

多賀城地区ほ場整備事業に係る 発掘調査報告書

第 1 分冊

内館館跡 新田遺跡
大日南遺跡 山王遺跡(古墳時代)

令和 5 年 2 月

多賀城市教育委員会

多賀城地区ほ場整備事業に係る 発掘調査報告書

第 1 分冊

内館館跡 新田遺跡
大日南遺跡 山王遺跡(古墳時代)

令和 5 年 2 月

多賀城市教育委員会

序 文

東北地方太平洋沿岸部に未曾有の被害をもたらした東日本大震災から、12年の歳月が経過しようとしています。有史以来、国内最大といわれる巨大地震で内陸部の多くの家屋が損壊したほか、津波により沿岸部の住宅地や工場地帯が壊滅的な被害を受けました。津波は本市西部に広がる水田の一部にも達し、西部地区の農業基盤の早急な復興が求められました。このような緊急事態に際し、職員一同、市民生活の早急な復旧・復興を目指す一方で、周知の埋蔵文化財包蔵地が市域の約3割に及ぶ本市においては、復旧・復興事業に伴う発掘調査をいかに円滑に進めていくかが大きな課題となっていました。

本書は、平成27年度から令和4年度にかけて実施した、県営多賀城地区土地改良事業に伴う8遺跡の発掘調査報告書です。調査面積は約7万m²と極めて広大でしたが、復興最優先で取り組むことはもちろんのこと、貴重な文化財を後世に伝えていくという責務をもち、適切に記録保存を図ってまいりました。幸いにも、文化財に対する市民の皆様の御理解と宮城県を始め多くの関係機関から専門職員の派遣をいただき、8か年度にわたる発掘調査及び報告書の作成を実施することができました。

今回の調査では、内館館跡で発見された中世館跡を構成する大規模な区画施設や、古代多賀城の南面に広がっていたまち並みを区画する道路など、新たな発見がありました。記念すべき令和6年の多賀城創建1300年を目前にして、本市の歴史を解明する上で貴重な多くの成果が挙げられたことは大変喜ばしく、それらの成果をまとめた本書が、本市の文化財に対する皆様の御理解の一助になるとともに、永く活用されることとなれば幸いです。

最後になりましたが、本市の復旧・復興に際して御支援をいただきました関係機関、発掘調査に対して御理解と御協力を賜りました地権者の皆様をはじめ関係各位に対し、心より感謝申し上げます。

令和5年2月

多賀城市教育委員会
教育長 麻生川 敦

例　　言

- 1 本書は、平成 27 年度から令和 4 年度にかけて実施した県営多賀城地区土地改良事業（農村地域復興再生基盤総合整備事業（農地整備事業））に伴う内館館跡、新田遺跡、大日南遺跡、山王遺跡、安楽寺遺跡、市川橋遺跡、大日北遺跡、六貫田遺跡の発掘調査の成果をまとめた、多賀城地区は場整備事業に係る発掘調査報告書である。
- 2 本事業は平成 23 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災の復興関連事業であり、平成 26 年 2 月 7 日に「復興調査に係る連絡調整会議」の場で宮城県教育委員会から示された方針に基づき、現地調査と報告書作成を行ったものである。
- 3 本書では経緯度の基準を世界測地系で表示している。また、本書で報告している調査では、東日本大震災発生以降に測量した座標を用いている。震災以前に行った調査を掲載する場合は、位置等を調整して合成している。また、図版中では世界測地系座標値における小数点以下を省略して表示しているが、有効数字は小数点以下 3 桁である。なお、挿図中の高さは、水準点から計測した標高値を示している。
- 4 土色は、『新版標準土色帖』（小山・竹原 1996）を参考にした。
- 5 現地調査、整理作業及び報告書作成にあたっては、宮城県教育庁文化財課をはじめ多くの関係機関からの調査協力を得た。
- 6 本書は 3 分冊で構成しており、各分冊の内容及び執筆者は以下のとおりである。本書の編集は、各執筆担当者と協議の上、小原一成が行った。図版作成等は、各執筆担当者のほか、遺物整理員、株式会社三協技術が行い、赤澤靖章・桑折肇がこれを補佐した。また、遺物の写真撮影は、佐藤則之、株式会社三協技術が行った。

第 1 分冊 内館館跡・新田遺跡・大日南遺跡・山王遺跡（古墳時代）

- | | |
|-------------------------------------|----------------|
| I 調査に至る経緯と経過 | 小原一成 |
| II 調査の方針と方法 | 小原一成 |
| III 遺跡の位置と環境 | 小原一成 |
| IV 安楽寺遺跡・市川橋遺跡・六貫田遺跡・大日北遺跡の試掘確認調査成果 | 小原一成 |
| V 内館館跡 | 佐藤則之 |
| VI 新田遺跡 | 佐藤則之 |
| VII 大日南遺跡 | 小原一成 |
| VIII 山王遺跡（古墳時代） | 佐藤則之・小原駿平・小原一成 |

附章 1 プラント・オパール分析 株式会社古環境研究所

第 2 分冊 山王遺跡 図版編

遺構・遺物図版、遺構・遺物写真 小原一・佐藤・柳澤・古川・村田・廣谷

第 3 分冊 山王遺跡 本文編

- | | |
|--------------|--|
| I 調査概要 | 小原一成 |
| II 基本層序 | 小原一成 |
| III 道路跡 | 丹野修太 |
| IV 街区内の遺構と遺物 | 小原一成 |
| V 街区外の遺構と遺物 | 村田晃一・廣谷和也（宮城県教育庁文化財課）
柳澤和明・古川一明・村田晃一・廣谷和也（宮城県教育庁文化財課） |
| VI 総括 | 小原一成
丹野修太 |

附章2 年代測定分析 株式会社加速器分析研究所

附章3 樹種同定分析 株式会社東都文化財研究所

附章4 出土木簡分析 武井紀子氏（日本大学文理学部史学科教授）

- 7 本事業に係る調査は、遺跡毎に調査次の番号を振って実施したが、本書では煩雑さを避けるために各章では遺跡名のみを表記する。
- 8 発掘調査及び資料整理・報告書作成に際しては、以下の方々及び機関から御指導・御協力を賜った（五十音順、敬称略）。
- 荒木志伸 生田和宏 佐藤憲幸 須田良平 高橋栄一 高橋透 武井紀子 千葉孝弥 豊村幸宏
平川南 矢内雅之 山口貴久 吉野武
宮城県教育庁文化財課 東北歴史博物館 宮城県多賀城跡調査研究所
東京都府中市、神奈川県、千葉県印西市
岡山県教育委員会、長野県教育委員会、新潟県教育委員会、兵庫県教育委員会、山口県教育委員会
- 9 本事業に係る発掘調査成果は、遺跡見学会、多賀城市遺跡調査成果報告会、宮城県遺跡調査成果発表会、古代城柵官衙遺跡検討会などで内容の一部を公表しているが、これらと本書の内容が異なる場合には、本書がこれらに優先する。
- 10 調査に関する諸記録及び出土遺物は、全て多賀城市教育委員会が保管している。

凡　　例

- 1 本書で使用した遺構略号は以下のとおりである。
SB : 挖立柱建物跡 SA : 柱列跡 SI : 穴窓建物跡 SE : 井戸跡 SD : 道路側溝、溝跡 SK : 土壙
SX : 道路跡、道路路面、小溝群、水田跡、その他の遺構 Pit : 柱穴及び小穴
- 2 遺構の事実記載について、文章では特徴的な属性を選択的に記載し、遺構数の多い遺跡については法量等を中心まとめた属性表も掲載した。あわせて参考願いたい。
- 3 遺構属性表の表記に関する特記事項は、以下の通りである。
- ・建物跡・柱列跡の柱間寸法の計測は、原則として東西方向は西から、南北方向は北から行った。ただし、西側や北側が不明な場合は東・南から計測している場合もあり、本文中で明記している。
 - ・柱痕跡がない場合は、柱穴の中央で計測した。ただし、状態によりまたは柱筋から柱痕跡が1つ以上ずれる場合は、2間（場合によっては3間）の総和を表記している場合もある。
 - ・柱間寸法の表記で柱位置が不明な場合は、不明もしくは数値を（ ）書きとしている。
 - ・全体の状況が不明な数値については、「+」を加えて表記している。
- 4 平面図中のセクションポイントのうち「10-1」のように表記している場合は、「(図版番号) - (個別番号)」を示している。
- 5 遺物図版に付した番号は、遺跡毎に1番から始まる登録番号である。文中の遺物の項目において括弧付きで示す番号は、この登録番号を指す。また、遺物写真図版については、原則として1/3縮尺で掲載しているが、遺物の大きさに応じて適宜調整している。なお、写真のみ掲載している遺物については、写真図版中に出土位置等を記した。
- 6 遺構の名称は、山王遺跡は10001番から始めているが、多賀城市と宮城県での番号の重複を避けるため、以下のように付した。(10001～:南2道路以北、15001～:南2道路以南東部工区、16001～:南2道路以南中部工区、17001～:南2道路以南西部工区) その他の遺跡は第1次調査からの通し番号である。
- 7 奈良・平安時代の土器の分類記号は『市川橋遺跡－城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書II』(多

賀城市教育委員会 2003) に従った。詳細は下記のとおりである。

(1) 土師器壺

- A類：ロクロ調整を行わないもの
- B類：ロクロ調整を行ったもの
 - B I類：ロクロからの切り離し後、回転ヘラケズリされたもの
 - B II類：ロクロからの切り離し後、手持ちヘラケズリされたもの
 - B III類：ロクロからの切り離しがヘラ切りで、再調整されないもの
 - B IV類：ロクロからの切り離しが静止糸切りで、再調整されないもの
 - B V類：ロクロからの切り離しが回転糸切りで、再調整されないもの
 - B I・B II類では、ロクロからの切り離しが識別できる資料があり、ヘラ切りによるものを a、静止糸切りによるものを b、回転糸切りによるものを c として細分する

(2) 土師器甕

- A類：ロクロ調整を行わないもの
- B類：ロクロ調整を行ったもの

(3) 須恵器壺

- I類：ロクロからの切り離し後、回転ヘラケズリされたもの
- II類：ロクロからの切り離し後、手持ちヘラケズリされたもの
- III類：ロクロからの切り離しがヘラ切りで、再調整されないもの
- IV類：ロクロからの切り離しが静止糸切りで、再調整されないもの
- V類：ロクロからの切り離しが回転糸切りで、再調整されないもの
 - I・II類では、ロクロからの切り離しが識別できる資料があり、ヘラ切りによるものを a、静止糸切りによるものを b、回転糸切りによるものを c として細分する。

8 瓦の分類は「多賀城跡 政府跡 図録編」(宮城県多賀城跡調査研究所 1980)、「多賀城跡 政府跡 本文編」(宮城県多賀城跡調査研究所 1982) の分類基準に従った。

9 本文中で用いている「To-a 火山灰」とは、東北地方に広く降下した広域火山灰である。その降下年代に関しては、915年とする説(町田洋「火山灰とテフラ」日本第四紀学会編『日本第四紀地図』1987年。阿子島功・壇原徹「東北地方、10 C頃の降下火山灰について」『中川久夫教授退官記念地質学論文集』、1991年)と、907年から934年の間とする説(宮城県多賀城跡調査研究所『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1997』、1998年)に見解が分かれている。近年、915年説を評価するものも見られる(小口雅史「古代東北の広域テフラをめぐる諸問題—十和田aと白頭山(長白山)を中心にして」、椎山晴生編『日本律令制の展開』吉川弘文館、2003年)。本書では、これらの研究成果をもとに、To-a 火山灰を 10 世紀前葉に降下したものと理解する。

第1分冊 目 次

序文

例言・凡例

目次・図版目次・表目次・写真図版目次

調査要項

1 要項	
2 調査体制	
I 調査に至る経緯と経過	1
1 調査に至る経緯	1
2 調査経過	4
II 調査の方針と方法	8
1 発掘作業	8
2 整理等作業	9
3 報告書の作成方針	10
III 遺跡の環境	11
1 地理的環境	11
2 歴史的環境	11
3 遺跡概要	13
IV 安楽寺遺跡・市川橋遺跡・六貫田遺跡・大日北遺跡の試掘確認調査成果	15
V 內館館跡	19
1 遺跡概要	19
2 調査の方法と経過	20
3 基本層位	20
4 発見した遺構と遺物	21
5 総括	41
VI 新田遺跡	135
1 遺跡概要	135
2 調査経過	135
3 第114次調査	135
4 第119次調査	138
5 総括	138
VII 大日南遺跡	175
1 調査経過	175
2 発見した遺構	175
3 総括	176
VIII 山王遺跡（古墳時代）	182
1 調査概要	182
2 発見した遺構と遺物	182
3 総括	187
附章1 山王遺跡におけるプラント・オパール分析	225

図版目次

I 調査に至る経緯と経過

第1図 市内遺跡の分布 ······ 2

第2図 ほ場整備事業対象範囲と周知の埋蔵文化財包蔵地の分布 ······ 3

IV 安楽寺遺跡・市川橋遺跡・六貫田遺跡・大日北遺跡の試掘確認調査成果

第1図 安楽寺遺跡試掘確認調査位置図 ······ 15
第2図 市川橋遺跡試掘確認調査位置図 ······ 16
第3図 六貫田遺跡試掘確認調査位置図 ······ 17
第4図 大日北遺跡試掘確認調査位置図 ······ 18

V 内館跡

第1図 調査区位置図 ······	59・60	第31図 90T 北側平面図 ······	90
第2図 館跡全図 ······	61	第32図 90T 南側平面図 ······	91
第3図 6①・78①T、7②・91②T、 93T 平面図 ······	62	第33図 70⑩⑩T、106T 平面図 ······	92
第4図 6②・78②T、6③・78③T 平面図 ······	63	第34図 明治期の内館跡地籍図 ······	93
第5図 7①・91①T、92T 平面図 (1) ······	64	第35図 伊勢地区的屋敷跡 ······	94
第6図 7①・91①T、92T 平面図 (2) ······	65	第36図 78②T 北壁断面図 ······	95
第7図 SE50 井戸跡平面・断面図 ······	66	第37図 6・78T 断面図 ······	96
第8図 SE51・52 井戸跡・SX236 平面・断面図 ······	67	第38図 7①・91①T、92T 断面図 ······	97
第9図 7③・91③T、8①T 平面図 ······	68	第39図 7②・91②T、7③・91③T、92T 断面図 ······	98
第10図 挖立柱建物跡平面・断面図 ······	69	第40図 55⑤T 東壁、57T 東壁・SE89(56T) 断面図 ······	99
第11図 8②～④T、69⑩T 平面図 ······	70	第41図 58T 東壁・SD03(59T) 断面図 ······	100
第12図 8⑤T、68①～④T 平面図 ······	71	第42図 60T 東壁、61①T 南壁・69T 断面図 ······	101
第13図 8⑥⑦T、61①②T、67①T 平面図 ······	72	第43図 69T、71T 断面図 ······	102
第14図 55①～⑥T、121T 平面図 ······	73	第44図 70T、72T、76T 断面図 ······	103
第15図 56③T、69⑨⑩T、89②T 平面図 ······	74	第45図 79T 断面図 ······	104
第16図 56④T、89②T 平面図 ······	75	第46図 80T、81T 断面図 ······	105
第17図 57T、58①T、59T、60T 平面図 ······	76	第47図 89②T、90①T 断面図 ······	106
第18図 58②～⑤T、69⑩T 平面図 ······	77	第48図 90①T 断面図 ······	107
第19図 62T、63T、64T 平面図 ······	78	第49図 90T 断面図 ······	108
第20図 69①～⑧T 平面図 ······	79	第50図 93T、106T 断面図・SX214(90⑥T) 平面・ 断面図 ······	109
第21図 69⑩～⑫T 平面図 ······	80	第51図 遺物実測図 1 ······	110
第22図 70⑩～⑫T 平面図 ······	81	第52図 遺物実測図 2 ······	111
第23図 71⑤～⑬T 平面図 ······	82	第53図 遺物実測図 3 ······	112
第24図 72①～⑤T 平面図 ······	83	第54図 遺物実測図 4 ······	113
第25図 75T、76①T 平面図 ······	84	第55図 遺物実測図 5 (91②T SE50 井戸側) ······	114
第26図 77①～③T 平面図 ······	85	第56図 遺物実測図 6 (91②T SE50 井戸側) ······	115
第27図 79T 平面図 ······	86	第57図 遺物実測図 7 (91②T SE50 井戸側・ SD03) ······	116
第28図 80①②T 平面図 ······	87		
第29図 80③T、81T 平面図 ······	88		
第30図 90T 全図 ······	89		

VI 新田遺跡

第1図 第114次調査区位置図 ······	143・144	第5図 99③～⑤T、110①～③T 平面図 ······	148
第2図 第119次調査区位置図 ······	145	第6図 99⑥T 西側平面図 ······	149
第3図 12T、88T 平面図 ······	146	第7図 99⑥T 東側平面図 ······	150
第4図 99①～③T 平面図 ······	147	第8図 99⑦-1・99⑧T 平面図 ······	151

第9図	87①T、99⑧T 東側平面図	152
第10図	87②T-1、110⑨T 平面図	153
第11図	94①～③T、112T 平面図	154
第12図	94①T、98T①・②平面図	155
第13図	97①～④T 平面図	156
第14図	97④T、95T、96T 平面図	157
第15図	11T、96T 平面図	158
第16図	134①・②T 平面図	159
第17図	134①T、135①・③T 平面図	160
第18図	135②T 平面図	161

VII 大日南遺跡

第1図	調査区位置図	177
第2図	145⑨・⑩T 平面図	178

VIII 山王遺跡（古墳時代）

第1図	山王遺跡の古墳時代遺構遺物分布図	183
第2図	SI10265 平面・断面図と出土遺物	190
第3図	171⑧T SX10424 平面・断面図	191
第4図	SX10424 出土遺物 1	192
第5図	SX10424 出土遺物 2	193
第6図	SX10424 出土遺物 3	194
第7図	SX10424 出土遺物 4	195
第8図	SX10424 出土遺物 5	196
第9図	SX10424・10427 出土遺物	197
第10図	164⑨T SX10305 水田跡平面・断面図	198
第11図	169①T SX10436 水田跡平面・断面図	199

第19図	135③T、136①～③T 平面図	162
第20図	中世の大溝と調査区	163
第21図	12T、99T 断面図	164
第22図	98T、99T 断面図	165
第23図	94①T、96T 断面図	166
第24図	95T、96T 断面図	167
第25図	96T、11T 断面図	168
第26図	134T、135T 断面図	169
第27図	135T、136T 断面図	170

第3図	145⑨・⑩T 断面図 (SD512～519)	179
第4図	大日南遺跡 145⑨・⑩T と第1～3次調査構配図	180

第12図	169②・③T SX10437 水田跡平面・断面図とIV層上面出土遺物	200
第13図	SX15322 出土遺物	201
第14図	SX16079 出土遺物	202
第15図	SX16079・10428 出土遺物	203
第16図	105①T SI10168 平面・断面図と出土遺物	204
第17図	SX10425 出土遺物	205
第18図	SX10425・SX10426 出土遺物	206
第19図	164⑦T SI10318～10320 平面・断面図と出土遺物	207

表 目 次

V 内館館跡

第1表	内館館跡掘立柱建物跡・柱列跡属性表	49
第2表	内館館跡井戸跡属性表	49
第3表	内館館跡溝跡属性表	50～54
第4表	内館館跡土壤属性表	55
第5表	内館館跡小溝群属性表	55～58

第6表	内館館跡出土遺物観察表 1	117
第7表	内館館跡出土遺物観察表 2	118
第8表	内館館跡出土遺物観察表 3	119
第9表	内館館跡出土木製品観察表	120
第10表	内館館跡出土金属製品観察表	120

VI 新田遺跡

第1表	新田遺跡溝跡属性表 ND114	139・140
第2表	新田遺跡溝跡属性表 ND119	141

第3表	新田遺跡土壤属性表 ND114	142
第4表	新田遺跡土壤属性表 ND119	142

VII 山王遺跡（古墳時代）

第1表	山王遺跡（古墳時代）出土遺物観察表 1	208
第2表	山王遺跡（古墳時代）出土遺物観察表 2	209
第3表	山王遺跡（古墳時代）出土遺物観察表 3	210

第4表	山王遺跡（古墳時代）出土遺物観察表 4	211
第5表	山王遺跡（古墳時代）出土遺物観察表 5	212
第6表	山王遺跡（古墳時代）出土遺物観察表 6	213

写 真 図 版 目 次

IV 内館館跡

写真1 遺跡全景（南東から）	61 ① T SD07 西中溝跡（南西から）
クロップマークと調査区（上が北） ···· 121	63T 全景（北から）
写真2 6 ① · 78 ① T 全景（西から） ···· 122	64T SD02 内溝跡南北コーナー部（南から）
6 ② · 78 ② T 全景（西から）	写真7 68 ① T SX112 小溝群（東から） ···· 127
6 ② · 78 ② T SD03 中溝跡（南から）	69 ⑥ T 全景（南から）
6 ② · 78 ② T SD04 外1溝跡（南から）	69 ⑬ T SK131 土壌（南西から）
6 ② · 78 ② T SD05 外2溝跡（南から）	69 ⑩ T 完掘状況（北東から）
7 ① T 全景（南から）	70 ⑫ T 全景（南から）
92T SX46 小溝群（北から）	72 ① T SX161 流路跡（南から）
7 ② T SD02 内溝跡（東から）	77 ① T SD242 溝跡断面（東から）
写真3 7 ② · 91 ② T SE50 井戸跡（南から） ··· 123	写真8 79 ② T SD173 · 174 溝跡断面図（南から） 128
SE50 井戸跡 井戸側（北東から）	80 ① T 全景
SE50 井戸跡 井戸側内面（東から）	80 ③ T 全景
SE50 井戸跡 井戸側縦板（西面）	80 ③ T SD15 溝跡（南から）
SE50 井戸跡 井戸側内側端先、曲物出土状況 (東から)	89 ① T 全景（東から）
写真4 7 ③ · 91 ③ T 振立柱建物跡（南から） ··· 124	89 ① T SD187 溝跡（南から）
7 ③ · 91 ③ T 振立柱建物跡柱穴断面（北東から）	89 ① T SD188 溝跡（西から）
7 ② · 91 ② T SE51 井戸跡（東から）	89 ② T 全景（東から）
7 ② · 91 ② T SE52 井戸跡（東から）	写真9 90 ① T 全景（東から） ······ 129
7 ③ · 91 ③ T SK62 土壌（東から）	90 ① T 調査風景（北から）
写真5 7 ③ · 91 ③ T SK63 土壌（東から） ··· 125	90 ① T SD185 溝跡（左）、SD246 溝跡（右） (南から)
7 ③ · 91 ③ T SD07 西中溝跡（東から）	90 ① T SB195 振立柱建物跡柱穴縦板（南から）
7 ③ · 91 ③ T SD08 西外1溝跡（東から）	90 ① T SK207 土壌（南から）
8 ① T 全景（東から）	90 ② T SD88 溝跡（西から）
56 ③ T 全景（東から）	93T SK221 土壌 混貝土層（北東から）
56 ③ T SE89 井戸跡（北から）	106T 全景（南から）
57T 全景（南から）	写真10 出土遺物 1 ······ 130
写真6 58 ① T 全景（北から） ······ 126	写真11 出土遺物 2 ······ 131
58 ① T SE101 井戸跡（西から）	写真12 出土遺物 3 ······ 132
58 ① T SD02 内溝跡、SD100 溝跡（北東から）	写真13 出土遺物 4 ······ 133
58 ① T SD03 中溝跡（北東から）	写真14 出土遺物 5 ······ 134
59T SD03 中溝跡と SD07 西中溝跡の接続部 (南から)	

VI 新田遺跡

写真1 新田遺跡第114次調査区全景（東から） ··· 171	99 ⑥ T 柱穴群検出状況（東から）
12T 全景（南東から）	99 ⑥ T P 9 断面（北から）
99 ③ T 全景（西から）	

写真2	99 ⑧ T SD2369・SX2370 検出状況（西から）	172	写真3	96T SD2417（南から）	173
99 ⑧ T	SF2370 畦畔B 検出状況（南から）		97 ④ T SD2396 小溝群断面（北から）		
99 ⑧ T	層序（北から）		134 ① T 全景（南から）		
94 ① T	全景（西上空から）		134 ② T 全景（西から）		
94 ① T	SK2382 断面（東から）		135 ① T SD2446（南西から）		
95T	全景（南から）		135 ③ T SD2446（南から）		
96T	全景		135 ② T SD2451（南から）		
96T	SX2413 小溝群・柱穴群検出状況（北から）		135 ③ T SD2459（東から）		
			写真4 出土遺物	174	

VII 大日南遺跡

写真1	145 ⑨ T 全景（南から）	181
	145 ⑩ T 全景（南から）	

VIII 山王遺跡（古墳時代）

写真1	167 ② T SI10265 掘り下げ状況（南から）	214	写真3	出土遺物 1	216
171 ⑧ T	SX10424 検出状況（南西から）		写真4	出土遺物 2	217
171 ⑧ T	SX10424 断面（南西から）		写真5	出土遺物 3	218
171 ⑧ T	SX10424 遺物出土状況（西から）		写真6	出土遺物 4	219
171 ⑧ T	SX10424 遺物出土状況（南から）		写真7	出土遺物 5	220
171 ⑧ T	SX10424 遺物出土状況（南から）		写真8	出土遺物 6	221
171 ⑧ T	SX10424 遺物出土状況（南から）		写真9	出土遺物 7	222
171 ⑧ T	SX10424 完掘状況（北西から）		写真10	出土遺物 8	223
写真2	149 ① T SX15322 遺物出土状況（北西から）	215	写真11	出土遺物 9	224
164 ⑨ T	SX10305 畦畔検出状況（南西から）				
169 ① T	SX10436 畦畔検出状況（東から）				
104 ③ T	SX10425 遺物包含層遺物出土状況（西から）				
105 ① T	SI10168 掘り下げ状況（北から）				
105 ① T	SX10426 遺物包含層遺物出土状況（北から）				
164 ⑦ T	SI10318 検出状況（南から）				
164 ⑦ T	SI10319 掘り下げ状況（南から）				

調査要項

1 要項

- 遺跡名 市川橋遺跡（宮城県遺跡番号：18008 住所：多賀城市市川外）
新田遺跡（宮城県遺跡番号：18012 住所：多賀城市新田外）
山王遺跡（宮城県遺跡番号：18013 住所：多賀城市山王外）
大日北遺跡（宮城県遺跡番号：18015 住所：多賀城市高橋外）
安楽寺遺跡（宮城県遺跡番号：18033 住所：多賀城市新田外）
内館館跡（宮城県遺跡番号：18036 住所：多賀城市南宮外）
六貫田遺跡（宮城県遺跡番号：18045 住所：多賀城市東田中外）
大日南遺跡（宮城県遺跡番号：18053 住所：多賀城市高橋外）
- 調査主体 多賀城市教育委員会 教育長 菊地 昭吾（～平成 28 年 9 月 30 日）
小畠 幸彦（平成 28 年 10 月 1 日～令和元年 9 月 30 日）
麻生川 敦（令和元年 10 月 1 日～）
- 調査担当 多賀城市埋蔵文化財調査センター 所長 板橋 秀徳（平成 27～29 年度）
佐藤 良彦（平成 30 年度）
伊藤 文昭（平成 31～令和 3 年度）
今野 一博（令和 4 年度）
- 調査協力 宮城県仙台地方振興事務所、多賀城市都市産業部産業振興課（旧市民経済部農政課）
宮城県教育庁文化財課（旧文化財保護課）、東北歴史博物館、宮城県多賀城跡調査研究所
東京都府中市、神奈川県、千葉県印西市
岡山県教育委員会、長野県教育委員会、新潟県教育委員会、兵庫県教育委員会
山口県教育委員会

2 調査体制

①平成 27 年度

調査期間 平成 27 年 10 月 19 日～平成 28 年 3 月 25 日

調査体制 多賀城市埋蔵文化財調査センター 主幹 武田健市 副主幹 相澤清利 村松稔

研究員 石川俊英 熊谷満

調査員 村上詩乃

宮城県教育庁文化財保護課（当時）田中秀幸 佐藤則之

大本朋弥（兵庫県派遣） 岩崎仁志（山口県派遣）

廣田和穂（長野県派遣）

東北歴史博物館

柳澤和明 千葉直樹

内 容 内館館跡第 1 次調査（試掘確認調査 3,980 m²、本発掘調査 3,826 m²）

新田遺跡第 108 次調査（試掘確認調査 690 m²）

安楽寺遺跡隣接地（試掘確認調査 316 m²）

山王遺跡第 154・157 次調査（試掘確認調査 2,488 m²）

②平成 28 年度

調査期間 平成 28 年 4 月 1 日～平成 29 年 3 月 22 日

調査体制 多賀城市埋蔵文化財調査センター 主幹 武田健市 副主幹 和田信行（東京都府中市派遣）

研究員 熊谷満 永井三郎（神奈川県派遣）
技師 岛山未津留 丹野修太 小原駿平
宮城県教育庁文化財保護課（当時）田中秀幸 遠藤則靖 佐藤則之
飯坂盛泰（新潟県派遣） 永恵裕和（兵庫県派遣）
米田克彦（岡山県派遣）
柳澤和明
東北歴史博物館

内 容 内館跡第1次調査（確認調査 1,193 m²、本発掘調査 3,811 m²）
新田遺跡第114次調査（試掘確認調査 1,936 m²、確認調査 1,404 m²、本発掘調査 1,759 m²）
市川橋遺跡第93次調査（試掘確認調査 3 m²）
六貫田遺跡第1次調査（試掘確認調査 413 m²）
大日北遺跡第6次調査（試掘確認調査 268 m²）
山王遺跡第167・178・179次調査（試掘確認調査 592 m²、確認調査 2,906 m²、本発掘調査 2,024 m²）

③平成29年度

調査期間 平成29年4月17日～平成30年3月23日

調査体制 多賀城市埋蔵文化財調査センター 主幹 武田健市 研究員 石川俊英 丹野修太
関健吾（神奈川県派遣） 主査 小原一成（文化財係）
技師 小原駿平 調査員 鈴木隆政
宮城県教育庁文化財保護課（当時） 黒田智章 遠藤則靖 伊東博昭 佐藤涉 佐藤則之
柳澤和明
東北歴史博物館

内 容 新田遺跡第119次調査（確認調査 1,109 m²、本発掘調査 338 m²）
大日南遺跡第13次調査（試掘確認調査 230 m²、本発掘調査 297 m²）
大日北遺跡第6次調査（試掘確認調査 122 m²）
山王遺跡第178・179・198次調査
(試掘確認調査 4,984 m²、確認調査 4,656 m²、本発掘調査 6,440 m²)

④平成30年度

調査期間 平成30年4月12日～平成31年3月20日

調査体制 多賀城市埋蔵文化財調査センター 研究員 小原一成 丹野修太 関健吾（神奈川県派遣）
調査員 茂泉光雄 名取健一 李スルチョロン
鈴木隆政
宮城県教育庁文化財課 廣谷和也 下山貴生 猪股清和 伊東博昭 傅田惠隆
梅川隆寛 矢内雅之 佐藤則之 山田晃弘 佐久間光平
東北歴史博物館 柳澤和明

内 容 山王遺跡第178・198次調査（確認調査 9,175 m²、本発掘調査 3,332 m²）

⑤平成31年度

調査期間 平成31年4月5日～令和2年3月25日

調査体制 多賀城市埋蔵文化財調査センター 研究員 小原一成 丹野修太 関健吾（神奈川県派遣）
杉山祐一（千葉県印西市派遣）
技師 小原駿平
調査員 佐藤則之 名取健一 桑折肇
宮城県教育庁文化財課 廣谷和也 西村力 伊東博昭 傅田惠隆 佐藤涉
梅川隆寛 矢内雅之 熊谷亮介 山田晃弘 佐久間光平
須田良平 古川一明
東北歴史博物館 柳澤和明

宮城県多賀城跡調査研究所	村田晃一
測量支援業務	株式会社バスコ
内 容 山王遺跡第178・198次調査（確認調査3,274m ² 、本発掘調査3,157m ² ）	
⑥令和2年度	
調査期間 令和2年4月7日～令和2年12月25日	
整理期間 令和3年1月4日～令和3年3月26日	
現地調査 多賀城市埋蔵文化財調査センター 研究員 小原一成 丹野修太 調査員 佐藤則之	
整理体制 研究員 丹野修太 柳澤和明	
東北歴史博物館	
内 容 山王遺跡第178・198次調査（確認調査1,660m ² 、本発掘調査100m ² ）	
出土資料の整理・発掘調査報告書の作成	
⑦令和3年度	
整理期間 令和3年4月15日～令和4年3月31日	
整理体制 多賀城市埋蔵文化財調査センター 研究員 小原一成 調査員 佐藤則之 宮城県教育庁文化財課 柳澤和明 古川一明 村田晃一 報告書作成支援業務 株式会社三協技術	
内 容 出土資料の整理・発掘調査報告書の作成 補完工事等に伴う立会確認調査	
⑧令和4年度	
整理期間 令和4年4月1日～令和5年2月28日	
整理体制 多賀城市埋蔵文化財調査センター 研究員 小原一成 丹野修太 技師 小原駿平 調査員 佐藤則之 宮城県教育庁文化財課 古川一明 村田晃一 廣谷和也 報告書作成支援業務 株式会社三協技術	
内 容 出土資料の整理・発掘調査報告書の作成	

I 調査に至る経緯と経過

1 調査に至る経緯

(1) 協議の経過

本件は、宮城県仙台地方振興事務所が事業主体となり多賀城市教育委員会が調査主体となって実施した県営多賀城地区土地改良事業（多賀城地区農村地域復興再生基盤総合整備事業（農地整備事業））に係る埋蔵文化財発掘調査である。事業対象範囲は、本市西部の水田約 281ha に広がり、そのうち山王遺跡、内館館跡、新田遺跡、大日南遺跡、大日北遺跡、市川橋遺跡、六貫田遺跡、安楽寺遺跡の 8 遺跡に関わり、発掘調査面積は約 68,000 m² に及んだ。

平成 23 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災では、市域の約 33.7% が浸水し、その範囲は農業地帯として水田が広がる一本柳地区の一部にまで及んだ。津波浸水被害を受け、本市では平成 23 年 12 月に『多賀城市震災復興計画』を策定し、その中の復興事業のひとつとして、農地基盤整備事業を位置付けた。あわせて、平成 23 年 3 月に策定した『第五次多賀城市総合計画』を平成 25 年 3 月に改訂し、八幡字六貫田や市川字多賀前地区を農業ゾーンに追加拡大し、この地域を優良農地として保全を図るとともに、水田を高度利用した大豆等の集約生産や、施設野菜や花卉園芸などを展開する高生産性農業が営まれるよう、農地集積や大区画ほ場整備を促進する方針とした。

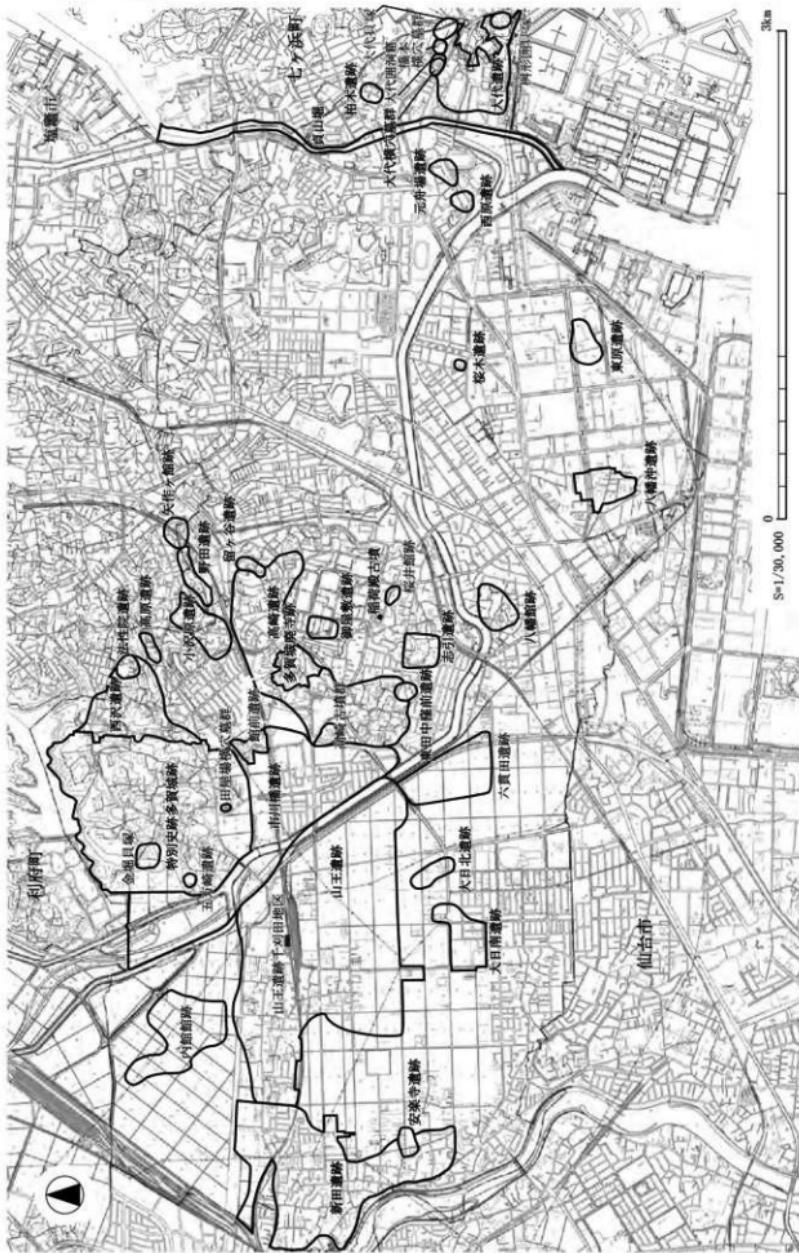
総合計画の改定に先立ち、担当部署間では円滑な事業実施に向けて協議を開始している。平成 23 年 12 月 14 日に、事業主体である宮城県仙台地方振興事務所及び多賀城市市民経済部農政課から、本市教育委員会へ本事業計画について説明がなされた。計画では、本市西部の既存農地約 300ha を対象として、用排水路や農道の整備工事・ほ場の区画整備・換地・農地利用集積等を実施することとなっていた（第 2 図）。このうち、地面の掘削を伴う整備工事に関しては、事業計画地と重なる遺跡への影響が懸念された。平成 24 年 7 月 10 日からは、3 者に加えて宮城県教育庁文化財課（当時は文化財保護課）も協議に同席し、宮城県仙台地方振興事務所から排水路・パイプラインなどの標準計画案が示された。特に、当初は田面を広域に切り盛り造成する予定で、周知の遺跡内ののみでも田面の切土に伴う調査をする面積が 50 万 m² を超える計画となっていましたが、遺跡へ与える影響が極めて大きいことから、可能な限り地面の掘削を行わない工法へと変更するよう調整を行った。その結果、田面の造成は盛土施工を基本とすることに変更され、道路や側道の新設及び拡張、給水用パイプラインの敷設、用排水路の敷設 の各種工事を主要な調査対象とすることとなった。この事業範囲と標準断面の基本設計案をもとに宮城県仙台地方振興事務所と宮城県文化財課との間で埋蔵文化財のかかわりについての事前協議が行われた。平成 25 年 8 月 21 日には、宮城県農林水産部長と県教育委員会教育長との協議により、本事業においては事前に確認調査を実施する必要があり、調査の結果重要な遺構等が発見された場合は、保存についての協議を要する旨回答があったと、宮城県仙台地方振興事務所長から多賀城市教育委員会教育長へに通知された。

その後、平成 27 年 7 月 31 日に宮城県仙台地方振興事務所長と多賀城市長の間で「多賀城地区（山王遺跡外）埋蔵文化財包蔵地に関する協定書」を締結した。その内容としては、平成 27 年 8 月 1 日より発掘調査を開始し、平成 31 年 12 月 31 日までに現地における全体の発掘調査を終了し、平成 33 年 3 月 31 日までに遺物の整理と報告書の作成を完了するというものであった。

この協定書の内容に基づき、平成 27 年 8 月 12 日付けで現地調査に係る第 1 回委託契約を締結し、内館館跡・山王遺跡・新田遺跡・安楽寺遺跡・大日南遺跡の試掘調査から事業を開始することとなった。

しかし、調査の経過に伴い、調査対象となる工事の増加・変更や、遺構の分布が周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲を超えて外側に広がっていることが明らかとなり、調査面積が増加したことから、調査期間の延長及び調査費用を増額する変更協定を令和元年 12 月に締結した。最終的には、報告書作成を本事業延伸の限度である令和 5 年 2 月までとする変更協定を令和 4 年 3 月に締結した。令和 5 年 2 月をもって発掘調査報告書の作成を終了した。

1 調査に至る経緯



第1図 市内遺跡の分布



ほ場整備事業に伴う周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲変更(事業終了時の実績)

周知の埋蔵文化財包蔵地名	従前面積 (m ²)	ほ場調査事業に伴う 範囲拡大面積 (m ²)	拡大後面積 (m ²)	
ほ場整備事業関連 周知の埋蔵文化財 包蔵地	山王遺跡	1,118,500	191,800	1,310,300
	内館館跡	6,500	135,000	141,500
	新田遺跡	571,400	74,400	645,800
	大日南遺跡	96,200	3,000	99,200
	市川橋遺跡	696,600	0	696,600
	六貫田遺跡	164,600	0	164,600
	安楽寺遺跡	10,700	0	10,700
その他市内周知の埋蔵文化財包蔵地面積 (m ²) (特別史跡含む)	大日北遺跡	28,200	0	28,200
	小計	2,692,700	404,200	3,096,900
市内周知の埋蔵文化財包蔵地面積 (m ²) (特別史跡含む)	2,544,635		2,544,635	
市内周知の埋蔵文化財包蔵地面積合計 (m ²) (特別史跡含む)	5,237,335		5,641,535	
市の面積に占める割合 (%)	26.6%	2.1%	28.7%	

第2図 ほ場整備事業対象範囲と周知の埋蔵文化財包蔵地の分布

（2）震災復興事業に伴う発掘調査の取り扱いについて

本事業は、東日本大震災の復興事業扱いとなることから、事業の円滑な推進と埋蔵文化財保護の両立を図るために、文化庁から示された方針（平成23年4月28日付け府財第61号 文化庁次長通知）に基づき、発掘調査期間の短縮及び発掘調査体制の強化を図りながら調査を実施することとなった。更に、平成26年2月7日開催の「復興事業に伴う埋蔵文化財発掘調査に係る連絡調整会議（第4回）」で示された宮城県内における復興事業調査の基本方針を受け、本事業においては以下の点を取り入れながら調査を実施し、事業の迅速化を図った。

・冬期間の現地発掘調査の実施

本市ではこれまで、降雪や地面の凍結により地下遺構の損壊が増加され、安全の確保が非常に困難となり、かつ作業効率が著しく低下する冬期間は、報告書作成期間として原則的には現地調査を実施してこなかった。しかし、本事業においては工区の引き渡しを最優先とし、冬期間においても現地調査を実施した。その結果、営農には支障がないように各工区の現地調査を終了させることができたが、令和2年度までは現地調査と整理作業を並行して行わなければならず、発掘調査報告書の作成に専念することができたのは、現地調査が収束を迎えた令和3年度以降であった。

・現地調査に係る一部作業の民間への委託

令和元年9月から令和2年3月にかけて、株式会社バスコに測量支援業務を委託した。この期間においては、従来の手測りによる実測に加えて、TOPCON社製PS-105Aトータルステーションを用いた遺構測量を行い、CUBIC社製遺構実測支援ソフトウェア「遺構くん」による図化編集作業を実施した。遺物出土状況の詳細図や断面図については写真測量を併用して図化作業を行った。この期間において手測りにより実測した図面についてはトレースを委託し、デジタル実測図と統合して一括して納品を受けた。

・資料整理・報告書作成に係る一部作業の民間への委託

平成31年度以降については、室内における整理作業に関して、出土遺物洗浄注記接合及び実測トレース、調査図面のトレース、報告書作成に係る編集作業、図版作成や写真撮影等に係る作業の一部を株式会社三協技術や株式会社イビソクに委託し、作業の迅速化を図った。

・報告資料の厳選

本事業では、限られた期間内で報告書を刊行するために、主として各調査区の担当者を中心に調査区毎に成果を概括し、報告遺構を厳選した。また出土遺物についても、報告するのは基本的には抽出遺構出土のものに限定し、報告書掲載遺物の量を絞り込むことで、報告書刊行までの作業の迅速化を図った。

2 調査経過

（1）現地発掘調査の経過

①平成27年度

平成27年10月19日から平成28年3月25日まで発掘調査を実施した。調査員の延べ数は、多賀城市調査員6名、宮城県調査員7名である。現地調査は、稲の刈取りが終了した10月中旬より北部工区の内館跡の試掘調査及び本発掘調査、新田遺跡北部の試掘調査、東部工区の山王遺跡南東部の試掘調査から開始した。11月下旬からは西部工区の新田・山王・安楽寺遺跡隣接地についても、遺跡の範囲を確認するための試掘調査を実施した。その結果、新田遺跡北部、山王遺跡南西部では周知の遺跡の外から遺構が発見され、調査対象箇所の拡大を要することを把握した。安楽寺遺跡東部では、遺構・遺物は発見されなかつたことから、本発掘調査の対象から除外し、調査終了とした。

内館跡では、平成25年に国土地理院により作成された航空写真に、中世の堀跡と推測されるクロップマークが確認されており、その範囲が従前の遺跡範囲よりも広がっていることから、遺構の分布が遺跡範囲よりも外側まで広がっていることが想定された。よって、試掘調査により遺構の分布を確認し、調査対象範囲を確定する必要があった。調査の結果、従前の遺跡範囲よりも外側で遺構の分布が確認できたこ

とから、調査対象範囲を拡大した。あわせて、遺跡内の水路、パイプライン、揚水機場設置工事に関しては、本発掘調査も順次実施した。その結果、古代の小溝群や中世の溝跡などを発見した。

資料整理については、現地調査と並行して、出土した遺物の洗浄・注記を行った。

②平成 28 年度

平成 28 年 4 月 1 日から平成 29 年 3 月 22 日まで発掘調査を実施した。調査員の延べ数は、多賀城市調査員 7 名、宮城県調査員 7 名である。調査は、平成 27 年度からの継続である内館館跡の調査から開始するとともに、同館跡の試掘調査範囲を西側の洞ノ口遺跡付近まで広げた。また、北部工区の新田遺跡隣接地及び市川橋遺跡の試掘調査を実施した。試掘調査の結果、新田遺跡については、周知の遺跡の外からも遺構が発見され、調査区の拡大を要することを確認した。内館館跡西側の試掘調査では遺構・遺物とともに発見されず、本発掘調査の対象から除外した。市川橋遺跡については、70 cm 以上の盛土が確認され、工事による掘削が及ぼないことが確認できたことから、本発掘調査の対象から除外した。内館館跡については、6 月 4 日に遺跡見学会を開催したのち、10 月までには大方の現地調査を終了し、平成 29 年 1 月に一部追加調査を行って調査を終了した。北部工区の新田遺跡については、12 月まで本発掘調査を実施した。11 月上旬からは、西部工区の山王遺跡西側隣接地、中・東部工区南側の山王遺跡・大日北遺跡・六貫田遺跡及び隣接地の試掘調査を実施した。試掘調査の結果、大日北遺跡と六貫田遺跡については河川跡等が確認されたが、遺構がないことを確認したため、本発掘調査の対象から除外し、調査終了とした。山王遺跡については、西部・中部・東部工区とともに周知の遺跡の外から遺構が発見されたため、本発掘調査に切り替え、中部工区北側及び西部工区から順次調査を開始した。

資料整理については、現地調査と並行して、出土した遺物の洗浄・注記を行った。

③平成 29 年度

平成 29 年 4 月 17 日から平成 30 年 3 月 23 日まで発掘調査を実施した。調査員の延べ数は、多賀城市調査員 7 名、宮城県調査員 4 名である。調査は西部工区から開始し、山王遺跡西部及び新田遺跡東部の調査を開始するとともに、中部工区北側の山王遺跡の調査も並行して行った。9 月からは大日南遺跡隣接地及び大日北遺跡の試掘調査を行い、大日南遺跡西側隣接地の 145 ⑨⑩ T で遺構が発見されたため、記録保存のための本発掘調査に切り替えて調査を継続した。西・中部の遺跡隣接地における調査は 12 月頃までに終了し、平成 30 年 1 月からは中・東部の山王遺跡内の調査に集約し、南側の調査区の調査を途中まで終えたところで年度終了となった。

資料整理については、現地調査と並行して、出土した遺物の洗浄・注記を行った。

④平成 30 年度

平成 30 年 4 月 12 日から平成 31 年 3 月 20 日まで発掘調査を実施した。当初の調査体制は多賀城市調査員 3 名、宮城県調査員 5 名である。7 月中旬からは調査員を順次増員し、最終的な調査員の延べ数は、市調査員 7 名、県調査員 12 名である。

調査は山王遺跡を残すのみとなり、工事の計画に合わせて東西に主要調査区を移動しながら順次北上する方針とした。最初に東部工区南側の 148 ~ 149T から調査を開始し、5 月には中部工区の 142T にも着手した。6 月には東部工区の 150T に戻り、153T まで順次調査を進めた。7 月からは中部工区の 154T の表土掘削を行い、そこから西側の 156T まで調査を進めた。9 月 18 日には東西に長い調査区である 157T の調査を開始するが、調査面積が広かつたことから 12 月まで調査期間を要した。11 月には東部工区の 158T の調査を開始し、それと並行して 159T の調査にも着手した。その後随時東部工区の 162T まで調査を進めるとともに、2 月からは中部工区の 163T の表土除去も行った。この年度には、中部工区の 164T と 165T まで調査を終了させるとともに、164T の東側のラインから東部工区の 167T まで表土掘削を行い、本年度の調査を終了した。

資料整理については、現地調査と並行して各年度の発掘調査で出土した遺物の洗浄・注記を行うとともに、図面整理に整理員を専従させ、チェック及び修正等が終了した実測図から順次トレース作業を行った。

⑤平成31年度（令和元年度）

平成31年4月5日から令和2年3月25日まで山王遺跡の発掘調査を実施した。当初の調査体制は、市調査員3名、県調査員8名である。4月中旬からは市及び県調査員を順次増減員し、年明け1月上旬からは市調査員7名、県調査員8名の15名体制で2月の面的調査を終了させた。2月下旬からは、県調査員は現場図面引渡しのために整理作業に入ったため、年度終了までは市調査員4名で中部工区の177Tの調査を進めた。調査員の延べ人数は、多賀城市7名、宮城県14名である。

調査は前年度に引き続き、工事の計画に合わせて東西に順次調査区を設定しながら北上する方針で進めた。最初に中部工区の164Tから調査を開始し、7月からは東部工区の167Tの調査にも着手し、順次東側に調査区を拡張しながら168Tまで調査を行った。その後、東側に調査区を広げながら171Tのラインの調査を進めたが、調査面積が広大であったことから、このブロックは11月末まで調査期間を要した。並行して10月2日からは加瀬用水の改修に伴い172Tの調査に着手し、工事の進捗に合わせて断面の精査を中心とした確認調査を実施した。併せて、11月からは173Tの表土掘削も行い、174Tまで調査を進めた。12月からは東部工区の市道新田上野線から北側の175Tの調査を開始し、併せて1月7日には中部工区の176Tの調査区にも着手し、2月19日にはこれら調査区の調査を終了した。また、畠部分を切土する範囲である中部工区の177Tについては、2月19日から表土の掘削を行い、南側を中心に遺構検出作業の一部を実施し、本年度の調査を終了した。

資料整理については、現地調査と並行して各年度の現地発掘調査で出土した遺物の洗浄・注記を行うとともに、図面整理に整理員を専従させ、チェック及び修正等が終了した実測図から順次トレース作業を行つた。

⑥令和2年度

令和2年4月7日から同年12月25日まで発掘調査を実施した。当初の調査体制は市調査員3名であり、5月からは2名、7月からは1名体制で調査を進めた。

調査は山王遺跡内中部工区の177Tの北側を重機による表土掘削によって拡張し、その後遺構検出と平面図の作成を北から順に進め、4月下旬には北側の遺構検出状況の写真撮影を行つた。その後も南側に向けて調査を進め、一部遺構については掘り下げるとともに図面作成、写真撮影を行い、5月末に機材を撤収して調査を終了した。

10月中旬からは東部工区の178Tの重機による表土掘削を開始し、10月下旬に遺構検出状況写真撮影を行つた。その後本発掘調査部分の遺構掘り下げを行うとともに随時図面作成、写真撮影を行い、12月25日までに調査器材等を撤収して178Tの全ての調査を終了した。

資料整理については、現地調査の規模が縮小したことから、市調査員1名、県調査員1名体制で報告書作成作業を進めた。広範囲に及ぶ調査成果をまとめるために、整理の第一段階として、各調査区の概要をまとめた「トレーニングメモ」の作成から始めた。ここでは、調査概要と調査区の性格を特に反映していると考えられる遺構のリストアップを行うこととし、基本的には各調査区の調査が終了してから随時担当調査員により作成していたが、令和2年度は過年度分の調査区等を中心にトレーニングメモの作成を行つた。また、トレースが終了した調査区から体裁を整えて、都市計画図上に調査区の配置作業も行つた。

⑦令和3～4年度

令和3年4月15日から令和5年2月24日まで資料整理及び報告書の作成を行つた。主だった現地調査が令和2年度で終了したことから、令和3年度からは引き続き資料整理を本格化させ、遺構図面の整理と報告書掲載図版の作成、出土遺物の調査及び実測図作成を行うとともに、報告書本文作成にも着手した。令和4年度も、前年度に引き続き遺構と遺物に関する報告書掲載図版の作成、本文の執筆を中心とした作業を行つた。

なお、現地調査に関しては、令和3年度以降については、宮城県仙台地方振興事務所からの要望を受けて、補完工事に関する工事立会等に適宜対応した。

(2) 周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲変更

①内館館跡

古代の生産域が従前の範囲を超えて発見されたほか、中世の大規模な堀跡と建物の一部が確認されたことから、遺跡の範囲を拡大するとともに、遺跡の内容も「古代の散布地」から「古代の生産域及び中世の屋敷跡」に変更した。

- ・従前の遺跡面積：6,500 m² 変更後の遺跡面積：141,500 m² 変更面積：135,000 m²の拡大

・宮城県教育委員会への通知日：平成 29 年 3 月 29 日、平成 30 年 3 月 29 日

②新田遺跡

北部及び東部において従前の範囲を超えて古代の溝跡・土壙・小溝群、中世の柱跡・溝跡等が発見されたことから、遺跡の範囲を拡大した。

- ・従前の遺跡面積：571,400 m² 変更後の遺跡面積：645,800 m² 変更面積：74,400 m²の拡大

・宮城県教育委員会への通知日：平成 29 年 3 月 29 日、平成 30 年 3 月 29 日

③大日南遺跡

西側で溝跡や土壙が発見されたことから、遺跡の範囲を拡大した。

- ・従前の遺跡面積：96,200 m² 変更後の遺跡面積：99,200 m² 変更面積：3,000 m²の拡大

・宮城県教育委員会への通知日：平成 30 年 3 月 29 日

④山王遺跡

遺跡南部で古代の堅穴建物跡・溝跡・小溝群・土壙等が発見されたことから、遺跡の範囲を拡大した。

- ・従前の遺跡面積：1,118,500 m² 変更後の遺跡面積：1,310,300 m² 変更面積：191,800 m²の拡大

・宮城県教育委員会への通知日：平成 30 年 3 月 29 日、平成 31 年 3 月 27 日

(3) 調査期間における普及啓発活動

①遺跡見学会

年月日	イベント名	見学者数
平成 28 年 6 月 4 日	内館館跡第 1 次調査遺跡見学会	125 人
平成 29 年 10 月 14 日	山王遺跡第 178 次調査遺跡見学会	115 人

②展示等

年月日	イベント名	題目
平成 28 年 5 月 28 日～9 月 11 日	連報展	内館館跡第 1 次調査、山王遺跡第 178 次調査
平成 29 年 5 月 28 日～7 月 30 日	連報展	内館館跡第 1 次調査、山王遺跡第 178 次調査
平成 30 年 5 月 26 日～7 月 29 日	連報展	山王遺跡第 178・179 次調査
令和元年 6 月 1 日～7 月 28 日	連報展	山王遺跡第 178・198 次調査
令和 2 年 6 月 16 日～7 月 31 日	連報展	山王遺跡第 178・198 次調査
令和 3 年 6 月 5 日～7 月 25 日	連報展	山王遺跡第 178・198 次調査

③遺跡報告会等

年月日	イベント名	題目
平成 28 年度		
7 月 2 日	多賀城市道路調査報告会	内館館跡第 1 次調査
12 月 10 日	宮城県道路調査成果発表会	内館館跡第 1 次調査
平成 29 年度		
6 月 24 日	多賀城市道路調査報告会	内館館跡第 1 次調査
12 月 10 日	宮城県道路調査成果発表会	山王遺跡第 178 次調査
平成 30 年度		
6 月 23 日	多賀城市道路調査報告会	山王遺跡第 178・198 次調査
12 月 8 日	宮城県道路調査成果発表会	山王遺跡第 178・198 次調査
2 月 16 日	第 45 回古代城壁官衙遺跡検討会	多賀城外の調査成果－市川塙遺跡第 96 次・山王遺跡第 178・198 次調査－
平成 31 年度（令和元年度）		
6 月 29 日	多賀城市道路調査報告会	山王遺跡第 1・78・198 次調査
12 月 14 日	宮城県道路調査成果発表会	山王遺跡第 178・198・211 次、市川塙遺跡第 96 次調査
2 月 22 日	第 46 回古代城壁官衙遺跡検討会	山王遺跡第 178・198 次調査（資料報告）
令和 2 年度		
6 月 27 日	多賀城市道路調査報告会	山王遺跡第 178・198 次調査
令和 3 年度		
6 月 26 日	多賀城市道路調査報告会	山王遺跡第 178・198 次調査

II 調査の方針と方法

1 発掘作業

(1) 調査の方針と調査地の選定

本事業に伴う発掘調査を実施するにあたり、必要箇所については平成 27～29 年度に順次各遺跡の試掘確認調査を実施し、遺跡の広がりを把握し調査地の選定を行った。一方、山王遺跡については、これまで既存住宅地範囲を中心に多くの調査実績があり、古代多賀城の方格地割内では高密度で遺構が分布していることが明白であった。よって、遺跡内北側については既往調査の成果をもとに調査費用と期間を設定し、試掘確認調査をせずに本発掘調査のみを実施した。一方、山王遺跡西部と南部の隣接地については、これまで調査により遺跡が広がる可能性があることから、試掘確認調査を実施し、遺跡範囲を確認することとした。その結果、遺構の分布が従前の周知の埋蔵文化財包蔵地よりも外側に広がっていることが明らかとなったことから、試掘確認調査の成果をもとに、登録されている遺跡の範囲を超えて本発掘調査を実施した。

当初計画における主な工事内容のうち、事前に発掘調査を要する工事は、農道の新設及び既存農道の拡幅、側道の新設、パイプラインの設置、用排水路の新設及び既存用排水路の改修、田面の切盛り、暗渠等であった。本事業においては、個々の工事内容と遺跡の重要性及び過去の調査データ、復興事業の取扱いを十分に精査した上で、宮城県文化財課と復興事業を早急に進めるための調査方法を協議しながら調査方法を決定することとした。以下に、その対応方針を示す。

- ・農道の新設及び既存農道の拡幅

新設の場合は全体、拡幅の場合は拡幅部分の確認調査

- ・側道（作業用道路）

重要と想定される部分を重点的に確認調査

- ・パイプラインの新設

掘削範囲・深度までの本発掘調査。本事業においては、パイプラインは新設ないし拡幅農道に伴うことが多いことから、1 調査区内のうち農道部分は確認調査、パイプライン部分は本発掘調査となる箇所が多い。

- ・用排水路の新設及び改修

掘削範囲・深度までの本発掘調査

- ・田面の切土

保護層が確保できる深さまでの本発掘調査及び計画範囲の確認調査

内館館跡・新田遺跡・山王遺跡南側を中心にして調査していた平成 27 年～令和元年 7 月頃までは、遺跡の広がりや性格が不明な点が多くあったことから、遺構面まで掘削の及ばない工事であっても、遺構の分布が無くなるまで全面の確認調査を実施した。令和元年 8 月頃以降の山王遺跡北側を調査した際には、周辺の調査成果が多く遺跡の内容をある程度把握できており、重要遺構が多数検出される状況が想定されたため、遺構保存の観点から、確認調査はデータの希薄な地点のみを対象として、必要十分な調査を実施することに調査の進め方を変更した。このことは、令和元年 7 月 24 日に開催した関係機関打ち合わせで情報共有し、適用することとした。上記調査方法を基本方針とするが、近年の他県における発掘調査現場における事故の状況を鑑みて、調査区の幅が狭小になる場合には、事故防止を徹底するために安全な調査幅を確保することとした。このため、最低でも 2 m 程度の幅の調査区を設定し、そのうち掘削が及ぶ範囲を本発掘調査、掘削が及ばない範囲を確認調査として対応した箇所もある。

調査内容は工事に応じて必要な調査方法を適用した。遺構面が複数存在している場合には、確認調査部

分は第1面の遺構検出まで、本発掘調査部分は概ね1m程度の工事による掘削が及ぶ深さまで掘り下げて調査を実施した。そのため、1調査区内でも最終的な遺構検出面が異なる場合も生じている。

(2) 調査の方法

発掘調査では遺構確認面までをバックホウで掘削し、遺構検出作業を古代の地山及びその上層の堆積層で実施した。遺構や遺物包含層は、記録保存調査対象の発掘調査区では原則としてすべて精査し、確認調査対象の発掘調査区では必要最小限の一部を掘り下げる内容を確認した。埋め戻しについては、田面の造成などの施工と直結するものであったことから、現場の引き渡しについては、調査区が開口している状態のままとし、施工業者が埋め戻しを行うとともに、工事に着工した。

調査区名については、全遺跡共通で試掘や本発掘調査に関わらず、1から178までの通し番号を付した。調査区の設定においては、当初は工事対象となる範囲全体に1本のトレンチを通して設置していたが、長大な調査区を設定してしまうと、降雨後の排水処理等に多大な時間を要するという問題点があった。よって、現地調査を迅速に進めるため、事業の途中からは約30~50m毎に土手を設け、調査区を小区に区切ることとし、調査区名については枝番(丸数字)で管理した(例:100①T)。調査区を区切る土手については、必要に応じて最終的には掘り下げて下層の遺構を調査した。なお、本報告書中では、主に試掘調査区や遺構・遺物が見発されなかった調査区については詳述していない。

遺構等については、基本的には調査区毎に1から始まる仮番号を付して台帳を作成しながら管理した(例:100①T-D 1 150①T-E 1等)。報告書作成時には全体を通して連番で遺構番号を振り直しており、現地調査時と報告書作成時の遺構番号の新旧対応表を作成して追認が可能な状態にしている。遺構の記録に際しては、工事に伴い設置した3級及び4級基準点を測量原点とし、トータルステーションを用いて各調査区に測量基準点を設けた。遺構の実測は主に調査区の両端に任意座標で基準点を設定し、そこから水糸で測量基準線を引き、直線上に間竿などを設置してそれを基準に原則1/20縮尺で測量した。現地で作成した図面を世界測地系座標に当てる作業は、調査終了後にトレースしたデジタル画像を調整する形で実施した。断面図と調査区壁面については遺構の内容に合わせて必要箇所を作成し、遺構が見発されなかつた調査区については柱状図で済ませた箇所もある。また、一部調査区についてはトータルステーションを用いた測量作業や、株式会社CUBIC製の遺構実測支援システム「遺構くん」を使用した図化を実施した。

遺構等の写真撮影は、Nikon社製デジタル一眼レフカメラD3200(撮像素子サイズ:23.2×15.4mm[サイズCMOSセンサー]、有効画素数:24.2メガピクセル)を用いた(記録形式RAW及びJPEGの同時記録)。

遺物は、基本的には検出遺構・層位毎に記録して取上げ、特徴的な出土状況の遺物等については、図面や写真で記録を行った。

2 整理等作業

(1) 資料の整理

整理等作業は、平成27年度から発掘作業と並行して着手した。遺物の水洗・注記等の基礎整理作業は、今後の資料管理や、カビの発生等による収蔵環境の悪化防止を考慮した上で、報告書掲載の有無に関わらず全ての資料を対象に行なった。一部資料の洗浄注記接合作業については民間に委託した。そして、令和2年度中にはほぼ全ての遺物の洗浄注記作業を終了した。遺物の実測トレースについては、遺物整理員によつてを行い、一部資料については委託して実施した。

遺構図面等の基礎整理に関しては、雨天等による野外作業の中止日に随時調査員で行うとともに、平成30年度からは図面整理に専従する整理員が加わり、調査員によるチェックが終了した図面から随時Adobe Illustratorでトレース作業を行なった。令和2年度からはトレース図面を国土座標に乗せて調査区の全体配置図を作成する作業も行なった。令和3年度からは報告書掲載用に版組レイアウトを行なった。

(2) 調査結果の整理

本事業において最も広大な面積を調査した山王遺跡では、調査区毎に成果を概括し、各調査区の担当調

査員が重要と判断した遺構を厳選することで、報告書で詳述する遺構の候補とした。ここで作成した、各調査区の成果を概括した「トレンチメモ」を、編集担当者が全てチェックし、総合的な観点から加除筆を行いながら整理して、報告遺構を整理した。その後、原稿を作成する過程において、各執筆担当者により、さらに調整が行われた。この作業を通して選択した遺構の種類は、掘立柱建物跡・柱列跡・堅穴建物跡・井戸跡・土器埋設遺構が主に優先するものとして挙げられる。そのほか、特徴的な遺物の出土状態を呈するものについては文章・表とし、その他は表にまとめた。

3 報告書の作成方針

(1) 遺構の掲載方針

- ・本事業で発見された遺構は総数3,800以上である。掲載方針は、以下の基準のとおりである。
- ・古代の道路遺構及び区画溝等については文章・表とする。
- ・調査成果の整理の際に作成した「トレンチメモ」をもとに資料を精査し、掘立柱建物跡・柱列跡・堅穴建物跡・井戸跡・溝跡・土壙・土器埋設遺構を中心として報告することとし、残存状態が良好であること、規模が大きいもの、遺物が多く出土したり特徴的な遺物出土状況のもの等については文章・表で詳述し、そのほかは属性表にまとめた。
- ・報告時の体裁を文章と属性表に仕分け、編集の手間を減らすように務めた。報告体裁の仕分けについては、各執筆担当者が担当エリアを概括しながら判断し、編集担当者が最終確認をした。報告時の登録番号は、文章もしくは表で記載した遺構に限定したため、登録番号を付していない遺構も多い。断面図には単に「SD」や「SK」と記している。烟跡の可能性がある小溝群も文章ないし表で報告する。
- ・遺物包含層や堆積層については、重要遺構の年代決定等に関わるもののみを取り上げ、出土遺物についても遺構として取り上げたもののみを精査する。

(2) 遺物の掲載方針

本事業で出土した遺物の量は、テンバコ約2,200箱である。当センターでは、報告書を作成する際には出土資料の調書を作成して管理することとしているが、本事業では以下の方針により調書を作成し、報告書で提示することとした。

- ・報告書で詳述することとした遺構出土遺物については、全て調書を作成する。
- ・堆積層出土遺物については、重要遺構の年代を決定付けると判断したもののみを検討する。
- ・遺構出土遺物で報告書に掲載する資料については、年代決定資料等を優先する。
- ・括資料については、今後の土器編年研究等の基準資料となり得たことから、できるだけ多く掲載する。
- ・墨書き器と陶磁器類については、出土状態に関わらず全て登録番号を振り、報告書掲載資料の候補とする。
- ・上記基準から漏れた遺物に関しては、実測図の作成が可能な資料等については、適宜抽出して報告書掲載候補とした。

III 遺跡の環境

1 地理的環境

多賀城市は、宮城県のほぼ中央、仙台市の中心部から北東約10kmの位置にあり、総面積は19.69 km²である。市の東側は太平洋に面し、北西は加瀬沼を隔てて利府町、北東は塩竈市、東は七ヶ浜町、西から南にかけては仙台市とそれぞれ接している。

本市の地形は、北西から南東にかけて利府町の丘陵地帯を源流とする砂押川によって大きく二分されている。砂押川の北は、松島丘陵と呼ばれる標高50m未満の低丘陵であり、南に向かって枝葉のように延びている。多賀城跡が立地する丘陵上には、市内では最も古い中生代三疊紀の利府層があり、多賀城碑や多賀城跡の礎石もこの層の一部の花崗質砂岩であることが判明している。一方、南部から西部にかけては、県中央部の海岸線に沿って広がる沖積平野の北端部にあたる。この沖積平野は一般的に仙台平野と呼ぶが、陸前丘陵のあいだに形成された内陸の沖積平野も含めることもある。なお標高の最高値は多賀城跡がある市川字大久保の52.6m、最低値は栄三丁目の0.8mであり、市域の約50%は標高5m以下となっている。

市内を流れる河川としては、七北田川、砂押川、勿来川などがある。市西部の仙台市との境を流れる七北田川は、仙台市の北端に近い泉ヶ岳を源とする二級河川で、中流域では冠川・今市川などと呼ばれたこともあります。現在は仙台市の蒲生で仙台湾に注いでいるが、慶長年間の改修以前は、現在の砂押川の流路を通り、七ヶ浜町の湊へと流れていた。かつては、新田付近から東側に蛇行し、流路を変えながら現在の水田地帯南側付近を通っていたことが、発掘調査や地図の形状分布、航空写真に見るクロップマークから推察される。砂押川は利府町菅谷を源とし、市の北部で利府町森郷を源とする勿来川と合流し、貞山運河を経て仙台港へと注いでいる。かつては流域ごとに市川・八幡川・田中川などと呼ばれていた。

2 歴史的環境

(1) 繩文・弥生時代

本市近隣の松島湾沿岸には、里浜貝塚、大木貝塚、西の浜貝塚などの著名な貝塚が多数分布している。沿岸部と比べるとやや内陸に位置する本市においてその分布は少ないが、市北部の多賀城跡内には、繩文時代前・中期の五万崎遺跡、金堀貝塚が、沿岸部に近い市東部には繩文晚期の大代貝塚などがある。

弥生時代における市内の遺跡としては、大代地区にある樹形圓貝塚がある。この貝塚は、大正8年の大代貝塚発掘の際に発見された小規模な貝塚であり、山内清男が複圧痕土器を発見したことで著名である。そのほか、多賀城跡内の五万崎遺跡で石包丁が出土し、山王遺跡の沖積地では弥生時代中期以前の水田跡や遺物包含層が、市川橋遺跡では中期の遺物包含層が発見されている。

(2) 古墳時代

多賀城市西部の七北田川や砂押川によって形成された微高地に立地する山王遺跡では前期の集落が確認されているほか、市川橋・山王・新田の各遺跡では、低湿地部分の一部に水田が営まれていたことが判明している。中期になると、山王遺跡では東北地方において最も早く鉄器製作が行われた集落が形成されていたことが、発掘調査により確認されている。さらに北海道系の土器や石器が出土し、北方の人々とも交流していたことが明らかになった。後期においては、集落内を流れる7世紀前半から中頃の河川跡より数多くの生活道具とともに仏具である木製柄香炉が出土していることから、仏教伝来の影響を受けた、中央と密接に関わる集落があったことが判明している。特に現多賀城インター・チェンジ付近の山王・市川橋遺跡では、溝や材木塀で区画された100棟以上の堅穴建物で構成される集落が発見されており、地方豪族が居住した拠点集落と考えられる。

墳墓については、中期頃の高崎古墳群（丸山圓古墳群）や後期の稻荷殿古墳などの高塚古墳、後期～

終末期の大代横穴墓群、田屋場横穴墓群などの横穴墓があり、地方豪族の墓であったと推測される。

(3) 古代

古代の東北地方には、国家が北方において様々な政策を遂行するための拠点として、城柵が各地に設置された。承平年間（931～938）に作成された『和名類聚抄』には、陸奥国府は宮城郡にあったと記されており、市川の多賀城に所在したと考えられている。陸奥国の成立は7世紀半ばのこととされているが、その頃の北限は大崎地方あたりであり、それよりも北の地域はまだ律令政府に属さない「蝦夷の地」であった。仙台市太白区郡山に所在する郡山遺跡では大規模な城柵が発見され、7世紀末頃には陸奥国府が置かれたと考えられている。

陸奥国内では養老4年（720）に蝦夷の大規模な反乱が起り、按察使が殺害される事態となった。これを受け、陸奥・出羽国内の政策の見直しが行われ、8世紀の前葉（多賀城碑によると神亀元年＝724年）、仙台平野を望む松島丘陵の先端に多賀城が築かれ、郡山遺跡から国府機能が移転された。

多賀城には陸奥国を治める国府が置かれ、国司が派遣されるとともに、陸奥・出羽両国を統轄する按察使が常駐していた。律令制が未だ及ばない北の地域を律令政府の管轄に取り込んでいく役割も担い、奈良時代には鎮守府も置かれるなど、東北地方の政治・軍事の中心であった。その後、鎮守府については、延暦21年（802）に坂上田村麻呂によって築かれた胆沢城（奥州市）に移され、以後は国府の機能だけが残る。『日本後紀』承和6年（839）の記事を最後に「多賀城」の名は文献から姿を消すが、現段階では11世紀半ば頃に終末を迎えたと考えられている。

多賀城は、標高約52mの丘陵部から約4mの沖積地にかけて起伏に富んだ地形に展開していた。一辺670～1000m程の不整形の外郭線には高さ約4～5mの築地塀や材木塀が設置され、南、東、西、北西に門が開いていた。南門は政庁へと続く正面玄闇として、また東門は当時港が開かれていた塩竈へと続く海路の玄闇として機能していたと考えられる。城内のほぼ中央、約100m四方を築地塀で囲った範囲には、「政庁」が置かれ、中心建物である正殿は儀礼や重要な公務が執り行われる場であったと考えられる。藤原朝彌による改修、伊治公皆麻呂の乱後の再建、貞観地震からの復興を契機とする変遷が確認されている。さらに、城内各所の平坦な場所では、遺構が集中して検出されている。政庁東側の作貫地区、政庁南側の城前地区、東門の南西にある大畑地区、政庁北側の六月坂地区、城内西側にある金堀地区や五万崎地区などでは、実務を執り行った役所が設置されていた。

多賀城の南東約600mの地点には、多賀城の造営とほぼ同時に付属寺院である多賀城廃寺が建立された。塔と本尊を祀る金堂が向き合って東西に並び、その北には講堂が置かれ、中門から延びた築地塀が塔と金堂を取り囲み講堂に取り付く伽藍配置である。塔と金堂が向き合う配置は、大宰府付属の觀世音寺と共通する。正式な寺名は伝わっていないが、城外的主要道路で万灯会が行われた際に使用された「觀音寺」と書かれた墨書き土器が出土しており、多賀城廃寺の寺名と考えられている。

また、多賀城に関わる重要な遺跡として、大代地区に位置する柏木遺跡は、多賀城跡東方約4kmの海岸線に近い丘陵南斜面で発見された製鉄遺跡で、8世紀に操業した多賀城に関わる製鉄所跡とみられている。館前遺跡は、9世紀頃の大型建物群が発見されており、国司の邸宅（国司館）か城外の役所跡と考えられる。山王遺跡千刈田地区は、JR東北本線陸前山王駅の北に所在し、10世紀前葉頃の四面廻廊建物を中心に数棟の建物と井戸が発見されている。多量の陶器類や「右大臣殿 骨馬收文」と書かれた木簡が出土したことなどから、「國守館」跡と考えられている。

宝龜11年（780）に起きた伊治公皆麻呂の乱ののち、多賀城の南面から西側にかけての山王・市川橋遺跡には、道路により基盤目状に区画（方格地割）されたまち並みが整備される。その基準となったのは、まち並みの中を通り多賀城南門へと向かう南北大路と、南門から5町（約550m）南側で南辺築地と平行して東西に延びる東西大路である。さらに南北大路の南側延長には、河川を改修し運河を整備するなど水陸両交通を兼ね備えた都市建設が始まつた。多賀城南面に広がるまち並みは、この南北大路（幅約18m→23m）、東西大路（幅約13m）を基準として段階的に整備されており、9世紀中頃最大となるこ

とが発掘調査により判明している。その範囲は東西約 1700 m、南北約 900 m および、南北道路 13 条、東西道路 6 条が確認されている。

まち並みの中には、掘立柱建物跡、堅穴建物跡等の居住施設が多く発見されており、特に大路沿いに近くなるほど高密度となる。多賀城に勤務した役人を始めとし、工人など多くの人々が暮らしていたと考えられており、東西大路に面した区画には国司館が分布している。東町浦地区や高崎遺跡井戸尻地区では万灯会に使用したと見られる灯明皿の一括廃棄があり、市川橋遺跡では多量の人面墨書土器が出土するなど、まち並みの中でのまじないや儀式のあり方もうかがえる。まち並みの周辺には田や畠などの生産域が広がっており、土地利用の差が認められる。このような多賀城を支えるために人工的につくられた空間は、規模は異なるものの当時の都や大宰府に見られるまち並みと共通し、多賀城とその前面に広がるまち並みを合わせて、「古代都市多賀城」と呼んでいる。

(4) 中世

多賀城が終末を迎えるとされる 11 世紀半ば以降、陸奥国支配の拠点である国府は「多賀国府」の名で存在しており、そこでは陸奥守の代官である目代が留守所の長官=留守職として在府官人を指揮し、国務を執り行っていた。文治 5 年 (1189)、奥州平泉へと遠征した源頼朝は、鎌倉への帰途多賀国府に立ち寄り、地頭たちに対し、奥州統治の基本方針を示した。翌建久元年 (1190)、藤原泰衡の郎従であった大河兼任が鎌倉政権に対し反逆を企て、敗北するという事件が起こると、頼朝は陸奥国留守職に伊沢家景を任じ、陸奥国の民事・行政にあたらせた。伊沢氏はのち、職名にちなみ「留守」名字を名乗るようになり、留守氏の所領として「高用名」が与えられた。多賀城市の西部にある新田・山王・大日南遺跡では、溝や塀で方形に区画された屋敷群が発見されている。施釉陶器や中国産陶磁器などの当時の高級品が出土していることから、上級武士階級の屋敷とみられ、留守氏との関わりが指摘されている。多賀国府の所在地については、古代の多賀城と同じ場所に存在したという説や、七北田川流域の仙台市東部岩切から多賀城市西部にかけての地域を想定する説など、諸説がある。また、市域の西側を流れる七北田川（冠川）は、物資輸送の橋が航行し、河原では二か所で定期市が開かれ、その一帯は中世多賀国府における経済活動の拠点となっていた。またこの河原は、彼岸念佛に代表される逆修供養の場でもあり、七北田川堤防付近に集められた南安楽寺古碑群が、当時の信仰の様子を物語る。

元弘 3 年 (1333)、北畠顕家は陸奥守として義良親王（のちの後村上天皇）と共に多賀国府に赴く。建武 2 年 (1335)、鎌倉にいた足利尊氏が後醍醐天皇に反旗を翻して京都へ進出した。鎮守府將軍に任せられた顕家は義良親王を奉じ、留守氏や八幡氏といった奥州の兵を引き連れて多賀国府を出發し、京都を奪還する。一方で、顕家が不在の奥州では足利方が勢力を盛り返しており、顕家は陸奥国へ戻り勢力回復を図るが叶わず、延元 2 年 (1337) に伊達氏を頼り、伊達郡巣山に移った。その後、南北朝双方による争奪戦の中、最終的に 14 世紀末、陸奥国では足利方の支配が確立し、多賀国府の名も歴史上姿を消す。

3 遺跡概要

(1) 遺跡各説

市内には、特別史跡指定地を含め、40 を超える遺跡が所在している。西側の沖積地から丘陵部の西端にかけては、新田・山王・市川橋・高崎・西沢遺跡など市内でも有数の規模をもつ遺跡が隣接して分布している。これらの遺跡で発見された遺構や遺物には、陸奥国府が置かれた多賀城と密接に関わるものが多く認められ、この時期に限ってみれば一連の遺跡群と捉えることができる。一方、南東部には海岸線沿いの浜堤上に八幡沖遺跡、浜堤から丘陵にかけては大代貝塚や大代横穴墓群、柏木遺跡などが所在している。

内館館跡は、市北部の標高約 5 m の自然堤防上に位置している。本事業開始前までに発掘調査を実施したことではなく、明治時代の地積図には水田中に不整形方の畠地が見られ「内館」の小字が確認されること、「御中館之御分帳」に留守顕宗の所領として「南く」や「南んくやち」などが見られることから、本遺跡は 16 世紀末に留守顕宗が隠居した中館と呼ばれる館の跡と推定してきた。

新田遺跡は、市西部の標高5～6mの微高地に位置している。縄文時代から中世にかけての遺跡として知られており、特に中世では大小の溝で区画された屋敷跡が多数発見されている。このうち寿福寺地区では、12世紀後半から16世紀にかけて連続して屋敷群が形成されていたことが明らかとなっており、出土遺物から上級武士の屋敷と考えられている。

大日南遺跡は、市南西部の自然堤防上に位置している。調査の結果、13～16世紀の大規模な区画溝跡で囲まれた屋敷跡や土坑墓群などが発見されている。屋敷跡は、13～14世紀中葉頃までは小規模な区画溝で構成されるのに対し、15～16世紀頃には大規模な区画溝へと変化する様相が確認されている。屋敷跡は6区画確認されており、土坑墓で構成される墓域は南西側の区画溝を埋め戻した後に形成されている。本遺跡は在地の武士であった八幡氏が治めた「八幡荘」と推測される領域の北西端部に位置しており、発見された中世の屋敷跡と関連している可能性がある。

山王遺跡は、標高3～4mの微高地に立地し、その範囲は東西約2km、南北約1kmである。これまでに弥生時代中期頃の水田跡や古墳時代前期～後期の集落跡、古代の方格地割、中世の屋敷跡などが発見されている。このうち、古代の方格地割は東西大路と南北大路の二つの基幹道路を基準とし、東西・南北の直線道路によっておよそ1町四方の区画を造成したものである。これによって形成されたまち並みからは、上級役人の邸宅や中・下級役人の住まいである建物跡や井戸跡などが多数発見されている。

安楽寺遺跡は、市西部の微高地に位置している。この地区は『風土記御用書出』の旧跡の項で「安楽寺跡」とされている。また観応2年（1351）の岩切城合戦の時、留守氏が籠った新田城の遺跡とする考えも示されたが、これまでのところ古代・中世の遺構は発見されていない。

市川橋遺跡は、市中央部の標高2～3mの沖積地に位置している。多賀城南面の広い範囲に広がっており、山王遺跡と同様に古代の方格地割に基づくまち並みが形成されている。

大日北遺跡は、市南部の標高3m前後の微高地に位置している。これまでの調査では、古代の小溝群、土器埋設遺構、水田跡などが発見されている。

六貫田遺跡は、市南部の標高3m前後の自然堤防上に位置している。古代の散布地として認識されていたが、これまで調査実績がなかったため、遺跡の性格については不明である。

（2）基本層序

本事業における発掘調査を実施するにあたり、これまでの山王遺跡を中心とした既往調査成果をもとに、基本層序を以下のように大別して取り扱う。

- I層　II層より上面に堆積する層をまとめてI層とする。現代の耕作土や盛土等も含まれる。
 - II層　古代の遺構の最上層に堆積する層である。主に黒色～黒褐色を呈している層は、年代測定では、10世紀後葉～11世紀前葉頃の範囲に収まる分析結果が複数確認できる。（第3分冊附章2参照）。このことから、II層は10世紀後葉～11世紀前葉頃に広域に堆積した層の可能性が高く、10世紀後葉以降中世頃の遺構検出面となる。
 - III層　主に黒褐色～暗褐色を呈する古代の遺構検出面であるIV層と、II層の間に堆積する層を一括してIII層とした。古代の堆積層及び遺構検出面となる。
 - IV層　主に黄褐色～褐色土を呈する古代の地山である。古墳時代から古代の遺構検出面となる。
 - V層　IV層下部の黒色～黒褐色土層である。場所によっては古墳時代前期の水田跡や遺物包含層が形成されている箇所もある。
 - VI層　V層直下の黄褐色～褐色の堆積層である。
- 大別層中に複数の土層が確認された場合には、適宜細別して捉えている。
また、各遺跡での様相が異なる場合については、各章で改めて説明している。

IV 安楽寺遺跡・市川橋遺跡・六貫田遺跡 大日北遺跡の試掘確認調査成果

本事業の範囲については、遺跡内及び隣接地に及んだことから、遺跡の範囲を確認するための試掘調査を実施した。その結果、内館館跡、新田遺跡、大日南遺跡及び山王遺跡については、従前の周知の遺跡の範囲よりも外側で構造が確認されたことから、本発掘調査として対応し、各章でその成果を詳細に報告する。ここでは試掘のみで調査を終了した安楽寺遺跡、市川橋遺跡、六貫田遺跡及び、大日北遺跡について報告する。

①安楽寺遺跡の試掘確認調査成果（第1図）

安楽寺遺跡では、これまで調査実績がほとんどなかったことから、遺跡内における構造の有無及び東側隣接地における構造の広がりを確認するために、6箇所にトレンチを設定し、試掘調査を実施した。その結果、いずれの調査区でも構造・遺物は見られなかったことから、工事による遺跡への影響がないと判断し、本発掘調査対象から除外して調査終了とした。

②市川橋遺跡の試掘確認調査成果（第2図）

特別史跡多賀城跡の西側に隣接する市川橋遺跡の構造の有無を確認するために、4箇所にトレンチを設定し、試掘調査を実施した。その結果、いずれの調査区でも70cm以上の盛土が確認され、その下層は腐植土ないしグライ化作用を受けた砂礫層であり、湿地か河川内と考えられたことから、工事による遺跡への影響がないと判断し、本発掘調査対象から除外して調査終了とした。



第1図 安楽寺遺跡試掘確認調査位置図

③六貫田遺跡の試掘確認調査成果（第3図）

六貫田遺跡では、これまで調査実績がなかったことから、遺跡内における遺構の有無を確認するために8箇所のトレンチを設定し、試掘調査を実施した。その結果、いずれの調査区でも遺構・遺物は発見されなかったことから、工事による遺跡への影響がないと判断し、本発掘調査対象から除外して調査終了とした。

④大日北遺跡の試掘確認調査成果（第4図）

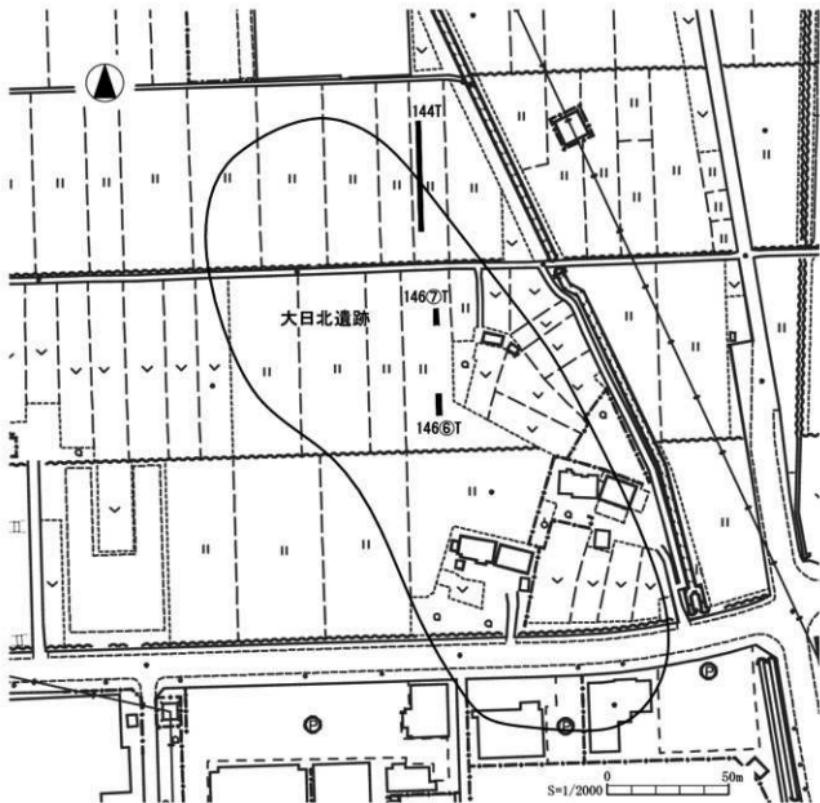
遺跡内における遺構の有無及び北側隣接地における遺構の広がりを確認するために、3箇所のトレンチを設定し、試掘調査を実施した。その結果、河川跡等が確認されたが、遺構がないことを確認したため、工事による遺跡への影響がないと判断し、本発掘調査対象から除外して調査終了とした。



第2図 市川橋遺跡試掘確認調査位置図



第3図 六貫田遺跡試確認調査位置図



第4図 大日北遺跡試掘確認調査位置図

V 内館館跡

1 遺跡概要

本館跡は古代及び中世の遺跡である。概要については遺跡の位置と環境で述べたので、ここでは中世の留守氏と南宮地域について簡単に記述する。

本館跡が所在する南宮は留守氏累代の譲状に記されており、留守氏の所領だったことがわかる。留守氏は、鎌倉時代には「多賀国府」で「陸奥国守職」として陸奥国内の統治にあたっていた。多賀国府や留守氏の本拠地は明確ではないが、本遺跡の南西 900 m にある多賀城市新田遺跡や新田遺跡の西に接する仙台市洞ノ口遺跡などが候補地となっている。南北朝期には、仙台市岩切と利府町にまたがる高森山に岩切城（国史跡）を築城し、室町・戦国時代にかけて本拠地としていた。

室町時代には留守氏の有力家臣として南宮氏の名前があり、南宮を本拠地としていたと思われる。南宮氏は 16 世紀前半頃成立の「奥州留守家旧記」には登場するが、16 世紀中頃の留守家の家臣と資産などを記した「留守分限帳」には記載はない。

戦国時代末期には留守氏 17 代顕宗が隠居させられ、「御中館」に居住し、隠居分として「をき南く（沖南宮）、かみ南く（上南宮）、けあけ（毛上）」などにある田畠が与えられた。これらは南宮内の地名であり、中館の周辺にあったと考えられている（多賀城市史編纂委員会 1997）。また、顕宗隠居直後に、南宮のうちの田が恩賞として留守氏 18 代政景の部下に与えられている（仙台市史編さん委員会 2000）。

その後、豊臣秀吉による奥州仕置によって留守氏と南宮との関係は断たれ、南宮は伊達領となり、江戸時代には 200 石の成田氏が南宮に在郷屋敷を置いていた。

本遺跡内には南宮神社が存在する。『羽見観蹟聞老志』（享保 4 年 1719）には記載があり、この頃には存在していたことがわかる。また、『風土記御用書出』（安永 3 年 1774）には伊勢神宮を祀った神明社が内館にあったと記されている。今回の調査では神明社の跡地と考えられる小規模な土壇が残る場所を発掘調査した（81T）。

考古学的にみると、市内には中世の遺構・遺物が発見された遺跡が 21ヶ所あり、市内遺跡の半数が中世のものである。これらのうち城館とされているものが 13 遺跡、屋敷とされているものが 3 遺跡、寺院が 1 遺跡である。城館は大部分が丘陵上に立地しており、市街化のため旧状をとどめるものではなく、発掘調査が実施された場合でも小面積の調査が多いことから、全容がわかるものはない。本館跡は自然堤防上に立地する城館とされているが、発掘調査の結果からは屋敷跡と思われる。

一方、沖積地の微高地では、山王遺跡や新田遺跡などで大溝によって区画された屋敷が発掘調査されている。山王遺跡では、八幡地区で「古い屋敷跡」と「新しい屋敷跡」、伏石地区で「伏石地区的屋敷跡」（宮城県教育委員会 1997）が発見されている。いずれも大溝によって方形に区画されており本館跡と類似したありかたである。また、八幡地区的北側では、北辺と西辺を検出したが南辺と東辺が発見されていない「北の屋敷跡」（宮城県教育委員会 1994）と、南西コーナー部分が検出された「北西端の屋敷跡」（宮城県教育委員会 2015）が発見されており、いずれも 2 重の大溝で区画されている。これらの八幡地区的屋敷跡は本館跡の南東およそ 800 m 付近に所在している。

新田遺跡は大規模な堀で区画した広い範囲の内部をさらに大溝で分割していくつかの屋敷としたもので（多賀城市教育委員会 1990、千葉 1992、本書新田遺跡第 119 次調査第 20 図）、本館跡の南西およそ 900 m に所在する。大日南遺跡では大溝で区画された方形の屋敷がいくつか連続して存在していることが明らかになっており（多賀城市教育委員会 2013）、本館跡の南 1.8 km に所在する。

また、新田遺跡のさらに西側にある仙台市洞ノ口遺跡では新田遺跡と同様に、大規模な堀で囲まれた範囲内を大溝で区画して屋敷としており、室町～戦国時代には留守氏本家に関連する遺跡と考えられている

(仙台市教育委員会 2005)。本遺跡の西 1.7 km に所在し、留守氏の居城である岩切城跡は洞ノ口遺跡の北東 1.7 km にある。仙台市中野高柳遺跡では同時期に 2 ~ 7 区画の屋敷が存在する鎌倉時代から近世初期にかけての屋敷の変遷が明らかにされている (宮城県教育委員会 2006)。いくつかの屋敷が連続あるいは隣接して存在するありかたは大日南遺跡と類似しており、本館跡の南 3.6 km に所在する。これら 대부분は留守氏に関連する遺跡であるが、中野高柳遺跡は室町時代には国分氏の支配地域であり、大日南遺跡は戦国時代には留守氏の家臣となっていた八幡氏との関連が推定されている。

永禄年中に留守頼宗が隠居後に居住した「御中館」が南宮地内にあると最初に指摘したのは吉田東伍である (吉田 1900)。しかし、具体的な場所については触れていない。その後、加藤・野崎は多賀城跡周辺の分布調査をもとに、明治 19 年の地籍図と合わせ、南宮内館の地について、畠として利用されている場所を幅の狭い水田が取り巻いていて、「水濠が周っていたように観察される」とし (加藤・野崎 1973)、館跡と考えた。調査の結果、加藤・野崎の指摘のとおり、この場所に大溝で区画された屋敷跡が存在したことが明らかになった。

2 調査の方法と経過

今回のは場整備事業に際して、遺跡周辺の航空写真を点検したところ、館跡を巡る大溝がクロップマークとして明瞭に確認できた。したがって、調査は館跡の範囲を確定することから始め、クロップマークを参照して調査区を設定した (写真図版 1-2)。その後、は場整備計画が確定した段階で、水路やパイプレイント設置部分、揚水機場などの地下構造に影響を及ぼす部分については本発掘調査、農道などの遺構に直接影響を及ぼさない部分については確認調査を実施した。

調査区には調査順に番号を付したが、は場整備関連の調査全体の通し番号としたため、本館跡については連番ではない。本館跡の調査区は 4 ~ 10 調査区 (以下 T と略す)、53 ~ 81T、89 ~ 93T、106T、121T である (第 1 図)。

測量は世界測地系の座標で行った。平面図は、1/20 で作成した調査区とトータルステーションなどの電子機器で作成した調査区とがあり、これらを統合して報告書作成に用いた。

調査経過

【平成 27 年度】刈り取り後の 10 月から調査を開始し、4 ~ 10T、53 ~ 79T の調査を実施した。館跡の範囲確認のための調査区は、6 ~ 8T、57 ~ 64T である。この際に平安時代の小溝群などが発見され、水路や道路部分の調査の結果、遺跡の範囲が大きく広がった。

【平成 28 年度】80 ~ 81T、89 ~ 93T、106T、121T の調査を実施した。93T は館跡内部の畠として残っていた部分の遺構の残存状況や遺構面の高さを確かめるための調査で、一部過去の開田によって削平されているものの表土直下に遺構が良好に残存していることが判明した。106T は南宮神社周辺の様子を確認するための調査である。このほか、事業地内の田面高を決定する際の参考にするため、遺跡内の遺構面の標高をつば掘りによって調べ、本館跡の調査を終了した。

3 基本層位

隣接する山王遺跡とほぼ同様の堆積状況である。

【I 層】近現代の水田耕作土と床土である。厚さは 0.2 m 程度である。

【II 層】湿地への落ち込み部分や溝跡の上部などの低い部分に残る層で、平安時代の遺構を覆っている。黒褐色の粘土もしくは粘土質シルトで、厚さは 0.1 m 前後である。山王遺跡の基本層 II 層と同じものと思われる。年代は 10 世紀後葉～11 世紀前葉頃と考えられる。(第 3 分冊附章 2 参照)

【III 层】7②・91②T から 6①・78①T にかけて存在するが、遺構検出時に表土と共に除去したため、調査区の壁面でのみ確認した。上下 2 層 (III a・III b 層) に分層できる。7②・91②T では中世の SE51・52 井戸跡はこの層の上面から掘り込まれ、平安時代の SE50 井戸跡はこの層に覆われていた (第

39図1)。灰黄褐色の砂質シルトで、厚さは0.2m程である。

【IV層】大部分の調査区の遺構検出面である。水成堆積層で、黄褐色を呈し、シルトが大部分であるが砂や粘土に近い場所もある。90⑥Tで検出したSX214土器集中の土器がIV層堆積時に流入したものと考えると、本層の上部は古墳時代中期以降に堆積したことになる。なお、隣接する山王遺跡では本層に相当する黄褐色シルト層が古墳時代中期の遺構を覆っている場合と遺構がシルト層を掘り込んでいる場合があることが確かめられている。

IV層の上面で流路跡と思われる落ち込みを各地で検出した。堆積土はIV層によく似たシルト層で、上部にはTo-a火山灰が流入しているものや基本層II層が堆積しているものがあった。すべての遺構に切られしており、自然に形成された落ち込みであるため、一部を除き特に図示しなかった。

4 発見した遺構と遺物

発掘調査の結果、掘立柱建物跡、井戸跡、溝跡、土壤、畑作の痕跡（以下、小溝群で記述）などが発見された。また、これらの遺構や周辺から土師器、須恵器、中世陶器などが出土した。しかしながら、幅2m程の細長いトレンド調査が大部分であり、遺構の全容が把握できたものは少なかった。

館跡を区画する大溝跡はクロップマークで明瞭に確認でき、確認調査の結果とも一致していた。これらのことから、館跡は南側でやや東に屈曲する長方形状の区画（以下、東郭と記述する）と西側の区画（以下、西郭と記述する）からなることが明らかになった（第2図）。東郭では区画溝は5条あり、以下ではこれらを内側から、最内溝跡（SD01）、内溝跡（SD02）、中溝跡（SD03）、外1溝跡（SD04）、外2溝跡（SD05）と呼ぶことにする。また、西郭では4条あり、同様に内側から、西郭内溝跡（SD06）、西郭中溝跡（SD07）、西郭外1溝跡（SD08）、西郭外2溝跡（SD09）と呼ぶことにする。

以下、調査区ごとに発見した遺構と遺物の概要を記述するが、規模等の詳細はそれぞれの属性表を参照していただきたい。

4・5T(第1図)

遺構は検出されなかった。遺跡の範囲外である。

6①～③T、78①～③T(第3・4・36・37図、写真図版2-1～5)

6Tは館跡の範囲を確認するためのトレンドである。しかし、後に北側に隣接して水路設置のため78Tを設定し調査を実施したため、併せて報告することとする。なお、これらのさらに東側は54Tとして調査を実施した。

調査区全域で掘立柱建物跡や堀跡を始めとして多くの小柱穴を検出した。また、調査区西側では館跡を区画する大溝などを、東側では平安時代の溝跡や小溝群を検出した。

【SB16掘立柱建物跡】(第3図) 柱穴が中世のSD12溝跡の堆積土を掘り込んでいることから中世の建物跡であると考えられる。

【SB24掘立柱建物跡】(第4・37図9) 柱穴の規模がやや大きいことから古代のものである可能性が考えられる。

【SB26掘立柱建物跡】(第4・37図7) 6②Tの柱穴3基と78②Tの柱穴2基から推定した掘立柱建物跡である。

【SA17・18・33柱列跡】(第3・4・37図6) 掘立柱建物跡の一部である可能性が考えられる。SA33堀跡は柱穴の規模がやや大きく、古代のものである可能性が考えられる。

【SD02内溝跡東辺】(第3・4・36図) 78①Tで西肩部分を検出し、6①Tと78②Tで東肩部分を検出した。調査区の境界で分断されたため詳細は不明である。堆積土から、丸瓦、須恵器高台付壺・甕、土師器甕、須恵器系土器壺が出土した。

【SD03中溝跡東辺】(第4・36図、写真図版2-3) 底面がほぼ中央で0.3m程高まっており2条の溝跡が存在した可能性もあるが、最上部は灰色シルトで同時に埋没している。堆積土上部から龍泉窯産と思わ

れる青磁碗（写真図版 11-3）が出土した。本溝跡と SD04 外 1 溝跡東辺との間隔は溝跡の中心で測るとおよそ 9 m である。

【SD04 外 1 溝跡東辺】（第 4・36 図、写真図版 2-4）クロップマークでは南へ延びているが、東辺南端の 62T では検出されていない。本溝跡と SD05 外 2 溝跡東辺との間隔は溝跡の中心で測ると 2.6 m である。

【SD05 外 2 溝跡東辺】（第 4・36 図、写真図版 2-5）SD04 外 1 溝跡と近接して平行する溝跡で、同様に南側の 62T では検出されていない。堆積土から土師器坏 B V 類（第 51 図 1、写真図版 10-1）が出土した。

【SD11 溝跡】（第 3・37 図 1）北側に隣接する 7①・91①T、92T で検出された SD10 溝跡と連続する溝跡で、堆積土が類似するため 6①T の SD12 溝跡と一連である可能性がある。堆積土上面から小柱穴が掘り込まれている。堆積土から、中世陶器甕（第 53 図 92）、石臼、丸瓦、灰釉陶器皿（第 53 図 93、写真図版 10-93）、須恵器甕、土師器坏・甕、須恵系土器坏、砥石（第 54 図 96）、全面に煤が付着した円碟（写真図版 12-95）が出土した。

【SD12 溝跡】（第 3 図）6①T で検出した東西方向の溝跡で、東側は 78T までは延びていない。堆積土が類似するため SD11 溝跡と一連である可能性がある。堆積土中から、中世陶器甕、石臼（第 54 図 2）、丸瓦、須恵器坏・甕、土師器坏、須恵系土器坏が出土した。

【SD19 溝跡】（第 4・36 図）78②T で検出した北西～南東方向の溝跡で、堆積土上部には基本層 II 層と類似する黒色砂などが堆積している。堆積土の特徴が共通することから、7①・91①T と 92T の SD41 溝跡と連続すると思われる。堆積土中から土師器甕が出土した。

【SD20・21 溝跡】（第 4 図）両者は 3 m 離れて平行している。北側の 7①・91①T と 92T にある SD223・224 溝跡も同様の状況で、一連の溝である可能性がある。南延長上の 62T では検出されなかった。

【SD22 溝跡】（第 4・37 図 5）6③・78③T で検出した南北溝跡で、堆積土下部に黒色の粘土質シルトが薄く堆積している。北側にある 77①T の SD242 溝跡、76①T の SD241 溝跡と 55⑥T の SD240 溝跡とは堆積土が共通しており、ほぼ直線上に並んでいることから一連の溝と考えられる。

【SD29 溝跡】（第 4・37 図 3）6③・78③T で検出した南北溝跡で、堆積土中位に To-a 火山灰が流入している。

【SD30 溝跡】（第 4・37 図 2）6③・78③T で検出した南北溝跡で、堆積土層中に、ひび割れもしくは植物の根の痕跡などに入り込んだ To-a 火山灰の筋がみられる。

【SX27 小溝群】（第 4 図）南北方向の小溝群と東西方向の小溝群が重複し、南北方向の小溝群の方が古い。両方向の小溝群には重複するものや近接するものがあり、少なくとも 2 時期ずつ、4 時期（以上）があつたと思われる。

【SX34 小溝群】（第 4 図）東西方向の小溝群で、SX27 小溝群とは 15 m 程離れている。両者の間には SD30 溝跡があり、小溝群を区画していた可能性も考えられる。

7①～③T、91①～③T、92T（第 3・5～10 図、写真図版 2～5）

7T は館跡の範囲を確認するためのトレンチである。後に東側に隣接してパイプライン敷設のために 91T を設定し調査を実施したため、併せて報告する。また、7①・91①T の道路を挟んだ東側では農道建設のため 92T として調査を行ったため併せて報告する。また、調査区は南北に長いため、①～③それに分けて記述する。

7①T、91①T、92T（第 5・6・38・39 図、写真図版 2-6・7）

調査区の北半部では平安時代の溝跡や小溝群、南半部では館跡を区画する大溝などを検出した。また、南端部（館跡内部）でいくつかの小柱穴を検出したが組み合わせは不明である。

【SK43 土壙】（第 6・38 図 1）堆積土上部に自然炭化した薄い植物層が堆積することで SD10 溝跡と共通することから、一連の可能性も考えられる。

【SD01 最内溝跡】（第 6・38 図 2）調査区の間で屈曲しており、7①・91①T では北辺を、92T では東辺を検出した。クロップマークはみられない。北辺は上幅 3.5 m であるが、東辺は上幅が 2.0 m で、東辺

が狭くなっている。南側延長上の6①Tと78①Tでは最内溝跡は検出されなかった。堆積土から須恵器・高台付壺・甕、土師器壺・甕、曲物などが出土した。

【SD02 内溝跡】(第6・38図4、写真図版2-8) 7①・91①Tでは北辺を、92Tでは東辺を検出した。北辺・東辺ともに、2条の溝跡があり、館跡内側に規模が大きな溝跡が、館跡外側にやや小さな溝跡が巡っているように見えるが、最終的に両者は黄褐色の砂で埋没している。SD01 最内溝跡北辺との間隔は溝の中心で測るとおよそ11mで、東辺との間隔はおよそ5mである。堆積土から、須恵器瓶・甕、土師器壺・甕、須恵系土器壺・高台付壺、砥石(第54図75)、焼けた礫などが出土した。

【SD03 中溝跡】(第6・38図6) 7①・91①Tでは北辺を、92Tでは東辺を検出した。北辺では、壁の途中に段があり、東辺では、底面中央部が浅く東西両側が深くなっている。SD02 内溝跡との間隔は、北辺・東辺ともに溝の中心で測るとおよそ10mである。堆積土から、須恵器甕と龍泉窯産の青磁碗の高台部を円盤状に加工したもの(第53図76、写真図版11-76)が出土した。

【SD04 外1溝跡】(第6・39図2) 7①・91①Tでは北辺を、92Tでは東辺を検出した。堆積土上部には黄灰色シルトなどが堆積し、SD05 外2溝跡東辺とともに覆われている。SD03 中溝跡との間隔は溝の中心で測ると北辺・東辺ともにおよそ8mである。

【SD05 外2溝跡】(第6・39図2) 7①・91①Tでは北辺を、92Tでは東辺を検出した。SD04 外1溝跡との間隔は北辺・東辺ともに溝の中心で測るとおよそ3mである。

【SD10 溝跡】(第6・38図1) 7①・91①Tで検出した南北溝跡で、西側で部分的に検出したSK43 土壌跡とは堆積土が類似することから一連のものである可能性が考えられる。また、92TのSD11溝跡は南延長上にあり、堆積土が共通することから一連の溝跡と思われる。堆積土は上層が自然炭化した植物を多く含む粘質シルトや砂などの薄い互層であり、下層は黒褐色粘質シルトなどである。

【SD11 溝跡】(第6・38図5) 92Tで検出した、屈曲しながら南側にある61Tまで延びる溝跡で、堆積土上面から小柱穴が掘り込まれている。堆積土は上層が炭化物、自然炭化した植物を多く含む黒色シルトで、下層は黒褐色シルトである。堆積土中から茶臼の下臼(第54図63、写真図版12-63)と2枚重なった銅錢(写真図版13-M4)が出土した。

【SD23 溝跡】(第6図) 7①・91①Tと92Tで検出した、北西～南東に延びる溝跡である。堆積土は黒褐色粘土質シルトで、層の中ほどにTo-a火山灰が流入している。堆積土中から土師器壺B V類(第51図68)、須恵系土器壺(第51図69)・鉢(第53図16)が出土した。

【SD35 溝跡】(第5図) 7①・91①Tと92Tの北端で検出した東西溝で、堆積土上部に基本層II層に類似する黒色シルトが堆積している。

【SD41 溝跡】(第6・38図3) 7①・91①Tと92Tで検出した、北西～南東に延びる溝跡で、1度掘り直されている可能性が考えられる。堆積土の特徴が78②TのSD19溝跡と共通しており、一連の溝跡と思われる。新しい時期の堆積土は黒褐色粘土質シルトなどで、最上部に基本層II層に類似する黒色シルトが堆積している。古い時期の堆積土は黒褐色のシルトや粘土である。堆積土から、須恵器壺、土師器壺・甕、須恵系土器壺(第51図72)、砥石(写真図版12-73)などが出土した。

【SD243・244 溝跡】(第5・39図2) 7①・91①Tと92Tで検出した南北溝跡で、両者はほぼ平行している。南延長上の6②Tと78②Tでも同様の溝跡を検出しており一連の溝跡と考えられる。両者の間隔は溝跡の中心で測るとおよそ3mであり、SD243溝跡の東肩とSD244溝跡の西肩の距離は1m程度である。両溝跡を境として東側にはSX46・47小溝群が、西側にはSX48小溝群があり、様相が異なっている。また、両溝跡の間は通路として使用された可能性も考えられる。

【SD243 溝跡】堆積土中から、丸瓦、須恵器壺、土師器壺・甕、須恵系土器壺・高台付壺などが出土した。

【SD244 溝跡】92Tの南端でいくぶん東へ屈曲しており、そのまま東へ延びてSX46小溝群の南を区画する溝跡となっている可能性がある。また、通路であれば交差点を考えることも可能である。堆積土中から、平瓦(第54図21、写真図版11-21)、須恵器壺・甕、土師器壺B V類(第51図7、写真図版10-7)・

高台付壙（第51図77）・甕、須恵系土器壙（第51図6、第52図5、写真図版10-5）・高台付壙などが出土した。

【SX46 小溝群】（第5図、写真図版2-7）南北方向の小溝群で、直線的に延びるものと北で東へ湾曲するものとがあり、前者が古い。また、後者には近接しており同時に存在しないものがあることから少なくとも2時期はあったと思われる、概ね第5図で色分けしたように推測できる。小溝群は地山のブロックを多く含む黄灰色シルトなどで、人為的に埋め戻されている。それぞれの間隔は小溝跡の中心で測ると1.8～2.3mである。

【SX47 小溝群】（第5図）東西方向の小溝群で、SD243・244溝跡の東側に存在する。重複しているものがあり少なくとも2時期あったと思われる。埋土は地山のブロックを多く含む黄灰色シルトなどで、人為的に埋め戻されており、それぞれの間隔は0.8～1.3mである。

【SX48 小溝群】（第6図）東西方向の小溝群で、SD243・244溝跡の西側に存在しており、重複しているものがあり少なくとも2時期あったと思われる。埋土は地山のブロックを多く含む黄灰色シルトなどで、人為的に埋め戻されており、それぞれの間隔は1.5～2.0mである。

7(2)T・91(2)T(第3・7・8・39図、写真図版2・3・4・11・13)

調査区南側では館跡の東郭西辺を区画する大溝を、それより北側（館跡内部）では小柱穴群や井戸跡などを検出した。中央部から東・北側にはSE50井戸跡などの古代の遺構を覆う堆積層（基本層III層）が分布しており、中世のSE51・52井戸跡などはこの層の上面から掘り込まれていた（第39図1）。遺構検出時に乾元重寶など44枚が重なったさし銭（写真図版13-M3）と青磁碗、中世陶器甕（第53図54、写真図版11-54）が出土し、土壌から土師器甕B類（第52図45、写真図版11-45）が出土した。

調査区北側にある小柱穴群は掘立柱建物跡を構成するものと思われるが、組み合わせが判明したものはない。年代は平安時代もしくは中世かと思われるが、遺構検出時に基本層III層を除去してしまったため判別することはできないが、調査区の壁面を観察すると、基本層III層を掘り込んでいるものが多い印象を受ける。

これらの平面形は円形や楕円形のものが多く、直径0.2～0.6mで、深さは0.3～0.7mである。埋土は地山のブロックを多く含む黒褐色シルトなどである。なお、埋土に焼土粒や炭化物粒を多量に含む柱穴があることから、この付近が火災に遭った可能性がある。柱痕跡のわかるものは直径0.2m程度の円形である。柱穴埋土から元豐通寶（写真図版13-M2）が出土した。

【SE50井戸跡】（第3・7・51・53・55～57図、写真図版3・10・13・14）掘方を掘り、内部に方形の井戸側が設置された井戸跡である。溝跡、柱穴と重複しており、これらより古い。調査時には判然としなかつたが、掘方に対して井戸側がかなり南によっているので何度も作り替えられている可能性がある。【掘方】南北3.2m、東西3.0mの楕円形で深さは1.3m程残存している。地山の砂のブロックを多量に含む黒褐色土などで埋め戻され、硬く突き固められていた。須恵器壙（第51図30～32写真図版10-30・31）・高台付壙（第51図29）・甕・瓶、土師器壙・甕が出土した。【井戸側】（写真図版3-1～4）内法で一辺が0.8m程の方形で、上部は抜き取られている。四隅に丸木の柱を立て、横棟で連結し、その外側に板材を横位に積み上げ、さらに外側に板材を縦に並べて構築していた。縦板と横板は固定されていないので、掘方を埋め戻しながら井戸側を組み上げていったと思われる。【隅柱】（第56図W37、写真図版14-W37）直径が0.2mの粗く面取りされた丸太材で、高さは0.7m程残存していた。それぞれの柱は枠組みされた横棟（第56図W7、写真図版14-W7）で固定されている。【横板】（第56図W4・12・13、写真図版14-W12・W13）長さ1.0m、幅0.2m、厚さ3cm程で、各辺とも底面から3段分が残っていた。また、東辺では横棟と横板の間に細い丸杭（第56図W38・39、写真図版14-W39）と曲げ物の底板（第55図W24、写真図版13-24）を差し込み固定していた。横板には幅や厚さ、横断面形が類似するものがあり、ある程度の長さの板材を1m程に切断して転用したものと思われる。【縦板】（第56図W21・25・26、第57図15・16・17・18・22・19・20）幅0.2～0.3m程で長さは0.1～0.7m程残存していた。北辺

には3枚、東・西・南辺には4枚が並べて立てられているが、それぞれは連結されていない。切り欠きや枘穴が残っているものが多く、建築材が転用されたものと思われる（写真図版3-4、14-W14・W16・W19・W20・W21・W25・W26）。【堆積土・出土遺物】側内には黒褐色粘土などが堆積していた。木製曲物容器の蓋板（第55図W23、写真図版13-W23）、鉄製鋤鍬先（写真図版13-M1）、モモ？種子、須恵器壺・高台付壺・甕（第53図27、写真図版11-27）、土師器壺（第51図34）・甕、須恵系土器壺などが出土した。【側抜取穴】多量の地山ブロックと炭化物を含む黒褐色土などで埋め戻されていた。須恵器甕・瓶、土師器壺・高台付壺・甕B類（第53図35）、須恵系土器壺（第51図28・36～38、写真図版10-28・36）が出土した。

【SE51 井戸跡】（第8図、写真図版4-3）素掘りの井戸跡で、SE52 井戸跡より古い。平面形は円形であり、確認した面では上部の直径は1.5mで、深さは1.6mである。調査区壁面で見ると上部は大きく開いており、横断面形は漏斗状を呈していたと思われる。堆積土は黒色粘土質シルトなどで、上部から直径10cm程度の丸木材がまとめて出土した。堆積土から、須恵器瓶、土師器壺・甕が出土した。

【SE52 井戸跡】（第8図、写真図版4-4）素掘りの井戸跡で、SE51 井戸跡より新しい。平面形は円形で

あり、上部の直径は確認した面では1.0mで、深さは確認面から0.8mである。SE51 井戸跡と同様、横断面形は漏斗状と思われる。堆積土上部は地山ブロックを多量に含む黒褐色砂質シルトで人為的に埋め戻されており、埋め戻し土の下部には焼土と炭化物が多量に含まれていた。堆積土下部は黒褐色砂質シルトなどである。

【SD01 最内溝跡西】（第3図）南北溝跡で、南延長上の64Tでは検出されなかった。堆積土中から、平瓦、須恵器壺・甕が出土した。

【SD02 内溝跡西】（第3図）南北溝跡で、SD01 最内溝跡西との間隔は溝の中心で測るとおよそ5mで

ある。堆積土上層から、須恵器甕・瓶、土師器壺、鉄滓が、下層から石臼、全面に煤が付着した礫、須恵器瓶が出土した。

【SD03 中溝跡西】（第3図）南北溝跡で、SD02 内溝跡西との間隔は溝の中心で測るとおよそ8mである。堆積土上層から、石臼、須恵器高台付壺・甕・瓶、土師器壺、木製品下駄（第57図W36、写真図版13-W36）が、下層から須恵器瓶、土師器壺・甕、須恵系土器高台付壺が出土した。

【SD53 溝跡】（第3図）東西溝跡で、基本層III層の上面で検出した。小柱穴と重複し、これより古い。溝の上半部は人為的に埋め戻されており、下半部は黒色粘土質シルトなどが堆積している。

【SD55 溝跡】（第3図）南北溝跡で、SD56 溝跡と接続していると思われるが、接続部をSD03 中溝跡西によって壊されているため判断しない。接続している場合は、両者が区画溝である可能性が考えられる。

断面図を作成していないため詳細は不明だが3時期あり、最も新しい溝の上部には基本層II層に類似する黒色粘土が堆積し、それ以前のSD56 溝跡と接続する時期の溝の堆積土上部にTo-a火山灰が流入している。堆積土上層から、須恵器甕・瓶、土師器甕、須恵系土器壺、縁軸陶器が、下層から平瓦、丸瓦、須恵器壺・蓋・甕、磨痕と敲打痕がある礫などが出土した。

【SD56 溝跡】（第3図）東西溝跡で、SD03 中溝跡西に壊され、詳細は不明である。堆積土中から、須恵器壺・甕、須恵系土器壺が出土した。

【SX236 漆器塗埋納遺構】（第3・8図）土壤内に漆器碗が埋納されたもので、SD02 内溝跡西辺と SD03 中溝跡西辺の間で検出された。保存状態が悪く、取り上げることはできなかつた。【漆器碗】土壤底面から10cmほど浮いており、碗の下では何も検出されなかつた。碗は黒漆塗りで、赤漆で文様が描かれている。

【土壤】長径0.8m、短径0.7mの楕円形で、深さ0.2mである。内部の土は周囲の地山によく似たにぶい褐色の砂である。

7③・91③T（第9・10・39図、写真図版4-1・2・5、5-1～3）

北側では柱穴や大溝を検出したが、南側は湿地となっており、遺構は検出されなかつた。

掘立柱建物跡は4棟検出した（第10図、写真図版4-1）。調査区の幅が狭いことから規模が判明したものはなく、組み合わせが不明な柱穴があることから、これらのほかにも掘立柱建物跡が存在したと思われ

る。また、柱穴が浅いものが多くこの地区全体がかなり削平されていると思われ、消滅した柱穴が存在した可能性がある。

【SB56 挖立柱建物跡】(第9・10図) 東西2間以上、南北1間以上で、SB57 挖立柱建物跡と重複し、これより古い。柱穴は一辺が0.6m程の方形で、深さは0.2m程残存していた。柱は抜き取られたものと直径0.2mの円形の柱痕跡が残るものがある。埋土は地山のブロックを多量に含む黒褐色土である。

【SB57 挖立柱建物跡】(第9・10図) 東西1間以上、南北2間以上で、西側柱列の北から2番目の柱穴は削平されている可能性がある。SB55 挖立柱建物跡とSA59柱列跡と重複し、前者より新しく、後者より古い。柱穴は一辺が0.6m程の方形で、深さは0.2m程残存していた。柱は抜き取られているものがある。埋土は地山のブロックを少量含む黒褐色土である。

【SB60 挖立柱建物跡】(第9・10図) 東西2間以上、南北3間以上で、西側柱列の北から1・2番目の柱穴は削平されたと思われる。SB61 挖立柱建物跡と重複しているが新旧関係は不明である。柱穴は一辺が0.4～0.6m程の方形で、深さは0.4m程残存していた。柱痕跡は直径0.2m程の円形で、柱根が残るものがある。埋土は地山のブロックを多量に含む黒褐色土などである。北側柱列西から3番目の柱穴の柱抜取穴埋土から、須恵器蓋・甕・瓶が、柱痕跡埋土から須恵器坏が出土した。また、西側柱列の北から4番目の柱穴の柱痕跡埋土から土師器甕が出土した。

【SB61 挖立柱建物跡】(第9・10図) 東西2間以上、南北2間以上で、北西隅の柱穴は削平されたと思われる。SB60 挖立柱建物跡と重複しているが新旧関係は不明である。柱穴は一辺が0.6m程の方形で、深さは0.4m程残存していた。柱材が残存しているものや抜き取られているもの、掘方底面で直径0.2m程の円形の柱痕跡が確認できたものがある。埋土は地山のブロックを多量に含む黒褐色土である。

【SA59柱列跡】(第9・10図) 東西3間以上で、掘立柱建物跡の一部である可能性も考えられる。SB57 挖立柱建物跡と重複しており、これより新しい。柱穴は一辺が0.4～0.6m程の方形で、深さは0.3m程残存していた。柱痕跡は直径0.2m程の円形で、直径14cmの柱材が残存していたものがある。埋土は地山のブロックを多量に含む黒褐色土である。

【SK62 土壙】(第9・10・39図6、写真図版4-5) 調査区北壁際で検出した土壙で、大半は調査区外である。堆積土上部には植物が自然炭化した層があり、石臼、石製の鉢(写真図版12-12)、円孔が穿たれた凝灰岩の礫、磨痕がある粘板岩製の扁平な礫などが出土した。

【SK63 土壙】(第9・10・39図5、写真図版5-1) 調査区北壁際で検出した土壙で、大半は調査区外である。堆積土上部には植物が自然炭化した層があり、中世陶器鉢と全面に煤が付着した礫が出土した。

【SK67 土壙】(第9・39図4) 円形の土壙で、SD64溝跡と重複し、これより新しい。埋土は地山のブロックを多量に含む黒褐色粘土などで、人為的に埋め戻されている。

【SD07 西郭中溝跡西辺】(第9・39図3、写真図版5-2) 南北溝跡で、堆積土は、上層は黒褐色シルトで下層は黒褐色粘土などである。上層から、中世陶器鉢(第53図58、写真図版11-58)、須恵器坏・甕・瓶、土師器坏・甕、須恵器系土器坏が、下層から須恵器高台付坏・甕が出土した。

【SD08 西郭外1溝跡西辺】(第9図、写真図版5-3) 南北溝跡で、底面は平坦で壁は緩やかに立ち上がる。堆積土は黒褐色粘土などで、瓦質土器鉢(第53図60、写真図版12-60)と須恵器甕が出土した。北東側にあるSD07 西郭中溝跡西辺との間隔は溝の中心で測るとおよそ13mである。

【SD09 西郭外2溝跡西辺】(第9図) 南北溝跡で、底面は平坦で壁は大きく開きながら緩やかに立ち上がる。堆積土は黒褐色粘質シルトなどで、須恵器坏・甕、土師器坏・甕が出土した。北東側にあるSD08 西郭外1溝跡西辺との間隔は溝の中心で測るとおよそ8mである。

【SD15 溝跡】(第9図) 南北溝跡で、底面は平坦で壁は緩やかに立ち上がる。堆積土は黒褐色粘質シルトなどである。南側の80③Tと北側の8②Tにも同規模の大溝があり、ほぼ直線上に存在することからこれらは一連の大溝と思われる。

【SD64 溝跡】(第9・39図4) 南北溝跡で、南側でSD66溝跡と接続している。底面は平坦で壁は緩やか

に立ち上がる。堆積土は黒褐色粘土などで、須恵器壺（第51図59、写真図版10-59）が出土した。

【SD66溝跡】（第9図）南北溝跡で、調査区北側へ延びているが、南側はSD264溝跡と接続している。底面は平坦で壁は緩やかに立ち上がる。堆積土は黒褐色粘質シルトなどである。

8①～⑨T（第9・11～13図、写真図版5-4）

①・②Tでは館跡にかかる小柱穴と大溝を、⑥Tでは小溝群を検出した。掘り下げていないため、各遺構の詳細は不明である。他の調査区では明確な遺構は検出されず、⑦T以北は湿地であった。

【SA237柱列跡】（第9図）①Tで検出した東西2間の柱列跡で、南側に展開する掘立柱建物跡の一部である可能性がある。SA237柱列跡の周辺には長径30～40cmの円形もしくは梢円形の小柱穴が散漫に分布している。

【SD06西郭内溝跡西辺】（第9図）①Tで検出した上幅1.4mの南北溝跡で、南側の7③・91③Tでは対応する溝は検出されなかった。

【SD07西郭内溝跡西辺】（第9図）①Tで検出した上幅3.8mの南北溝跡で、SD06西郭内溝跡西辺とは溝の中心で測るとおよそ4m離れている。

【SD08西郭外1溝跡西辺】（第9図）①Tで検出した上幅1.6mの南北溝跡で、SD07西郭中溝跡西辺とは溝の中心で測るとおよそ10m離れている。

【SD09西郭外2溝跡西辺】（第9図）①Tの西端で検出した上幅1.3m以上の南北溝跡で、西側は調査区外である。

【SD15溝跡】（第11図）②Tで検出した上幅2.8mの南北溝跡で、南側の7③・91③Tと80③Tでも同様の溝が検出され、3者がほぼ直線上に並ぶことから一連のものと考えられる。

【SD70溝跡】（第9図）①Tで検出した東西方向の大溝跡で、方向が西郭の区画溝西辺とほぼ直交することから館跡の西郭を南北に区画する溝の可能性も考えられる。

【SD71溝跡】（第11図）②Tで検出した東西溝跡で、堆積土中にTo-a火山灰が流入している。

【SD72溝跡】（第11図）②Tで検出した東西溝跡で、堆積土から須恵器壺（第51図152、写真図版10-152）が出土した。

【SD73溝跡】（第11図）②Tで検出した南北溝跡で、堆積土中にTo-a火山灰が流入している。SD71溝跡とは同時期に存在しており、方向がほぼ直交することから、両者が区画溝であった可能性がある。

【SD258溝跡】（第13図）⑥Tで検出した東西溝跡で、溝の南北で小溝群の方向が異なることから、区画溝であったと思われる。

【SX112小溝群】（第13図）⑥Tで検出した南北方向の小溝群で、SD258溝跡の南側に存在する。東側に隣接する68①・②Tと70②Tでも検出された。小溝の間隔が狭いことから少なくとも2時期あったと思われる。

【SX113小溝群】（第13図）⑥Tで検出した東西方向の小溝群で、SD258溝跡の北側に存在する。

9・10T（第1図）

遺跡の南西の調査区で、湿地であり、遺構・遺物は発見されなかった。

53①～⑥T（第1図）

遺跡の南東の調査区で、湿地であり、遺構・遺物は発見されなかった。西側は79Tと連続する。

54①～⑥T（第1図）

遺跡の東側の調査区で、湿地であり、遺構・遺物は発見されなかった。西側は78Tと連続する。

55①～⑨T、121T（第1・14図）

55①・②Tでは遺構は検出されなかった。③～⑨Tでは溝跡や小溝群を検出した。また、②～⑥Tのすぐ東側を121Tとして調査したため併せて報告する。一方、55⑦Tは後に90①Tの東端部に含まれたため90Tで報告することにする。

【SD76溝跡】（第14・40図3）55⑤T、121Tで検出されたほぼ南北に延びる溝跡で、SD77溝跡とSX83

小溝群と重複し、いずれよりも古い。堆積土下層に薄い黒色粘土が堆積する特徴が共通する溝が南側の76 ①T(SD241 溝跡)、77 ①T(SD242 溝跡)、6 ③・78 ③T(SD22 溝跡)でも検出されており、南北に210m以上延びていたと思われる。

【SD77 溝跡】(第14・40図3) 55 ⑤T、121Tで検出された東西溝跡で、北側にはSX83 小溝群が、南側にはSX84 小溝群が存在し、両者を区画する区画溝と思われる。

【SD81 溝跡】(第31図) 55 ⑥Tで検出された東西溝跡で、堆積土上部に基本層II層に類似した黒色土が堆積している。西側の90 ②TのSD210 溝跡と90 ⑥・⑦TのSD213 溝跡も同様の堆積状況で、ほぼ東西の直線上に並んでいることから一連の溝と思われる。

【SX83 小溝群】(第14図) 55 ⑤Tと121Tで検出され、SD77 溝跡より北側に存在する。南北方向のものと東西方向のものがあり、後者には重複するものがあることから少なくとも3時期あったと思われる。

【SX84 小溝群】(第14図) 55 ⑥Tと121Tで検出され、SD77 溝跡より南側にある南北方向の小溝群で、近接していることから3時期あった可能性が考えられる。

【SX86 小溝群】(第32図) 55 ⑨Tで検出された南北方向の小溝群で、大きく方向が異なるものがあり、近接しているものもあることから何時期かの変遷があった可能性が考えられる。

56 ①～④T(第15・16・31図、写真図版5-5)

①～④Tのすべてで遺構を検出した。②Tは90 ③・④Tと一部で重複し、③Tは90 ②Tと一部で重複している。

【SE89 井戸跡】(第15・40図2、写真図版5-6) ③Tで検出した素掘りの井戸で、最下層は地山ブロックを多量に含む埋め戻し土であり、その上部は自然堆積で、最上部付近に基本層II層に類似する黒色シルトが堆積している。

【SD88 溝跡】(第15・31図) ③Tで検出した南北溝跡で、東側の90 ①Tまで延びている。堆積土上部にTo-a 火山灰が流入している。

【SD90 溝跡】(第15図) ③Tで検出した上幅4.8mの東西方向の大溝跡もしくは土壌で、堆積土最上部にTo-a 火山灰が流入している。

【SX85 小溝群】①・②Tで検出した南北方向の小溝群で、90 ①Tで広く調査したため90 ①Tで説明する。
57T(第17・40図1、写真図版5-7)

東郭北辺の区画溝を検出した。また、SD04 外1溝跡北辺とSD03 中溝跡北辺の間で小柱穴を検出したが建物跡として組み合うものはない。平面形は円形で、直径は0.3m程であり、深さのわかるものは0.2mである。埋土は黒褐色砂質シルトなどである。南端部のカクランから中世陶器擂鉢(第53図110、写真図版11-110)が出土した。

【SD02 内溝跡北辺】(第17・40図1) 東西溝跡で、北側が深くなつており別の溝があるように見えるが、上部は同時に埋没しており、同じ溝と考えた。また、南側の壁にも段がある。

【SD03 中溝跡北辺】(第17・40図1) 東西溝跡で、南北両壁に段がある。SD02 内溝跡北辺とは溝の中心で測ると9.6m離れており、SD02 内溝跡北辺の北肩と本溝跡の南肩との距離はおよそ3mである。

【SD04 外1溝跡北辺】(第17・40図1) 東西溝跡で、SD03 中溝跡北辺とは溝の中心で測るとおよそ9m離れており、SD03 中溝跡の北肩と本溝跡の南肩との距離はおよそ4.5mである。

【SD05 外2溝跡北辺】(第17・40図1) 調査区北端で部分的に検出した。

58 ①～⑤T(第17・18図、第41図1、写真図版6-1～4)

①Tでは東郭北東コーナー一部分の区画溝跡を、②～⑤Tでは溝跡や土壌を検出した。

【SE101 井戸跡】(第17・41図1、写真図版6-2) ①Tの東壁際で検出した素掘りの井戸跡で、東半部は調査区外であるが、平面形は円形と思われる。

【SD01 最内溝跡西辺】(第17・41図1) ①Tで検出した南北溝跡で、堆積土中から、白磁碗、土師器甕が出土した。

【SD02 内溝跡西辺】(第 17・41 図 1、写真図版 6-3) ①Tで検出した南北溝跡で、底面は中央部が浅く東西両側が深くなっている。いくつかの溝が重複している可能性があるが、最終的には幅広い大溝の状態で埋没しているため一つの溝と考えた。堆積土中から、須恵系土器壺・高台付壺が出土した。SD01 最内溝跡西辺との距離は、溝の中心で測るとおよそ 5.6 m である。

【SD03 中溝跡西辺】(第 17・41 図 1、写真図版 6-4) ①Tで検出した南北溝跡で、東壁には段がある。SD02 内溝跡西辺とは溝の中心で測るとおよそ 12 m 離れている。

【SD04 外 1 溝跡西辺】(第 17・41 図 1) ①T の北端で検出した南北溝跡で、詳細は不明である。SD03 中溝跡西辺の北肩と本溝跡南肩はおよそ 3.6 m 離れている。

【SD100 溝跡】(第 17・41 図 1、写真図版 6-3) ①Tで検出した東西溝跡で、堆積土上部に To-a 火山灰が流入している。

【SD102 溝跡】(第 18 図) ②Tで検出した南北溝跡で、北側で東へ屈曲するか、東西方向の溝跡に合流している。

【SD103 溝跡】(第 17 図) ①Tで検出した南北溝跡で、堆積土から銅錢(写真図版 13-Ⅺ 5)と全面に煤が付着した砾(写真図版 12-115)が出土した。

59T (第 17・41 図 2、写真図版 6-5)

【SD01 最内溝跡西辺】調査区東端で検出した南北溝跡で、掘り下げていないため詳細は不明である。

【SD02 内溝跡西辺】南北溝跡で、掘り下げていないため詳細は不明であるが、堆積土中から、土師器壺・甕、須恵系土器壺が出土した。SD01 最内溝跡西辺と SD02 内溝跡西辺との間隔は溝の中心で測るとおよそ 5 m である。

【SD03 中溝跡西辺】(第 41 図 2) 調査区西端部で検出した南北溝跡で、西側に堆積土が延びており、SD07 西郭中溝跡北辺もしくは SD06 西郭内溝跡西辺と合流していると思われる。堆積土中から、かわらけ灯明皿(第 52 図 116、写真図版 10-116)、縄釉陶器、須恵器壺、土師器壺・甕が出土した。SD02 内溝跡西辺の西肩と本溝跡の東肩の間隔はおよそ 3 m である。

60T (第 17・42 図 1)

【SD06 西郭内溝跡北辺】東西溝跡で、上幅 1.2 m であるが、西郭中溝跡の内側にあり、平行することから内溝跡と考えた。堆積土中から、須恵器壺、土師器甕、須恵系土器壺・高台付壺が出土した。

【SD07 西郭中溝跡北辺】東西溝跡で、堆積土中から、須恵器の小片と焼けた骨が出土した。SD06 西郭内溝跡北辺とは溝の中心で測るとおよそ 3.5 m 離れている。

61①・②T (第 13 図)

②T の SD03 中溝跡西辺と SD06 西郭内溝跡との間(西郭内部)で SA106・107 柱列跡のほか多くの小柱穴を検出した。掘立柱建物跡の一部である可能性が考えられる。遺構検出時に常滑産甕が出土した。

【SA106 柱列跡】東西 3 間以上の柱列で、掘立柱建物跡の一部である可能性がある。

【SA107 柱列跡】東西 4 間以上の柱列で、掘立柱建物跡の一部である可能性がある。

【SD03 中溝跡西辺】②T で検出した南北溝跡で、位置関係から館跡東郭の中溝跡西辺と考えられる。

【SD06 西郭内溝跡西辺】①T の東端部で溝の西肩を検出し、位置関係から西郭の内溝跡かと思われる。堆積土中から、瓦質土器擂鉢、須恵器壺・甕が出土した。

【SD07 西郭中溝跡西辺】(第 42 図 2、写真図版 6-6) ①T で検出した南北溝跡で、SD06 西郭内溝跡西辺の西肩と本溝跡の東肩の間隔はおよそ 0.6 m である。

【SD08 西郭外 1 溝跡西辺】(第 42 図 2) ①T で検出した南北溝跡で、SD07 西郭中溝跡西辺とは溝の中心で測るとおよそ 8.6 m 離れている。

【SD09 西郭外 2 溝跡西辺】(第 42 図 2) ①T で検出した南北溝跡と思われるが調査区北側で途切れてしまい、北へは延びていない。一方、南側では SD08 西郭外 1 溝跡西辺と同時に埋没しており同じ溝とも考えられるが、本溝跡が北へは延びないのに対し SD08 外 1 溝跡西辺は北へ延びていることから別の溝と考え

ておくこととする。堆積土上部から中世陶器甕、平瓦、土師器甕が出土した。SD08 西郭外 1 溝跡西辺とは溝の中心で測るとおよそ 3.1 m 離れている。

62T(第 19 図)

東郭南東コーナー部の調査区で、SD02 内溝跡と SD03 中溝跡を検出したが、掘り下げていないため詳細は不明である。最内溝跡と外 1・2 溝跡は検出されなかつた。

【SD02 内溝跡南東コーナー部】堆積土中から、須恵器甕、須恵系土器坏が出土した。

【SD03 中溝跡南東コーナー部】堆積土中から、須恵器坏・瓶、土師器坏・甕が出土した。

【SD110 溝跡】南北溝跡で、人為的に埋め戻されている。

63T(第 19 図、写真図版 6-7)

東郭南辺の調査区で、中溝跡を検出したが掘り下げていないため詳細は不明である。調査区南半は湿地となっており、外 1・2 溝跡は検出されなかつた。

【SD03 中溝跡南辺】クロップマークから中溝跡南辺と判断した。

64T(第 19 図)

東郭南西コーナー部の調査区で、内溝跡と中溝跡を検出したが、外 1・2 溝跡は検出されなかつた。各遺構は掘り下げていないため詳細は不明である。遺構確認時に中世陶器甕とかわらけ灯明皿（第 52 図 123）が出土した。

【SD02 内溝跡南西コーナー部分】（写真図版 6-8）L 字状に屈曲している。

【SD03 中溝跡南西コーナー部分】L 字状に屈曲しており、SD02 内溝跡とは溝の中心で測るとおよそ 10 m 離れている。

【SD111 溝跡】南北溝跡で、人為的に埋め戻されている。

65～67T(第 1 図)

内館館跡の西側に存在する L 字形のクロップマークの性格を確かめるための調査区である。65・66T は全面が湿地であり、現代の水路跡が検出されたが遺構・遺物は発見されなかつた。67T は湿地とその周辺部であり、明確な遺構は検出されなかつたが、非クロコ調整の土師器坏（第 51 図 128・129、写真図版 10-128）などが出土した。

68①～④T(第 12 図、写真図版 7-1)

西側の①～③T では小溝群などが検出され、東側の③・④T では溝跡や土壤などが検出された。

【SK116 土壙】③T で検出した円形の土壙で、掘り下げていないため詳細は不明である。

【SK117 土壙】③T で検出した円形と思われる土壙で、南北両端は調査区外に延びている。掘り下げていないため詳細は不明である。

【SK118 土壙】③T で検出した方形の土壙で、南側は調査区外である。掘り下げていないため詳細は不明である。

【SD114 溝跡】②T で検出した南北溝跡で、掘り下げていないため詳細は不明である。SX112 小溝群と位置的に重複するが新旧関係は不明である。北側にある 77②T の SD145 溝跡は方向が一致し、幅がほぼ同じであることから一連の溝である可能性がある。

【SD115 溝跡】②T で検出した南北溝跡で、SX112 小溝群と位置的に重複するが新旧関係は不明である。

【SX112 小溝群】（写真図版 7-1）①・②T で検出した南北方向の小溝群で、北側にある 70②T と 8⑥T でも検出されたが、南西側の 8⑤T と 70②T では検出されなかつた。小溝同士が近接しているものがあるため、何回か掘り直されている可能性がある。

69①～⑩T(第 15・20・21・42・43 図、写真図版 7-2～4)

遺跡中央部の北東から南西にかけての調査区で、①T と ⑩T 以南では遺構は検出されなかつた。

【SK123 土壙】（第 20・42 図 3）⑦T で検出した円形と思われる土壙で、東半は調査区外である。

【SK126 土壙】（第 20 図）⑧T で検出した梢円形と思われる土壙で、東半は調査区外である。

【SK131 土壌】(第 21 図、写真図版 7-3) ⑩ T で検出した円形と思われる土壌で、北半は調査区外である。SX132 小溝群と重複するが、新旧関係は不明である。

【SD119 溝跡】(第 20・42 図 4) ②・③ T で検出した北東～南西方向の溝跡で、SD120 溝跡と重複し、これより古い。堆積土中に To-a 火山灰が流入している。

【SD120 溝跡】(第 20 図) ③ T で検出した落ち込みで、溝跡もしくは土壌かと思われる。SD119 溝跡と重複し、これより新しい。堆積土上部に基本層 II 層に類似する黒色土が堆積している。

【SD121 溝跡】(第 20・43 図 6) ④ T で検出した北東～南西方向の溝跡で、堆積土上部に To-a 火山灰が流入している。

【SD122 溝跡】(第 20・43 図 4) ⑥ T で検出した東西溝跡で、堆積土上部に基本層 II 層に類似した黒色土が堆積している。

【SD124 溝跡】(第 20・43 図 8) ⑦ T で検出した東西溝跡で、堆積土上部に基本層 II 層に類似した黒色土が堆積している。

【SD125 溝跡】(第 20 図) ⑧ T で検出した東西溝跡で、堆積土上部に To-a 火山灰が流入している。

【SD259 溝跡】(第 21 図) ⑯ T で検出した東西溝跡で、堆積土中から、須恵器甕、土師器ミニチュア土器、須恵系土器坏が出土した。

【SD260 溝跡】(第 21 図) ⑯ T で検出した東西溝跡で、地山ブロックを含む暗灰黄色シルトなどで、人为的に埋め戻されている。埋土から、土師器坏、須恵器蓋が出土した。

【SX127 小溝群】(第 20 図) ⑧・⑨ T で検出した南北方向の小溝群で、基本層 II 層に類似する黒色土に覆われている。埋土は地山のブロックを多く含む黒褐色シルト質砂である。

【SX132 小溝群】(第 21 図) ⑯・⑰ T で検出した南北方向の小溝群で、位置的に SK131 土壌と重複するが新旧関係は不明である。埋土には地山のブロックが多く含まれる。

70 ①～⑯ T (第 22・44 図 2、写真図版 7-5)

南宮神社周辺の⑯ T ～⑯ T で溝跡や小溝群が検出されたが、北東側の①～⑯ T と南西側の⑯ T は湿地であり、遺構は検出されなかった。

⑯ T では小柱穴がいくつか検出され、掘立柱建物跡などが存在したと思われるが、建物跡としての組み合わせは不明である。平面形は隅丸方形や円形で、規模は直径もしくは一边が 0.4 ～ 0.6 m で、深さは 0.2 ～ 0.6 m である。埋土は地山ブロックを含む灰黄褐色砂質シルトなどである。柱痕跡は直径 0.2 m 程の円形である。柱穴埋土から土師器甕が出土した。

【SD136 溝跡】⑯ T で検出した南北溝跡で、堆積土上部に基本層 II 層に類似する黒色土が流入している。

【SD139 溝跡】⑯ T で検出した南北溝跡で、堆積土中に To-a 火山灰が厚く堆積している。

【SD145 溝跡】⑯ T で検出した南北溝跡で、南延長上にある 68 ⑯ T の SD114 溝跡と一連である可能性がある。

【SD146 溝跡】⑯ T で検出した南北溝跡で、堆積土上部に To-a 火山灰が流入している。

【SD147 溝跡】(第 44 図 2) ⑯ T で検出した南北溝跡で、上幅 3.0 m と比較的大規模である。堆積土下部に To-a 火山灰が流入しており、最上部には基本層 II 層に類似する黒色シルト質砂が堆積している。

【SX137 小溝群】⑯・⑯ T で検出した東西南北方向の小溝群で、近接しているものがあることから何回か作り替えられた可能性がある。

【SX142 小溝群】⑯ T で検出した東西南北方向の小溝群で、間隔は空いているものの 106 T 西側調査区の小溝群と一連である可能性がある。

【SX148 小溝群】⑯ T で検出した東西南北方向の小溝群で、近接しているものがあることから何回か作り替えられた可能性がある。

【SX112 小溝群】⑯ T で検出した南北方向の小溝群で南側の 68 ⑯・⑯ T の小溝群と一連と思われる。

71 ⑯ ⑯ T (第 23・43 図)

⑯・⑯ T では小柱穴や井戸跡、土壌などを検出し、その周辺では小溝群や溝跡を検出した。北東側の⑯

～④Tと南西側の⑩・⑪Tは湿地となっており、遺構は発見されなかった。

⑩Tでは小柱穴が検出されたが、建物跡としての組み合わせは不明である。平面形は隅丸方形や円形で、規模は直径もしくは一辺が0.3～0.5mで、深さは0.2～0.3mである。埋土は地山ブロックを含む灰黄褐色砂質シルトなどである。柱痕跡は直径0.2m程の円形である。

【SE156 井戸跡】(第43図5) ⑪Tで検出した素掘りの井戸跡で、堆積土は灰黄褐色シルト質砂などである。堆積土中から、丸瓦、土師器甕が出土した。

【SE159 井戸跡】(第43図2) ⑫Tで検出した素掘りの井戸跡で、堆積土は灰黄褐色シルト質砂などで、最上部に基本層II層に類似する黒褐 色砂質シルトが流入している。堆積土中から、土師器高台付壺が出士した。

【SK252 土壌】⑨Tで検出した土壤で、SX154 小溝群と重複し、これより新しい。西側が調査区外に延びており詳細は不明であるが、地山ブロックを多量に含む黒色土で埋め戻されている。

【SD150 溝跡】(第43図1) ⑤Tで検出した東西溝跡で、堆積土最上部に基本層II層に類似する黒褐色シルトが堆積している。

【SD152 溝跡】(第43図3) ⑦Tで検出した南北溝跡で、堆積土上部にはTo-a火山灰のブロックが含まれている。

【SD153 溝跡】⑦Tで検出した南北溝跡で、この溝より西側にSX154 小溝群が存在することから区画溝の可能性がある。

【SD155 溝跡】⑩Tで検出した南北溝跡で、この溝より東側にSX154 小溝群が存在することから区画溝の可能性がある。

【SD160 溝跡】(第43図7) ⑯Tで検出した南北大溝跡で、堆積土は植物遺存体やスクモを多く含む黒褐色シルトなどである。堆積土中から、平瓦、土師器壺、須恵系土器壺が出土した。

【SX154 小溝群】⑧・⑨Tで検出した東西南方向の小溝群で、SK252 土壌と重複し、これより古い。近接しているものがあることから何回か作り替えられた可能性がある。

【SX157 小溝群】⑪・⑫Tで検出した東西南方向の小溝群で、溝跡や小柱穴と重複し、これらより古い。近接しているものがあることから何回か作り替えられた可能性がある。

72 ①～⑨T(第24・44図)

全体的に湿地もしくは湿地に隣接する地域で、流路跡や時期不詳の溝跡などを検出した。

【SX161 流路跡】(第44図1、写真図版7-6) ①Tで検出した南北方向の流路跡で、底面には下層に含まれる流木が露出していた。堆積土は暗灰黄色シルトなどである。

【SX162 洪水跡】(第44図7) ①・②Tで検出された砂と粘土の薄い互層で、植物遺存体を多く含み、洪水の痕跡かと思われる。

73T、74T(第1図)

全域が湿地状であり、遺跡はこの場所までは広がっていないことが判明した。

75T(第25図)

中央部を除くほぼ全域が湿地状で、明確な遺構は検出されず、遺跡はこの場所までは広がっていないことが判明した。

76 ①・②T(第25・44図)

75Tに近い②Tは湿地状で遺跡外であり、①Tでは遺構が検出されたことから、①Tが遺跡の東限であることが判明した。

【SD241 溝跡】(第44図4) 南北方向の溝跡で、SD136 溝跡と重複しこれより古い。位置関係や底面付近に黒色土が堆積している状況が共通することなどから、北側の55T・121TのSD240 溝跡と南側の77①TのSD242 溝跡と一連と思われる。

【SD163 溝跡】(第44図4) 北西～南東方向の溝跡で、SD164 溝跡と重複しており、これより古い。堆積

土上部に To-a 火山灰が流入している。西側の 90 ①T で検出された SD185 溝跡とは、方向がほぼ一致することや To-a 火山灰が流入している点で共通し、一連の溝跡である可能性も考えられる。

【SD164 溝跡】(第 44 図 5) 南北溝跡で、SD163 溝跡と重複しており、これより新しい。堆積土上部に基層 II 層に類似する黒褐色シルトが堆積している。

【SX165 小溝群】南北方向の小溝群で、部分的に重複しているため、何回かの掘り直しがあった可能性がある。

77 ①～⑤T(第 26 図)

①～③T で小溝群などを検出した。③T の東半部から東側は湿地となっており、遺構は検出されなかつた。

【SD242 溝跡】(写真図版 7-7) ①T で検出した南北溝跡で、堆積土の下部に黒色粘土層が堆積しており、北側にある 76 ①T の SD241 溝跡と類似することから、これと一連と思われる。

【SX167 小溝群】①・②T で検出した南北方向の小溝群で、近接しているものがあるため、何回かの掘り直しがあった可能性がある。

【SX169 小溝群】③T で検出した南北方向の小溝群で、それぞれの間隔は 2.0 ～ 2.5 m である。

79 ①～⑤T(第 27・45 図)

80T に近い西側の①～④T では大溝跡などが検出されたが、⑤T の東半部より東側は湿地となっており、遺構は検出されなかつた。

【SE176 井戸跡】(第 45 図 4) ④T で検出した素掘りの井戸跡で、北半部は調査区外であるが、平面形は円形と思われる。

【SK172 土壌】(第 45 図 3) ②T で検出した土壌で、南半部は調査区外であるが、平面形は円形と思われる。

【SD170 大溝跡】(第 45 図 1) ①T 西側で検出した幅広の落ち込みで、西側は調査区外であるが南北方向の大溝跡と思われる。上幅は 5 m 以上である。

【SD171 大溝跡】(第 45 図 1) ①T 東側で検出した幅広の落ち込みで、東側は調査区外であるが②T までは広がっておらず、上幅 3 ～ 4 m 程の南北方向の大溝跡と思われる。

【SD173 溝跡】(第 45 図 2、写真図版 8-1) ②T で検出した南北溝跡で、1 度掘り直されて新旧 2 時期ある。新しい溝跡の堆積土底面付近に To-a 火山灰が流入している。

【SD174 溝跡】(第 45 図 2) ②T で検出した南北溝跡で、新旧 2 時期ある。SD173 溝跡とは溝の中心で測るとおよそ 3.7 m 離れて平行している。北側の 6 ②・78 ②T と 92T、7 ①・91 ①T でも同様に平行する溝跡が検出されており、概ね直線上に並ぶことからこれらは一連の溝跡である可能性が考えられる。

【SD175 溝跡】③T で検出した東西溝跡で、堆積土は暗灰黄色粘土である。

80 ①～③T(第 28・29・46 図、写真図版 8-2・3)

遺跡南端部の調査区で、①～③T 全面に遺構が検出された。①T では小柱穴群が検出され、掘立柱建物跡などを構成すると思われるが、組み合せは不明である。SD177 溝跡、SX178 小溝群と重複し、SD177 溝跡より古く、SX178 小溝群よりは新しい。直径もしくは長径が 0.3 ～ 0.7 m の円形もしくは楕円形で、埋土は地山ブロックを含む褐灰色粘土などである。

【SK179 土壌】(第 28 図) ②T で検出した楕円形の土壌で、堆積土上部には炭化物と焼土を多量に含む土が流入している。堆積土中から、須恵器坏と土師器甕が出土した。

【SD177 溝跡】(第 28 図) ①T で検出した東西溝跡で、ほぼ同位置で掘り直されており、新旧 2 時期ある。小柱穴群と SX178 小溝群と重複し、いずれよりも新しい。

【SD13 大溝跡】(第 28・46 図 4) ②T の II 層上面で検出した南北大溝跡で、中央部が浅くなつておらず、いくつかの溝跡があるよう見えるが、最終的に同時に埋没しているため、1 条の溝跡と考えておく。堆積土は、下層が灰色粘土などで、上層が褐灰色粘土である。堆積土中から、須恵器坏と土師器甕が出土した。

【SD14 大溝跡】(第 28・46 図 5) ②T で検出した南北大溝跡で、SD13 大溝跡に隣接し、平行している。

堆積土は、下層が自然堆積の黒褐色シルトで、中層が地山ブロックを含む黒褐色シルトで人為的に埋め戻されており、上層が褐色粘土である。堆積土下層から瓦質土器擂鉢（写真図版 11-144）が出土した。東側に隣接して平行に延びる SD263 溝跡は本溝跡と密接な関連を有するものと思われる。

【SD15 溝跡】（第 29・46 図 3、写真図版 8-4）③T で検出した北西～南東方向の溝跡で、この溝跡を境に東西の小溝群の方向が異なっており、区画溝と考えられる。北側の 7③・91③T と 8②T にも同様の溝跡が存在し、直線上に並ぶことから一連の溝跡と思われる。

【SX178 小溝群】（第 28 図）①T で検出した東西方向の小溝群で、埋土は地山ブロックを含む黒褐色粘土質シルトである。

【SX181 小溝群】（第 29 図）③T の SD15 溝跡の東側で検出した小溝群で、北西～南東方向のものと直交する方向のものがあり、前者が新しい。前者には小溝同士が重複するものがあり、少なくとも 1 度掘り直されたものと思われる。

【SX182 小溝群】（第 29 図）③T の SD15 溝跡の西側で検出した南北方向の小溝群で、西側にある 7③・91③T までは延びていない。小溝同士が重複するものがあり、1 度掘り直されたものと思われる。

81T（第 29・46 図）

神明社の跡地とされる場所で、小規模な土壇が存在し、寛永通寶（写真図版 13-M 7）などの近世以降の遺物が比較的多く出土した。大溝跡と小溝群を発見した。

【SD13 大溝跡】（第 46 図 6）北東～南西方向の溝跡で、中央が浅く 2 条の溝のように見える特徴から 80 ②T の SD13 大溝跡と一連のものと思われる。SX181 小溝群と重複し、これより新しい。堆積土は、下層がオリーブ黒色粘土などで、上層が褐色粘土である。

【SX181 小溝群】北西～南東方向の小溝群で、80③T の小溝群と一連と思われるが、掘り下げていないため詳細は不明である。

89①～⑩T（第 15・16・31・47 図、写真図版 8-8）

①T は 90T に隣接しているため 90T とともに記述する。③T 以北は湿地となっており、遺構は検出されなかった。

【SD191 溝跡】（第 15・47 図 6）東西溝跡で、SD190 溝跡と重複し、これより古い。この溝跡より北西側に SX127 小溝群が存在し、南東側には小溝群は存在しないことから本溝跡は SX127 小溝群の区画溝であると考えられる。

【SD192 溝跡】（第 15 図）東西溝跡で、SX127 小溝群と重複し、これより新しい。堆積土から須恵系土器小皿（第 52 図 146、写真図版 10-146）が出土した。

【SD193 溝跡】（第 15・47 図 7）東西溝跡で、この溝跡より南東側に SX127 小溝群が存在し、北西側には存在しないことから本溝跡は SX127 小溝群の区画溝であると考えられる。

【SX127 小溝群】（第 15・47 図 8）②T で検出した小溝群で、69⑦～⑨T でも検出している。東西方向のものと南北方向のものが重複しており、前者が新しい。後者の小溝群には近接するものがあり何度も掘り直されたと思われ、小溝の間隔を 2m 程と仮定すると 2 群に大別でき、少なくとも 3 時期あったと思われる。

なお、これらは東側の SD191 溝跡と西側の SD193 溝跡によって区画されていると考えられる。両者の間隔はおよそ 45m である。また、69⑦T の SD125 溝跡は北側を、69⑩T の SD128 溝跡は南側を区画する溝跡である可能性も考えられる。

55⑧・⑨T、56①・②T、89①T、90①～⑩T（第 31・32・47～50 図、写真図版 9）

90①T は揚排水施設設置のための調査でまとまった面積を調査し、掘立柱建物跡、柱列跡、溝跡、土壌、小溝群などを検出した。また、周辺では 55T・56T・89T が調査されていることから、ここで一括して記述することとする。

【SB195 掘立柱建物跡】（第 31・48 図 1）90①T で検出した東西 2 間以上、南北 2 間以上の身舎に、北側

に4間以上、東側に3間以上の廂もしくは縁がつく建物跡で、南・西側は調査区外に延びている。SX85小溝群、SK204・205土壌と重複し、前者より新しく、後者より古い。建物跡の方向は測量基準線と一致している。【柱間】身舎の北側柱列が東から2.7m・2.4mであり、東側柱列が北から2.6m・2.6mである。北側の廂もしくは縁の柱列は身舎から1.6mほど出ており、柱間は東から2.2m・1.9m・2.0m・1.6mである。東側の廂もしくは縁の柱列は身舎から1.4mほど出ており、柱間は北から1.8m・2.5m・2.6mである。【柱穴】長径が0.2～0.4mの円形もしくは楕円形で、深さは最も深いもので0.5mである。身舎東側柱列の北から3番目の柱穴には直径5cmほどの柱材が残存していた。また、身舎東側柱列の北から1番目と2番目の柱穴には礎板が残っていた（写真図版9-4）。埋土は地山の小ブロックを含む黒色土である。柱穴埋土から、土師器壺（B類）、須恵器壺・甕、須恵系土器壺が出土した。【付属施設】東廂もしくは縁の東側2.2mにあるSA196柱列跡と同じく6.0m東にあるSA197柱列跡は位置関係からこの建物跡に付属するものと思われる。

【SA196柱列跡】（第31・48図2）90①Tで検出した南北2間の柱列跡である。SX85小溝群と重複し、これより新しい。柱列の方向は測量基準線と一致している。SB195掘立柱建物跡に付属するものと思われるが、具体的な機能は判然としない。【柱間・柱穴】柱間は北から2.0m・1.6mであり、柱穴は長径が0.2～0.6mの円形もしくは楕円形で、深さは最も深いもので0.4mである。

【SA197柱列跡】（第31・48図3）90①Tで検出した南北5間以上の柱列跡である。SX85小溝群と重複し、これより新しい。柱列の方向は北で西に2°振れている。SB195掘立柱建物跡に付属するものと思われるが、具体的な機能は判然としない。【柱間・柱穴】柱間は北から2.4m・3.0m・3.3m・2.5m・1.3mであり、柱穴は長径が0.2～0.3mの円形もしくは楕円形で、深さは最も深いもので0.4mである。

【SK198土壌】（第31・47図3）90①T北側中央で検出した土壌で、SD185・187溝跡と重複し、これらより新しい。平面形は長方形で、規模は南北3.7m、東西1.9mで、深さは0.4mである。SD185・187溝跡の堆積土のブロックを多量に含むシルトなどで埋め戻されている。

【SK200土壌】（第31図）90①T中央で検出した土壌で、SX85小溝群とSD187溝跡と重複し、これらより新しい。平面形は方形で、規模は南北1.6m、東西1.9mで、深さは0.4mである。堆積土は灰色粘土である。

【SK201土壌】（第31・47図5）90①T中央で検出した土壌で、SX85小溝群と重複し、これより新しい。平面形は楕円形で、規模は長径1.4m、短径1.0mで、深さは0.6mである。埋土は上層が褐色シルトで下層が沈下した部分に自然堆積したもので、下層は地山のブロックを多く含む灰黄色シルトで埋め戻されている。

【SK202土壌】（第31図）90①T中央で検出した土壌で、SX85小溝群と重複し、これより新しい。平面形は円形で、規模は直径が1.4mで、深さは0.3mである。地山のブロックを多く含む灰色シルトで埋め戻されている。埋土中から須恵系土器壺類が出土した。

【SK204土壌・SD248溝跡】（第31図）SK204は90①T中央南寄りで検出した土壌で、SD248はSK204に接続する溝跡である。SB195掘立柱建物跡とSX85小溝群、SK205土壌と重複し、前二者より新しく、後者より古い。

【SK204土壌】（第31図）平面形は不整形で、規模は南北1.5m、東西1.0mで、深さは0.2mである。

【SD248溝跡】SK204の北西隅に接続し、北へ7m程延びている。幅は0.4m程で、深さは0.1mである。

【SK206土壌】（第31・47図2）90①T東側で検出した土壌で、SK249土壌と重複し、これより古い。平面形は楕円形で、規模は長径1.9mで、深さは0.5mである。地山のブロックを多く含む灰色シルトで埋め戻されている。埋土中から中世陶器壺の口縁部（写真図版11-104）や近世瓦、相馬焼の破片が出土した。

【SK207土壌】（第31・47図1、写真図版9-5）90①T東側で検出した土壌で、SX85小溝群と重複し、これより新しい。平面形は楕円形で、規模は長径1.5mで、深さは西側が0.5mで東側が0.2mである。

地山のブロックを多く含む灰色シルトで埋め戻されている。

【SX214 土器埋没遺構】(第32・50図4) 90⑥Tの中央部で、本地区では地山となっている基本層IV層の上部から、土師器甕が2個まとめて出土した(第52図106・107)。据え穴や落ち込み等を探したが発見できなかったため、洪水等でIV層が形成されたときに埋没したものと思われる。

【SD88溝跡】(第31図・写真図版9-6) 90②Tの北側で検出した南北溝跡で、SD185溝跡とほぼ直角に接続している。SX99小溝群と重複し、これより新しい。掘り下げていないため詳細は不明であるが、上幅1m程度で、堆積土最上部にTo-a火山灰が流入している。

【SD185溝跡】(第31・49図4、写真図版9-3) 90①Tの北側で検出した東西溝跡で、西側に隣接する90②Tと北側に隣接する89①Tにも延びており、さらに東西に延びている。また、90②TのSD88溝跡はSD185溝跡と接続していることから同時期の溝跡である。SD239・246溝跡とSK225土壤と重複し、これらより古い。また、SD187溝跡と交差しているが、交差部分がSK198土壤に壊されており新旧関係は不明ものの、SD187溝跡はSD246溝跡と接続していることからSD187溝跡より古い。規模は上幅1.9m、下幅0.2m、深さは0.5m程度で、横断面形は上部が開いたV字形状である。堆積土は黒褐色の粘土などで、上部にTo-a火山灰が流入している。堆積土中から土師器甕(B類)が出土した。

【SD186溝跡】(第31図) 89①T中央部で検出されたL字形に屈曲する溝跡で、浅いため掘り直しの有無は不明である。SD185溝跡と重複しており、これより新しい。また、位置的にSD261溝跡と重複もしくは接続していたと思われるが、両者とも浅かったためそれぞれの関係は不明である。南北部分の上幅は1.6m、下幅1.2mで、深さは0.1mである。

【SD187溝跡】(第31・47図4、写真図版8-6) 90①T北側で検出した南北溝跡で、1度掘りなおされている。堆積土の状況からSD246溝跡とほぼ直角に接続しており、北側に隣接する89①Tでも検出され、さらに北へ延びている。南側は判然としないが、56②Tでは延長上で溝跡は検出されず、L字形に屈曲して90④TのSD211溝跡に連続する可能性が考えられる。SK198・200土壤と重複し、これらより古い。規模は、古い時期が上幅1.4m、下幅0.6m、深さは0.3m程度で、横断面形は皿状である。堆積土は黒色シルトなどである。新しい時期は上幅0.6m、下幅0.2m、深さは0.3m程度で、横断面形は皿状である。堆積土上部には基本層II層に類似する黒色シルトが流入している。

【SD188溝跡】(第31・49図1、写真図版8-7) 90②Tの北側で検出した東西溝跡で、隣接する89①Tにも延びており、さらに東西に延びている。規模は、上幅1.0m、下幅0.6m、深さは0.3m程度で、横断面形は皿状である。堆積土は黒褐色シルトなどで、最上部にTo-a火山灰が流入している。

【SD208溝跡】(第31・49図4) 90①T北側で検出した東西溝跡で、東側では幅が広く浅くなっている。SD187溝跡の手前で途切れている。また、西側に隣接する90②Tまでは延びていないと思われる。規模は、西側で、上幅0.8m、下幅0.2m、深さは0.2m程度で、横断面形は皿状である。堆積土は褐灰色のシルトである。堆積土中から土師器甕(B類)が出土した。

【SD209溝跡】(第32図) 90②Tの南端で検出した東西方方向の溝跡で、断面観察の結果1度掘り直されていることが判明した。新しい時期の溝跡は、深さは0.3mで、底面は丸みを帯び、横断面形は浅い皿状である。堆積土は暗褐色シルトなどである。古い時期の溝跡は、深さは0.4mで、底面は平坦で、横断面形は開いたU字形である。堆積土は灰黄褐色粘土などである。

【SD210溝跡】(第32図) 90②Tの南端で検出した東西方方向の溝跡で、断面観察の結果1度掘り直されていることが判明した。新しい時期の溝跡は、深さは0.3mで、底面は丸みを帯び、横断面形は浅い皿状である。堆積土は灰黄褐色シルトなどで、最上層に基本層II層に類似する黒色粘土が堆積している。古い時期の溝跡は、深さは0.5mで、横断面形は開いたV字形であり、堆積土は黒褐色シルトなどである。

【SD212溝跡】(第32・49図3) 90⑥Tと90⑦Tの接続部分で検出した東西方向の溝跡で、断面観察の結果2度掘り直されていることが判明した。最も新しい時期の溝跡は、上幅1.5m、深さは0.6mで、横断面形は開いたV字形である。堆積土は黒褐色粘土質シルトなどで、最上層に基本層II層に類似する黒

褐色粘土質シルトが堆積している。次に新しい時期の溝跡は、深さは0.2mで、横断面形は浅い皿状を呈すると思われる。最も古い時期の溝跡は、深さは0.6mで、横断面形は開いたU字形であり、埋土は地山ブロックを含む黒褐色粘土である。西側およそ50mにある90②TのSD210溝跡とは堆積土の状況が類似しており、一連のものであった可能性がある。

【SD219溝跡】(第32・49図2) 90⑧Tの東端で検出した南北方向の溝跡で、上幅1.6m、下幅1.0m、深さ0.3mである。壁は緩やかに立ち上がり、横断面形は浅い皿状である。堆積土は黒褐色粘土質シルトなどで、堆積層中位にTo-a火山灰が流入している。

【SD239溝跡】(第31・49図1) 90②Tの北側で検出した南北溝跡で、SD88・185溝跡とSX99小溝群と重複し、いずれよりも新しい。上幅1.0m、深さは0.2mで、底面は丸みを帯び、横断面形は浅い皿状である。堆積土は黒褐色粘土である。堆積土が類似することから、90①TのSD246溝跡と一連である可能性が考えられる。

【SD246溝跡】(第31・49図4) 90①Tの北側で検出した東西溝跡で、1度掘り直されている。埋土の状況から南北溝のSD187溝跡とほぼ直角に接続すると思われる。北側に隣接する89①Tでも検出され、さらに北へ延びている。また、西側にある90②Tで検出したSD239溝跡は2時期あることと埋土の状況がSD246溝跡と共通していることから、方向は異なるものの一連の溝跡かと思われる。SD185溝跡と重複し、これより新しい。規模は、古い時期が上幅2.2m、下幅1.1m、深さは0.3m程度で、堆積土は黒褐色のシルトなどである。新しい時期は上幅0.9m、下幅0.3m、深さは0.2m程度で、堆積土上部には基本層II層と類似する黒色のシルトが流入している。堆積土中から、平瓦、土師器壺B類と須恵器甕が出土した。

【SD261溝跡】(第31図) 89①T中央で検出した東西溝跡で、SD185溝跡と重複し、これより新しい。位置的にSD186溝跡と重複もしくは接続すると思われるが、関係は不明である。上幅0.9m、下幅0.6m、深さ0.1mである。堆積土は黒褐色砂質シルトである。

【SX85小溝群】(第31・48図4、写真図版9-2) 90①Tを中心として89①T、55⑦T、56①・②Tに存在する小溝群で、東西方向のものと南北方向のものがあり、前者が新しい。SB195掘立柱建物跡、SA196・197柱列跡、SK200～206土壤、SD79・80・87・183・187・247・248溝跡と重複し、いずれよりも古い。〔東西方向の小溝群〕小溝跡の間隔は若干バラつきがあるものの概ね2m程度で、整然と並んでいる。したがって、これらは同時に掘削されたものと思われる。上幅0.3～0.8m、下幅0.2～0.4m、深さ0.2m程度で、長さのわかるものは15～16mである。横断面形は皿状で、埋土は地山ブロックを含む褐灰色シルトなどである。埋土中から土師器壺・小型甕(第53図100、写真図版10-100)、須恵器甕が出土した。〔南北方向の小溝群〕重複するものがあり、少なくとも1回掘り直されたと思われ、東西方向の小溝群の間隔を参考にすると2群に大別できる。上幅0.3～0.7m、下幅0.2～0.3m、深さ0.2m程度で、長さはおよそ50m程度である。横断面形は皿状で、埋土は地山ブロックを含む褐灰色シルトなどで、人為的に埋め戻されている。埋土中から、平瓦、土師器壺・甕・耳皿、須恵器壺・瓶・甕、須恵系土器壺が出土した。

【SX99小溝群】(第32図) 90②Tで検出した東西方向の小溝群で、SD296・340・341溝跡と重複し、これらより古い。小溝跡が3条重複している部分があることから、少なくとも2回の掘り直しがあったと思われる。上幅0.2～0.5m、下幅0.2～0.4m、深さ0.1～0.2mである。横断面形は皿状で、埋土は地山ブロックを含む灰黄褐色砂質シルトなどで人為的に埋め戻されている。埋土中から土師器壺(B類)・甕が出土した。

【SX189小溝群】(第31・48図5) 90①T北東部で検出した南北方向の小溝群で、SD246溝跡と重複し、これより古い。北側に隣接する89①Tにも広がっているが、西側の90②Tには存在しない。小溝跡の間隔は0.3～0.6mと狭く、重複はしていないものの何回かの掘り直しが行われた可能性がある。SX85小溝群の間隔を参考にすると2群に大別できる。上幅0.1～0.7m、下幅0.1～0.5m、深さ0.2mで、長さは5.5m程度である。横断面形は皿状で、埋土は地山ブロックを含む褐灰色シルトなどで、人為的に

埋め戻されている。埋土中から土器器甕が出土した。

【SX218 小溝群】(第32図) 90⑧Tで検出した南北方向の小溝群で、近接しているものがあることから何回か掘り直されたものと思われる。上幅0.3~0.6m、下幅0.2~0.4m、深さ0.2mである。横断面形は皿状で、埋土は地山ブロックを含む黒褐色粘土質シルトなどである。

90①T周辺のまとめ

90①Tではある程度まとまった面積を調査し、周辺でも調査が行われた。その結果、ほぼ全域で区画構と小溝群が検出されたため、これらについてここでまとめておくことにする。なお、この項は調査を担当された米田克彦氏(平成28年度岡山県から官城県に派遣)の遺構の理解と整理によるところが大きい。

区画(第31図)

SD185溝跡はほぼ直線的に46m以上延びる東西溝で、この地区を南北に分ける区画溝と思われる。ほぼ同位置で重複し、これより新しいSD246溝跡とこれと接続しているSD187溝跡も同様に区画溝と思われる。したがって、この地区には、SD185溝跡の時期(I期とする)とSD187・SD246溝跡の時期(II期とする)の2時期の区画溝があったことになる。さらに、SD187・SD246溝跡には新旧2時期あることから、II期は1度掘り直されていることになる。以下、時期ごとに検討する。

【I期】SD185溝跡によって大きく南北に区画されている。

【SD88溝跡】SD185溝跡とほぼ直角に接続する溝跡で、SD185溝跡によって区画された南側の区画を東西に分ける区画溝と思われる。

【SD188溝跡】SD185溝跡の北側にあり、ほぼ直線的に20m以上延びる東西溝で、SD185溝跡とは方向が若干異なるが、堆積土上部にはTo-a火山灰が流入しており、SD185溝跡と同時期に機能していたもので、同様に区画溝と思われる。

【SD78溝跡】89①Tの東端にあり、堆積土上部にTo-a火山灰が流入していることから、SD185溝跡などと同時に存在した溝跡である。方向はSD185溝跡と概ね直交することから、区画溝であった可能性が考えられる。

【SD163溝跡】76①Tにあり、SD185溝跡の延長上にあることや堆積土にTo-a火山灰が流入していることからSD185溝跡と一連である可能性が考えられる。この場合、SD185溝跡は87m以上延びていることになる。〔区画の様相〕SD185溝跡によって南北に分けられ、南側の区画はSD88溝跡とSD178溝跡によってさらに東西に区画されている。SD178溝跡とSD88溝跡との距離はおよそ60mである。北側の区画はSD188溝跡によって南北に区画されていたことになる。〔年代〕区画溝の堆積土上部にTo-a火山灰が流入していることから、10世紀前葉頃を前後する時期と考えられる。

【II期】SD187溝跡によって東西に分けられ、西側はSD246溝跡によってさらに南北に区画されている。

【SD239溝跡】直接接続はしていないが、堆積土が類似することからSD246溝跡と一連である可能性が考えられる。

【SD186溝跡】89①TにあるL字状に屈曲する溝跡で、SD185溝跡より新しい。北と西へ延びており、南側の90①Tではこの溝の延長部は検出されていない。堆積土がSD187溝跡と類似することから、89①Tと90①Tの間を通り、SD187溝跡に接続していた可能性も考えられる。

【SD183溝跡】89①Tにある東西溝跡で、浅いため判然としないが、西側の90①Tでは明確な延長部は検出されておらず、部分的に検出したSD247溝跡を溝の南肩部分と考えると、SD183溝跡はこの部分で北へ屈曲し、SD186溝跡と連続していた可能性も考えられる。

【SD184溝跡】55⑦Tと89①Tにあり、SD183溝跡とほぼ直交することから区画溝の可能性がある。

【SD261溝跡】SD186溝跡のすぐそばにあり、堆積土が類似することから、両者が接続していた可能性も考えられ、SD246溝跡等の東西方向の区画溝が東へ直線的に延びていた時期があった可能性がある。

【SD211溝跡】90④Tにあり、SD246溝跡とほぼ平行しており、2時期ある。南北方向のSD187溝跡は南側の56①Tでは検出されなかったことから、西に屈曲しSD211溝跡と接続していた可能性もある。〔区

画の様相] SD187 溝跡と SD246 溝跡によって区画されている。さらに、SD187 溝跡の東側の区画は、調査区の境目で判断としないものの、SD183 溝跡と SD186 溝跡によって南北に区画されていた可能性がある。こう考えた場合、SD186 溝跡の南北方向部分と SD184 溝跡によってさらに東西に細分されていたことも考えられる。SD187 溝跡と SD186 溝跡の南北方向部分の距離はおよそ 12 m であり、SD184 溝跡と SD187 溝跡の距離はおよそ 30 m である。[年代] 新しい時期の区画溝の上部に基本層 II 層に類似する黒色土が流入していることから 10 世紀末～11 世紀前半頃までには廃絶したと考えられる。

小溝群

90 ① T の東側で SX85 小溝群、北西部で SX189 小溝群、90 ② T で SX99 小溝群を検出した。以下、これらについて若干検討する。

[遷地] これらは SD187 溝跡と SD211 溝跡、SD246 溝跡に囲まれたこの地区の低地部分を避けて位置しており、この付近の比較的高い場所を遷地した結果と思われる。[変遷] SX85 小溝群のうちの東西方向のものは各小溝が整然と並んでいることから同時に掘られた可能性がある。一方、SX85 小溝群の南北方向の小溝群では 2 条の小溝が重複しており、少なくとも 1 度掘り直されていると思われる。SX99 小溝群には 3 条の小溝が重複している場所があり、少なくとも 2 度の掘り直しがあったと思われる。[小溝の間隔] SX85 小溝群の東西方向の小溝群が同時に掘られたとすると、それらの間隔は若干バラつきがあるものの概ね 2 m 程度である。また、SX85 小溝群の南北方向の小溝群の東端の 3 条も同様な状況である。これを参考に各小溝跡が同様に存在していたと考えると、SX85 小溝群の南北方向のものと SX189 小溝群は 2 時期に、SX99 小溝群は 3 時期に矛盾なく大別できる。したがって、この場所での小溝の間隔は概ね 2 m 程度であった可能性がある。なお、小溝跡の間隔が判明した例として、仙台市中野高柳遺跡の SF2041 の 1.2 ～ 1.5 m（宮城県教育委員会 2006）がある。

区画と小溝群

I 期の SD185・SD88・SD78 溝跡によって区画された場所の東半部もしくは、II 期の SD187・SD246・SD184 溝跡によって区画された場所には SX85 小溝群が存在し、I 期の SD185 溝跡と SD188 溝跡によって区画された場所には SX189 小溝群があることから、区画内部には小溝群が掘られたと思われる。区画と小溝群の関係については、SD185 溝跡と SD188 溝跡の間にあるという位置関係から、SX189 小溝群は区画 I 期の時期のものであると思われる。SX85 小溝群は II 期の区画溝に壊されるものがあることから区画 I 期の時期には存在した可能性が高いと思われる。SX85 小溝群の東西方向の小溝群は最も新しいことから区画 II 期の可能性がある。なお、SX99 小溝群は区画 I 期以前のものである。

掘立柱建物跡・堀跡

90 ① T の掘立柱建物跡・堀跡は、北東部を部分的に検出しただけであり、全体の規模等は不明である。周辺には多くの調査区があるが、これらを区画する溝や周辺を区画する堀等は検出されていない。

年代は、SX85 小溝群の東西方向の小溝より新しいことから 11 世紀以降と考えられる。また、柱穴が円形で、直径が 0.2 ～ 0.4 m 程度であり、黒褐色土を主体とする埋土である点は、隣接する山王遺跡で発掘調査された中世の建物跡（八幡・伏石地区 宮城県教育委員会 1997）もしくは近世の建物跡（町地区 宮城県教育委員会 1998）と類似する。また、山王遺跡の中世や近世の建物跡には廂もしくは縁を持つ建物跡も存在する。こういったことから、SB195 掘立柱建物跡や付属の堀跡は中世もしくは近世のもの可能性が考えられる。

ところで、90 ① T では比較的多くの埋め戻された土壙を検出した (SK198・201 ～ 203・206・207)。調査区が限定されているため断定はできないが、掘立柱建物跡との位置関係から、これらの土壙は掘立柱建物跡の裏側（北側）に建物跡の居住者によって掘削された可能性も考えられる。SK206 土壙からは相馬焼の破片が出土しており、年代は江戸時代後期以降と考えられることから掘立柱建物跡の年代もこの頃と考えられることになる。

なお、SB195 掘立柱建物跡の主屋の東側柱列北から 2 番目の柱穴 (P 4) 底面に残存していた礎板の年

代測定を AMS 法で行ったところ暦年較正年代（ 1σ ）が 780～883 calAD で、調査成果からの推測年代とは古木効果を考慮しても差が生じている。

93T(第 3・50 図)

館跡内部南半部東側の調査区で、掘立柱建物跡、土壙、小溝群などを検出した。

【SB225 掘立柱建物跡】調査区南側で検出した、東西 2 間以上、南北 2 間以上の掘立柱建物跡で、東側と南側は調査区外である。SB226 掘立柱建物跡、SA227 柱列跡、SX224 小溝群と重複しているが新旧関係は不明である。柱穴は、長径 0.4 m 程の楕円形などで、柱痕跡は直径 0.1 m 程の円形である。

【SB226 掘立柱建物跡】調査区南側で検出した、東西 2 間以上、南北 2 間以上の掘立柱建物跡で、西側と南側は調査区外である。SB225 掘立柱建物跡、SA227 柱列跡、SX224 小溝群と重複しているが新旧関係は不明である。柱穴は、長辺 0.4 m 程の隅丸方形などで、柱痕跡は直径 0.1 m 程の円形である。

【SA227 柱列跡】調査区南側で検出した、東西 2 間以上の柱列跡で、東側は調査区外に延びている可能性がある。SB225・226 掘立柱建物跡と SX224 小溝群と重複しているが新旧関係は不明である。柱穴は、長径 0.4 m 程の楕円形などで、柱痕跡は直径 0.1 m 程の円形である。

【SX220 大土壙】（第 50 図 1）開田のため上部が削平されているが、南北 6.4 m、東西 5.4 m 以上の不整形の大きな掘り込みで、深さ 0.6 m である。南側を除く 3 方が埋め戻されており、埋め戻し後の大きさは、南北 5 m、東西 3 m ほどである。壁は緩やかに立ち上がり、横断面形は浅い皿状である。堆積土は黒褐色粘土質シルトで、埋め戻し土は地山の大ブロックを多量に含む黒褐色シルトである。堆積土上部から茶臼の下臼（第 54 図 148、写真図版 12-148）、須恵器坏・甕が、下部から土師器坏が出土した。

【SK221 土壙】（第 50 図 3、写真図版 9-7）南北 4.2 m 以上の大きな掘り込みで、西側は調査区外に延びている。小柱穴が堆積土上面から掘り込まれている。堆積土は黒褐色粘土質シルトなどで、最上部にカキやアサリの貝殻が多量に投棄されている。貝層下から平瓦が出土した。

【SD222 溝跡】南北溝跡で、小柱穴と SD223 溝跡と重複し、両者より新しい。上幅 0.8 m である。

【SD223 溝跡】東西溝跡で、小柱穴と SD222 溝跡と重複し、前者より新しく、後者より古い。上幅 1.2 m で堆積土は黒褐色シルトである。堆積土中から土師器坏（B 類）、須恵器坏・甕、須恵系土器坏・高台付坏が出土した。

【SX224 小溝群】調査区南側で検出した南北方向の小溝群で、北側は開田時の削平により、残っていない。SB225・226 掘立柱建物跡や SA227 柱列跡、SD222・223 溝跡などと重複し、SB226 掘立柱建物跡との新旧関係は不明であるが他のものよりは古い。また、近接しているものがあり、少なくとも 1 度は掘り替えられたと思われる。上幅 0.2～0.4 m で、埋土は地山ブロックを含む暗褐色シルトである。

106T(第 33 図、写真図版 9-8)

南宮神社周辺の状況を確かめるための調査区で、柱列跡や小溝群などを検出した。

【SA234 柱列跡】東西 3 間以上で、掘立柱建物跡の一部である可能性がある。周辺には小柱穴がある程度まとまって存在し、掘立柱建物跡などが存在した可能性がある。柱穴は 1 辺が 0.4 m 程の隅丸方形などである。

【SE229 井戸跡】（第 50 図 2）素掘りの円形の井戸跡で、直径は 2.1 m であり、深さは 0.9 m である。底面は平坦で、壁は急角度で立ち上がり、横断面形は箱形である。堆積土は、下層が褐灰色シルトなどで自然堆積であり、上層が地山ブロックを含む黒褐色シルトなどで人為的に埋め戻された層、最上層が炭化物や焼土粒を含む褐色シルトで、埋め戻し後に窪んだところに流入したものと思われる。堆積土下層からモモ種子、平瓦、土師器甕が出土し、最上層から須恵器坏、土師器甕などが出土した。

【SK232 土壙】北側の調査区の西端で検出された土壙で、南北 4.2 m 以上、東西 1.5 m 以上で、深さは 0.4 m である。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がり、横断面形は椀形である。堆積土はにぶい黄褐色シルトなどで、最上部に To-a 火山灰が流入している。

【SD230 溝跡】南側調査区で検出され、上幅 0.3 m である。堆積土から須恵器甕（第 53 図 149、写真図版

11-149) が出土した。

【SD231 溝跡】北側調査区北端で検出され、上幅 0.5 m である。堆積土から須恵系土器高台付壺が、遺構検出時に平瓦が出土した。

【SX228 小溝群】南側の調査区で検出した小溝群で、東西方向のものと南北方向のものがあり、後者が新しい。また、前者にはやや方向が異なるものがあり、少なくとも 2 時期ある。上幅 0.2 ~ 0.6 m で、埋土は地山ブロックを含む褐灰色砂などである。

【SX233 小溝群】北側の調査区で検出した東西方向の小溝群で、小溝跡が近接するものがあることから何回かの掘り直しがあったと思われる。上幅 0.2 ~ 0.4 m である。

【流路跡】西側にある 70 ⑩・⑪ T でも同様の堆積土の流路跡を検出しており、一連のものと思われる。蛇行しており、複数の流路跡が存在した可能性もある。深さは 0.3 m 程で、堆積土は灰黄褐色シルトなどで、中位に To-a 火山灰が流入しており、最上層には基本層 II 層に類似する黒褐色シルトが堆積している。SX142 小溝群と重複しているが、小溝群が最終の埋没時期より古いことは明らかではあるが、埋没期間中に小溝群が形成され、同時期に存在した可能性も考えられる。堆積土中から、平瓦、土師器甕、須恵器蓋・鉢が出土した。

5 総括

今回の調査で内館跡には古代と中世の遺構が重複していることが明らかになった。ここでは、古代の遺構と中世の館跡について簡単にまとめておくこととする。

(1) 遺跡について

今回の調査によって遺跡の範囲が大きく広がり、内容もある程度は明らかになった。遺跡の範囲は、東西約 500 m、南北 630 m 以上であり、ほぼ全面に小溝群が検出された。北側は 55 ② T 以南、69 ④ T 以南、70 ⑩ T 以南、71 ④ T 以南、72 ① T 以南に存在し、西側は 72 T 以東、8 ⑤ T 以東に存在している。東側は 76 ② T 以西、77 T 以西、78 ③ T 以西、79 ④ T 以西に存在し、南側は 81 T 以南にさらに広がって山王遺跡と連続している。周囲は南側を除いてすべて湿地となっている。中世には、遺跡中央部のやや高い場所に大溝で区画された屋敷が造営された。

(2) 遺構と遺物

① SX214 土器埋没遺構出土土器

基本層 IV 層の上部から土師器甕 2 個体（第 52 図 106・107）が出土したもので、基本層 IV 層上部堆積時に埋没したものと考えられる。いずれも口頭部と体部の境には明瞭な段を持たず、体部は球形ではなく長胴に近い。こういった特徴から、これらの年代は 6 世紀後半から 7 世紀前半頃と思われる。

② 平安時代

掘立柱建物跡や井戸跡、土壙、溝跡、小溝群などが検出された。これらからは土師器、須恵器、須恵系土器などが出土しており、年代はほぼ 9 ~ 10 世紀の平安時代に限定されることから、各遺構の年代も同様と考えられる。

i 掘立柱建物跡・小柱穴群

掘立柱建物跡が 6 ①・② T・78 ①・② T、7 ③・91 ③ T などで検出された。他に、6 ①～③ T・78 ①～③ T や 7 ②・91 ② T、70 ⑩ T・106 T では、掘立柱建物跡を構成するとと思われる柱列や小柱穴群が検出された。これらのうち、埋土に黒色土がほとんど含まれないものは、古代の柱穴と思われ、こういった場所は居住城かと考えられる。トレンド調査のため各居住域の詳細は不明であるが、7 ③・91 ③ T を除くと小柱穴は散在しており、多くの建物跡が存在したことや長期間居住城であったことなどは考え難い。なお、竪穴建物跡は全く検出されなかった。

一方、7 ③・91 ③ T では、掘立柱建物跡が集中し、柱穴が比較的大きめで方形を基調としている点で他の地区とは異なっている。これらの南側の SD64 溝跡からは、9 世紀前半頃の III 類の須恵器壺（第 51 図

59) が出土しており、掘立柱建物跡の年代の一端を表している可能性がある。

ii 井戸跡

井戸側を持つもの (SE50) と素掘りのもの (SE89・156・229) とがある。

前者は方形横板組みの井戸側を持つ井戸跡で、井戸側が掘方の南隅に寄って設置されており、調査時には判然としなかったものの作り替えられた可能性がある。年代は、掘方埋土から II a・III 類の須恵器坏 (第 51 図 30 ~ 32) や B 類の土師器坏が出土しており、9世紀中頃以降に構築されたものと思われる。また、抜き取り穴埋土や井戸側内堆積土から須恵系土器坏 (第 51 図 28・36 ~ 38) が出土しており、10世紀前半頃には廃絶したものと思われる。

素掘りのもののうち、SE89 井戸跡は堆積土上部に基本層 II 層に類似する黒色土が堆積しており 10 世紀後葉頃には廃絶していたと考えられる。SE156・229 井戸跡は周囲に古代の遺構のみが存在することから古代のもの可能性がある。

iii 小溝群

小溝群は地山面 (基本層 IV 層) で検出されたもので、畑作に関係するものと考えられている。耕作土は残っていない。小溝跡の埋土は地山のブロックを含む褐色シルトなどで、人為的に埋め戻されている。規模はバラつきがあるものの概ね上幅が 0.3 ~ 0.8 m、下幅が 0.2 ~ 0.4 m、深さ 0.2m 程で、横断面形は皿状~U 字状である。各小溝跡は基本的に平行して掘り込まれており、間隔は、90 ① T の SX85 小溝群の例から概ね 2 m ほどと考えられる。

方向は南北方向のものと東西方向のものがあり、両者が重複し大きく方向が変化した場所もある (90 ① T の SX85 小溝群など)。

また、これらには区画溝によって区画されているものがある。区画溝には数時期の変遷があり、ある程度の存続期間が推定されることから、小溝群も同様に一定期間耕作地として維持・管理されていたものと思われる (90 ① T の SX85 小溝群など)。この場合、小溝群には多くても数時期の重複しかないことから、小溝の掘削は頻繁に行われる作業ではなかったと思われる。

年代は、出土遺物が少なく、掘り下げていない遺構も多いことから確定できるものは少ないが、90 ② T の SX99 小溝群は、堆積土上部に 10 世紀前半頃に降下した To-a 火山灰が流入している SD88 溝跡より古く、少なくとも 3 時期あることから 9 世紀中~後半頃の年代が考えられる。また、小溝群を区画する区画溝には堆積土最上部に基本層 II 層に類似する黒色土が堆積しているものがあり (90 ① T の SD187 溝跡など)、黒色土は 10 世紀後葉~11 世紀前葉頃に堆積したと考えられていることから、この頃には廃絶していたものと思われる。

小溝群は畑作の痕跡と考えられている。本遺跡の南 3.7km にある中野高柳遺跡では、基盤層に 20 cm ほど掘り込まれた小溝群が検出されており、底面に To-a 火山灰が堆積していたことから、溝は地表面に露出しており、畑の畝間を反映したものと考えられている (宮城県教育委員会 2005)。同様に基盤層 (地山) に 10 ~ 20 cm ほど掘り込まれ、自然堆積土で埋没した小溝群が多賀城市山王・新田遺跡などで多く検出されており、畑の畝間の溝であった可能性が考えられる (注 1・2)。

一方、本遺跡で検出した埋め戻された小溝群については、畑の畝間の溝の痕跡とは考え難いことがすでに指摘されており (佐藤 2000、安 2005)、具体的な性格については、地力回復のための土の入れ替え作業や施肥溝、根菜類もしくは桑の作付け溝などが推定されている (佐藤 2000)。桑の作付け以外の作業は比較的頻繁に行われる作業で、本遺跡の埋め戻された小溝群のあり方とは一致しない。

一方、桑は、現在では、幅 0.3 m 程の溝を掘って植え付けし、植え付け溝の間隔は 1.5 ~ 2.5 m で、15 年程度で植え替えられている (財団法人大日本蚕業技術研究所編 2010)。現在の事例をそのまま安易に適用することはできないが、本遺跡の小溝群が桑の植え付け溝である可能性を想定しうるのではないかと思われる (注 3)。桑は養蚕用に用いられたものと思われる。

なお、養蚕は平安後期以降にはほぼ全国的に行われたことが指摘されている (網野 2001)。『日本後記』

延暦 15 年（796）条に「遣伊勢。三河。相模。近江。丹波。但馬口（草冠に寺）国婦女各二人於陸奥國教習養口（蚕カ）口（限カ）以二年」とあり、陸奥國では律令政府主導で養蚕が導入されたと思われる。また、本遺跡に近接する市川橋遺跡から 10 世紀前葉以降の網に関すると推定される文書の題箋軸が出土（多賀城市教委 2004）（注 4）していることから、網の生産が行われ、それにともなって桑が栽培されていたと思われる。11 世紀前半には陸奥國の貢納する網が粗悪化していることが資料に見え（『左經記』長元 7 年（1034）12 月 14・15 日条）（多賀城市教委 2004）、陸奥國內での網生産が一般化しており、陸奥國が深くかかわっていることが窺われる。

iv 区画溝

溝の両側で造構の様相が明瞭に異なるもの（SD15・23・77・93・125・128・153・155・163・183・185・187・188・191・193・243・244・258・261 溝跡）、何回か掘り直され比較的長期間存在したもの（SD55・173・210・213・81 溝跡）とこれらに接続するもの（SD78・88・184・186 溝跡）を区画溝と考えた。SD15 溝跡、SD185・163 溝跡と SD187 溝跡は両者の特徴を併せ持っている。これらの周辺では小溝群が検出されており、これらは小溝群を区画していたと思われる。

他に、区画溝かどうかは判断できないが、SD76・241・242・22 溝跡は 220 m 以上ほぼ南北に直線的に延びている。

区画の規模は、既述のように 90 ①T 周辺の I 期の区画の東西はおよそ 60 m で、区画内の東半部にある SX85 小溝群の東西はおよそ 40 m である。隣接する 89 ②T にある SX127 小溝群は東側が SD191 溝跡、北側が SD125 溝跡、西側が SD193 溝跡、南側が SD128 溝跡で区画されており、東西およそ 45 m、南北およそ 50 m 程度である。また、71T の SD153・155 溝跡は SX154 小溝群の区画溝と考えられ、区画溝の間隔はおよそ 27 m である。

7 ①・91 ①T と 92T の SD243・20 溝跡と 244・21 溝跡は平行しており、北側の SX47 小溝群と南側の SX48 小溝群を区画している。両溝は南にある 6 ②T・78 ②T、79 ②T まで延びており、並行して直線的に延びることから両溝の間を通路として利用していた可能性がある。このように考えた場合、92T で SD244 溝跡が東へ屈曲していることから、この部分で東へ延びる通路と分岐していた可能性も考えられる。

小溝群が溝によって区画されている例としては、仙台市中野高柳遺跡（宮城県教育委員会 2006）、仙台市沼向遺跡（仙台市教育委員会 2010）、多賀城市山王遺跡 223 次調査（多賀城市教育委員会 2022）などがある。

年代のわかるものには、堆積土に To-a 火山灰が流入していることから 10 世紀前葉前後と考えられるものがある（SD23・78・88・125・163・173・185・188 溝跡）。一方、90 ①T の SD187 溝跡や 89 ①T の SD183 溝跡の堆積土最上部には基本層 II 層に類似する黒色土が堆積しており、10 世紀後葉～11 世紀前葉頃には溝としての機能を失っていたと思われる。

なお、区画溝の方向はまちまちであり、土地利用に際しての方向の規制は認められず、微地形に応じて掘削されたと思われる。

③中世

i 館跡

クロップマークと造構確認のトレントン調査によって、南側でやや東に屈曲する長方形状の区画（東郭）と西側の区画（西郭）からなる、大溝で区画された館跡の存在が明らかになった（第 2 図）。両者の形状から、東郭が主郭で、西側が副郭と思われる。以下、概要を説明する。

東郭 大溝 2 条（SD02 内溝跡、SD03 中溝跡）で区画され、さらに内側にやや規模が小さい溝 1 条（SD01 最内溝跡）、外側に溝 2 条が巡っている（SD04 外 1 溝跡、SD05 外 2 溝跡）。SD02 内溝跡と SD03 中溝跡は全周を巡っているが、他の 3 条の溝跡は北側でのみ検出された。

【内部の規模】東西が、北側では 59T と 92T 付近で SD01 最内溝跡の中心で測ると、およそ 42 m で、西邊の東肩と東邊の西肩の距離はおよそ 40 m である。南側では、62T と 64T の SD02 内溝跡の南西コーナーと

南東コーナーの間で測ると、溝の中心間がおよそ 57 m で、西辺の東肩と東辺の西肩間がおよそ 54 m である。南北は、東側が、SD01 最内溝跡の北東コーナーと SD02 内溝跡の南東コーナー間が、溝の中心で測るとおよそ 80 m、SD01 最内溝跡の北辺の南肩と SD02 内溝跡の南辺の北肩との距離はおよそ 78 m であり、SD01 最内溝跡の北西コーナーと SD02 内溝跡の南西コーナー間が溝の中心で測るとおよそ 117 m であり、SD01 最内溝跡北辺の南肩と SD02 内溝跡南辺の北肩との距離はおよそ 112 m である。

【外側の規模】 SD03 中溝跡の溝の中心で測ると、北辺がおよそ 63 m、東辺がおよそ 98 m、南辺がおよそ 73 m、西辺がおよそ 147 m である。

【内部の様子】 中央部から北半部の 6①・78①T、7①・91①T、7②・91②T では多数の柱穴が検出され、掘立柱建物跡が存在したと思われる。他に、井戸跡や土壌などが検出された。南半部の 62T、64T、93T では 93T の一部で柱穴、土壌などが検出されたのみである。したがって、東郭内では中央部から北側が主に生活の場であったと思われる。

【SD01 最内溝跡】 北辺が 7①・91①T で、西辺が 58①T と 59T、7②・91②T で、東辺が 92T で検出されている。南側の 6T と 78T、62T、64T では確認できず、南半部には存在しなかったと思われる。SD02 内溝跡との間隔は、北辺では溝の中心で測るとおよそ 10 m であるが、西辺ではおよそ 5 m、東辺ではおよそ 5 m である。規模は、北辺が上幅 3.5 m で、西辺が上幅 2 m、東辺が上幅 2 m であり、北辺の規模が大きい。

【SD02 内溝跡】 北辺が 57T と 91①T で、西辺が 58①T と 59T、7②・91②T で、東辺が 6T と 78T、92T で、南東コーナーが 62T で、南西コーナーが 64T で検出されている。SD03 中溝跡との間隔は、各辺とも溝の中心で測るとおよそ 10 m で、内溝跡の外側の肩と中溝跡の内側の肩との距離は 3 ~ 4 m である。規模は、7②・91②T と 64T を除くと上幅 6 ~ 8.7 m で、深さ 0.7 m であり、底面は内側が 0.4 m 程深く段がついており、掘り直された可能性がある。堆積土は上層がぶい黄灰色シルトで、下層は黒褐色粘土である。7②・91②T と 64T では上幅 3 ~ 4.8 m でやや規模が小さく、外側に西郭があるため幾分小規模になっている可能性がある。

【SD03 中溝跡】 北辺が 57T と 7①・91①T で、西辺が 58①T と 59T、7②・91②T で、東辺が 6T と 78T で、南辺が 63T で検出されている。また、南東コーナーが 62T で、南西コーナーが 64 T で、北東コーナーが 92T で検出されている。外 1 溝跡との間隔は、東辺では溝の中心で測るとおよそ 8 m であり、北辺ではおよそ 9 m である。規模は、上幅が東辺は 7.2 m、北辺が 5 m、南辺が 7.2 m、西辺が 2.7 ~ 3.3 m であり、西郭が外側にある西辺がやや小規模である。

【SD04 外 1 溝跡・SD05 外 2 溝跡】 北辺が 57T と 7①・91①T で、西辺が 58①T で、東辺が 6T と 78T で、北東コーナーが 92T で検出されている。南辺では中溝跡の南側は湿地となっており、検出されなかった。外 1 溝跡と外 2 溝跡の間隔は東辺では溝の中心で測るとおよそ 3 m である。外 1 溝跡は、規模は東辺で上幅 1.5 m、下幅 0.5 m、深さ 0.7 m で、堆積土は上層が黄灰色シルトなどで下層がオリーブ黒色シルトである。外 2 溝跡は、規模は東辺で上幅 1.0 m、下幅 0.7 m、深さ 0.4 m で、堆積土は黄灰色シルトなどである。

【維持・管理】 SD02 内溝跡と SD03 中溝跡には壁もしくは底面に段や凹凸がみられるものや別の溝が掘り込まれているようにみえるものがある（第 36 図）。こういった段や溝は、区画溝の維持管理作業、あるいは区画溝の拡幅作業などを反映したものかと思われる。

西郭 大溝（SD07 西中溝跡）で区画され、その内側にやや規模が小さい溝 1 条（SD06 西内溝跡）、外側に溝 2 条（SD08 西外 1 溝跡、SD09 西外 2 溝跡）が巡っている。南辺は調査を行っておらず、状況は不明である。

【規模】 東西が、SD03 中溝跡西辺と SD07 西中溝跡の溝の中心で測ると、61T では約 39 m で SD03 中溝跡西辺の西肩と SD07 西中溝跡西辺の東肩との距離は約 35 m である。南北は 60T と 61T から推定した SD07 西中溝跡の北西コーナーと 7③・91③T までの距離がおよそ 105 m である。

【内部の様子】 8①T、61②T、7②・91②T、7③・91③T で発掘調査が実施された。いずれも柱穴が

検出され、掘立柱建物跡が存在したと思われるが、8①Tや7③・91③Tでは希薄で、東郭と同様に北側が生活の場となっていたと思われる。

【SD06 西内溝跡】 北辺が60Tで、西辺が61②T、8①Tで検出されている。一方、7③・91③Tでは検出されていないことから、南側には存在しなかったと思われる。規模は掘り下げていないため詳細は不明であるが、上幅1.4mで、堆積土は灰黄褐色シルトである。SD07 西中溝跡との間隔は西辺で溝の中心で測るとおよそ3mである。

【SD07 西中溝跡】 北辺が60Tで、西辺が61②T、8①T、7③・91③Tで検出されている。規模は、西辺では上幅4.4m、下幅1.8m、深さ1.7mであり、堆積土は黒褐色シルトや黒褐色粘土などである。SD08 西外1溝跡との間隔は西辺北側では溝の中心で測るとおよそ8mで、南側ではおよそ14mであり、SD07 西中溝跡西辺の西肩と SD08 西外1溝跡西辺の東肩との距離は61②Tでおよそ5.5mである。

【SD08 西外1溝跡】 西辺が61②T、8①T、7③・91③Tで検出されている。規模は、7③・91③Tで上幅は2.4m、下幅は1.6m、深さは最も深いところで0.5mである。SD09 西外2溝跡との間隔は7③・91③Tで溝の中心で測るとおよそ7mである。

【SD09 西外2溝跡】 西辺が61②T、8①T、7③・91③Tで検出されている。規模は、7③・91③Tで上幅は3.5m、下幅は0.6m、深さは最も深いところで0.4mである。

郭内部の分割 加藤・野崎は、明治19年の地籍図から、畑を取り囲む細長い水田を水濠と推定し、本館跡を具体的に紹介しており（加藤・野崎 1973）、北半部だけではあるが、今回の調査でこの推定がほぼ正しかったことが判明した。なお、この地籍図には、加藤・野崎が南辺と考えた、東郭東辺の中央部付近から西辺につながる細長い区画が図示されており、この場所にも区画溝が存在したと思われる（第34図）。この場合、東郭は南北に分かれていたことになる。西郭にも東郭ほど明瞭ではないが同様な細長い区画があり、南北に分かれていた可能性がある。東・西郭の南北の区画溝の相違や場の使われ方の違いはこういったことを反映している可能性がある。このように想定した場合、8①TのSD70 溝跡は西郭を南北に区画する溝の可能性が考えられる。掘り下げていないため詳細は不明であるが、上幅5.0mで、堆積土は暗灰黄色砂質シルトである。

東郭と西郭の関係 北西部で東郭の中溝西辺と西郭の西中溝北辺が接続している状況がクロップマークで確認でき、発掘調査では東郭と西郭の重複は確認されなかったことやそれぞれの溝跡の最上部の堆積土が類似していること（注5）から、最終時期には同時に存在し、廃絶したものと思われる。一方、西郭は存続期間のある時期に後から東郭に付加されたものなのか最初から東郭と存在していたものなのについては決定できないが、東郭だけが単独で存在していたとすると南北に長く屋敷としては不自然な形状であることから両者は同時に掘削された可能性が高いと思われる。

築造年代 出土遺物をみると、13世紀頃の龍泉窯系の青磁（第53図76）や13世紀後半～14世紀前半頃の常滑産甕、同時期の在地産の甕などがあり、これ以前に遡る遺物はない。一方、これらの遺物は長期間使用された可能性も指摘されており、築造時期は概ねこの頃以降と考えておきたい。

存続期間 館跡内部の6①T・78①T、93Tでは掘立柱建物跡や柱列が重複しており、7②T・91②Tでは柱穴が集中しており、集中度合いから長期間ではないもののある程度の期間は使用されたと考えられる。年代は、7③・91③TのSD08 西外1溝跡堆積土から、在地産の口縁部が外側に引き出され水平な平坦面を作り出した瓦質土器擂鉢が出土しており（第53図60）、同様の特徴を持つ宮城県大和町下草古城跡出土の瓦質土器擂鉢が16世紀中頃から17世紀初頭頃と考えられていること（宮城県教育委員会1992・1993）、多賀城市大日南遺跡でも、16世紀の遺構から同様の瓦質土器擂鉢が出土していること（多賀城市教育委員会2013）、山形県内の瓦質土器を集成した成果からもこういった擂鉢は16世紀頃と考えられている（高桑2003）ことから、この瓦質土器擂鉢の年代も16世紀頃と思われる。したがって、SD08 西外1溝跡や本館跡の年代の一端もこの頃にあると考えられる。

廃絶とその契機 天正18年（1590）の豊臣秀吉の奥州仕置により留守氏の所領が没収され、家臣も本拠

地を離れたと考えられており（多賀城市史編纂委員会 1997）、本館跡の廃絶がこのことを反映している可能性が考えられる。また、本館跡が、後述のように留守顕宗が隠居後に居住した「御中館」だとすれば天正 14 年（1586）の顕宗死去後に廃絶した可能性も考えられ、決定できない。いずれにしろ、遅くとも天正 18 年頃までは廃絶したものと考えられる。

居住者 永禄 10 年（1567）に留守氏の当主の顕宗は「御中館」に隠居したと考えられている。隠居分の田畠は「をき南く」（沖南宮）、「かみ南く」（上南宮）、「けあけ」（毛上）など南宮地内にあり、吉田東伍が指摘した通り（吉田 1900）「御中館」は南宮地内にあったと考えられる。ところで、南宮地内には 16 世紀の屋敷跡が本館跡の他に八幡地区的「新しい屋敷跡」（宮城県教育委員会 1997）、「北の屋敷跡」（宮城県教育委員会 1994）、「伏石地区的屋敷」（宮城県教育委員会 1997）が発掘調査で確認されている。このうち、「新しい屋敷跡」と「伏石地区的屋敷跡」は本館跡に比べ小規模で、留守家当主の隠居所とは考えにくい。「北の屋敷跡」は、北西コーナーは明瞭であるもののその後の周辺部の調査では南辺と東辺は存在しないことが確認され（宮城県教育委員会 2009 多賀城市教育委員会 2022）、四隅を大溝で区画する屋敷ではないことが明らかになり、やはり隠居所としてはふさわしくないと思われる。したがって、南宮地内に未知の屋敷跡が存在する可能性はあるものの、規模や複数の郭を有する点から、現時点では、本館跡が「御中館」であり、居住者は留守顕宗であると考えておきたい。

なお、本館跡の居住者が留守顕宗だった場合、居住期間は永禄 10 年（1567）の隠居から天正 14 年（1586）の死去までの 20 年間であり、建物跡の重複状況から屋敷跡としてある程度の使用期間が推定されることから、隠居所として造営されたものではなく、既に存在していた屋敷跡を隠居所とした可能性も考えられる。

ii 館跡以外の中世の遺構

館跡の南側の 80 ①・② T で大溝と柱穴など、79 ① T で大溝、79 ④ T で井戸跡などを検出した。

【SD13・14 溝跡】80 ② T の南北方向の大溝で、形状が館跡の区画溝と類似しており、上部に区画溝跡と同様の砂質土が堆積していることから館跡と同時期に存在していたと思われる。また、SD14 溝跡からは 16 世紀の瓦質土器擂鉢が出土した。すぐ北側の 64 T では不明瞭であるが、南側の 81 T では SD13 溝跡の延長が確認されている。

【SD170・171 溝跡】79 ① T で検出された南北方向の大溝かと思われる遺構で、中世のものである可能性が考えられる。すぐ南側の山王遺跡第 145 次調査で検出された SD1906 溝跡（多賀城市教育委員会 2115）はいずれかと一連である可能性がある。

なお、上述の SD13・14 溝跡と SD170・171 溝跡は 100 mほど離れてほぼ平行しており、屋敷を区画する溝跡とも考えられる。南側の都市計画道路の調査では平行する 2 条の東西方向の大溝跡が検出されており、年代は近世と考えられているが（宮城県教育委員会 2004）、状況からは屋敷の区画の南辺と考えることも可能であろう。「(仮)伊勢地区的屋敷跡」として今後の検討課題としておきたい（第 35 図）。屋敷跡だとすると本館跡と同時期に存在したことになる。

注 1

歓と歓間は通常は耕作土中に作られ、歓間が基盤層に 20 cm 程も掘り込まれるのは現在の畑作からは考え難い（安 2005）。また、歓間の溝が敵立で作業のたびに掘削されたとすると、歓間の痕跡である小溝跡は以前のものとずれたりしてかなりの数になると想われるが、そういう状況の小溝群が検出された例はない。

こういった状況からは、例えば、歓と歓間（の溝）は長期間固定されており、歓の維持管理のために歓間の土が少しづつ掻き上げられ結果的に歓間が深くなったり、もしくは、水はけをよくし、歓上を乾燥させるために歓間が深く掘り込まれていったことなどが考えられる。

注 2

実際の発掘調査では自然堆積で埋没した小溝群であっても、溝跡の底面付近には地山ブロックが多い場合や、底面に掘削時の工具痕が残り、地山ブロックが多量に含まれているように見える場合がある。

注3

現在の事例から見た埋め戻された小溝群の性格推定の一例である。埋め戻された小溝群がすべて同じ性格かどうかかも不明確である。性格推定には畑作物の確定が重要であるが、陸苗代や陸船などを除くと個々の畑で栽培された作物が確定できた例はない。なお、仙台市沼向遺跡ではモモなどの果樹、イネ、アワ、ヒエなどの穀類、アサ、ヒヨウタンなどの種子、果実が出土しており、イネ以外は畑作との関連が推定されている（仙台市教育委員会 2010）。

注4

宮城県教育庁文化財課吉野武氏のご教示による。

注5

各辺の内溝と中溝の堆積土最上部には灰黄褐色などの砂質土が堆積している。類似する土が広範囲に堆積していることからこの土層は洪水などのイベント堆積物である可能性が考えられる。イベントは館跡廃絶後ある程度の時間が経過し各溝が半分ほど埋没した頃のものと思われる。

参考文献

- 安 英樹 2005「石川県の畑状遺構と栽培植物」『石川県埋文情報』13号 石川県埋蔵文化財センター
 網野善彦 2001「桑と養蚕」『中世民衆の生業と技術』東京大学出版社
 加藤孝・野崎準 1973「多賀城市内の館跡 - 中世陸奥国府周辺遺跡の考古学的考察 -」『東北文化研究紀要』第5号 東北学院大学東北文化研究所
 佐藤甲二 2000「『脚跡の耕作痕に関する問題点と今後の課題 - 仙台市域の調査事例をとおして -』『はたけの考古学』日本考古学協会 2000年度鹿児島大会実行委員会
 高桑弘美 2003「山形県内出土の瓦質土器」『研究紀要』創刊号 山形県埋蔵文化財センター
 千葉孝弥 1992「武士の屋敷の発見」入間田宜夫・大石直正編『みちのくの都多賀城・松島』よみがえる中世7 平凡社
 能登健・中村直美・菊池貴広 2000「十和田a火山灰による災害と復旧」『紀要XXIX』(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
 能登健・中村直美・菊池貴広 2001「十和田a火山灰による災害と復旧(2)」『紀要XX』(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
 吉田東伍 1900『大日本地名辞書』
 財团法人日本蚕糸会蚕糸技術研究所編 2010「桑の栽培」「養蚕」
 仙台市教育委員会 2012『鴻ノ巣遺跡』仙台市文化財調査報告書第400集
 仙台市史編さん委員会 2000「古代中世」『仙台市史』通史編2
 仙台市教育委員会 2005『洞ノ口遺跡』仙台市文化財調査報告書第281集
 仙台市教育委員会 2010『沼向遺跡第4~31次調査』仙台市文化財調査報告書第380集
 多賀城市教育委員会 1990『新田遺跡』多賀城市文化財調査報告書第23集
 多賀城市教育委員会 2004『市川橋遺跡』多賀城市文化財調査報告書第75集
 多賀城市教育委員会 2013「大日南遺跡」『多賀城市内の遺跡1』多賀城市文化財調査報告書第112集
 多賀城市教育委員会 2015「山王遺跡第145次調査」『多賀城市内の遺跡2』多賀城市文化財調査報告書第119集
 多賀城市教育委員会 2015「山王遺跡第147次調査」『新田・山王遺跡』多賀城市文化財調査報告書第121集
 多賀城市教育委員会 2021『多賀城市的歴史遺産 南宮村・山王村』多賀城市文化財調査報告書第147集
 多賀城市教育委員会 2022『市川橋遺跡第96次調査発掘調査報告書』多賀城市文化財調査報告書第151集
 多賀城市史編纂委員会 1985「考古資料」『多賀城市史』第4巻
 多賀城市史編纂委員会 1997「原始・古代・中世」『多賀城市史』第1巻
 太宰府市教育委員会 2000『太宰府条坊跡 XV-陶磁器分類編-』

- 宮城県多賀城跡調査研究所 1990「第36次調査」『年報』
宮城県多賀城跡調査研究所 1991「第39次調査」『年報』
宮城県多賀城跡調査研究所 1992「第42次調査」『年報』
宮城県教育委員会 1992「下草古城跡」『下草古城跡ほか』宮城県文化財調査報告書第146集
宮城県教育委員会 1993「下草古城跡」『下草古城跡ほか』宮城県文化財調査報告書第154集
宮城県教育委員会 1994『山王遺跡八幡地区的調査』宮城県文化財調査報告書第162集
宮城県教育委員会 1997『山王遺跡V』宮城県文化財調査報告書第174集
宮城県教育委員会 1998『山王遺跡町地区的調査』宮城県文化財調査報告書第175集
宮城県教育委員会 2004『山王遺跡伊勢地区的調査』宮城県文化財調査報告書第198集
宮城県教育委員会 2005『中野高柳遺跡IV』宮城県文化財調査報告書第204集
宮城県教育委員会 2009『市川橋遺跡の調査』宮城県文化財調査報告書第218集
宮城県教育委員会 2018『山王遺跡VII』宮城県文化財調査報告書第246集

第1表 内館跡柱立柱建物跡・柱列跡属性表

遺構名	調査区	建物間数	棟方向	平面規模(m)				建物方向	柱痕 跡(m)	抜取 穴有無	柱穴掘方		新旧関係 ・備考	図版					
				東西		南北					規格 (m)	平面形		平面	断面				
				東西	南北	東西	南北												
SB16	6①・ 78①	2+	1+	4.0+	北	2.0+2.0	1.9+	東	1.9+	E-8°-N	北	0.2~ 0.4	円・椭円	SD12→	3				
SB24	6②・ 78②	2+	1+	6.2+	南	3.2+3.0		西	2.3+	E-15°-N	南	0.1~ 0.2	0.4~ 0.8	椭円	4	37-9			
SB26	6②・ 78②	2+	2 2 +	4.8+	南	2.4+2.4	4.7	東	2間分	E-13°-N	南	0.2	0.4	円・椭円	4	37-7			
SB56	7③・ 91③	2+	1+	3+	北	1.5+1.5	2.2	西	2.2+	E-8°-N	北	0.2	0.4~ 0.6	方	→SB57	9・10			
SB57	7③・ 91③	1+	2 2 +	2+	北	2.0	3.4+	西	3.4 (2 間分?)	E-0°-N	北	有	0.4~ 0.7	方・椭円	SB56→	9・10			
SB60	7③・ 91③	2+	3+	3.4+	北	不明+1.8	3.8+	西	不明+1.3	E-3°-N	北	0.2	0.4~ 0.6	方・椭丸	9・10				
SB61	91③	2+	2+	3.0+	北	不明+1.5	3.6+	西	不明+1.8	E-9°-N	北	0.2	0.5~ 0.7	方	9・10				
SB195	90①	3+	3+	東西 ?	身合 北	4.8+	身合 東	2.3+2.5	5.0+	N-0°-E	身合 北	0.1	有	0.4~ 0.5	円・椭円	SK85→ SK204	31 48-1・3		
SB225	93	1+	1+	1.9+	北	1.9	1.7+	西	1.7	E-6°-S	北	0.1	0.2~ 0.4	椭丸方	3				
SB226	93	1+	1+	1.9+	北	1.9	1.3+	東	1.3	E-31°-N	北	0.1	0.2~ 0.4	椭丸方	3				
SA17	6①・ 78①	3	東西	5.7		1.7+2.0 +2.0				E-5°-S		0.1 0.2	0.2~ 0.4	円・椭円	3				
SA18	6①・ 78①	2	東西	5.0		2.3+2.7				E-13°-S		0.2 0.3	0.2~ 0.4	円・椭円	3				
SA25	6②・ 78②	2+	東西	4.7		2.4+2.3				E-3°-N		0.1	0.3~ 0.4	円・椭円	SX27→	4 37-8			
SA33	6③・ 78③	3+	東西	7.0+		2.2+2.3 +2.5				E-4°-S	-	0.1~ 0.2	0.4~ 0.8	椭円	SX34・ SD31→	4 37-6			
SA58	7③・ 91③	3+	東西	4.1+		1.4+1.5 +1.2				E-7°-N		0.2	0.3~ 0.4	椭丸方	SB57→				
SA237	8①	3	東西	2.3		2.2+2.1				E-40°-N		0.2	0.2	円・椭円	9				
SA106	61①	3+	東西	6.8+						E-8°-N		0.2	0.2	円・椭円	13				
SA107	61①	3+	東西	4.2+						E-20°-S		0.2	0.2	円・椭円	13				
SA196	90①	2	南北	3.6		1.8+1.8				N-0°-E		0.1	0.4~ 0.6	円・椭円	SK85→	31 48-2・3			
SA197	90①	5+	南北	12.2+		2.4+2.8+ 3.2+2.5 +1.3				N-2°-E		0.1	0.3~ 0.4	円・椭円	SK85→	31 48-3			
SA227	93	2+	東西	2.4+		1.2+1.2				E-11°-N		0.1	0.3~ 0.4	円・椭円	SX224→	3			
SA234	106	3+	東西	10.8+		3.6+3.6 +3.6				E-36°-N		0.2	0.4~ 0.5	椭丸方 ・椭円		33			

第2表 内館跡井戸跡属性表

遺構名	調査区	検出面	構造	掘方(m)			井戸側(m)			抜取 穴(m)	深さ (m)	堆積土	新旧関係 ・備考	図面	
				平面形	断面形	法量	組み方	平面形	井戸側内 法量					平面	断面
SE50	7②・ 91②	IV	井戸側	楕円	箱	長3.2× 短3.0	横板組み	正方	0.8	自然	あり	1.3	人為		3・7
SE51	7②・ 91②	III	蓄水 槽	円	口一ト 状	直径1.5						1.6	自然	→ SE52	3・8 39-1
SE52	7②・ 91②	III	蓄水 槽	円	口一ト 状	直径1.0						0.8	上部 埋め戻し	SE51→	3・8 39-1
SE89	56③	IV	蓄水 槽	円	楕	直径1.8						0.6	自然		15 40-2
SE101	58①	IV	蓄水 槽	円?	V字	直径2.3						0.9	自然	SD03→	17 41-1
SE156	71⑩	IV	蓄水 槽	円	口一ト 状	直径0.9						0.7	自然		23 43-5
SE176	79④	IV	蓄水 槽	円	口一ト 状	直径1.3						1.1	自然		27 45-4
SE229	106	IV	蓄水 槽	円	箱	直径2.1						0.9	上部人為 下部自然		33 50-2

第3表 内館館跡溝跡属性表

遺構名	調査区	検出長(m)	方向		断面形	上幅(m)	下幅(m)	深さ(m)	堆積土	新旧関係	備考	図面	
			向き	角度								平面	断面
SD01	7①・ 91①	4.3	東西	W-22°-N	箱堀	3.5	2.5	0.5	自然	SX41 → SD01		3	38-2
	92	7.4	南北	N-1°-E	箱堀?	2.0	1.8	0.2	自然			6	41-1
	58①	2.2	南北	N-32°-E	浅い塹	3.1	0.5	0.6	自然			17	
	59	2.0	南北	N-28°-E		2.0							
SD02	7②・ 91②	5.6	南北	N-15°-W		2.3	1.0	0.4					
	6②・ 78②	6.8	南北			2.8+	0.6+				部分的な検出	3	36
	92	7.2	南北	N-10°-E		6.0	0.6		自然	SX48 → SD02	北東コーナー東辺	4	38-4
	7①・ 91①	4.8	東西	W-10°-N	塹	6.1	4.0	0.7	自然		北東コーナー北辺	6	40-1
SD03	57	1.8	東西	W-13°-N	浅い塹	6.3	2.4	0.8	自然			17	41-1
	58①	2.0	南北	N-63°-E	浅い塹	8.7	5.6	0.8	自然		北西コーナー一部	19	
	59	2.1	南北	N-26°-E		6.4							
	7②・ 91②	5.4	南北	N-10°-E		4.8	3.8	0.6	自然				
SD04	64	6.4	南北	N-25°-W		3.2							
	64	9.2	東西	E-30°-N		3.2					南西コーナー一部		
	62	1.7				6.4					南東コーナー一部		
	6②・ 78②	4.8	東西	N-1°-W	箱堀	7.2	4.6	0.8	自然			3	36
SD05	92	5.8	南北	N-12°-W	箱堀	5.0	3.5	0.8	自然	SX48 → SD03	北東コーナー東辺	4	38-6
	7①・ 91①	4.6	東西	W-10°-N	箱堀	4.2+	3.5	0.8	自然		北東コーナー北辺	6	40-1
	57	1.8	東西	W-12°-N	塹	5.5	2.3	0.9	自然			13	41-1
	58①	2.0			塹	5.3	3.8	0.9	自然	SX03 → SE101	北西コーナー一部	17	41-2
SD06	59	2.3	南北	N-19°-E	浅い塹	4.8+		0.9	自然			19	
	61①	2.3	南北	N-10°-W		2.7							
	7②・ 91②	5.0	南北	N-30°-W		3.3	1.9	0.5		SD55・ 56 → SD03			
	64	1.8				3.6					南西コーナー一部		
SD07	63	2.4	東西	E-37°-N		7.2							
	62	2.4				5.0					南東コーナー一部		
	6②・ 78②	6.8	南北	N-7°-W	逆台形	2.0	0.9	0.8	自然			4	36
	92	3.4			塹	1.6	0.5	0.7	自然	SX48 → SD04	北東コーナー一部	6	39-2
SD08	7①・ 91①	4.2	東西	W-20°-N	塹	1.8	0.7	0.7		SX48 → SD04		17	40-1
	57	1.7	東西	W-14°-N	塹	3.4	1.6	0.5	自然				41-1
	58①	1.7				1.8+		0.5	自然		部分的な検出 北西コーナー一部		
	6②・ 78②	6.8	南北	N-8°-W	逆台形	2.1	0.7	0.6	自然			4・17	36
SD09	92	3.4			塹	1.1	0.7	0.4	自然	SX48 → SD05		6	39-2
	7①・ 91①	4.2	東西	W-18°-N	塹	1.1	0.8	0.4		SX48 → SD05		9	42-1
	60	2.0				0.7+		0.3+	自然		部分的な検出	13	
	61②	2.0	南北								部分的な検出	17	
SD10	8①	4.8	南北	N-12°-W		1.4							
	60	2.0	東西	W-7°-S	V字	4.0	0.4	0.8	自然			9	39-3
	61①	2.0	南北	N-11°-W	塹	4.3	2.1	0.7	自然			13	42-1
	8②	3.8	南北	N-2°-W		3.8						17	42-2
SD11	7③・ 91③	4.4	南北	N-15°-W	塹	4.4	1.8	1.3	自然				

遺構名	調査区	検出長(m)	方向		断面形	上幅(m)	下幅(m)	深さ(m)	堆積土	新旧関係	備考	図面	
			向き	角度								平面	断面
SD08	61 ①	2.2	南北	N-9°-W	直	6.6	4.0	0.4	自然		SD09と同時に埋没	9 13	42-2
	8 ①	4.3	南北	N-11°-W		1.6							
	7 ③・ 91 ③	6.2	南北	N-27°-W	直	2.4	1.6	0.5	自然				
SD09	61 ①	2.0	南北	N-9°-W	楕	1.3	0.6	0.6	自然		SD08と同時に埋没 溝状に埋んだ部分	9 13	42-2
	8 ①	2.5	南北			1.3+			自然		部分的な検出		
	7 ③・ 91 ③	4.5	南北	N-20°-W	浅い楕	3.5	0.6	0.4	自然				
SD10	7 ①・ 91 ①	8.1	南北	N-1°-W	直	3.0	0.9	0.4	自然	SD41・42 → SD10 → SD01・40、 SK13		6	38-1
SD11	92				逆台形	2.7	1.5	0.8	自然	SD11 → 小柱穴	SD10と一連か?	3	37-1
	6 ①・ 78 ①	7.2	南北	N-80°-E	逆台形	2.9	1.5	0.6	自然	SD11 → 小柱穴		6	38-5
SD12	6 ①	6.0	東西	E-15°-N		4.6				SD12 → 小柱穴		3	
SD13	80 ②	5.2	南北	N-10°-E	楕	6.1		0.8	自然		底面中央が盛り上がる	28 29	46-4
	81	12.2	南北	N-35°-E	楕	9.0			自然	SX181 → SD14	底面中央が盛り上がる		46-6
SD14	80 ②	5.2	南北	N-10°-E	直	6.4	4.0	0.9	人為+ 自然			28	46-4
SD15	8 ②	5.3	南北	N-8°-W		2.7						9	46-3
	7 ③・ 91 ③	9.6	南北	N-20°-W	浅い楕	3.5	2.2	0.8	自然			11	
	80 ③	5.4	南北	N-25°-W	逆台形	2.5	0.8	0.9	自然		区画溝	29	
SD19	78 ②	4.2	南北	N-45°-W	楕	2.2	1.0	0.9	自然	SD19 → SD02	SD41と一連 II層類似土堆積	4	36
SD20	6 ②・ 78 ②	7.2	南北	N-15°-W	逆台形	1.2	0.6		自然			4	
SD21	6 ②・ 78 ②	7.2	南北	N-15°-W	逆台形	1.0	0.6		自然			4	
SD22	6 ③・ 78 ③	6.6	南北	N-3°-E	楕	2.2	0.3	0.4	自然	SD32 → SD22 → SX34	SD240・241・242と 一連	4	37-5
SD23	7 ①・ 91 ①	5.5	南北	N-33°-W	浅い楕	1.3	0.4	0.3	自然		To-a 火山灰入る	6	
	92	4.4	南北	N-21°-W	浅い楕	4.0	2.0	0.2	自然	SD23 → 小柱穴	To-a 火山灰入る		
SD29	6 ③・ 78 ③	7.4	南北	N-16°-W	楕	2.4	0.5	0.6	自然	SX27 → SD29	To-a 火山灰入る	4	37-3
SD30	6 ③・ 78 ③	6.8	南北	N-3°-W	V字	2.5	0.2	0.8	自然			4	37-2
SD31	6 ③・ 78 ③	6.8	南北	N-1°-W	楕	1.8	0.4	0.5	自然	SD31 → SA33		4	37-4
SD32	6 ③	13.9	東西	E-10°-N		1.2			自然	SD32 → SD22		4	
SD35	7 ①・ 91 ①	7.4	東西	E-14°-N		1.2	0.6	0.3		SX44・ 46 → SD35	II層類似土堆積	5	
SD36	7 ①・ 91 ①	4.0	東西	W-37°-N		1.5	1.1	0.6		SD36 → SD35		5	
SD40	7 ①・ 91 ①	5.0	東西	W-22°-N		0.5	0.5	0.3		SD10・ 41 → SD40		6	38-1
SD41	7 ①・ 91 ①	2.1	南北	N-32°-W		2.3+	0.5	0.6		SD41 → SD10・ 40	SD19と一連	6	38-3
	92	5.6	南北	N-32°-W		3.0	1.5			SD41 → 小柱穴	SD19と一連		
SD42	7 ①・ 91 ①	3.5	南北	N-30°-W		1.5	0.7	0.5		SD42 → SD10・ SK43		6	38-1
	7 ①・ 91 ①	6.2	南北	N-20°-W	逆台形	1.6	1.1	0.3	自然		SD20と一連	5	39-2
SD243	92	5.5	南北	N-13°-W	逆台形	1.2+	0.4	0.6	自然	SD20 → SD05		6	
	7 ①・ 91 ①	6.2	南北	N-20°-W	逆台形	1.8	0.8	0.3	自然		SD21と一連	5	
SD244	92	3.4	南北			1.5					東へ屈曲		

遺構名	調査区	検出長(m)	方向		断面形	上幅(m)	下幅(m)	深さ(m)	堆積土	新旧関係	備考	面	
			向き	角度								平面	断面
SD53 7②・ 91②		2.1	東西	E-20°-S		2.4	1.2	0.5	上部人為 下部自然			3	39-1
SD54 7②・ 91②		3.3	南北	N-43°-W	椀	3.1	1.2	0.9	自然			3	
SD55A 7②・ 91②		5.0	南北	N-40°-W	椀							3	
SD55B 7②・ 91②		5.0	南北	N-40°-W	椀		0.6		自然	SD55→SD03		3	
SD56 7②・ 91②		5.0	東西							SD56→SD03	SD55と接続?	3	
SD64 7③・ 91③		4.7	南北	N-14°-W		1.7	0.8			SD64→SK67	SD66と接続	9	39-4
SD66 7③・ 91③		1.4	東西	E-1°-N		0.7	0.3			SD66→SK68	SD64と接続	9	39-4
SD70 8①		2.4	東西	E-30°-N		5.0						9	
SD71 8②		2.4	東西	E-43°-N		1.8						11	
SD72 8②		2.4	南北	N-43°-E		1.5						11	
SD73 8②		9.0	南北	N-34°-W		1.5				SD73→SD74		11	
SD74 8②		2.7	東西	E-35°-N		1.9				SD73→SD74		11	
SD258 8⑥		5.0	東西	W-6°-N		1.5						13	
SD76 55⑤		17.0	南北	N-0°-W	椀	3.2	2.6	0.4	自然	SD76→SX83・ SD77	SD22と一連	14	40-3
SD77 55⑤		5.0	東西	W-19°-N	浅い椀	1.5	0.8	0.3	自然	SD76→SD77		14	40-3
SD78 89①		3.2	南北							SD78→SD183	To-a火山灰入る	30・31	
SD79 55⑤・56①		7.4	東西	E-3°-N	浅い椀	1.5	0.9	0.5	自然			30・31	
SD80 55⑧		1.8	東西	W-36°-N	皿	4.2	2.8	0.4	自然	SD80→SD251			
SD81 55⑧		1.9	東西	E-0°-N	浅い椀	1.6	1.0	0.5	自然			30・31・32	
SD250 55⑤		1.8	東西	W-45°-N								31	
SD251 55⑤・56①		3.6	南北	N-5°-W		1.4				SD80→SD79・ 251		31	
SD82 55⑨・90⑥		10.8	東西	W-45°-N	浅い椀	1.9	0.4	0.4	自然			30・32	
SD87 56②		4.2	東西	W-7°-N	皿	1.0	0.6	0.3	自然	SX87→SD87		31	
SD88 56③・90②		20.2	南北	N-21°-E		1.0				SX99→SD88 →SD185	To-a火山灰入る	15・30・ 31	
SD90 56③		3.6	南北	N-4°-E	浅い椀	4.8	1.7	0.6	自然			15	
SD91 56③		2.2	東西	E-19°-N	皿	0.8	0.6	0.2	自然			15	
SD93 55⑩・69⑩		9.4	南北	N-25°-E	V字	1.0	0.2	0.4	自然			15	
SD94 56④		3.2	東西	E-8°-N	逆台形	0.8	0.4	0.3	自然			15	
SD95 56④		1.8	南北	N-38°-E	椀	0.8	0.2	0.3	自然			15	
SD96 56④		1.8	南北	N-40°-W	皿	2.0	0.6	0.2	自然				
SD97 56④		1.8	南北	N-43°-W	皿	3.0	1.0	0.2	自然			16	
SD98 56④		2.6	南北	N-16°-W	皿	1.6	1.2	0.1	自然			16	
SD100 58①		2.1	南北	N-42°-W	椀	1.3	0.6	0.4	自然		To-a火山灰入る	17	41-1
SD102 58②		9.2	南北	N-26°-W	皿	1.2	0.5	0.3	自然		北側で別層合流?	17・18	
SD104 61①		2.2	南北	N-31°-W		5+						13	
SD105 61②		2.5	南北	N-35°-W	皿	1.5	0.7	0.2	自然			13	42-2
SD110 62		2.0	南北	N-10°-W		1.1			人為			19	
SD111 64		3	南北	N-35°-W		0.7			人為			19	
SD114 68②		1.8	南北	N-12°-W		1.4				SD145と一連?		12	
SD115 68②		1.9	南北	N-20°-W		4.0						12	
SD119 69②		15.0	東西	E-42°-N	V字	1.5	0.3	0.4	自然	SD119→SD120	To-a火山灰入る	20	42-4

遺構名	調査区	検出長 (m)	方向		断面形	上幅 (m)	下幅 (m)	深さ (m)	堆積土	新旧関係	備考	図面	
			向き	角度								平面	断面
SD120	69 ③	2.0	東西	W-5°-N	皿	4.0	3.0			SD119 → SD120	土壤か?	20	
SD121	69 ④	6.2	東西	E-44°-N	浅い椀	1.1	0.3	0.3	自然		To-a 火山灰入る	20	43-6
SD122	69 ⑤	3.8	東西	E-23°-N	浅い椀	1.1	0.4	0.3	自然			20	43-4
SD124	69 ⑥	3.6	南北	N-8°-W		1.4	0.5					20	43-8
SD125	69 ⑦	2.8	東西	W-2°-N		1.0	0.7				To-a 火山灰入る	20	
SD128	69 ⑩	2.3	南北	N-42°-W		1.3	0.7					15	
SD130	69 ⑪	2.1	東西	W-10°-N	皿	1.2		0.3	自然			21	
SD133	69 ㉓	2.4	南北	N-18°-W	皿	0.9	0.6					21	
SD134	69 ㉔	2.2	東西	W-18°-N		1.3	0.7					21	
SD135	69 ㉕	3.0	東西	E-23°-N		1.0	0.6					11	
SD136	70 ㉖	2.1	南北	N-23°-N		0.9	0.7					22	
SD139	70 ㉗	2.2	南北	N-23°-N	浅い椀	0.9	0.4				To-a 火山灰入る	22	
SD140	70 ㉘	2.2	南北	N-23°-N		1.5	0.4					22	
SD143	70 ㉙	2.5	南北	N-17°-N	浅い椀	0.7	0.3					22	
SD144	70 ㉚	2.2	南北	N-35°-W	皿	1.2	0.7					22	
SD145	70 ㉛	4.2	南北	N-8°-N	皿	1.6	0.7				SD114 と一連	22	
SD146	70 ㉜	2.2	南北	N-27°-W	皿	0.8	0.5				To-a 火山灰入る	22	
SD147	70 ㉝	1.8	東西	W-37°-N	V字	3.0	0.8	0.6	自然		To-a 火山灰入る	22	44-2
SD150	71 ⑤	2.2	東西	E-2°-N	椀	0.8	0.4	0.3	自然			23	43-1
SD262	71 ⑤	2.2	東西	E-2°-N	皿	1.2	0.4	0.4	自然		2時期か?	23	43-1
SD151	71 ⑥	2.2	南北	N-27°-W	浅い椀	2.0	0.6	0.3	自然			23	
SD152	71 ⑦	1.8	東西	W-40°-N	浅い椀	2.4	0.5	0.4	自然		To-a 火山灰入る	23	43-3
SD153	71 ⑦	2.0	南北	N-23°-N	浅い椀	1.8+	0.4	0.4	自然			23	
SD155	71 ⑩	2.8	南北	N-8°-W		0.8	0.6					23	
SD160	71 ㉖	3.2	南北	N-30°-W	皿	4.5	3.6	0.5	自然			23	43-7
SD254	71 ㉗	3.8	南北	N-22°-W	皿	3.6	2.1	0.9	自然		II層を切る		
SD163	76 ①	8.4	東西	W-23°-N	皿	1.3	0.5	0.2	自然		To-a 火山灰入る	25	44-4・5
SD164	76 ①	2.0	南北	N-5°-W	皿	1.3	0.8	0.3	自然	SD163 → SD164		25	44-5
SD241	76 ①	1.9	南北	N-13°-E	逆台形	1.6+	0.6	0.5	自然	SD241 → SD163	SD22 と一連	25	44-4
SD242	77 ①	1.8	南北	N-3°-W	逆台形	1.5+	0.7	0.5	自然		SD22 と一連	26	
SD170	79 ①	1.8	南北			4.8+			自然			27	45-1
SD171	79 ①	1.8	南北			2.6+			自然			27	45-1
SD173A	79 ②	3.2	南北	N-34°-W					自然			27	45-2
SD173B	79 ②	3.2	南北	N-34°-W	椀	1.8	0.7	0.6	自然		To-a 火山灰入る	27	45-2
SD174	79 ②	2.6	南北	N-30°-W	皿	0.9	0.5	0.1	自然			27	45-2
SD175	79 ③	11.8	東西	W-13°-N	皿	0.6	0.3		自然			27	
SD177A	80 ①	31.0	東西	W-5°-N		0.5						28	
SD177B	80 ①	42.5	東西	W-5°-N		0.5				SX178 → SD177		28	
SD183	89 ①	16.6	東西	W-23°-N	皿	1.7	1.3	0.1	自然	SD78・184、 SX85 → SD183		30・31	
SD184	89 ①・55 ⑦	10.0	南北	N-4°-W	皿	1.3	0.8	0.1	自然	SD184 → SD183		30・31	
SD185A	89 ①・90 ①	45.4	東西	W-17°-N								31・15・ 30	49-1・4
SD185B	89 ①・90 ①	45.4	東西	W-17°-N	椀	1.3	0.3	0.3	自然	SD185 → SD186・ 239、SK198	To-a 火山灰入る	31・15・ 30	49-1・4

遺構名	調査区	検出長 (m)	方向		断面形	上幅 (m)	下幅 (m)	深さ (m)	堆積土	新旧関係	備考	図面	
			向き	角度								平面	断面
SD186	89 ①・ 90 ①	4.6			皿	1.6	1.2	0.1		SD186 → SD185	L字に屈曲	31・30	
SD187A	89 ①・ 90 ①	23.0	南北	N-10°-E	椀	2.1		0.6	自然	SD187 → SK198・ 199・200	SD246と接続	30・31	47-4
SD187B	89 ①・ 90 ①	23.0	南北	N-10°-E	椀	1.8		0.3	自然	SD187 → SK198・ 199・200	SD246と接続	30・31	47-4
SD188	89 ①・ 90 ②	20.0	東西	E-4°-N	皿	1.3	0.6	0.3	自然	SD188 → SD255	To-a 火山灰入る	31・15・ 30	49-1
SD261	89 ①	6.0	東西	E-7°-S	皿	0.9	0.6	0.1	自然	SD185 →		31	
SD255	89 ①	5.3	東西	E-10°-N	逆台形	0.7	0.3	0.3	自然	SD188 → SD255			
SD190	89 ②	3.0	南北	N-43°-E	逆台形	1.3	0.4	0.4	自然			31・15・ 30	47-6
SD191	89 ②	3.6	東西	E-24°-N	逆台形	1.2	0.3	0.3	自然			31・15・ 30	47-6
SD192	89 ②	3.0	南北	N-37°-E		1.1	0.4		自然	SK127 → SD192		15	47-8
SD193	89 ②	3.0	南北	N-35°-W		1.2	0.4	0.3				15・30	47-7
SD208	90 ①	9.6	東西	W-9°-N	皿	2.0	1.7	0.1	自然			31・30	
SD246A	90 ①	15.0	東西	W-15°-N	皿	0.8	0.3	0.3	自然	SD185 → SD246	SD187と接続	31	49-4
SD246B	90 ①	15.0	東西	W-15°-N	皿	1.2	0.4	0.2	自然	SD185 → SD246	SD187と接続	31	49-4
SD247	90 ①	5.3	東西					0.1+	自然	SK85 → SD247	部分的な検出	31	
SD248	90 ①	7.4	南北	N-20°-E	皿	0.3	0.2	0.1	自然	SK85 → SD248	SK204と連結	31	
SD209A	90 ②	6.0	東西	E-3°-N					自然			32	
SD209B	90 ②	6.0	東西	E-3°-N		0.8	0.4	0.2	自然		2時期か?	32	
SD210A	90 ②	4.4	東西	E-0°-N					自然			30・32	
SD210B	90 ②	4.4	東西	E-0°-N	椀	1.6	0.3	0.3	自然		2時期か?	30・32	
SD235	90 ②	9.5	南北	N-1°-W		0.4			自然	SK99 → SD88・ 185 → SD235		15・31	49-1
SD239	90 ②	5.4	南北	N-22°-W		1.1			自然	SK99 → SD88・ 185 → SD239		15・30・ 31	49-1
SD211	90 ④	5.6	東西	E-0°-N	椀	0.9	0.5	0.2	自然			31	
SD256	90 ④	4.3	東西	W-2°-N	皿	0.4	0.3	0.1	自然				
SD212A	90 ⑥・ ⑦	7.4	東西	E-3°-N	椀							30・32	49-3
SD212B	90 ⑥・ ⑦	7.4	東西	E-3°-N	椀	0.7	0.3	0.4	自然			30・32	49-3
SD213A	90 ⑥・ ⑦	11.2	東西	E-0°-N	逆台形					SD81・SD210と一 連		30・32	49-5
SD213B	90 ⑥・ ⑦	11.2	東西	E-0°-N	椀					SD81・SD210と一 連		30・32	49-5
SD213C	90 ⑥・ ⑦	11.2	東西	E-0°-N	椀	1.4		0.4	自然	SD81・SD210と一 連		30・32	49-5
SD215	90 ⑦	8.5			皿	2.9	0.8	0.3	自然		直角に屈曲	32	
SD219	90 ⑧	1.5	南北			1.6	1.0	0.3	自然	To-a 火山灰入る		30・32	49-2
SD222	93	7.3	南北	N-8°-E		0.6				SK224、SK221、 SD223 → SD222		3	
SD223	93	6.7	東西	W-31°-N		1.3				SD223 → SD222		3	
SD230	106	2.4	南北	N-24°-W		0.3						33	
SD231	106	1.6	南北	N-32°-W		0.5						33	
SD259	69 ⑯	1.6	東西	E-33°-N	皿	2.4	1.3	0.4	自然			21	
SD260	69 ⑯	3.0	東西	E-13°-N	椀	0.7	0.5	0.3	人為			21	
SD263	80 ②	5.2	南北	N-10°-E		1.0	0.6	0.2				28	

第4表 内館跡土壤属性表

遺構名	調査区	検出面	平面形	断面形	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	堆積土	新旧関係		備考		図面	
									平面	断面	平面	断面	平面	断面
SK43	7①・ 91①	IV	不整		南北 3.0	0.7		自然	SD11・SD42 →		部分的な検出	6	38-1	
SK62	7③・ 91③	IV	円?	楕	南北 3.2	1+	0.8	自然			部分的な検出	9・10	39-6	
SK63	7③・ 91③	IV	方?	逆台形	南北 2.2+	2+	0.8	自然			部分的な検出	9・10	39-5	
SK67	7③・ 91③	IV	円	皿	2.2	2.2	0.4	自然	→ SD66			9	39-4	
SK68	7③・ 91③	IV	円?	皿	南北 1.5	1+	0.4	自然	SD66 → SK68 → SK69		部分的な検出	9		
SK69	7③・ 91③	IV	不整	楕	南北 2+	0.5+	0.5	自然	→ SD08・SK68		部分的な検出	9		
SK92	56③	IV	方?	皿	東西 3+	南北 3+	0.5	自然			部分的な検出	15		
SK116	68③	IV	円		1.0	1.0						12		
SK117	68③	IV	円		東西 2.6	南北 1.8+						12		
SK118	68③	IV	方		東西 2.7	南北 1.2+					部分的な検出	12		
SK123	69⑥	IV	円?	皿	東西 1+	南北 1+					部分的な検出	20	42-3	
SK126	69⑦	IV	円?	皿	1.9	1.3+					部分的な検出	20		
SK131	69⑨	IV	円?	V字	1.4	0.8+						21		
SK158	71⑩	IV	円?	楕	1.9	1+	0.5	自然				23		
SK159	71⑩	IV	円?	楕	南北 2.3	1+	0.5	自然				23		
SK168	77⑪	IV	不整		東西 1.6	0.8+						26		
SK172	79⑫	IV	円?	皿	東西 2.1	0.8+	0.4	自然			部分的な検出	27	45-3	
SK179	80⑬	IV	椭円	皿	南北 1.2	1.0	0.3	自然				28		
SK180	80⑬	IV	椭円		南北 1.6	1.3						28		
SK198	90⑪	IV	長方	箱	南北 3.7	1.9	0.4	人為	SD185・187 →			31	47-3	
SK200	90⑪	IV	長方	箱	東西 1.9	1.6	0.4	自然	SD187 →			31		
SK201	90⑪	IV	椭円	箱	南北 1.4	1.0	0.6	人為	SX85 →			31	47-5	
SK202	90⑪	IV	円	箱	1.4	1.4	0.3	人為	SX85 →			31		
SK203	90⑪	IV	方	皿	東西 1.3	南北 1.3	0.1	人為	SX85 →			31		
SK204	90⑪	IV	不整	皿	南北 1.5	1.0		自然	SX85 → SB195 → SK204 → SK205		SD248 と接続	31		
SK205	90⑪	IV	円	皿	1.2	1.1		自然	SK204 →			31		
SK206	90⑪	IV	椭円	逆台	東西 1.9	1.2	0.5	人為	SX85 →			31	47-2	
SK207	90⑪	IV	椭円	逆台	東西 1.5	1.0	0.5	人為	SX85 →			31	47-1	
SK221	93	IV	円?		南北 3.8	1+			→ SD222		上部に貝層	3	50-3	
SK232	106	IV	不整	皿	東西 4.2	1.6		自然	To-a 火山灰入る			33		
SK249	90⑪	IV	椭円	逆台	東西 0.9	0.5+	0.3	人為	SX85 → SK206 →					
SK252	71⑨	IV	円?	V字	東西 1.9	0.6		人為	SX154 →					

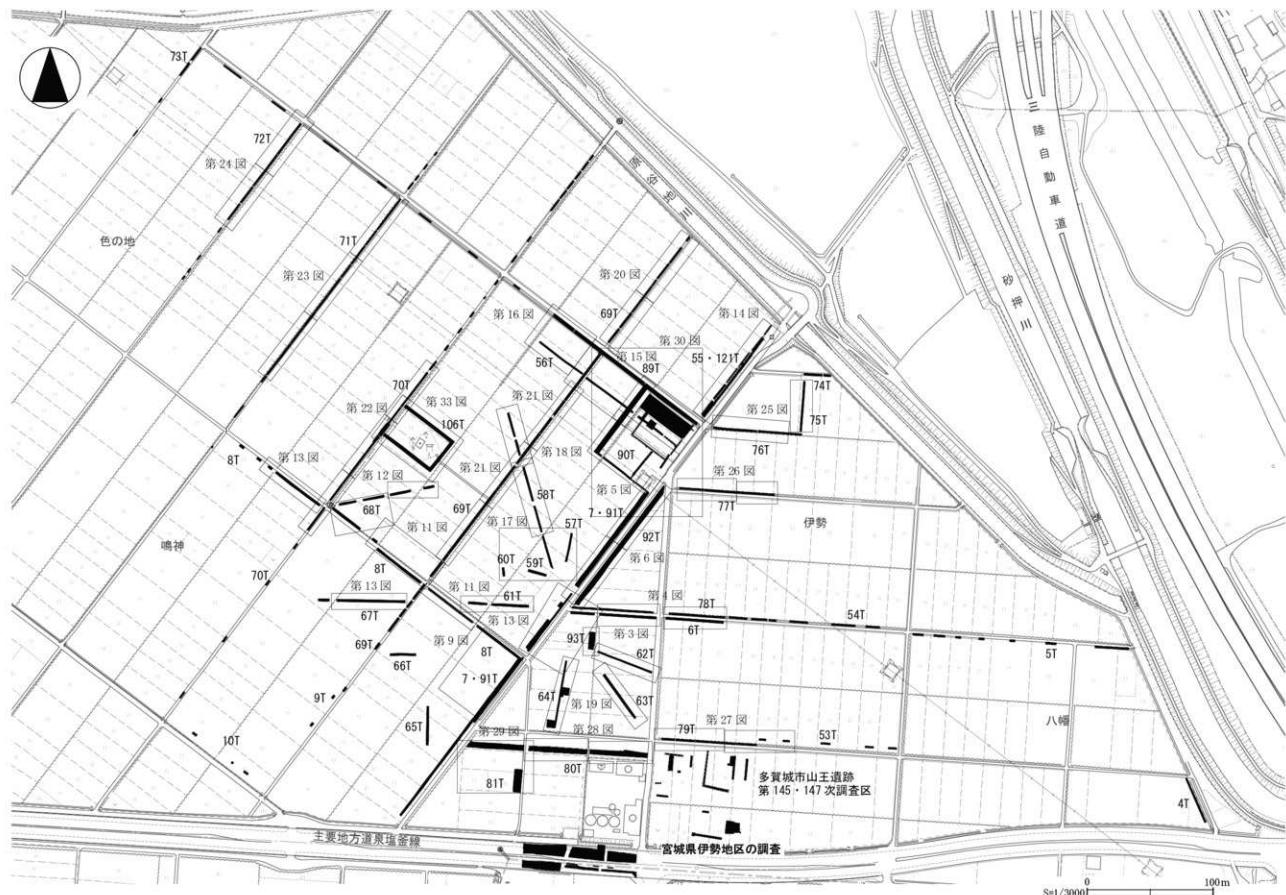
第5表 内館跡小溝群属性表

遺構名	調査区	範囲 東西 × 南北 (m)	区画構	検出 溝数	間隔 (m)	方向		規模 (m)			断面 形	新旧関係	備 考	図面	
						向き	角度	長さ	幅	深さ				平面	断面
SX27A	6③・78③	11 × 3.8+	東 SD30 西 SD29	4	1.8	南北	N-3°-E	0.7	0.3	0.1	皿			4	
SX27B	6③・78③		東 SD30 西 SD29	3	1.9	南北	N-3°-E	0.7	0.3	0.1	皿			4	
SX27C	6③・78③		東 SD30 西 SD29	4	1.7	東西	E-3°-N	5.0	0.3	0.1	皿	→ SD29		4	
SX27D	6③・78③		東 SD30 西 SD29	3	1.8	東西	E-3°-N	9.0	0.4	0.1	皿	→ SD29	溝曲	4	
SX28A	6②・③ 78②・③	30 × 7+	東 SD29 西 SD21	4	2.0	東西	E-3°-N	4.0	0.3			→ SD29, SA25			
SX28B	6②・③ 78②・③		東 SD29 西 SD21	3		東西	E-19°-N	6.0	0.4			→ SD29			
SX34A	6③・78③	13+ × 8+	西 SD30 ?	3		東西	E-7°-N	8.6	0.3			SD22 →		4	
SX34B	6③・78③		西 SD30 ?	2		東西		3	0.2					4	
SX44	92	3 × 2	南 SD35	2	1.4	南北	N-7°-W	1.2	0.2			→ SD35			
SX45A	7①・91①、 92	22+ × 6+	南 SD35	2	1.4	南北	N-17°-W	4.2	0.3			→ SD35		32	
SX45B	7①・91①、 92		南 SD35	2	1.6	南北	N-17°-W		0.3					32	

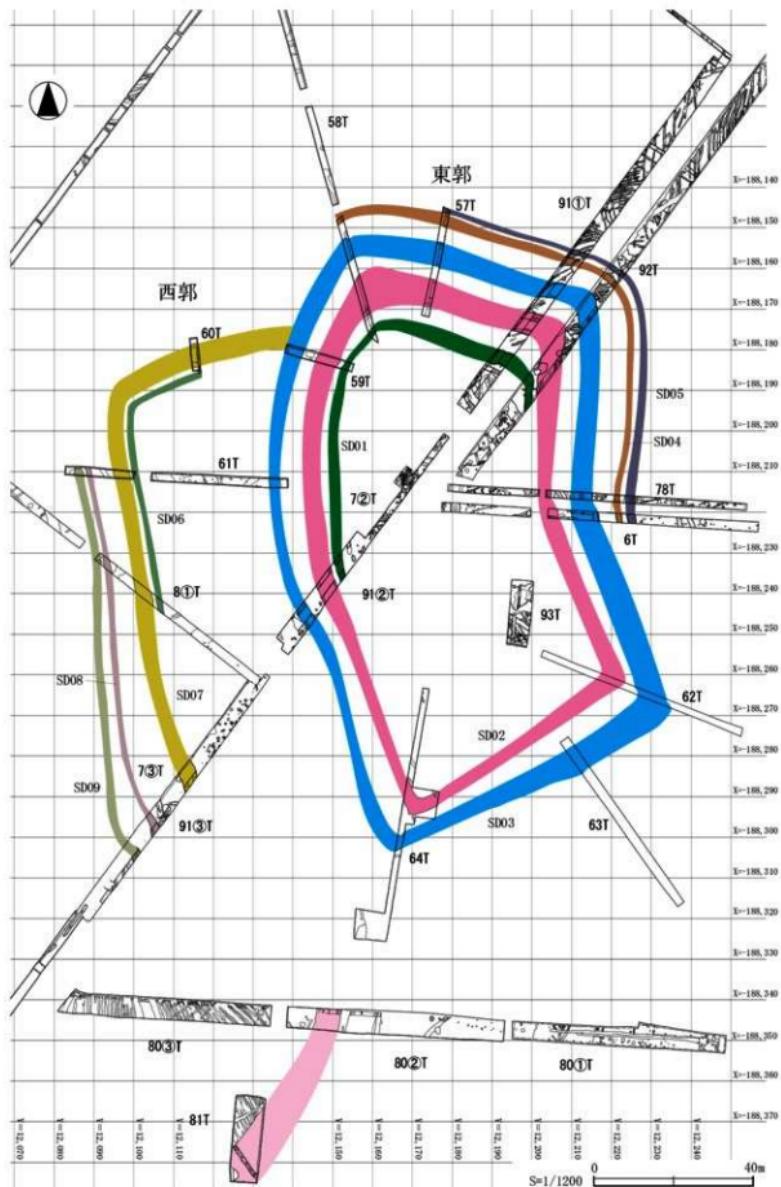
遺構名	調査区	範囲 東西×南北 (m)	区画構 数	間隔 (m)	方向		規模(m)			断面 形	新旧関係	備 考	断面	
					向き	角度	長さ	幅	深さ				平面	断面
SX46A	7①・91①、 92	21+ × 25+	北 SD35 西 SD244	16	1.8 ~ 2.3	南北	N-7° -E	8.0	0.4		→ SX47		5・30	
SX46B	7①・91①、 92		北 SD35 西 SD244	12	1.6 ~ 2.2	南北	N-7° -E	10.6	0.5			湾曲	5・30	
SX46C	7①・91①、 92		北 SD35 西 SD244	5	2.0 ~ 2.2	南北	N-7° -E	11.0	0.4			湾曲	5・30	
SX47A	7①・91①、 92	10+ × 8+	西 SD244	7	1.5 ~ 2.0	東西	E-13° -N	6.5	0.3		SX46 →			
SX47B	7①・91①、 92		西 SD244	7	1.5	東西	E-13° -N	6.5	0.3					
SX48A	7①・91①、 92	25+ × 30+	東 SD243	12	1.1 ~ 1.6	東西	E-13° -N	6.1	0.5				6	
SX48B	7①・91①、 92		東 SD243	14	1.0 ~ 1.5	東西	E-13° -N	6.3	0.5				6	
SX75	8②	20+ × 15+	北 SD71	6	2.0	東西	E-30° -N	2.7	0.4			2~3時 期あり	11	
SX83A	55⑤	30+ × 35+	南 SD77	11	2.5 ~ 3.0	東西	E-5° -N	7.2	~ 0.5		SD76 →		14	40-3
SX83B	55⑤		南 SD77	10	2.5 ~ 3.0	東西	E-5° -N	6.9	~ 0.5				14	40-3
SX83C	55⑤		南 SD77	2	2.5	南北	N-28° -E	8.6	~ 0.4				14	40-3
SX83D	55⑤		南 SD77	2		南北		1.6	0.3				14	40-3
SX84A	55⑥	15+ × 19+	北 SD77	8	1.5 ~ 2.0	南北	N-5° -E	10.4	0.3				14	
SX84B	55⑥		北 SD77	6	2.0 ~ 2.5	南北	N-5° -E	11.0	0.3				14	
SX85A	55⑦、56①・ ②、90①	36 × 46	北 SD185 東 SD78 南 SD81?	14	1.8 ~ 2.0	南北	N-3° -W	17.0	~ 0.5	皿		30・ 31	48-4	
SX85B	55⑦、56①・ ②、90①	36 × 46	北 SD186 西 SD187 東 SD184 南 SD81?	15	1.7 ~ 2.2	南北	N-3° -W	17.0	~ 0.6	皿		30・ 31	48-4	
SX85C	55⑦、56①・ ②、90①	30 × 26	北 SD183 186 西 SD187 東 SD184 南 SD81?	11	2.2 ~ 2.6	東西	W-3° -N	9.6	~ 0.8	皿		30・ 31	48-4	
SX86A	55⑨	9+ × 13+		6	1.0	南北	N-7° -W	3+	~ 0.6	皿		数時期あ り	30	
SX86B		9+ × 13+		3	1.0	南北	N-35° -W	1.9+	~ 0.6	皿		数時期あ り	30	
SX94	56④、69⑪		北 SD93?	4	2.0	東西	E-15° -N	3.2	~ 0.4	皿			15	
SX99A	56③、 90②	5+ × 50		5	1.0 ~ 1.4	東西	W-22° -N	4.5	~ 0.4	皿	→ SD88・ 235・239	31・ 15・ 30・ 32	49-1	
SX99B	56③、 90②			4	1.2 ~ 1.5	東西	W-22° -N	4.5	~ 0.4	皿		31・ 15・ 30・ 32	49-1	
SX99C	56③、 90②			5	1.2 ~ 1.7	東西	W-20° -N	4.5	~ 0.6	皿		31・ 15・ 30・ 32	49-1	
SX112A	8⑥、 68①②、 70②	60 × 17+		15		南北	N-3° -E	2.8	0.2				12・ 13・ 22	
SX112B	8⑥、68①②、 70②			19		南北	N-3° -E	2.8	0.2				12・ 13・ 22	
SX113	8⑥	11+ × 7+		5	1.5	東西	E-6° -N	3.0	0.3				13	

遺構名	調査区	範囲 東西×南北 (m)	区画構 造数	検出 間隔 (m)	方向		規模(m)			断面 形	新旧関係	備 考	断面	
					向き	角度	長さ	幅	深さ				平面	断面
SX127A	69 ⑧⑨⑩、 89 ②	44 × 40+	北 SD125 南 SD93 ? 東 SD191 西 SD193	24	1.5 ~ 2.0	南北 N-25° -W	7.0	0.3 ~ 0.6	0.1 ~ 0.2	楕			15 • 20 • 30	47-8
SX127B	69 ⑤⑥⑦⑧、 89 ②		北 SD125 南 SD93 ? 東 SD191 西 SD193	7	2.0	南北 N-5° -W	4.5	0.3 ~ 0.5	0.1	楕			15 • 20 • 30	47-8
SX127C	69 ⑤⑥⑦⑧、 89 ②	3.5+ × 7+	北 SD125 南 SD93 ? 東 SD191 西 SD193	3	1.5	東西 W-15° -N	5.8	0.3 ~ 0.6	0.1	直			15 • 20 • 30	47-8
SX129	69 ⑪	10+ × 6+	南 SD130	3	1.6	南北 N-25° -E	9.0	0.3		直			21	
SX132	69 ⑫⑬	13+ × 16+	北 SD130	9	1.6 ~ 2.8	南北 N-37° -W	2.0	0.2 ~ 0.6		直			21	
SX137A	70 ⑯⑰	15 × 21	北 SD136 南 SD139 • 140	6	1.6 ~ 1.8	東西 E-7° -N	2.2	0.2 ~ 0.6			SX138 →		22	
SX137B	70 ⑯⑰		南 SD139 • 140	4	1.8	東西 E-7° -N							22	
SX138	70 ⑯	2.5+ × 3+	南 SD139 • 140	3	0.8	南北 N-30° -W	2.2	0.2 ~ 0.4			→ SX137	2時期か	22	
SX141A	70 ⑰⑯	5+ × 8+	北 SD139 • 140	3	1.0	南北 W-28° -N	7.2	0.3				2時期か	22	
SX141B	70 ⑰⑯	3+ × 3+		2	2.0	東西 W-28° -N	1.8	0.4					22	
SX141C	70 ⑰⑯	3+ × 3+		2	1.0	東西 W-28° -N	0.8	0.3					22	
SX142A	70 ㉚、106	28+ × 11+		4	2.1 ~ 2.4	東西 E-15° -N	2.8	0.2 ~ 0.4			→ 流路跡		22 • 33	
SX142B	70 ㉚、106			3	2.3 ~ 2.6	東西		0.2 ~ 0.4					22 • 33	
SX142C	70 ㉚、106			1		東西	1.4	0.5					22 • 33	
SX148A	70 ㉚	5+ × 5+		3	1.6 ~ 2.0	東西 E-15° -N	3.0	0.3 ~ 0.4					22	
SX148B	70 ㉚			2	1.7	東西 E-15° -N	3.0	0.2 ~ 0.4					22	
SX149	70 ㉚	4+ × 3+		3	1.0	東西 E-10° -N	3.2	0.2 ~ 0.3			2時期か		22	
SX154A	71 ⑧⑨	20 × 22+	東 SD153 西 SD155	12	1.3 ~ 2.0	東西 E-12° -N	2.8	0.2 ~ 0.4			→ SK252		23	
SX154B	71 ⑧⑨	20 × 22+	東 SD153 西 SD155	12	1.3 ~ 2.0	東西 E-12° -N	2.8	0.2 ~ 0.4					23	
SX157A	71 ㉚㉛㉚	12+ × 11+		5	1.5 ~ 2.0	東西 E-12° -N	3.0	0.3 ~ 0.4			→ SE156		23	
SX157B	71 ㉚㉛㉚	12+ × 11+		4	1.3 ~ 2.0	東西 E-12° -N	2.2	0.2 ~ 0.4					23	
SX165A	76 ①	10+ × 2.0+		2	3.0	東西 E-15° -N	6.4	0.2 ~ 0.4					25	44-5
SX165B	76 ①	6 × 2.0+		3	2.3 ~ 2.6	南北 N-8° -E	2.0	0.3 ~ 0.6					25	44-5
SX165C	76 ①	15 × 2.0+		5	1.8 ~ 2.4	南北 N-28° -W	2.7	0.2 ~ 0.4					25	44-5
SX165D	76 ①	7.0 × 2.0+		2	5.8	南北 N-20° -W	2.4	0.2 ~ 0.4					25	44-5
SX166A	77 ①	5+ × 1.8+		5	1.1 ~ 1.6	南北 N-3° -W	1.8	0.2 ~ 0.5			2時期か		26 • 30	
SX166B	77 ①			1		南北 N-3° -W	1.8	0.3					26 • 30	

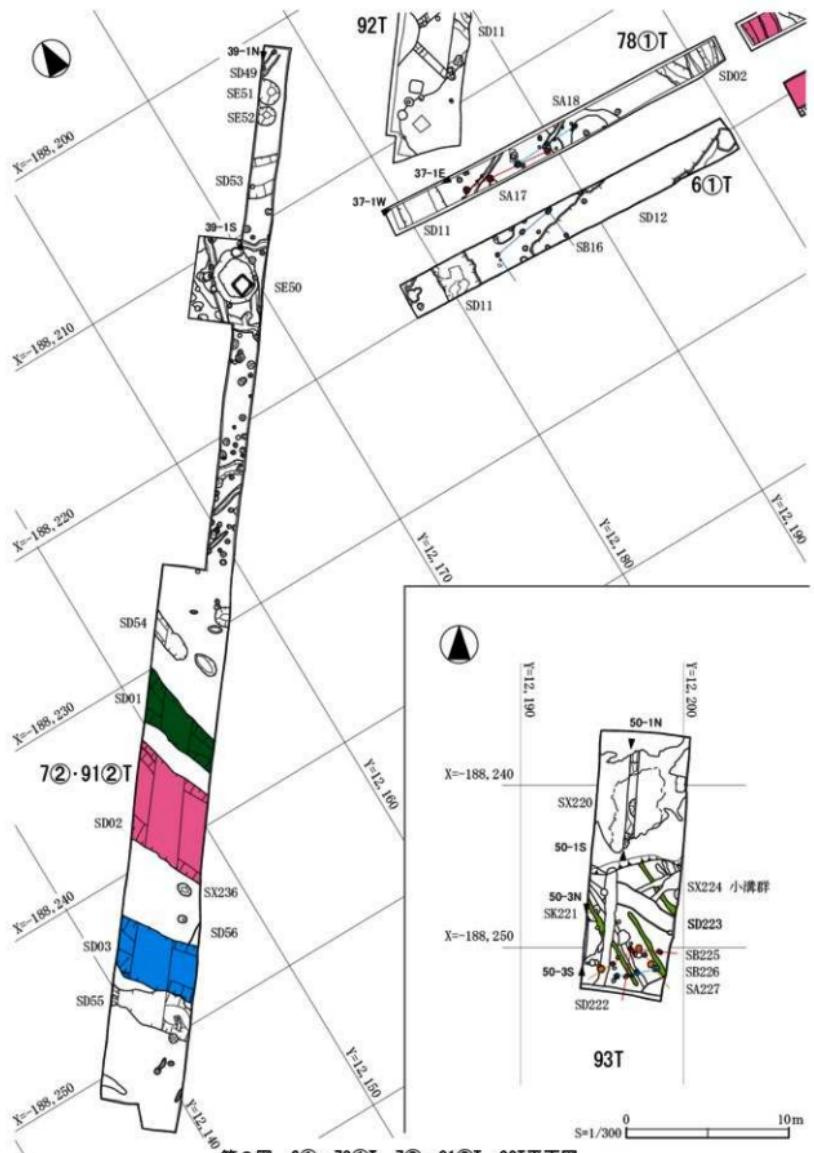
遺構名	調査区	範囲 東西×南北 (m)	区画構 棟数	間隔 (m)	方向		規模(m)		断面 形	新旧関係	備 考	断面	
					向き	角度	長さ	幅				平面	断面
SX167	77 ①	21 × 1.8		8	1.6 ~ 2.4	南北	N-7° ~ E	1.8	0.3 ~ 0.4				26
SX169	77 ③	16+ × 1.8+		7	2.0 ~ 2.5	南北	N-3° ~ E	1.8	0.3 ~ 0.6				26
SX178	80 ①	4+ × 2+		2	2.9	南北	N-38° ~ W	1.7	0.2		→ SD177		28
SX181A	80 ②③、81	15 × 5+	西 SD15	5	2.0 ~ 2.2	東西	E-35° ~ N	6.0	0.3		→ SD13		29
SX181B	80 ②③、81	33 × 37+	西 SD15	11	1.3 ~ 2.0	南北	N-27° ~ W	8.2	0.2 ~ 0.7				29
SX181C	80 ②③、81	33 × 37+	西 SD15	13	1.0 ~ 2.2	南北	N-23° ~ W	7.0	0.2 ~ 0.6				29
SX182A	80 ③	16 × 6+	東 SD153	7	1.6 ~ 2.5	南北	N-3° ~ E	4.6	0.2 ~ 1.0				29
SX182B	80 ③		東 SD15	8	1.7 ~ 2.2	南北	N-3° ~ E	4.6	0.2 ~ 0.5				29
SX189A	89 ①、90 ①	8+ × 4	北 SD188 南 SD185 · 246 東 SD187	7	1.6 ~ 1.8	南北	N-9° ~ E	4.0	0.4 ~ 0.8	0.1	皿	30 · 31	48-5
SX189B	89 ①、90 ①	8+ × 4	北 SD188 南 SD185 · 246 東 SD187	7	1.6 ~ 1.8	南北	N-9° ~ E	3.4	0.4 ~ 0.6	0.1	皿	30 · 31	48-5
SX216A	90 ⑦	5+ × 8+		1		東西	E-0° ~ N	1.0	0.2	0.1	→ SD215	SX217 · 218 上	30 · 32
SX216B	90 ⑦	5+ × 8+		2	3.0	南北	N-0° ~ W	2.1	0.3	0.1		一連か	30 · 32
SX216C	90 ⑦	5+ × 8+		3	0.8 ~ 2.4	南北	N-5° ~ W	2.6	0.4	0.1			30 · 32
SX217A	90 ⑦	13+ × 10+		3	6.0	東西	E-2° ~ N	3.0	0.5 ~ 0.8	0.2	皿		30 · 32
SX217B	90 ⑦	13+ × 10+		4	1.4 ~ 1.6	南北	N-13° ~ W	1.4	0.4	0.2	皿		30 · 32
SX217C	90 ⑧	13+ × 10+		5	1.1 ~ 2.0	南北	N-2° ~ E	2.4	0.3 ~ 0.6	0.2	皿		30 · 32
SX218A	90 ⑧	10+ × 10+		6	0.8 ~ 1.8	南北	N-8° ~ W	3.6	0.4 ~ 0.6	0.1 ~ 0.2	皿		30 · 32
SX218B	90 ⑧	10+ × 10+		7	0.8 ~ 1.7	南北	N-8° ~ W	3.0	0.3 ~ 0.6	0.1 ~ 0.2	皿		30 · 32
SX224	93	5+ × 8+		4	1.7 ~ 2.4	南北	N-29° ~ W	4.5	0.3		→ SD222, SA227		3
SX228A	106	7+ × 8+		3	1.6 ~ 1.9	東西	E-25° ~ N	2.8	0.3 ~ 0.4				33
SX228B	106	7+ × 8+		3	1.6	東西	E-26° ~ N	2.2	0.2 ~ 0.4				33
SX228C	106	7+ × 8+		2	3.0	南北	N-18° ~ W	5.0	0.6				33
SX228D	106	7+ × 8+		2	2.0	南北	N-18° ~ W	6.8	0.6				33
SX233A	106	8+ × 12+		3	3.0	東西	E-10° ~ N	4.2	0.2 ~ 0.4				33
SX233B	106	8+ × 12+		2	2.0	東西	E-12° ~ N	4.2	0.3				33
SX257A	77 ①	5+ × 1.7+		5	0.9 ~ 1.5	南北	N-4° ~ W	1.7	0.3				
SX257B	77 ①			1		南北		1.7	0.3				



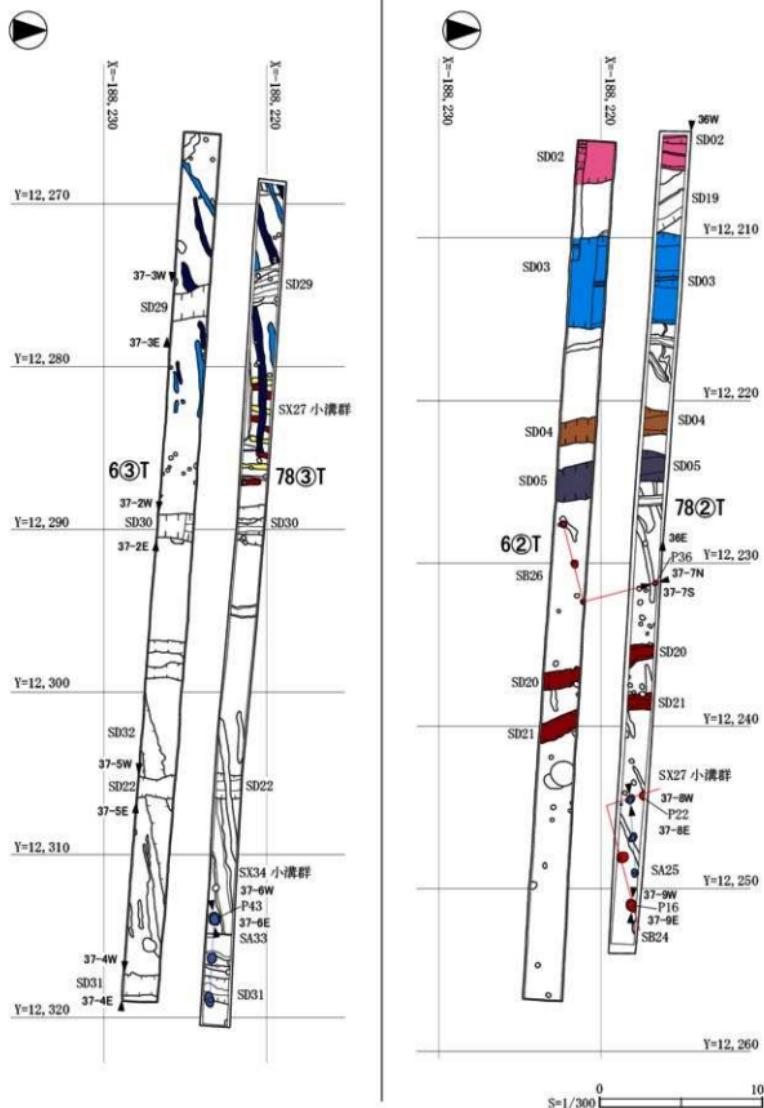
第1図 調査区位置図



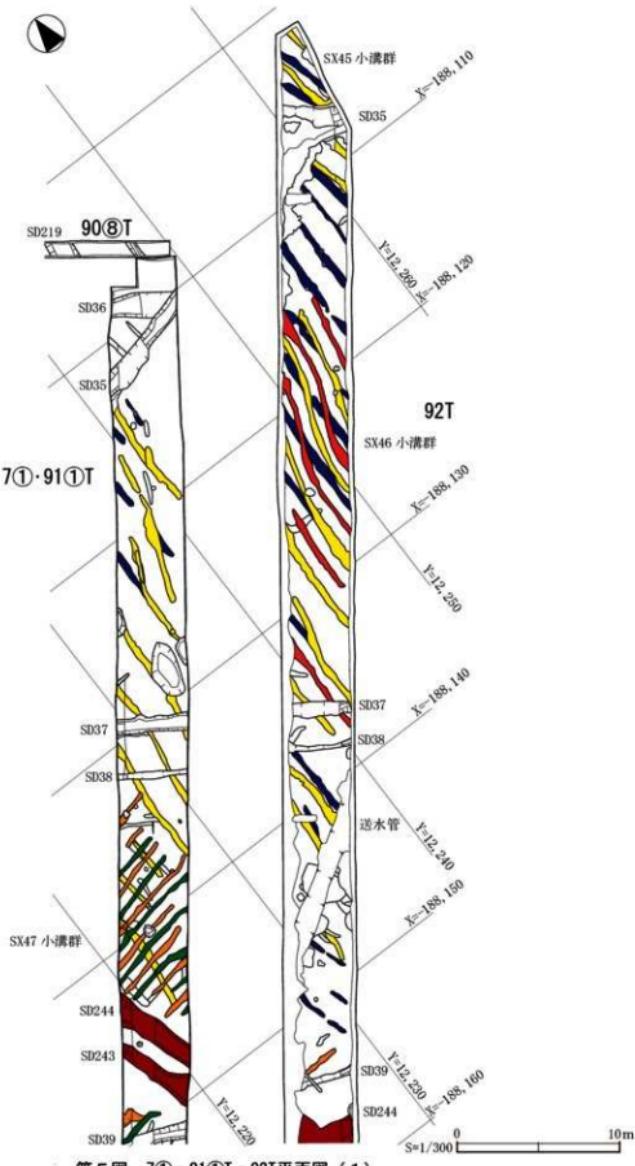
第2図 館跡全体図



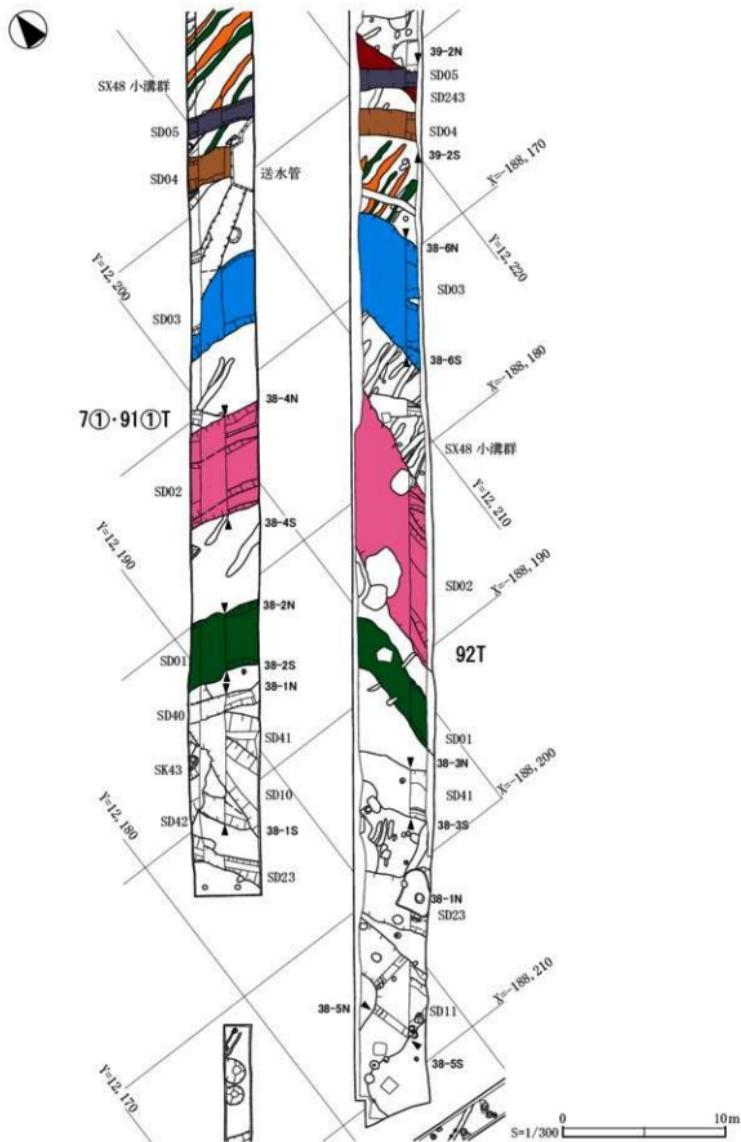
第3図 6①・78①T、7②・91②T、93T平面図



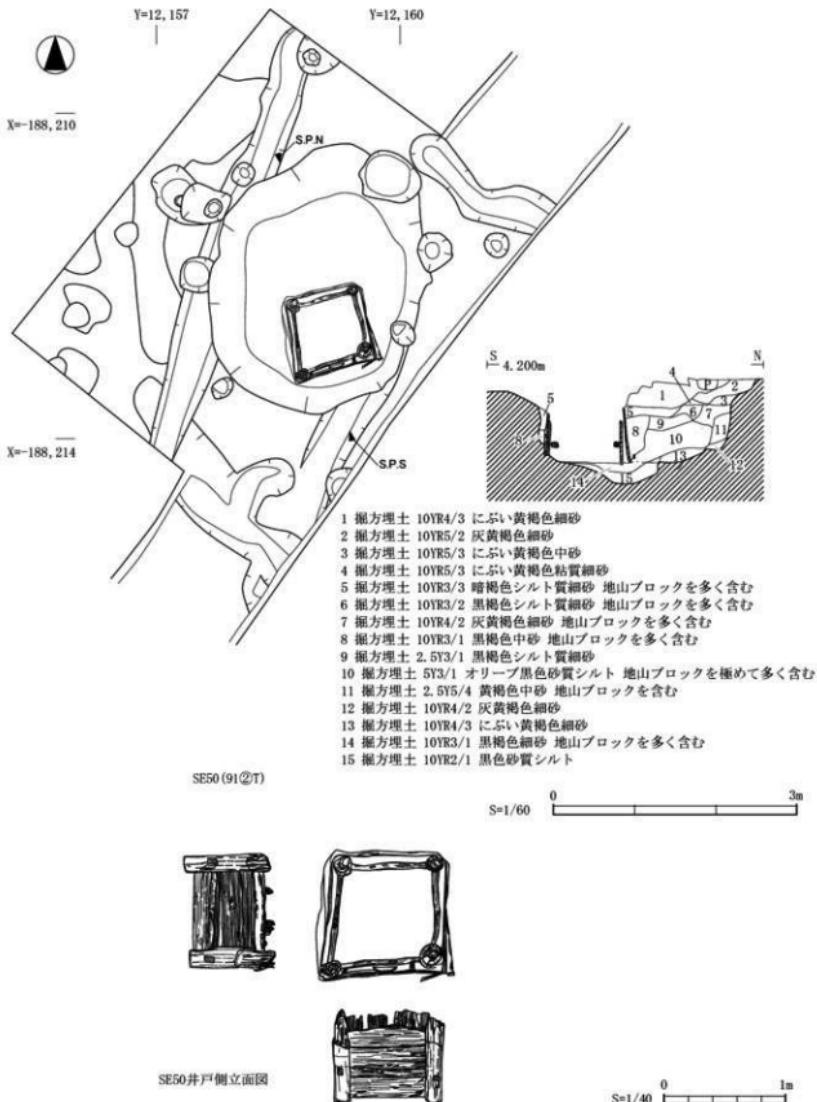
第4図 6②・78②T、6③・78③T平面図



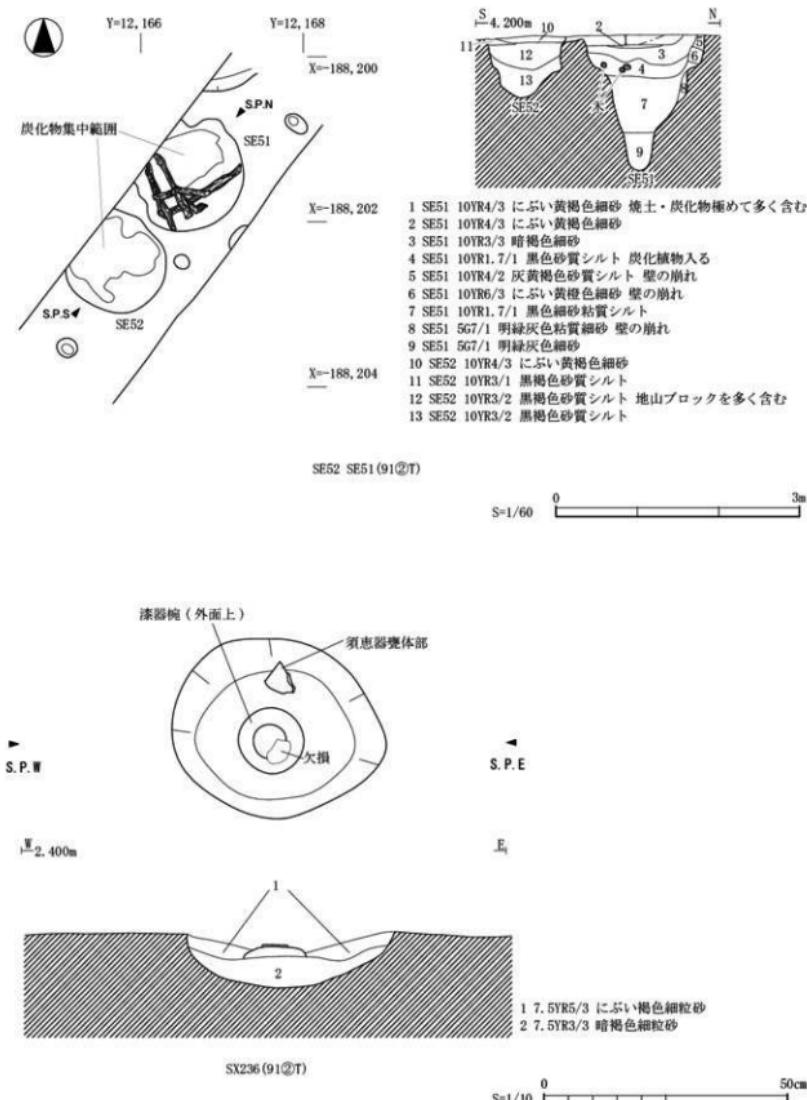
第5図 7①・91①T・92T平面図 (1)



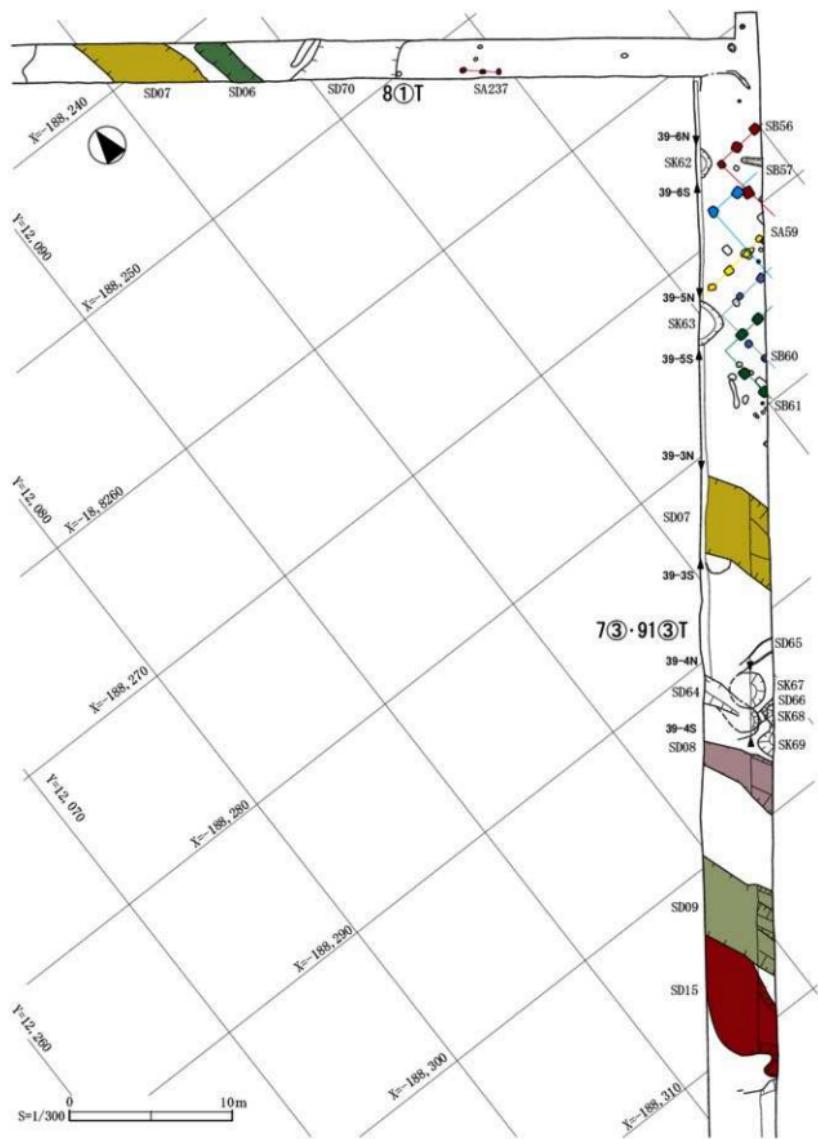
第6図 7①・91①T・92T平面図(2)



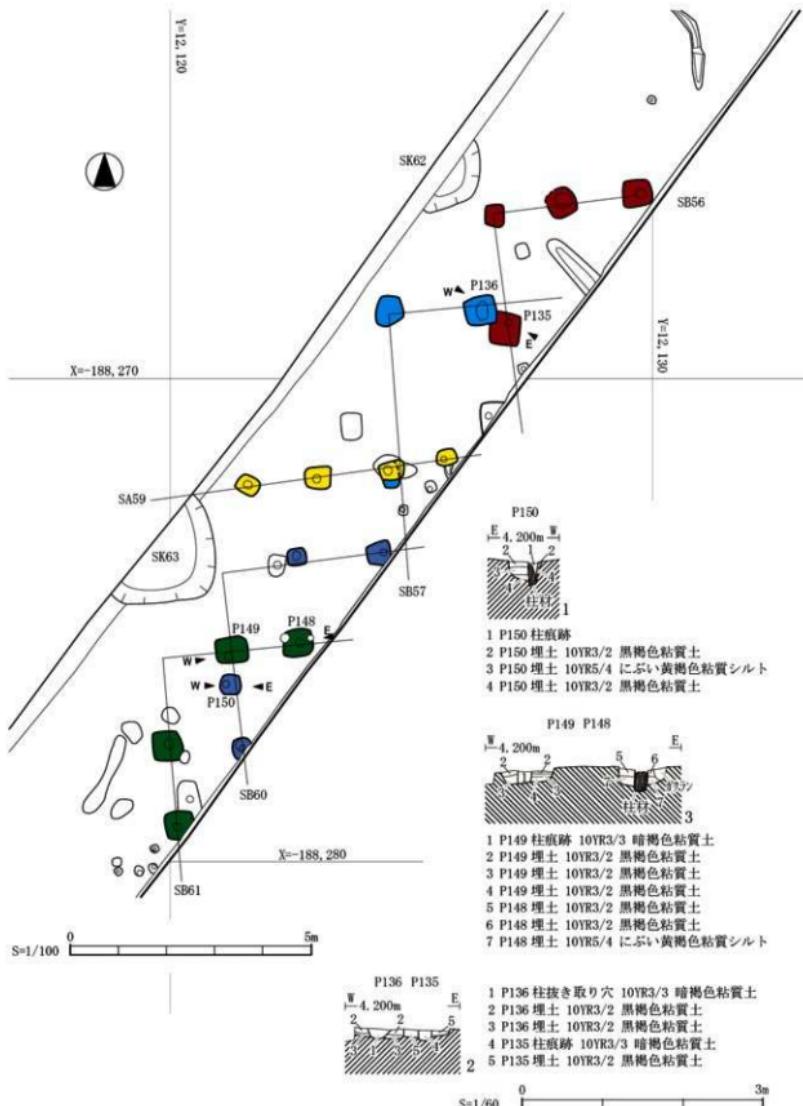
第7図 SE50 井戸跡平面・断面図



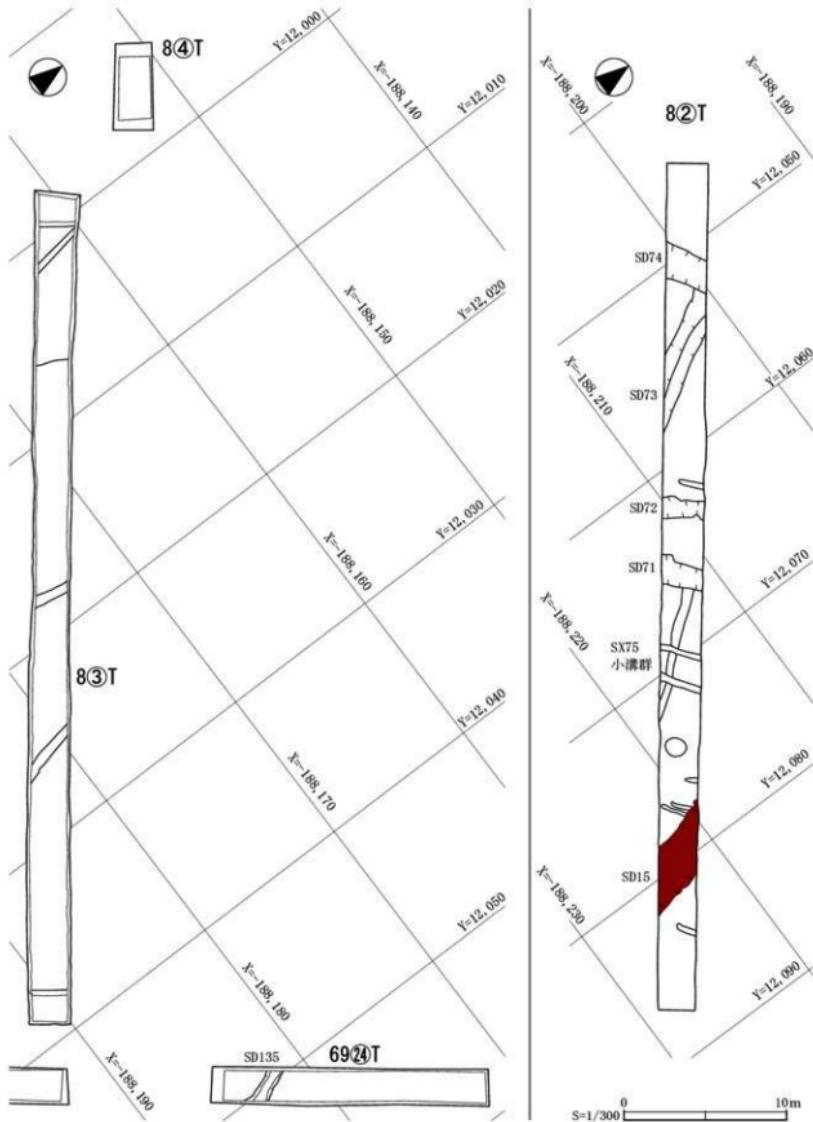
第8図 SE51・52 井戸跡、SX236 平面・断面図



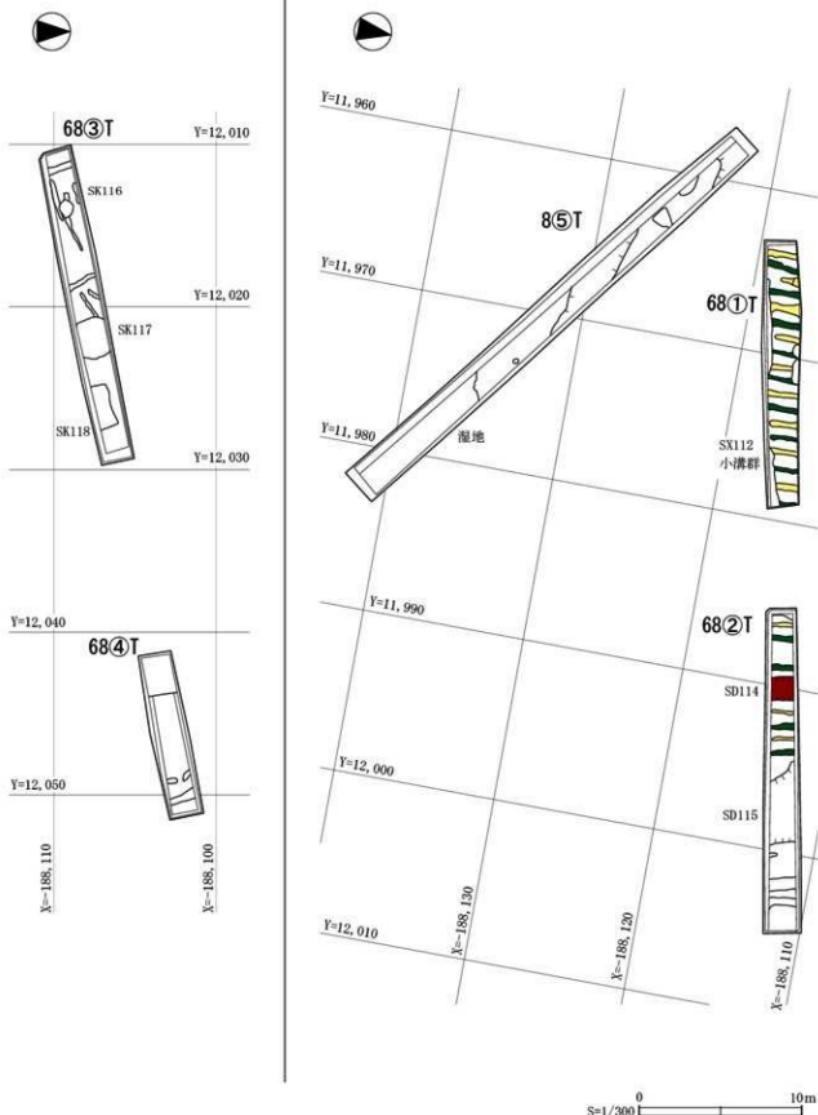
第9図 7③・91③T、8①T平面図



第10図 握立柱建物跡平面・断面図



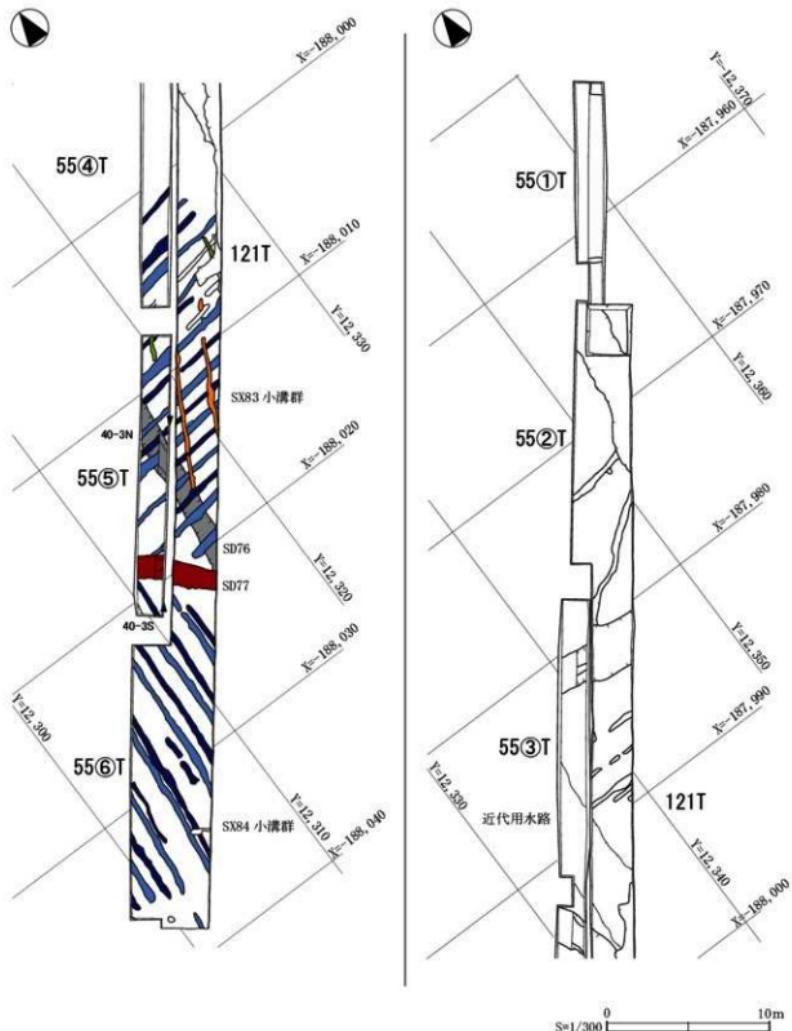
第 11 図 8②～④T・69④T 平面図



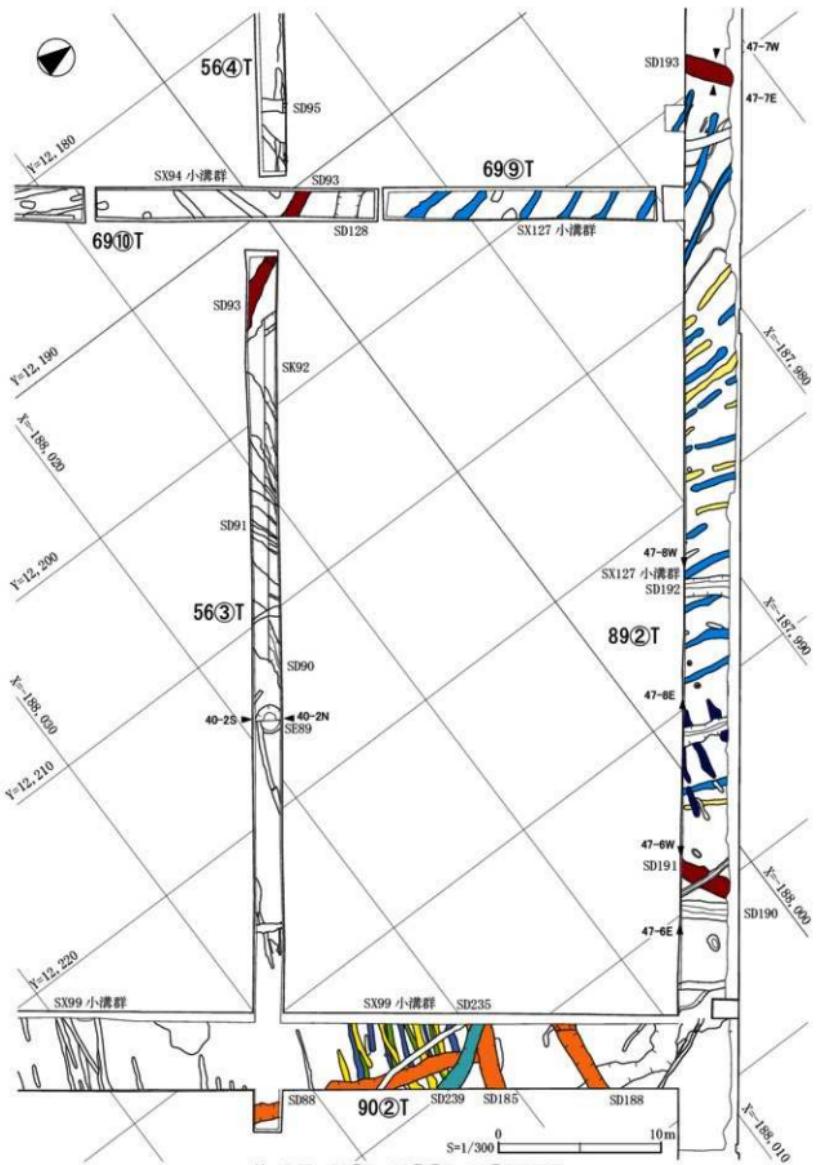
第12図 8⑤T、68①~④T平面図



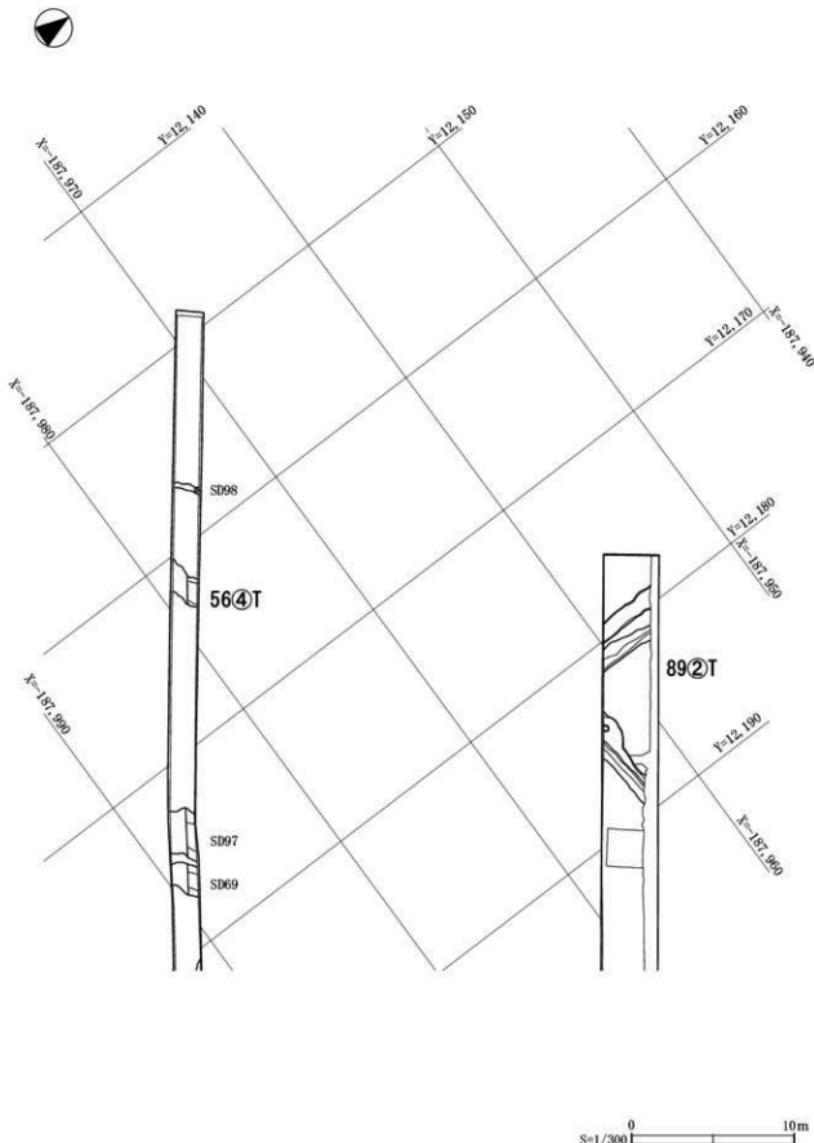
第13図 8⑥⑦T、61①②T、67①T平面図



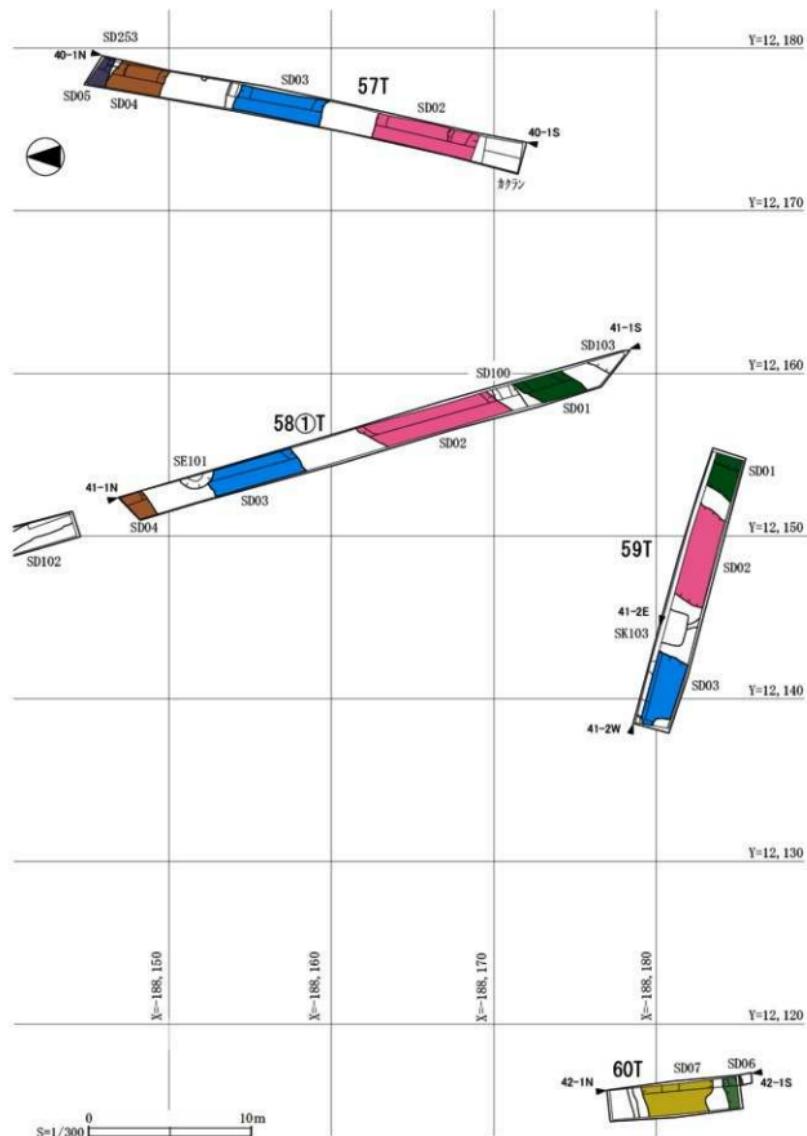
第 14 図 55①~⑥T、121T 平面図



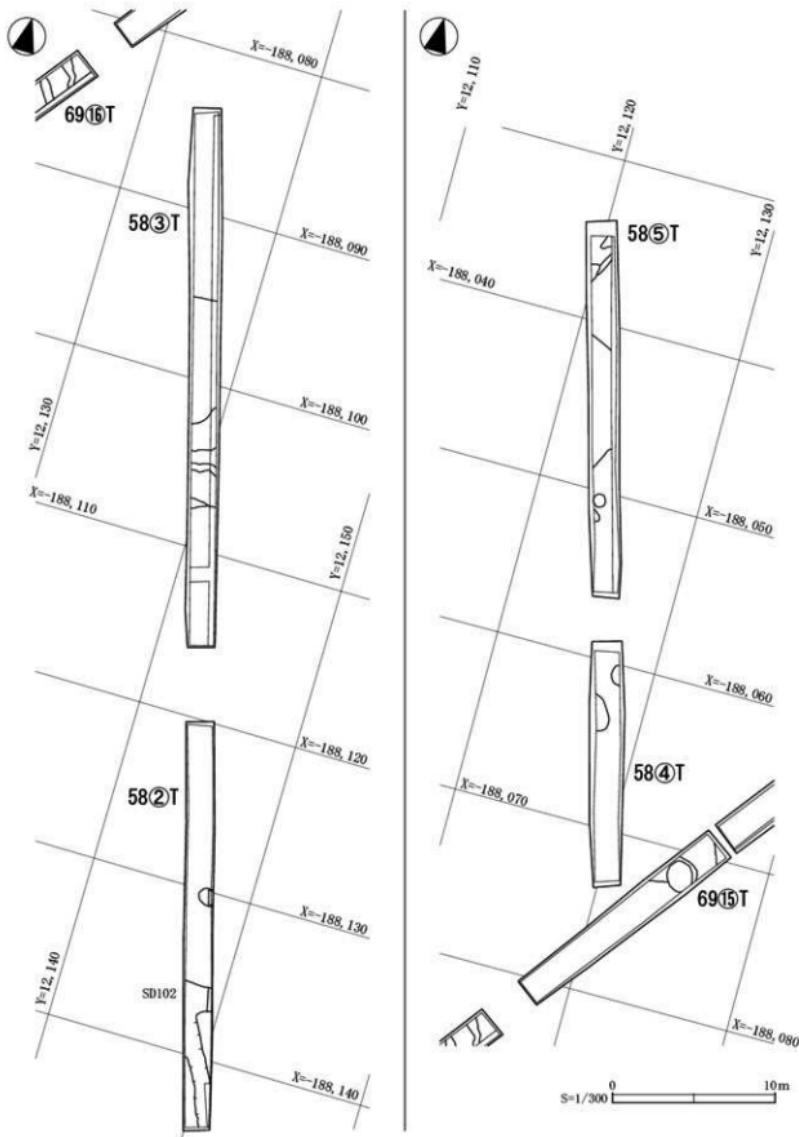
第15図 56④T、69⑩T、89②T平面図



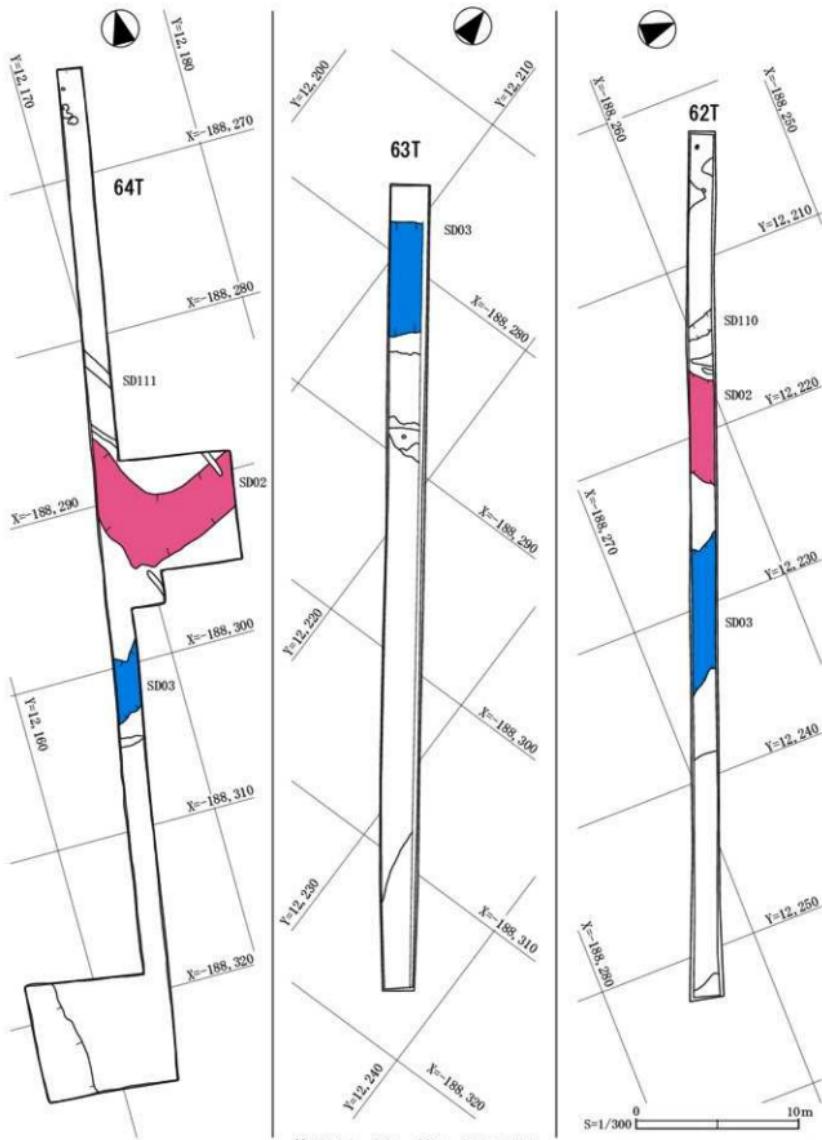
第16図 56④T、89②T平面図



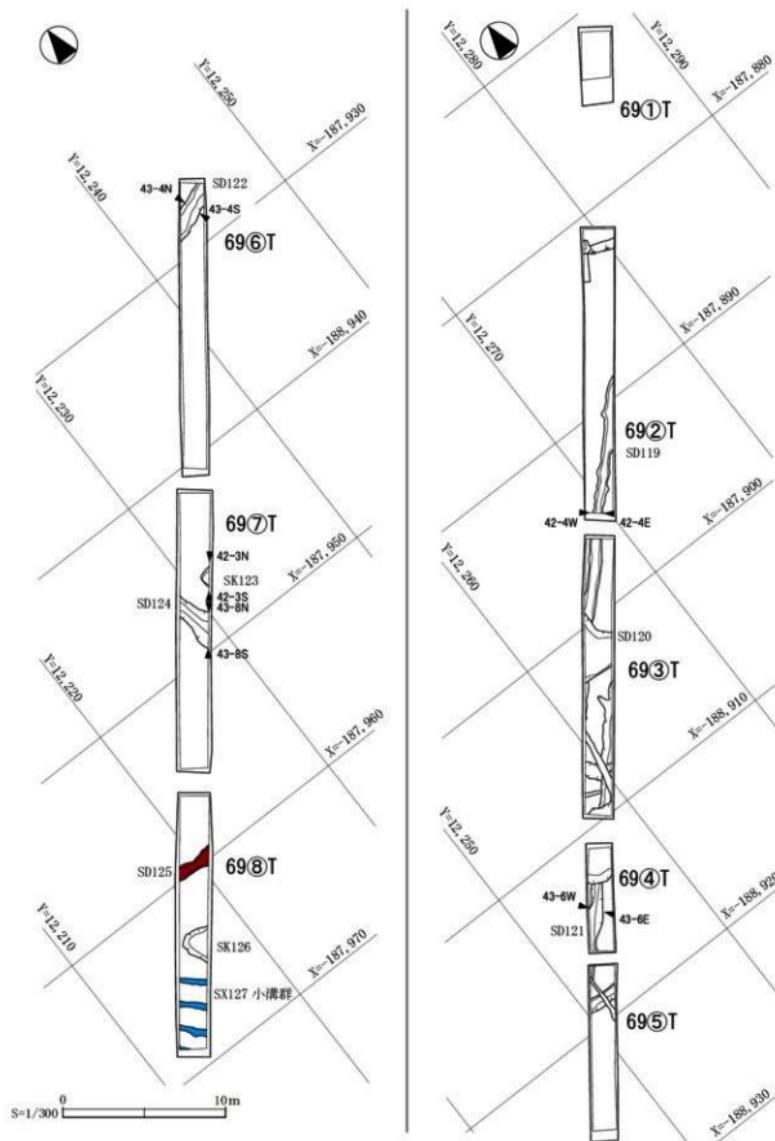
第17図 57T、58①T、59T、60T平面図



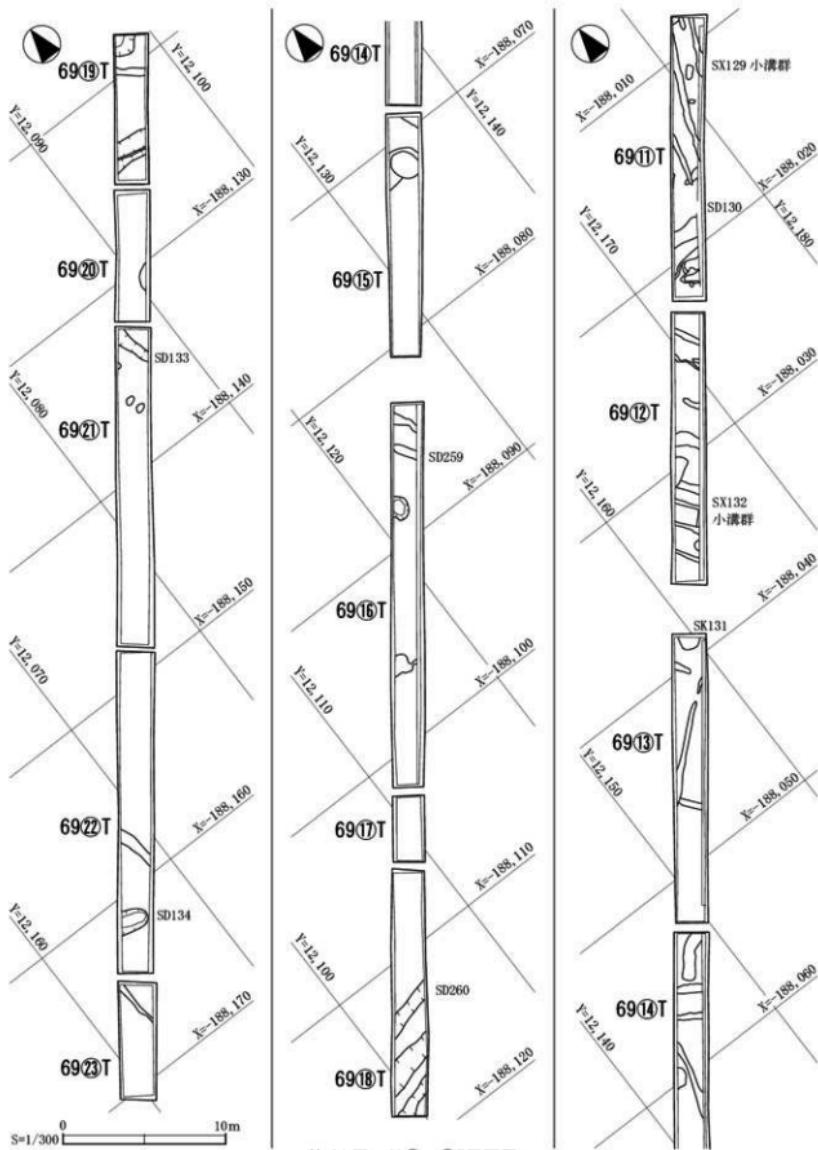
第18図 58②~5T、69⑯T平面図



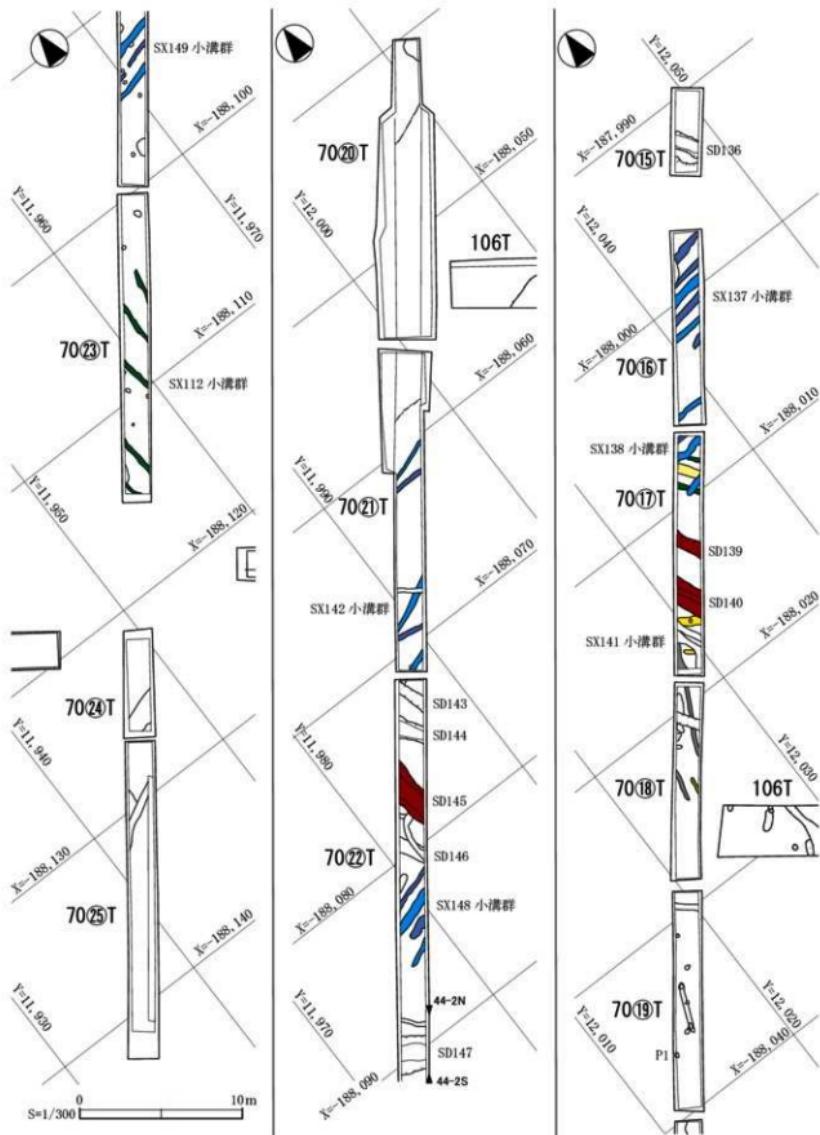
第19図 62T、63T、64T平面図



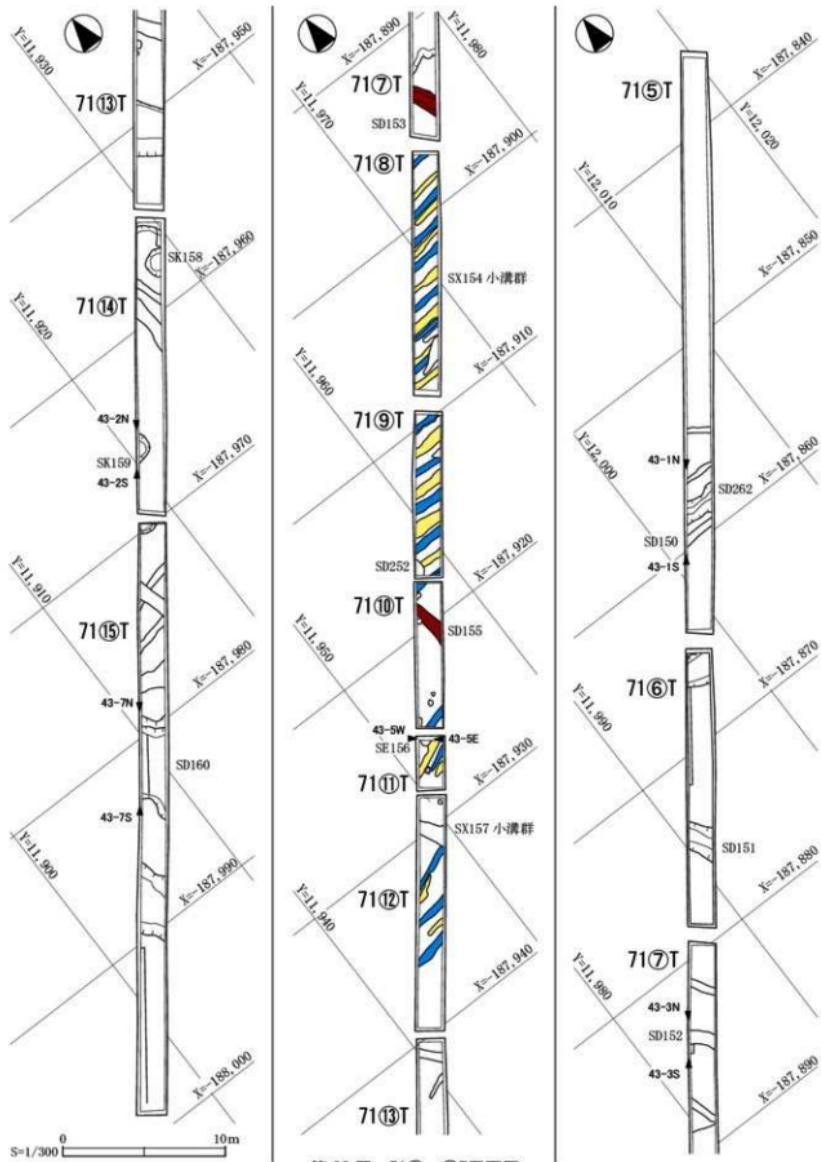
第20図 69①～⑧T平面図



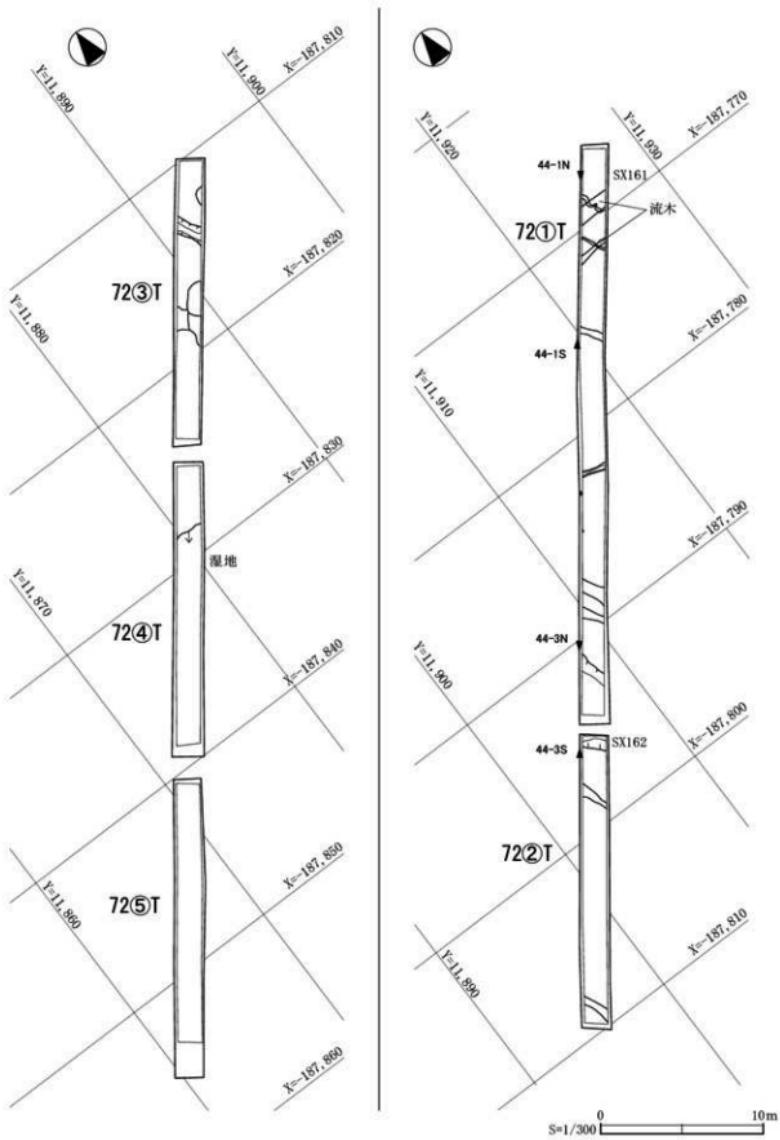
第21図 69㉔T～㉛T平面図



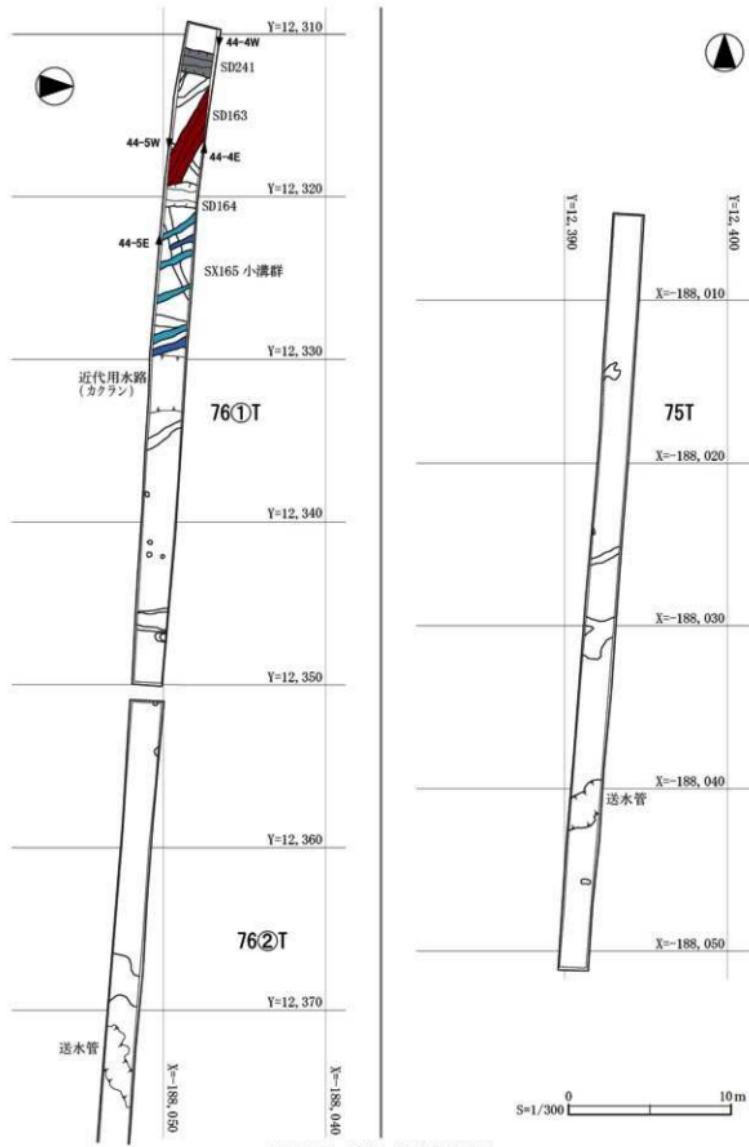
第22図 70⑯~⑱T平面図



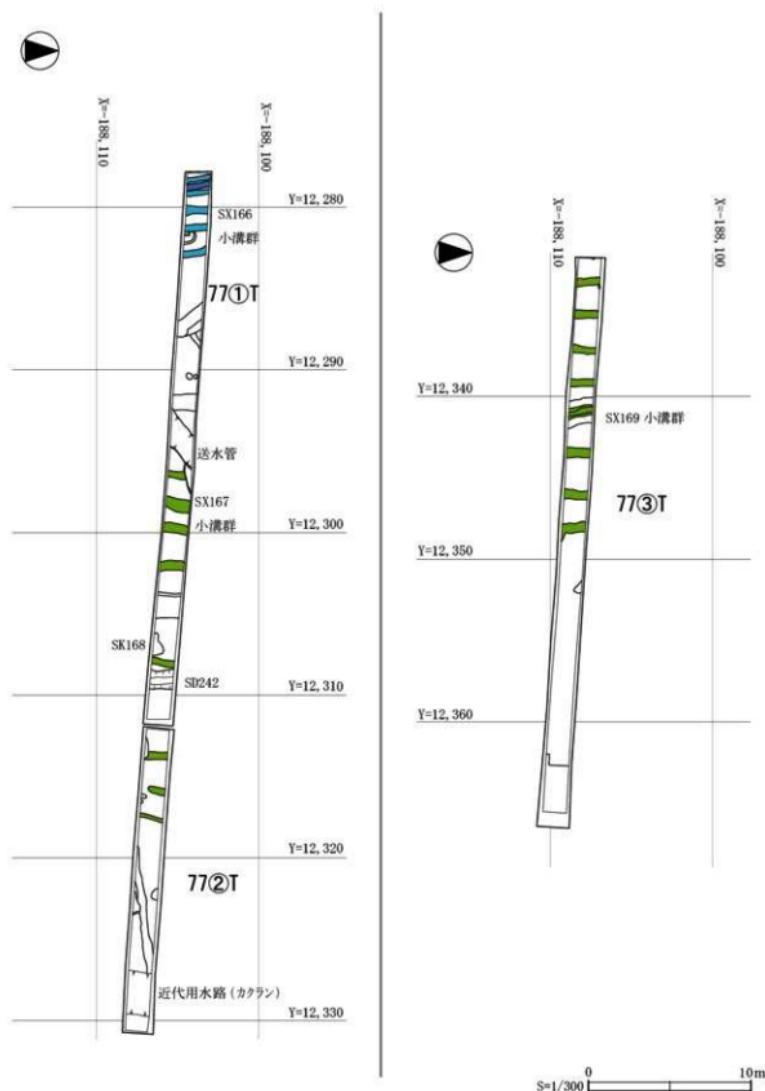
第 23 図 71⑤~⑯T 平面図



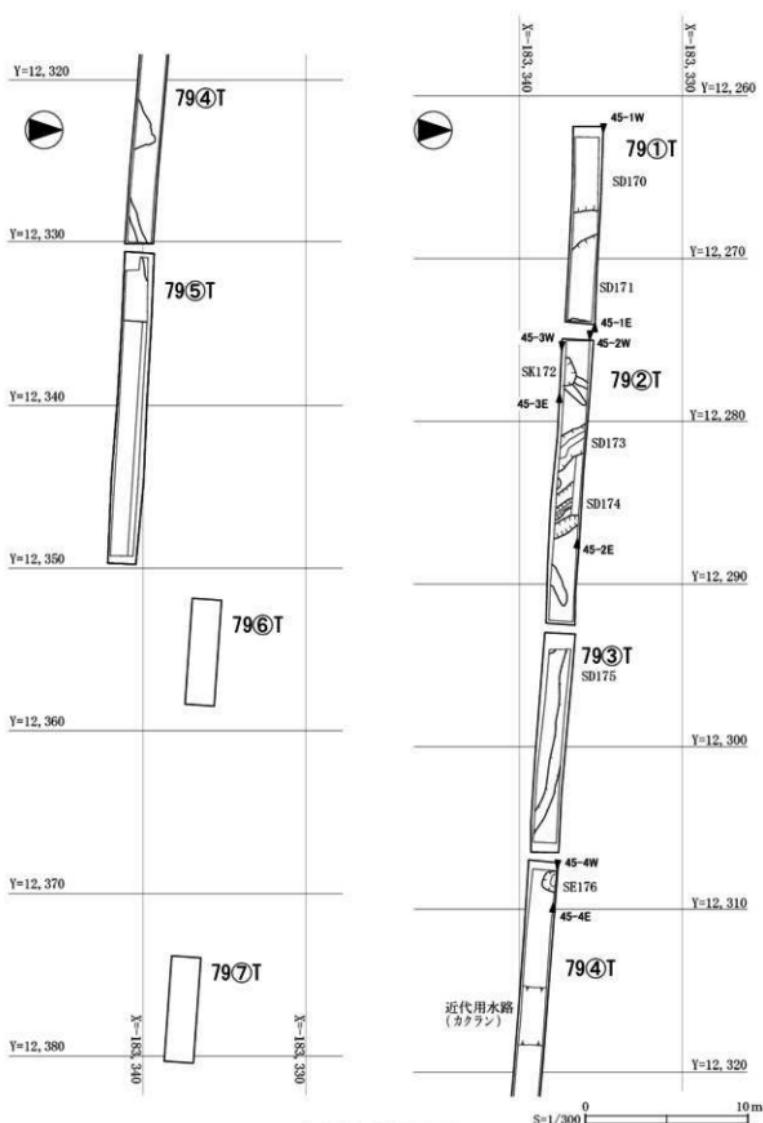
第24図 72①～⑤T平面図



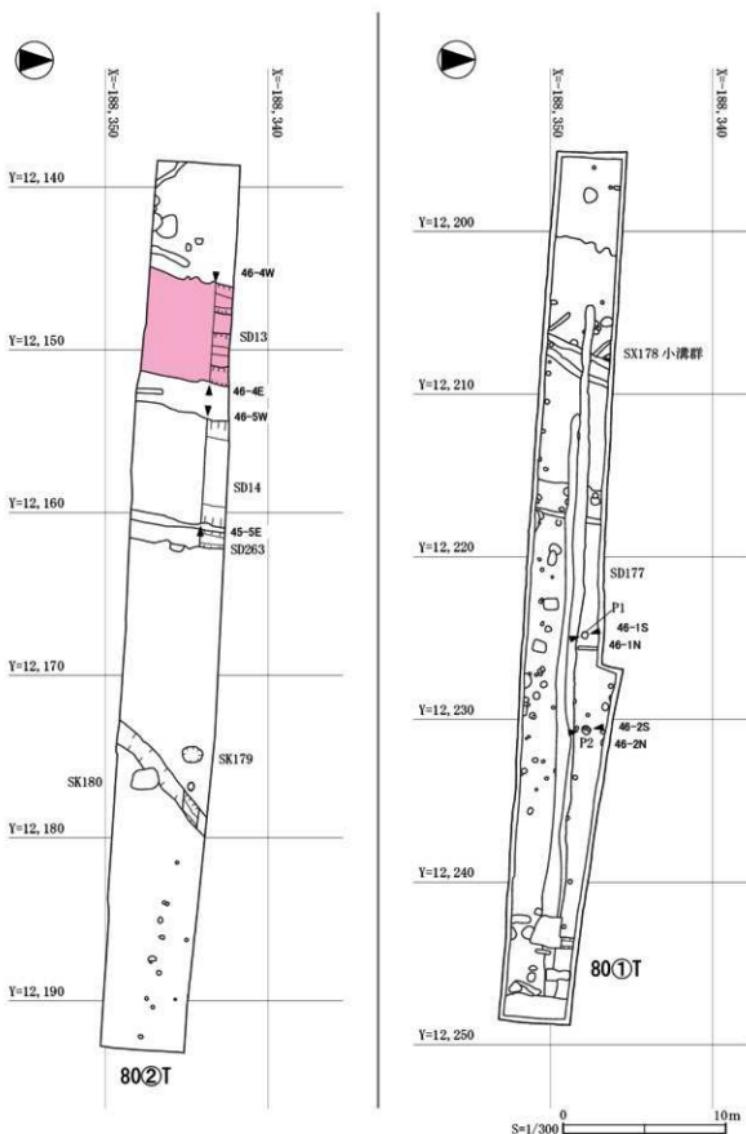
第25図 75T、76①T平面図



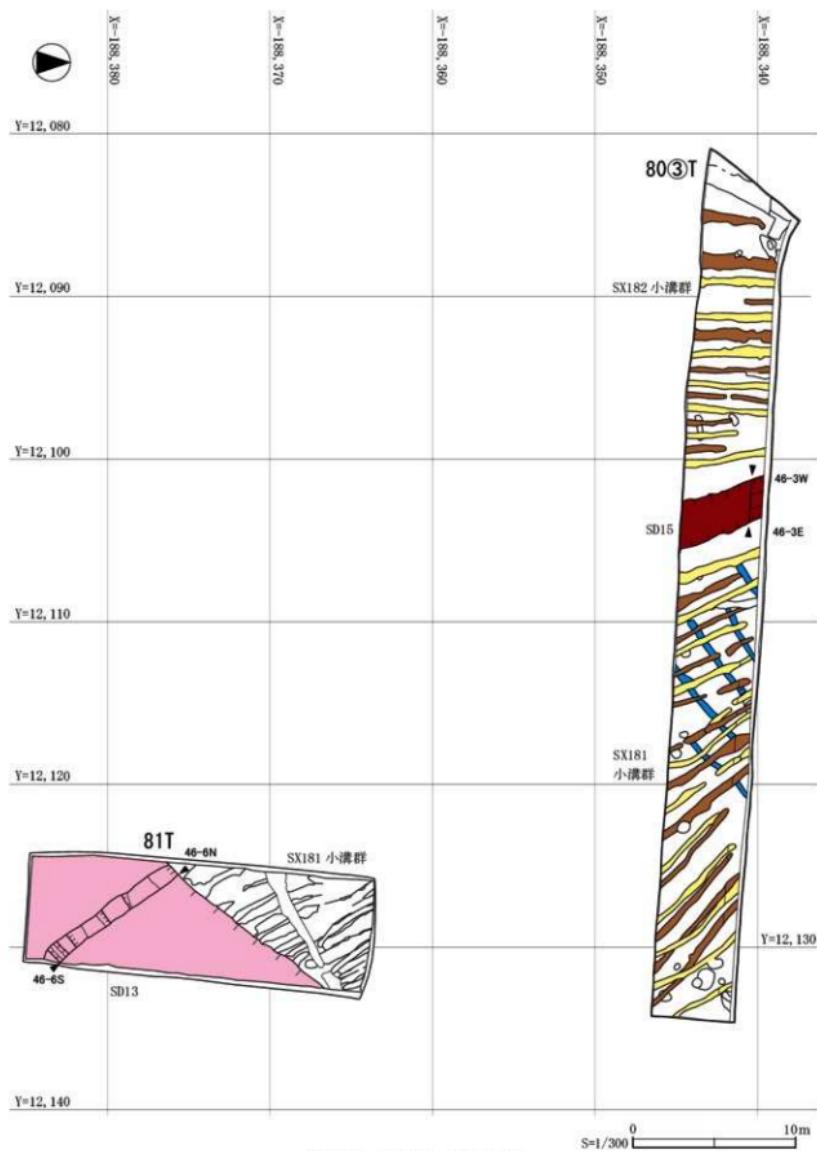
第 26 図 77①～③T 平面図



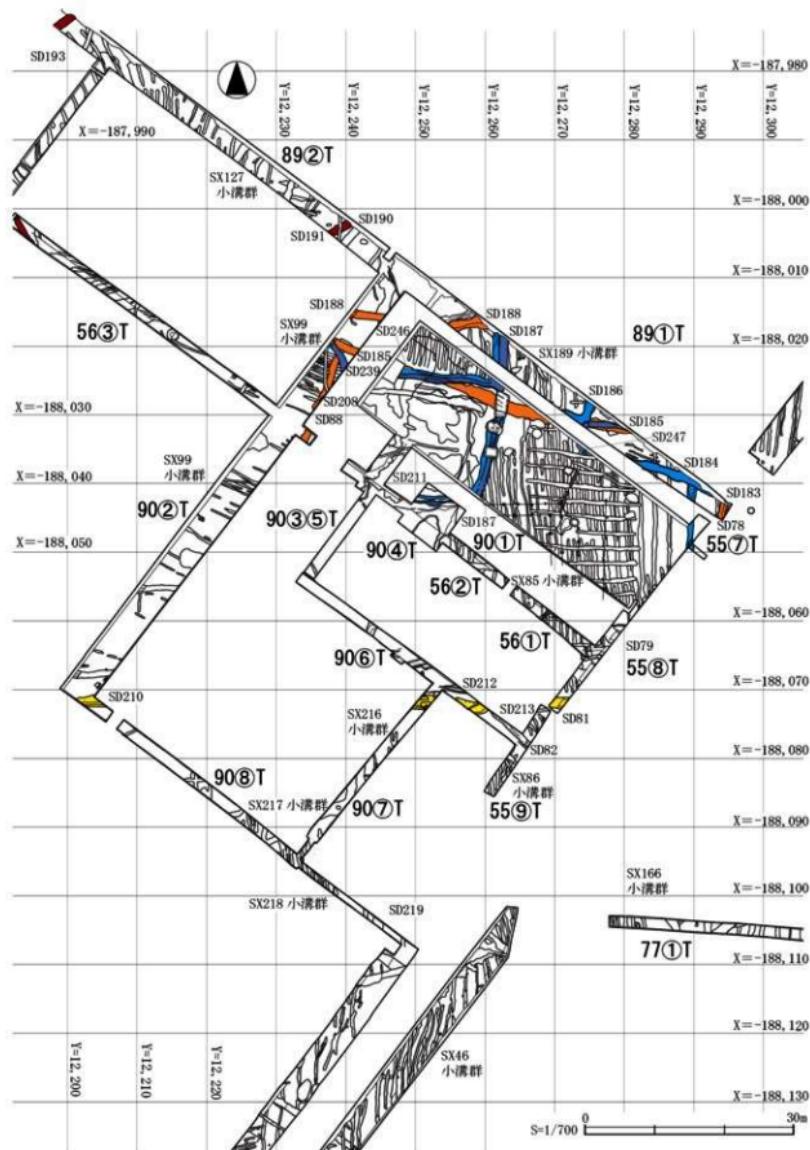
第27図 79T平面図



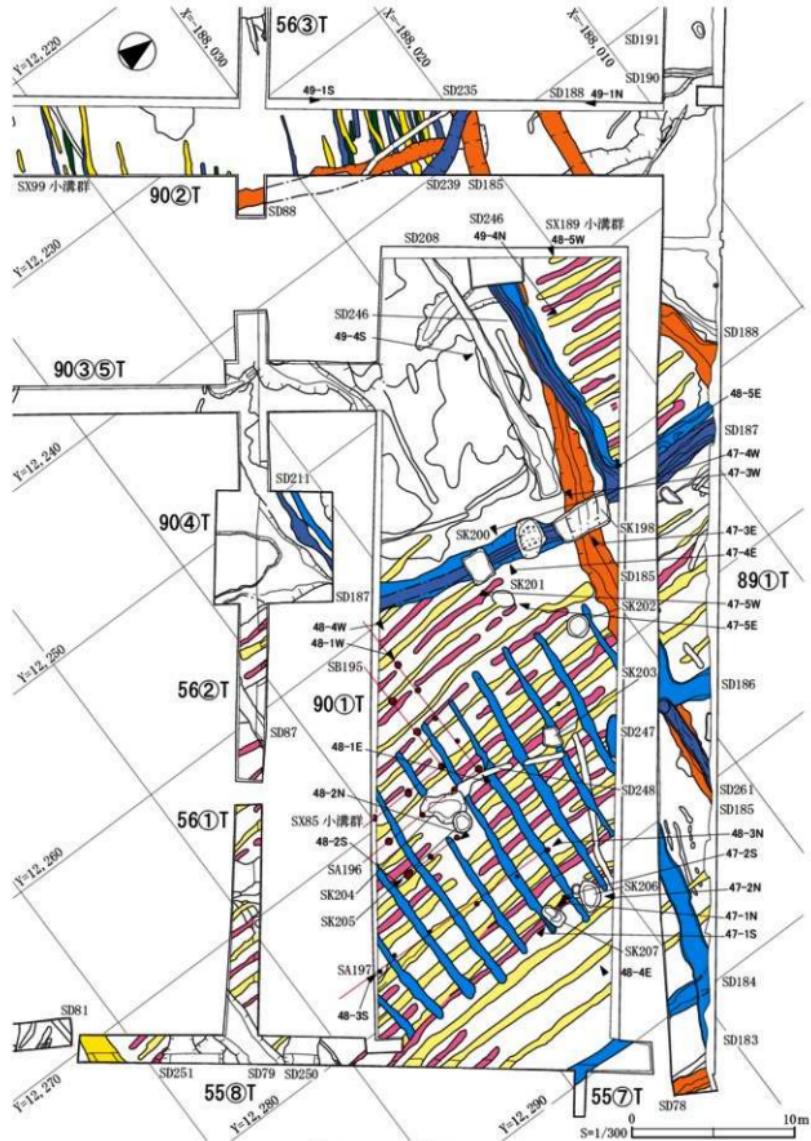
第28図 80①・②T平面図



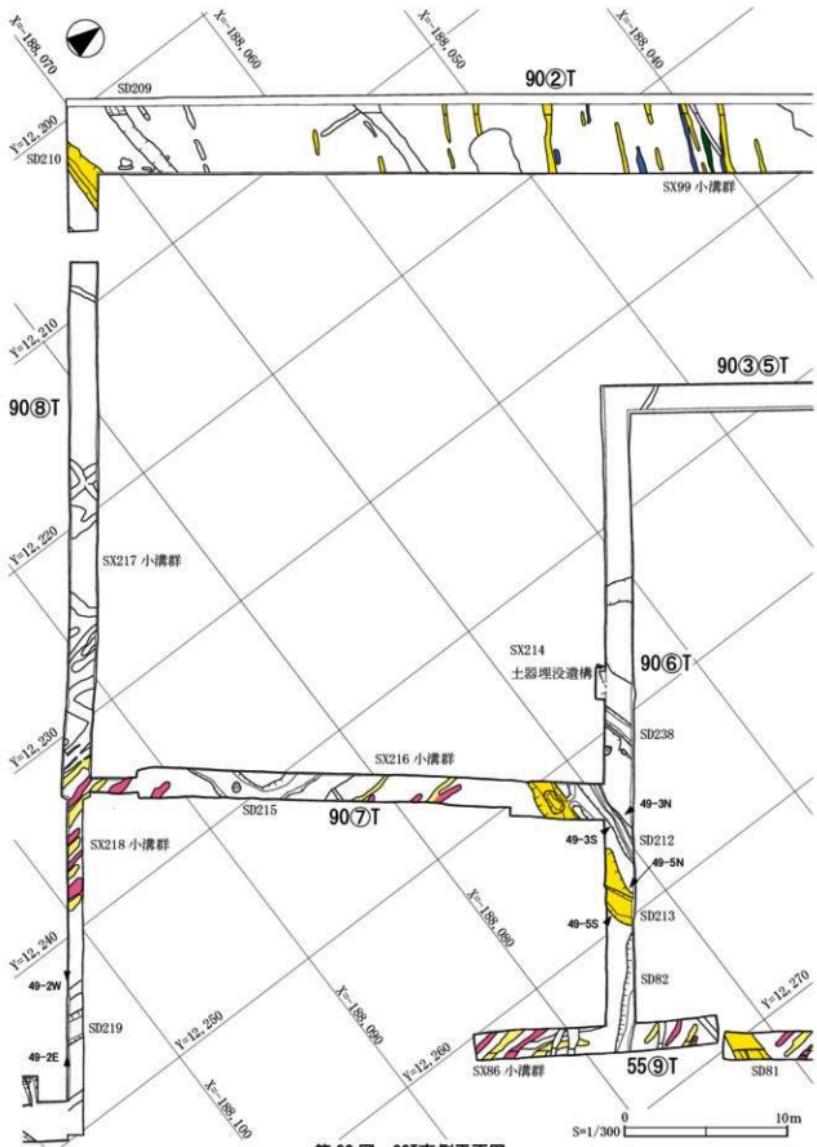
第29図 80③T、81T平面図



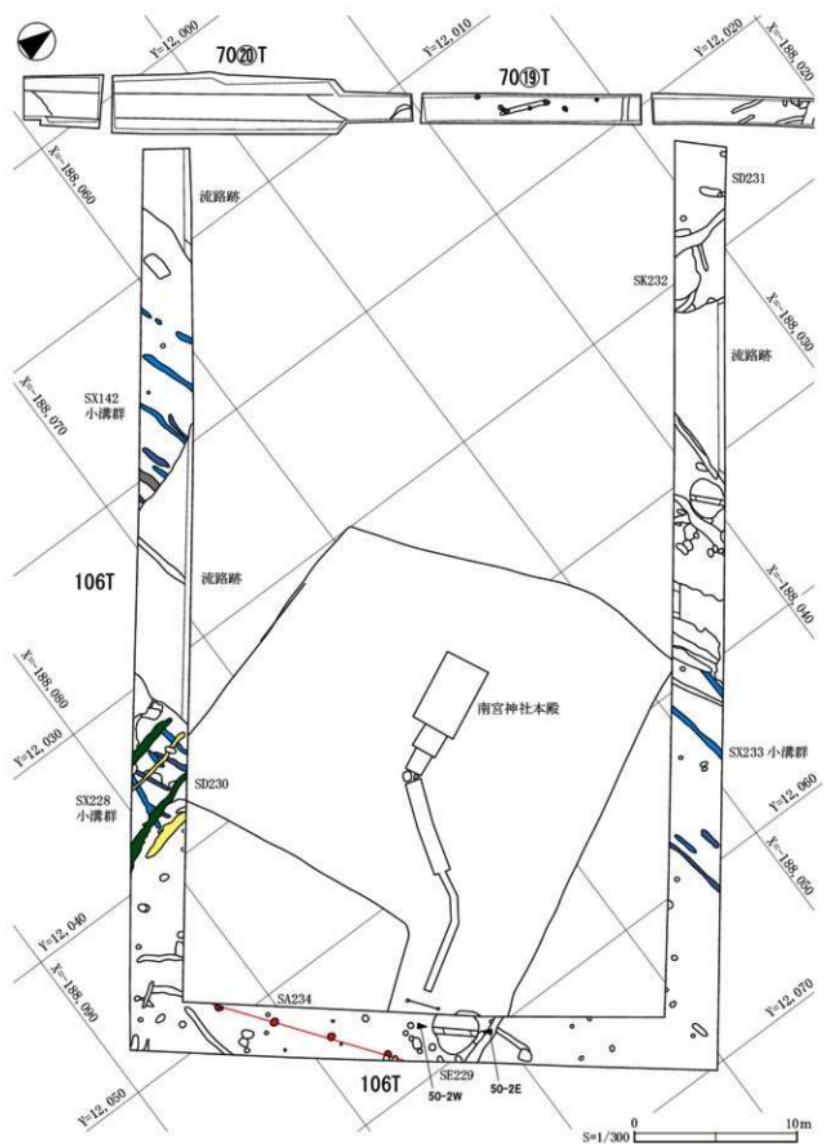
第30図 90T全体図



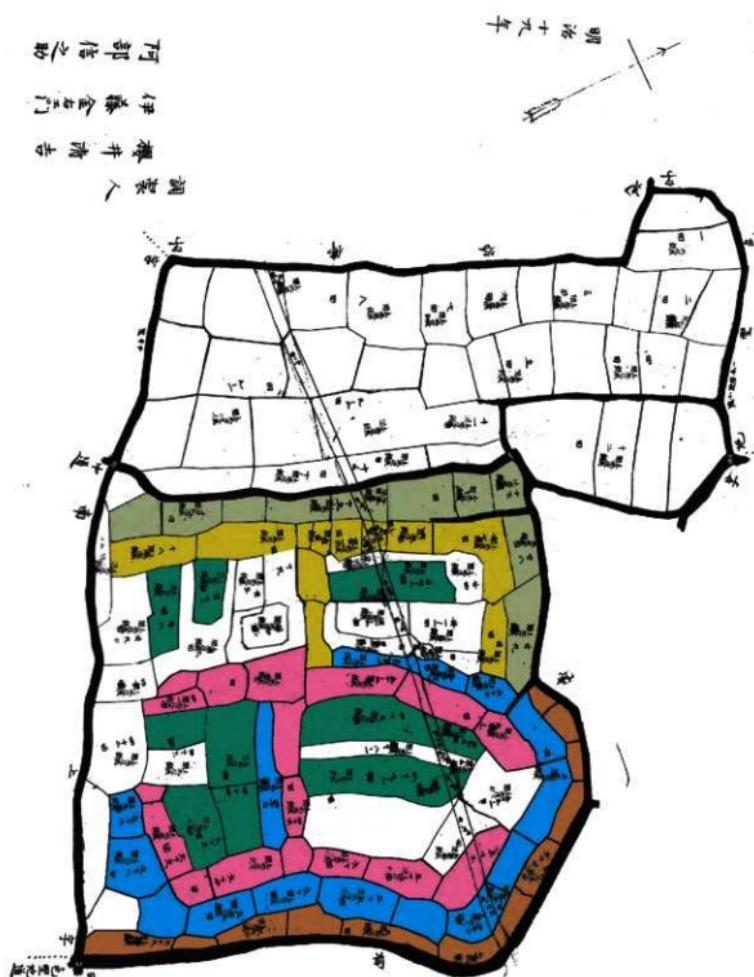
第31図 90T北側平面図



第32図 90T南側平面図

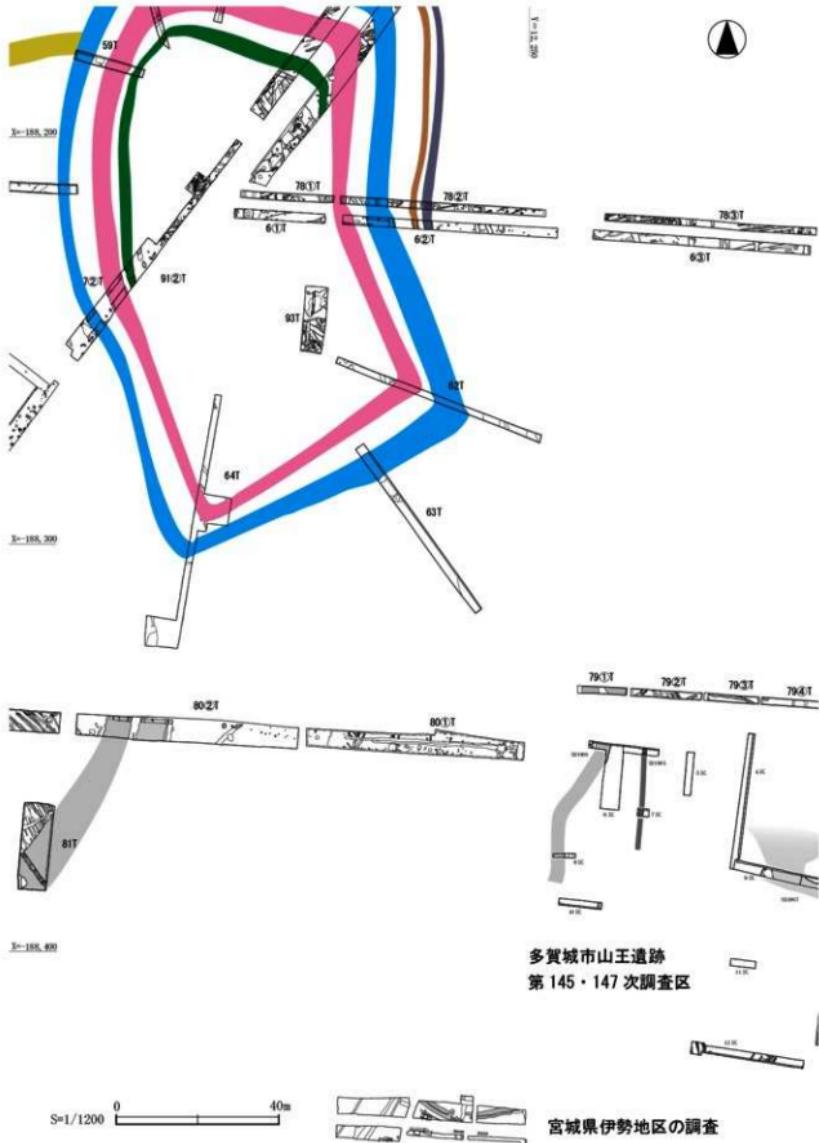


第33図 7019T、106T平面図

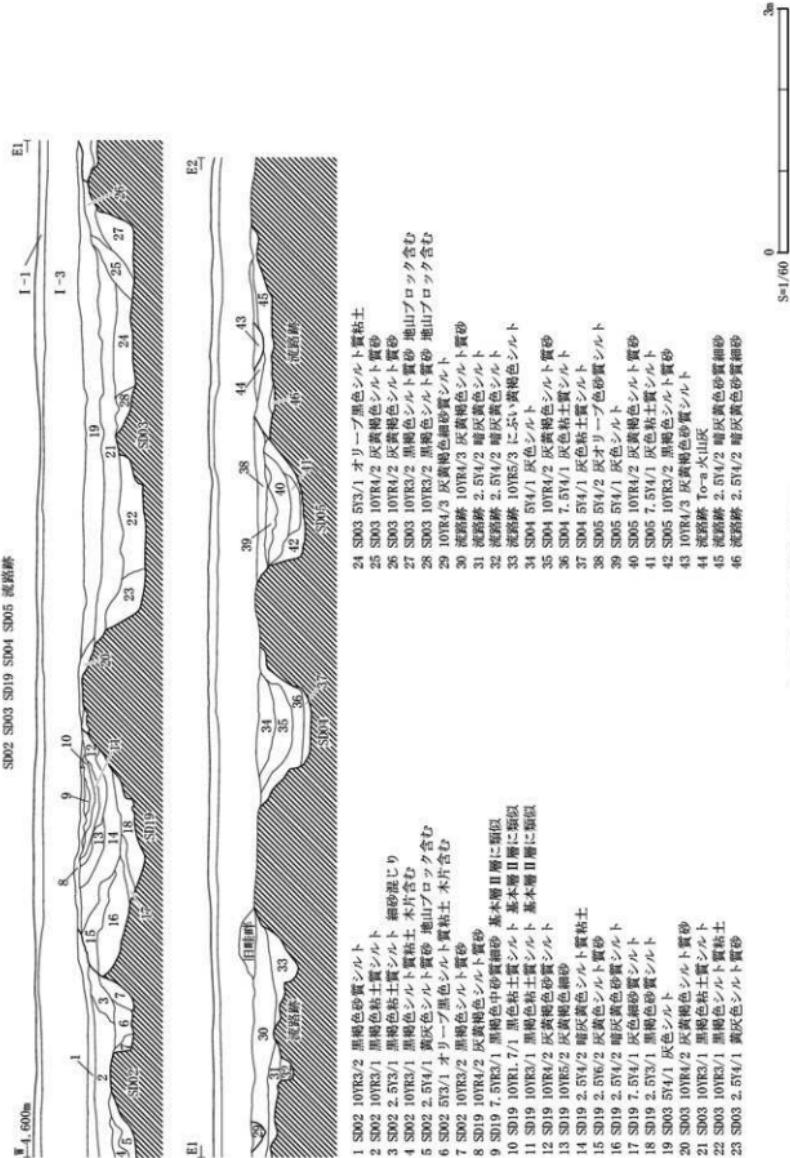


明治期の内館跡地籍図

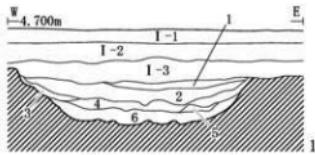
第34図 明治期の内館跡地籍図



第35図 伊勢地区的屋敷跡

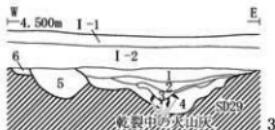


第36図 78②T北壁断面図



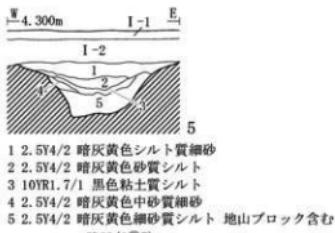
- 1 2.5Y2/1 黒色細レキ混り砂質シルト
2 10YR1.7/1 黒色細レキ混りシルト
3 10YR3/2 黑褐色シルト質砂
4 10YR3/1 黑褐色砂質シルト
5 10YR3/1 黑褐色砂質シルト
6 2.5Y3/1 黑褐色砂質シルト

SD11(78①T)



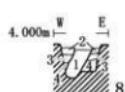
- 1 SD29 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト
2 SD29 2.5Y4/1 黄褐色シルト
3 SD29 To-a 灰色シルト
4 SD29 2.5Y4/2 灰黄褐色粘土質シルト
5 SD167 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト
6 SD168 2.5Y4/2 暗灰黄色粘土質シルト

SD29(6③T)



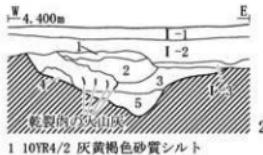
- 1 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト質細砂
2 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト
3 10YR1.7/1 黑色粘土質シルト
4 2.5Y4/2 暗灰黄色中砂質細砂
5 2.5Y4/2 暗灰黄色細砂質シルト 地山ブロック含む

SD22(6③T)



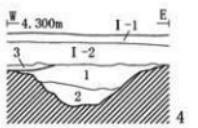
- 1 柱痕跡 2.5Y4/1 黄灰色粘土質シルト
2 振方埋土 2.5Y4/2 暗黄灰色砂質シルト 地山ブロック含む
3 振方埋土 2.5Y4/2 暗黄灰色粘土質シルト 地山ブロック含む
4 振方埋土 2.5Y4/2 暗黄灰色砂質シルト 地山ブロック含む

SA25 P22(78②T)



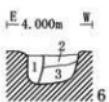
- 1 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト
2 10YR4/2 灰黄褐色シルト質砂
3 2.5Y4/2 灰黄褐色粘土質シルト 細砂混じり
4 2.5Y6/2 黄灰色砂質シルト質砂
5 2.5Y4/2 暗灰黄色細砂質シルト

SD30(6③T)



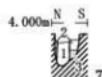
- 1 2.5Y4/2 暗灰黄色細砂質シルト
2 10YR5/2 灰黄褐色細砂質シルト
3 2.5Y4/2 暗灰黄色粘土質シルト

SD31(6③T)



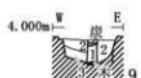
- 1 柱痕跡 2.5Y4/2 暗灰黄色粘土質シルト
2 振方埋土 2.5Y4/2 暗灰黄色粘土質シルト
3 振方埋土 2.5Y4/2 暗灰黄色粘土質シルト

SA33 P43(78③T)



- 1 柱痕跡 2.5Y4/1 黄灰色粘土質シルト 炭化物粒含む
2 振方埋土 2.5Y4/2 暗黄灰色粘土質シルト
3 振方埋土 2.5Y4/2 暗黄灰色砂質シルト 地山ブロックを多く含む

SB26 P36(78②T)

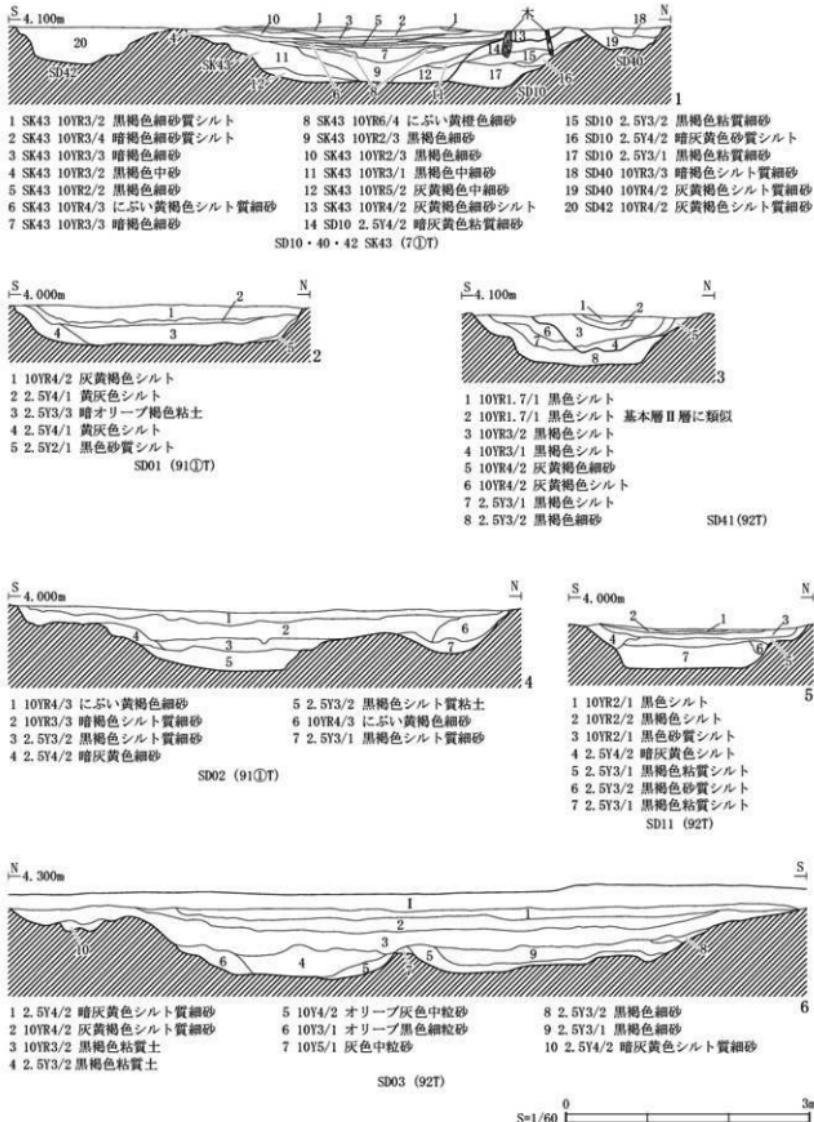


- 1 柱痕跡 2.5Y4/1 黄灰色粘土質シルト 炭化物を多く含む
2 振方埋土 2.5Y4/2 暗黄灰色粘土質シルト 地山ブロック含む
3 振方埋土 2.5Y4/2 暗黄灰色粘土質シルト

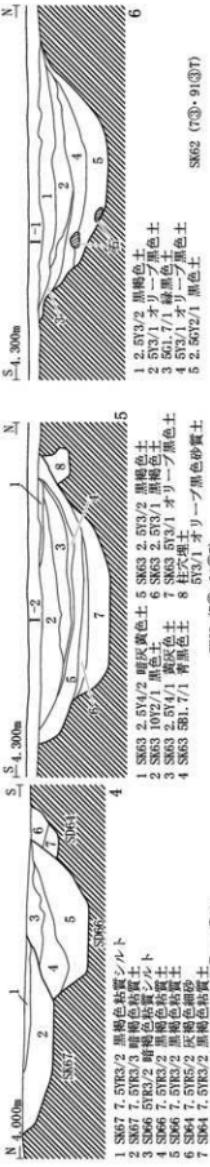
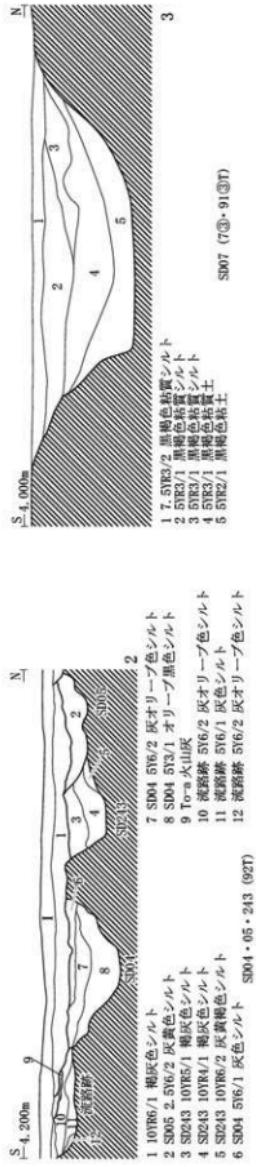
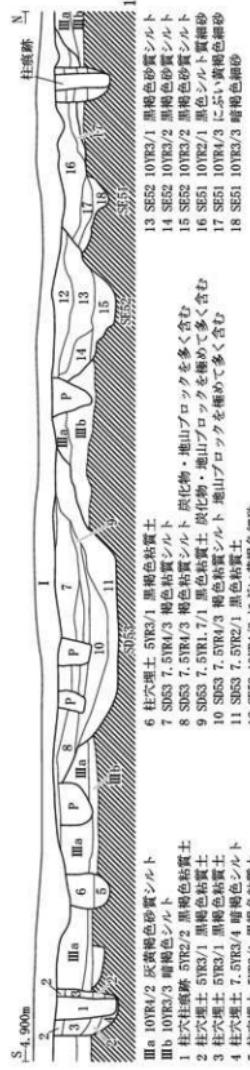
SB24 P16(78②T)

S=1/60 0 3m

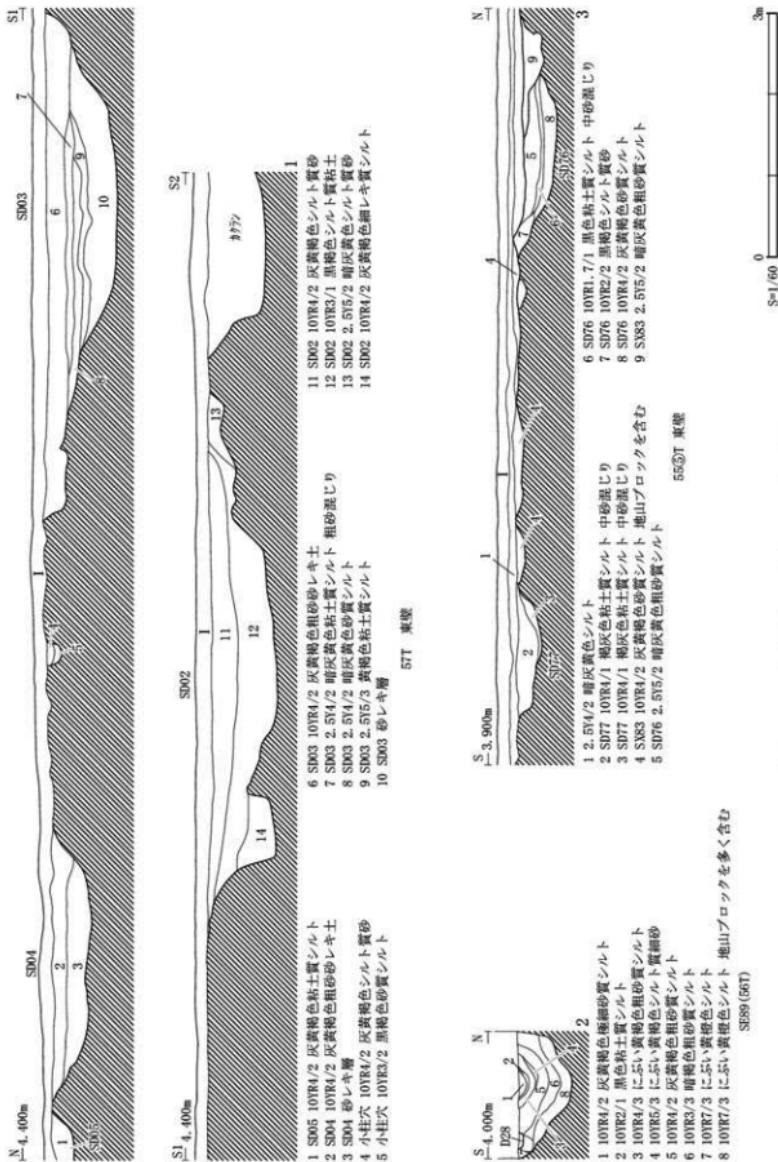
第37図 6・78T断面図



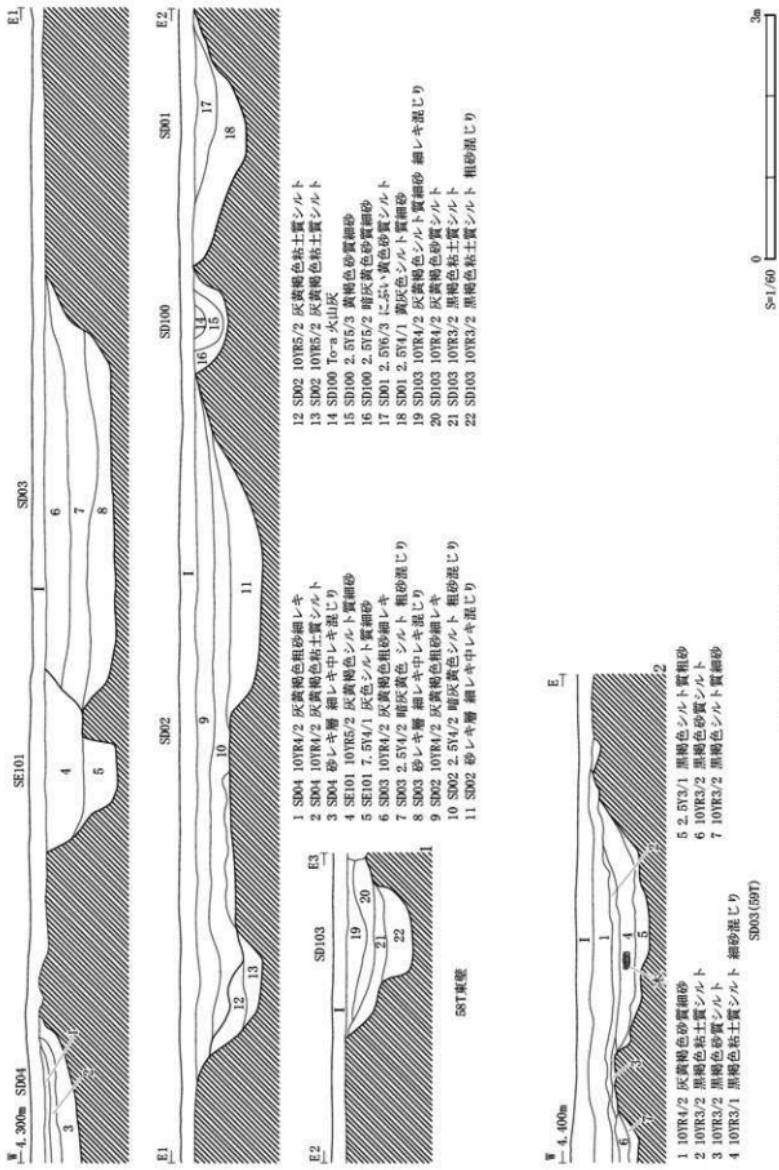
第38図 7①T、91①T、92T断面図



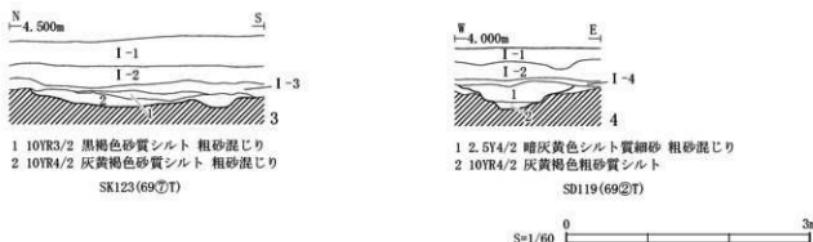
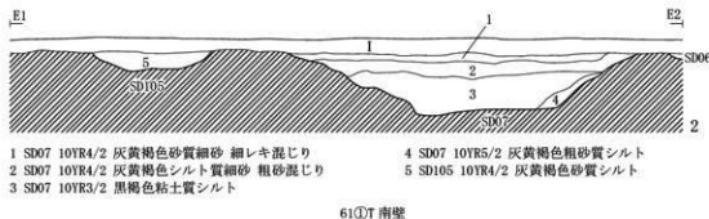
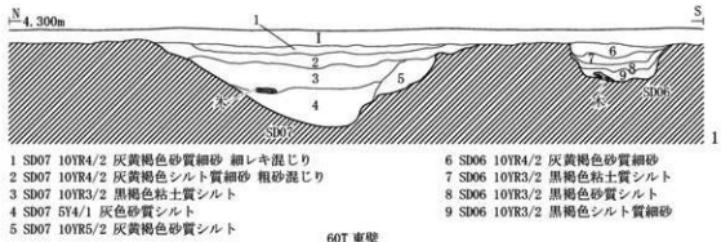
第39図 7②・91②T、7③・91③T、92T断面図



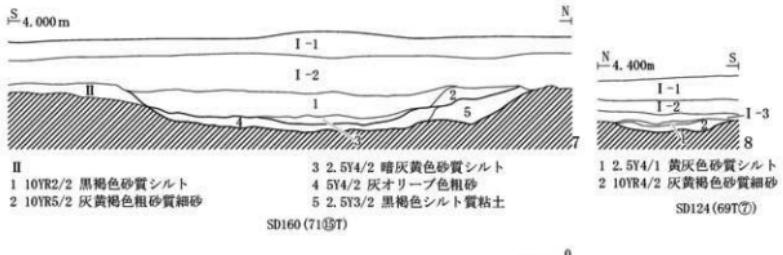
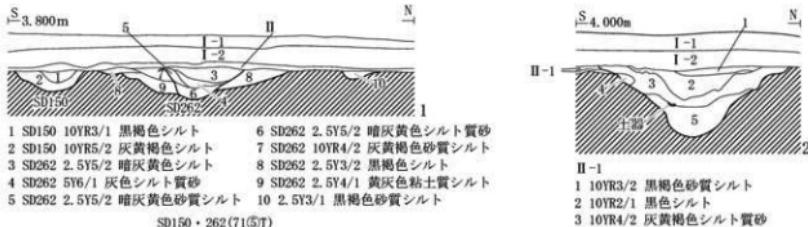
第40図 55⑤T東壁、57T東壁、SE89(56T)断面図



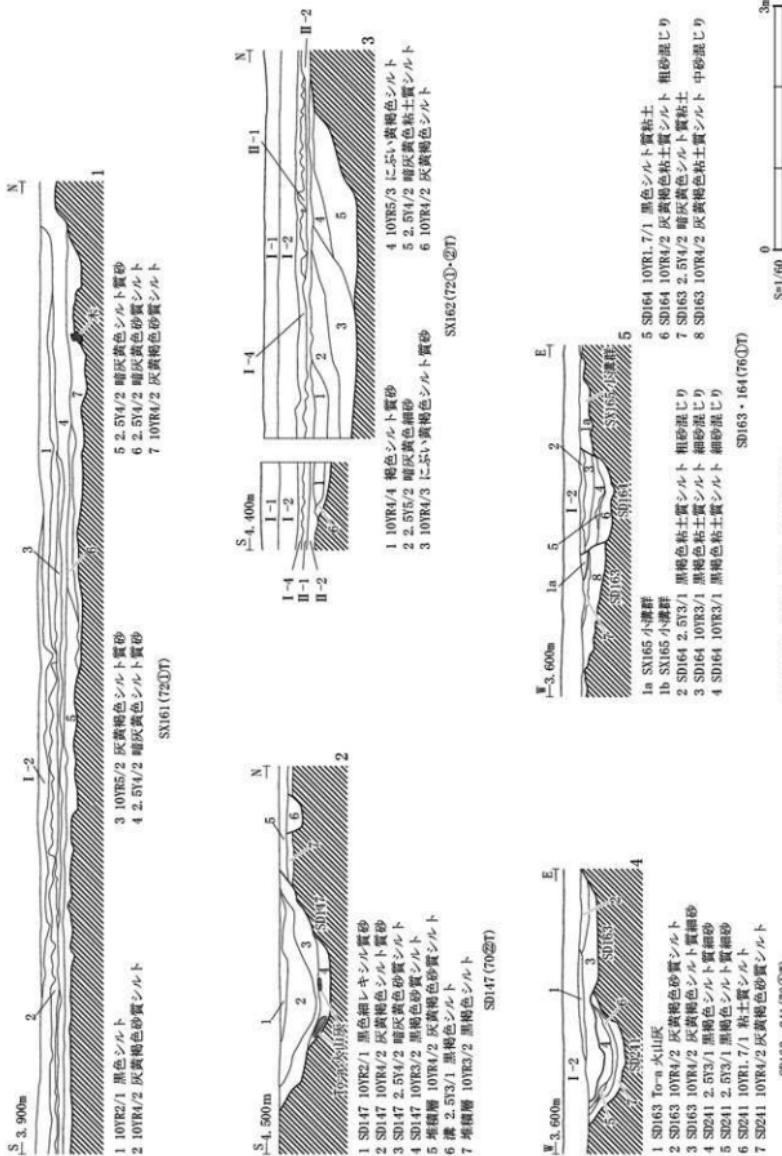
第41図 58T東壁、SD03(59T)断面図



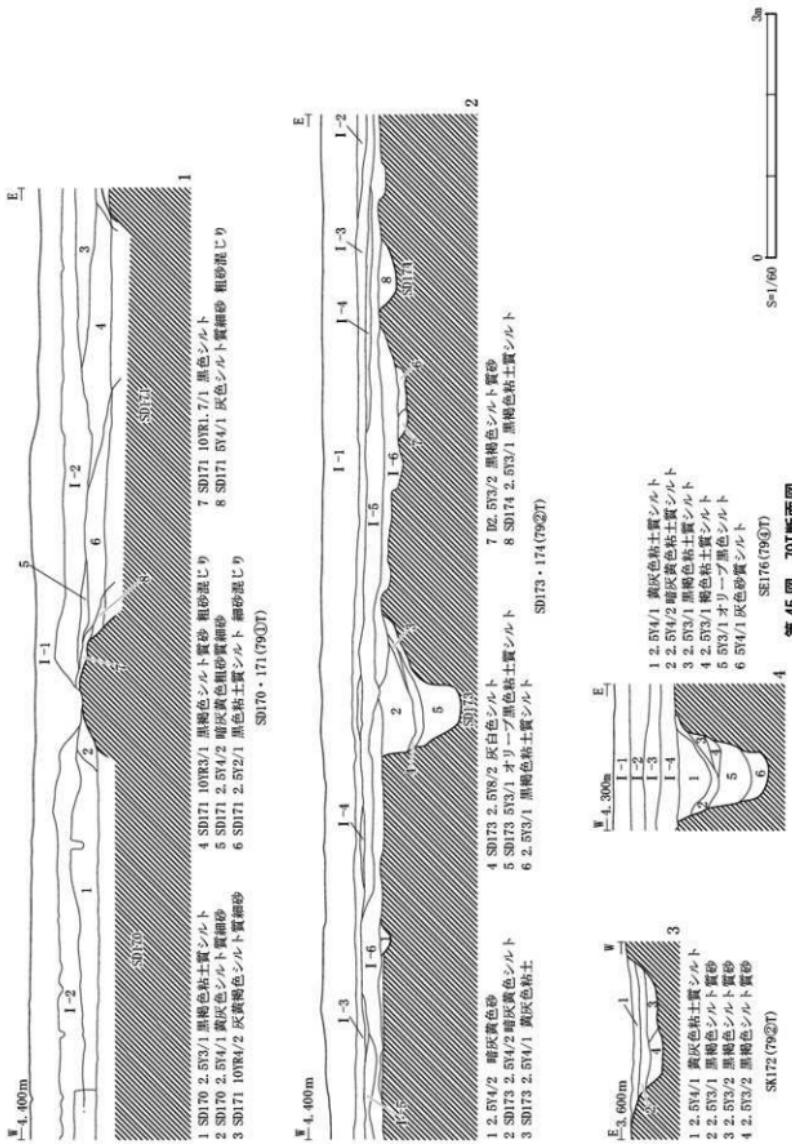
第42図 60T東壁、61①T南壁、69②T断面



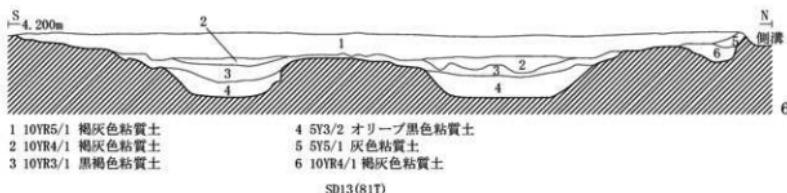
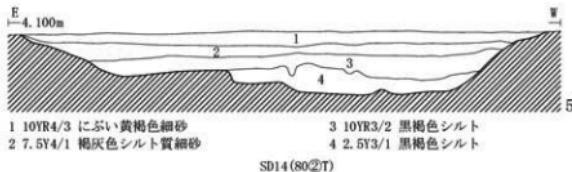
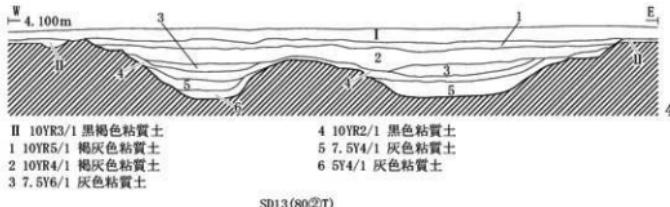
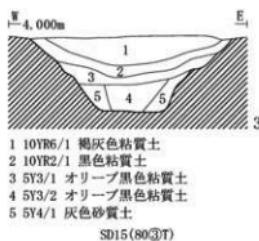
第 43 図 69T、71T 断面図



第44図 701、721、761断面図

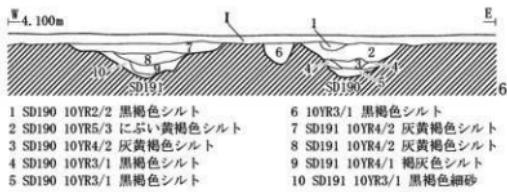
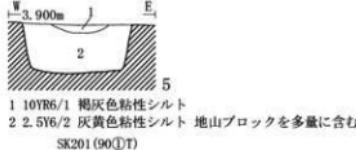


第45圖 79T斷面圖



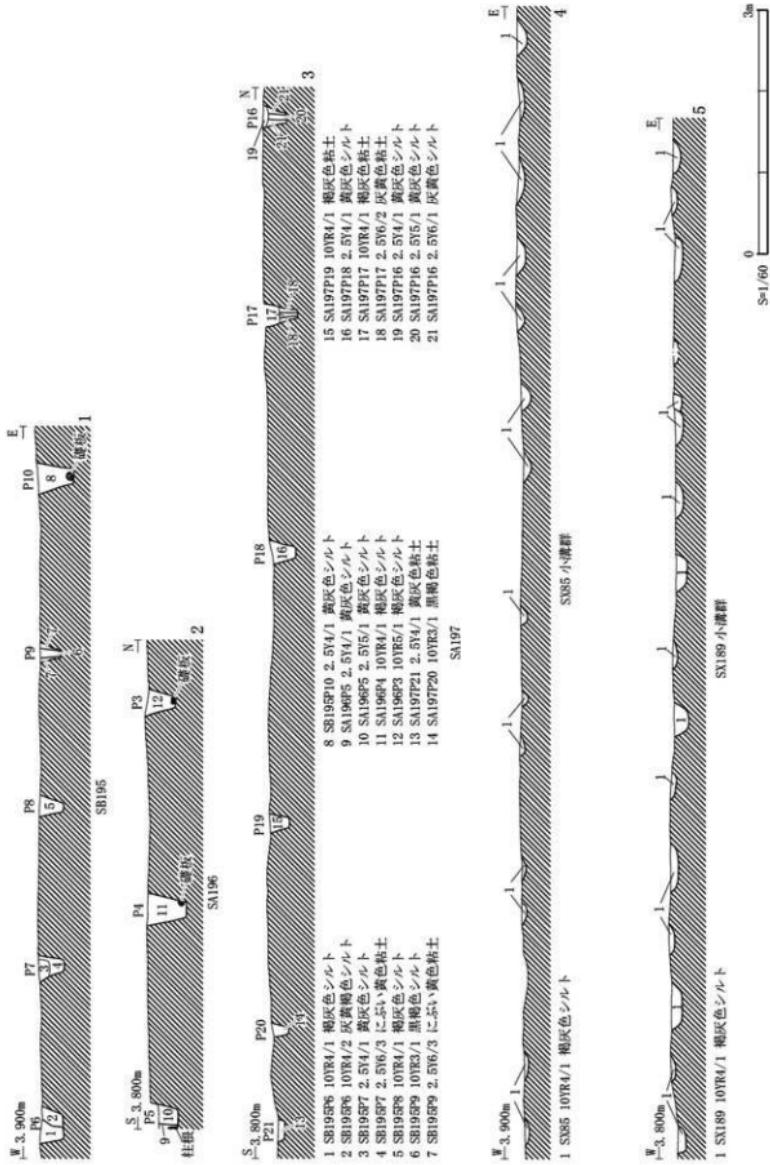
0 3m
S=1/60

第46図 80T、81T断面図

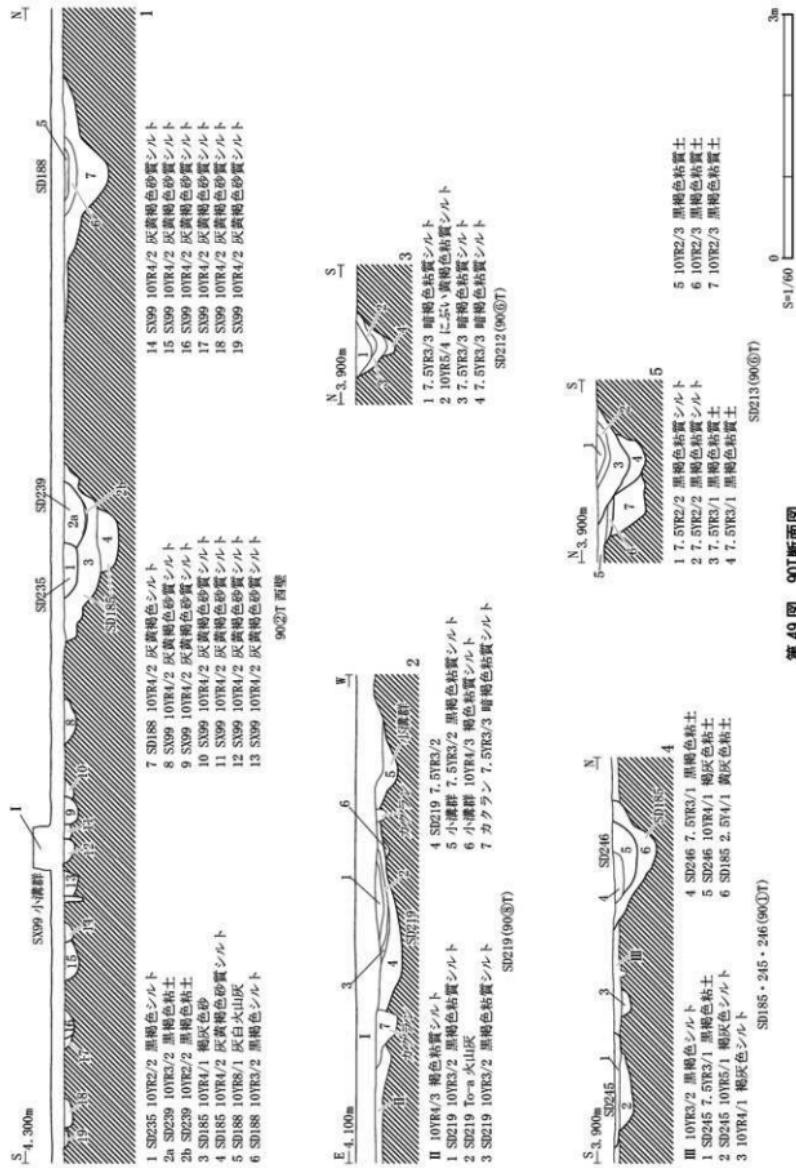


S=1/60 0 3m

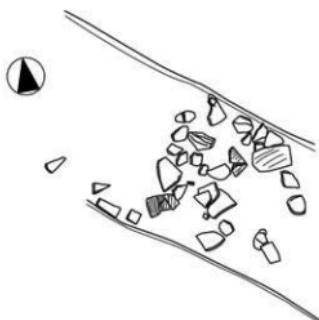
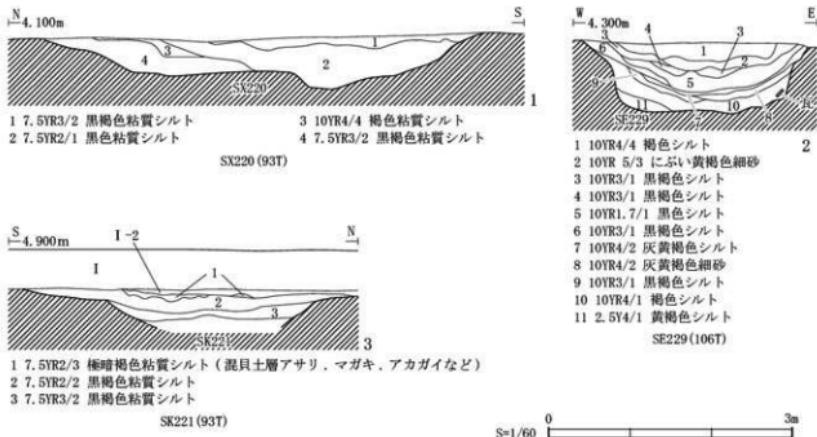
第 47 図 89②T、90①T断面図



第48図 90①断面図



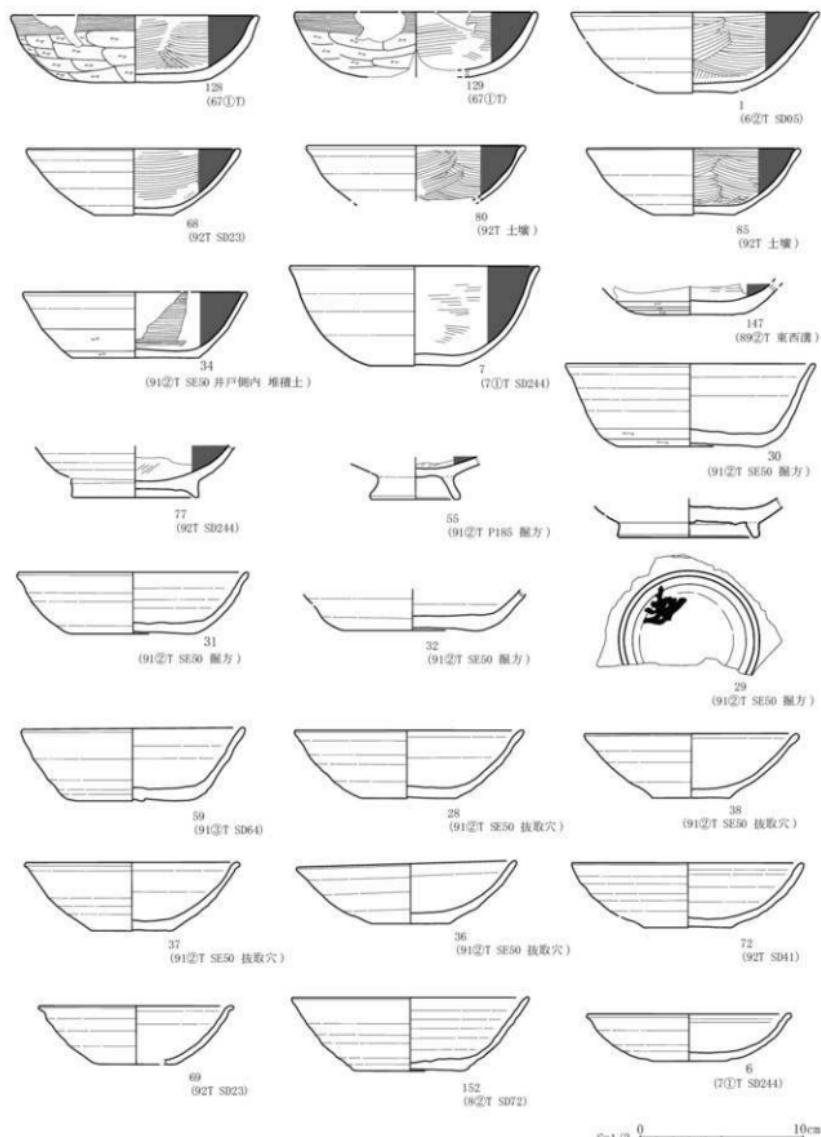
第49圖 90T斷面圖



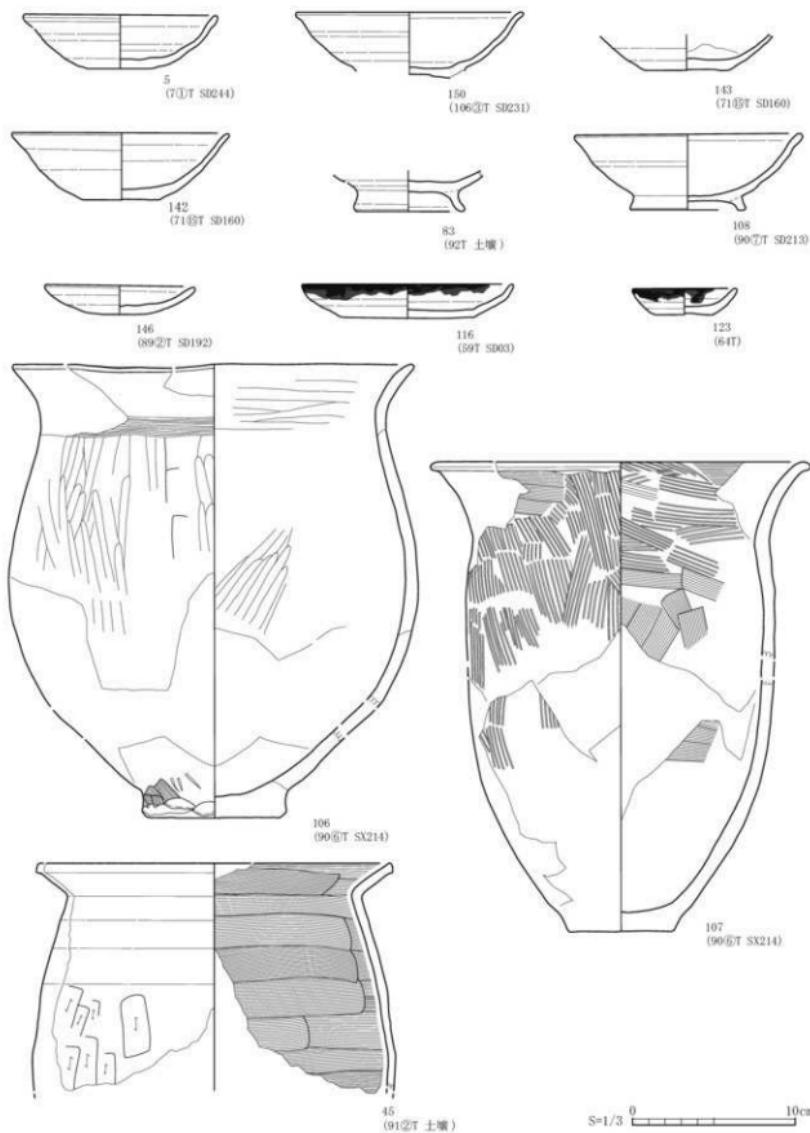
SX214 土器埋没遺構 (90⑥T)



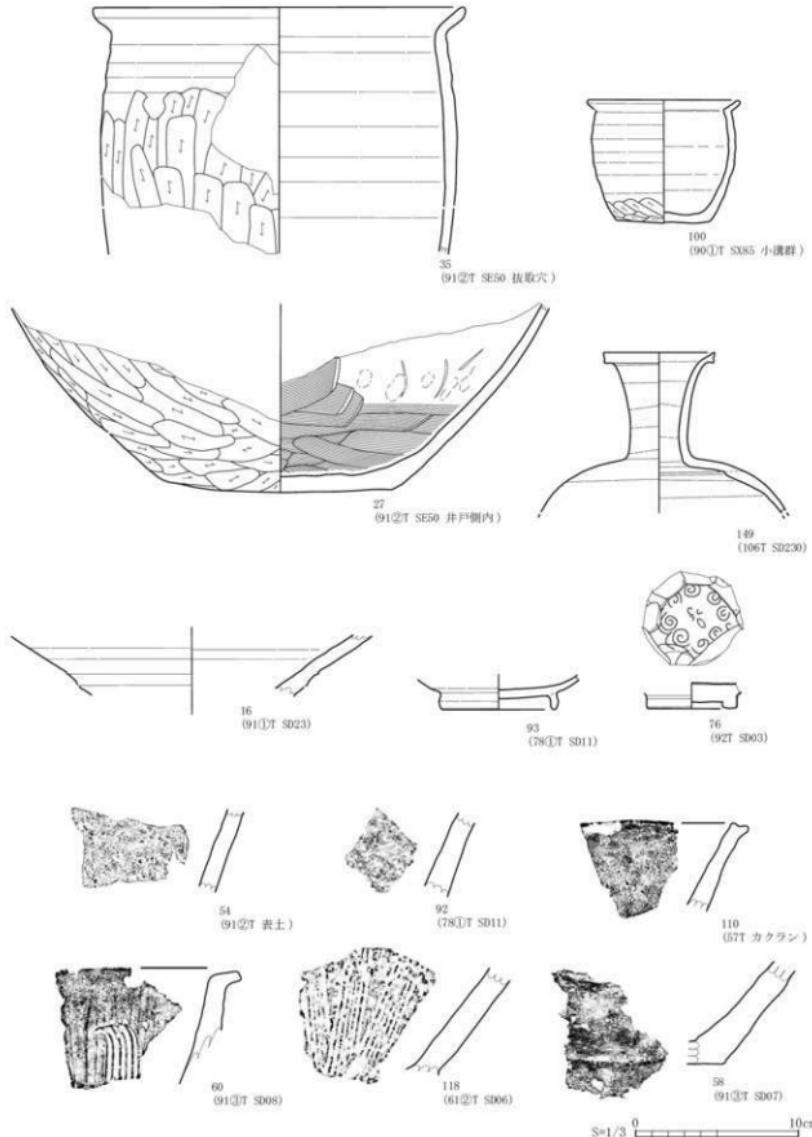
第50図 93T、106T断面図、SX214(90⑥T)平面・断面図



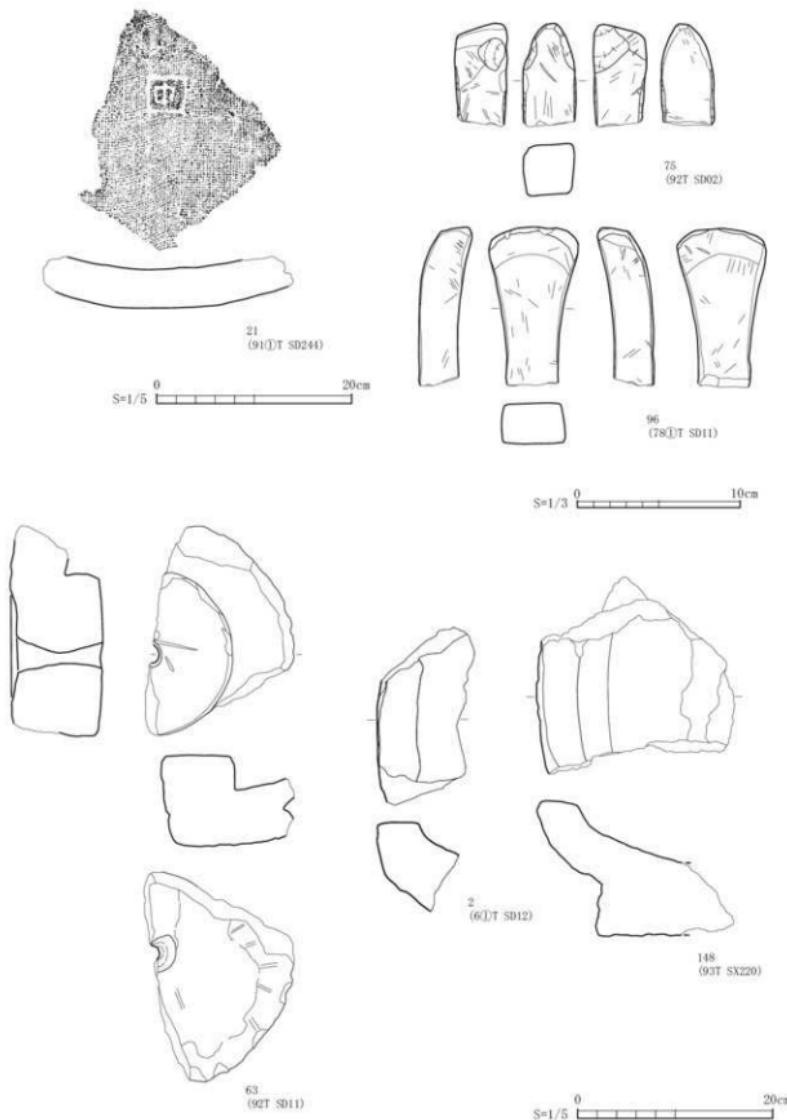
第 51 図 遺物実測図 1



第 52 図 遺物実測図 2

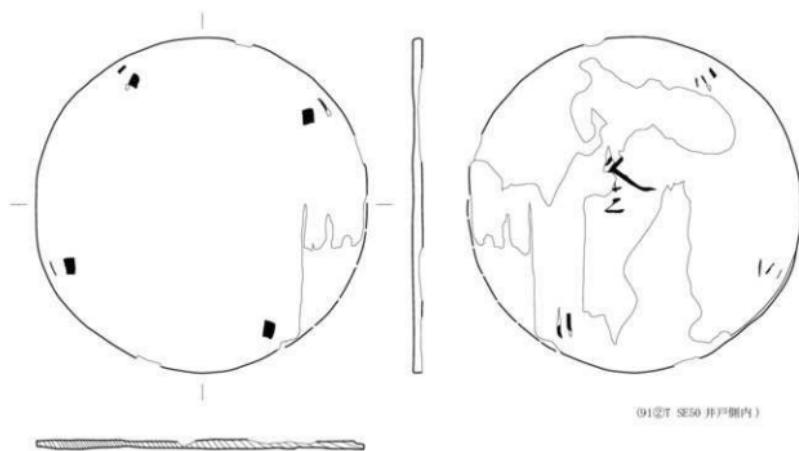


第 53 図 遺物実測図 3



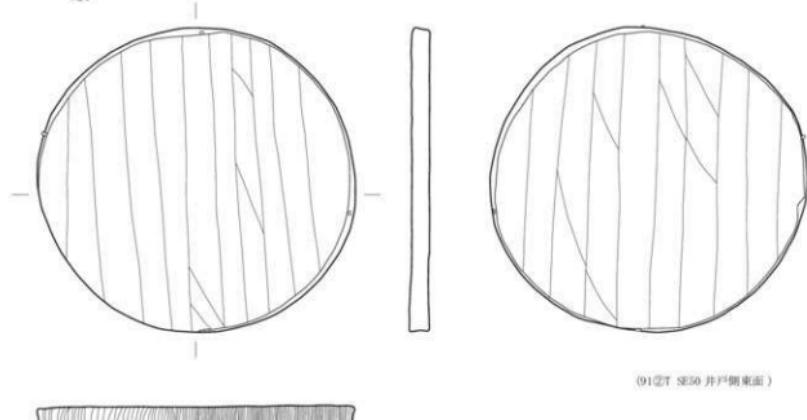
第 54 図 遺物実測図 4

W23



(91②T SE50 井戸跡内)

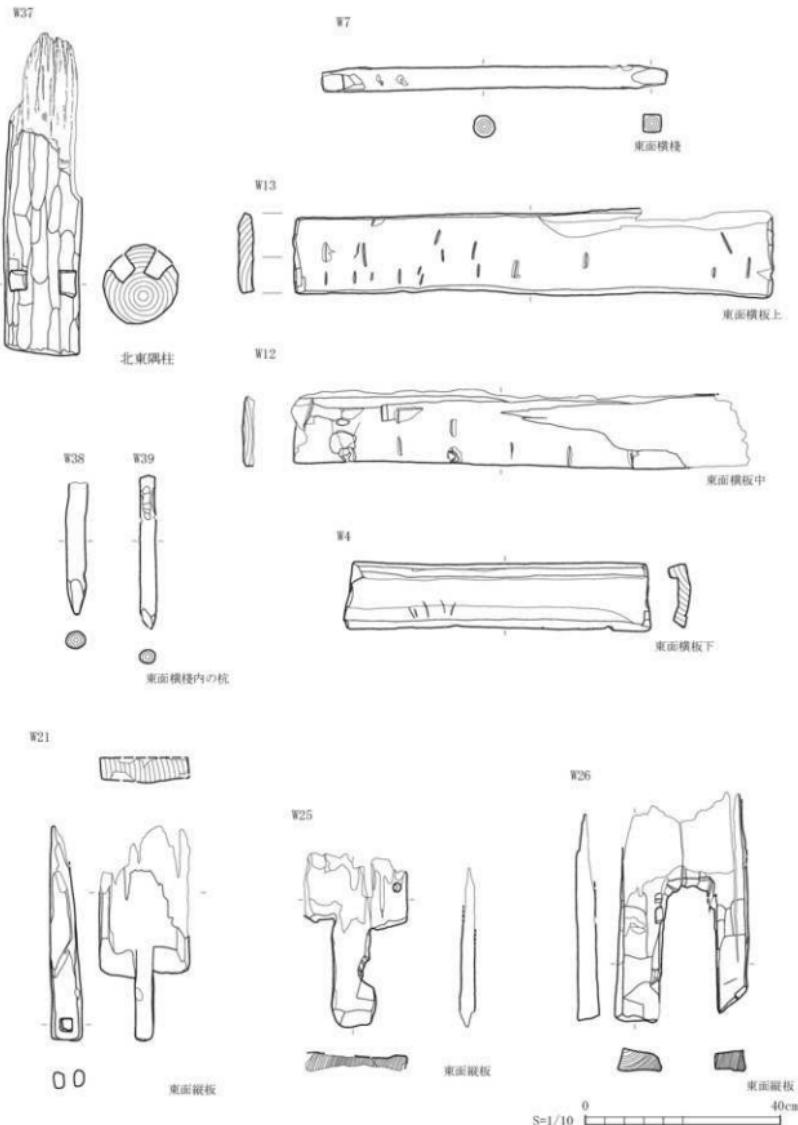
W24



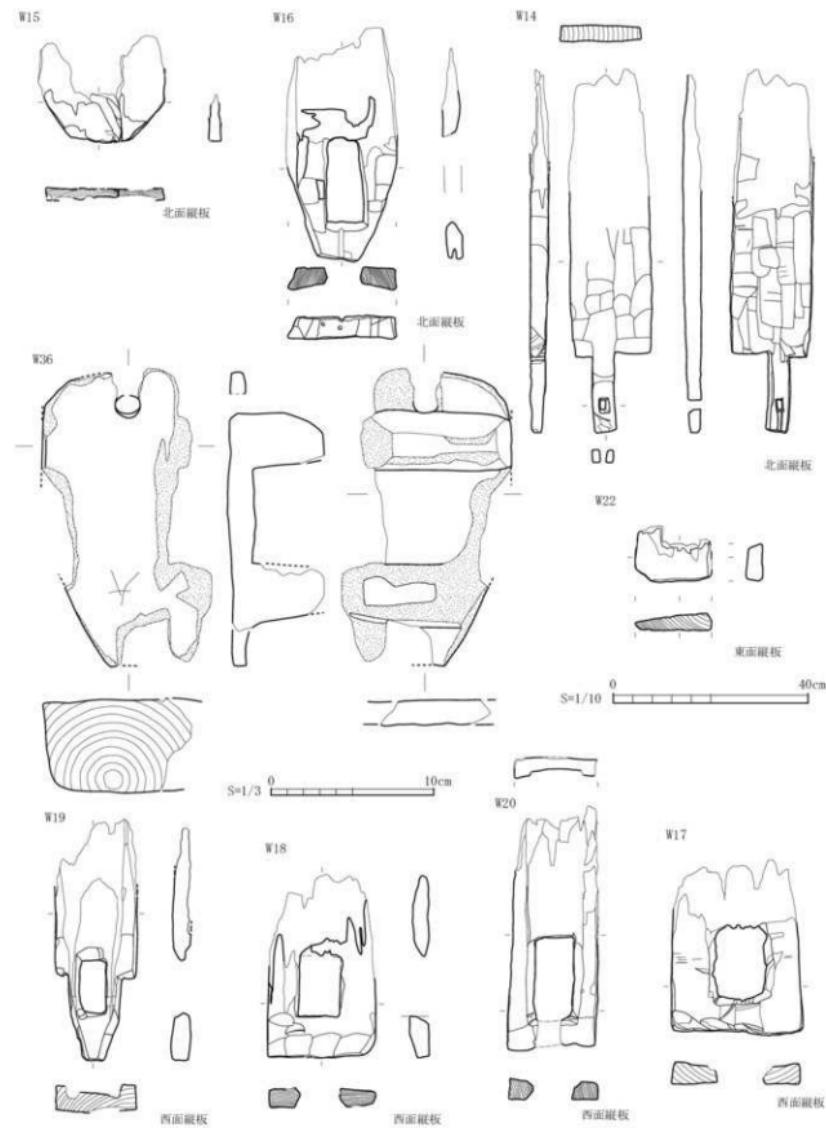
(91②T SE50 井戸跡東面)

S=1/3 0 10cm

第 55 図 遺物実測図 5 (91②T SE50 井戸跡)



第 56 図 遺物実測図 6 (91(2)T SE50 井戸側)



第 57 図 遺物実測図 7 (91②T SE50 戸戸側・SD03)

第6表 内館跡出土遺物観察表 1

登録番号	調査区	遺構	層位	種別	器種	調整	法量(cm)			遺物図版	写真図版	備考
							口径	底径	残存率			
1 6 ②	SD05	堆積土	土師器	环	外面：ロクロナダ 底部：回転系切り 内面：ヘラミガキ→黒色処理	15.2 16/24	5.0 24/24	5	51	10	BV類	
2 6 ①	SD12	堆積土	石製品	石臼	—	長さ (10.9)	幅 (6.1)	厚さ (5.4)	54	—	下臼 重さ 298 g	
5 7 ①	SD244	堆積土	須恵系土器	环	外面：ロクロナダ 底部：回転系切り 内面：ロクロナダ	(11.8) 10/24	4.2 24/24	3.3	52	10		
6 7 ①	SD244	堆積土	須恵系土器	环	外面：ロクロナダ 底部：回転系切り 内面：ロクロナダ	(12.4) 3/24	4.4 24/24	2.9	51	—		
7 7 ①	SD244	堆積土	土師器	环	外面：ロクロナダ 底部：不明 内面：ヘラミガキ→黒色処理	(15.4) 3/24	5.6 24/24	6.2	51	10	B類	
16 91 ①	SD23	堆積土	須恵系土器	鉢	外面：ロクロナダ 底部：— 内面：ロクロナダ	—	—	—	53	—		
21 91 ①	SD244	堆積土	瓦	平瓦 (焼印)	凸面：彫印つき 内面：布目痕	長さ (14.5)	幅 (15.4)	厚さ (2.4)	54	11		
27 91 ②	SE50	井戸側内 堆積土	須恵器	甕	外面：手持ちヘラケズリ 底部：ニビナダ 内面：ニビオサエ、ヘラナダ	—	13.8 14/24	(11.6)	53	11		
28 91 ②	SE50	抜取穴	須恵系土器	环	外面：ロクロナダ 底部：回転系切り 内面：ロクロナダ	13.9 24/24	5.8 24/24	4.2	51	10	内面に付着物(不明)あり	
29 91 ②	SE50	掘方	須恵器	高台付 环	外面：ロクロナダ 底部：ヘラ切り一高台貼付 内面：ロクロナダ	—	8.6 13/24	1.9	51	—	高台内に墨書き「□」あり	
30 91 ②	SE50	掘方	須恵器	环	外面：ロクロナダ、回転ヘラケズリ 底部：ヘラ切り一回転ヘラケズリ 内面：ロクロナダ	(15.2) 1/24	(8.7) 21/24	5.1	51	10	Ia類	
31 91 ②	SE50	掘方	須恵器	环	外面：ロクロナダ 底部：ヘラ切り 内面：ロクロナダ	(14.0) 4/24	(7.6) 14/24	3.8	51	10	III類	
32 91 ②	SE50	掘方	須恵器	环	外面：ロクロナダ 底部：回転系切り 内面：ロクロナダ	—	8.3 24/24	—	51	—	V類	
34 91 ②	SE50	井戸側内 堆積土	土師器	环	外面：ロクロナダ、回転ヘラケズリ 底部：回転ヘラケズリ 内面：ヘラミガキ→黒色処理	(13.8) 1/24	7.8 15/24	4.1	51	—	BI類	
35 91 ②	SE50	抜取穴	土師器	甕	外面：ロクロナダ、ヘラケズリ 底部：— 内面：ロクロナダ	(23.0) 5/24	—	(15.2)	53	—	B類 外面に油煙？	
36 91 ②	SE50	抜取穴	須恵系土器	环	外面：ロクロナダ 底部：回転系切り 内面：ロクロナダ	(13.4) 16/24	4.8 24/24	4.7	51	10	全体的に摩滅	
37 91 ②	SE50	抜取穴	須恵系土器	环	外面：ロクロナダ 底部：回転系切り 内面：ロクロナダ	(13.0) 3/24	(5.0) 12/24	4.2	51	—		
38 91 ②	SE50	抜取穴	須恵系土器	环	外面：ロクロナダ、ヘラケズリ 底部：— 内面：ロクロナダ	(13.0) 7/24	(4.8) 15/24	4.0	51	—		
45 91 ②	土壤	堆積土	土師器	甕	外面：ロクロナダ、ヘラケズリ 底部：— 内面：ヘラナダ	(22.0) 5/24	—	(14.0)	52	11	B類	
54 91 ②	—	I層	中世陶器	甕	外面：工具によるナダ 底部：— 内面：工具によるナダ	—	—	(5.2)	53	—		
55 91 ②	P185	掘方	土師器	高台付 环	外面：ロクロナダ 底部：切り離し不明一高台貼付 内面：ヘラミガキ→黒色処理	—	5.4 24/24	(2.1)	51	—		

第7表 内館館跡出土遺物観察表2

登録番号	調査区	遺構	層位	種別	器種	調整	法量(cm)		遺物 図版	写真 図版	備考
							口径 残存率	底径 残存率			
58	91 ③	SD07	堆積土	中世 陶器	擂鉢	外面：ヘラナデ 底部：— 内面：磨痕	—	—	53	11	在地産
59	91 ③	SD64	—	須恵器	坏	外面：ロクロナデ 底部：ロクロナデ→ナデ 内面：ロクロナデ	(13.5) 12/24	8.0 24/24	4.5	51	10 III類
60	91 ③	SD08	堆積土	瓦質 土器	擂鉢	外面：工具によるナデ 底部：— 内面：工具によるナデ	—	— (7.0)	53	12	
63	92	SD11	—	石製品	茶臼	—	長さ (21.5)	幅 (15.2)	厚さ (9.4)	54	12 下臼 重さ 2996 g
68	92	SD23	—	土師器	坏	外面：ロクロナデ 底部：回転系切り 内面：ヘラミガキ→黒色処理	(13.2) 4/24	4.8 14/24	4.1	51	— BV類
69	92	SD23	—	須恵系 土器	坏	外面：ロクロナデ 底部：回転系切り 内面：ロクロナデ	(11.8) 8/24	(5.0) 4/24	3.6	51	—
72	92	SD41	—	須恵系 土器	坏	外面：ロクロナデ 底部：回転系切り 内面：ロクロナデ	(14.2) 7/24	5.4 24/24	4.0	51	—
75	92	SD02	—	石製品	砥石	—	長さ (6.5)	幅 (3.3)	厚さ (3.2)	54	— No.81. 重さ 114 g
76	92	SD03	—	青磁	碗	外面：施釉 底部：高台内無釉。ヘラ切り→高台貼付 内面：施釉、見込みに線刻文(唐草文)あり	—	5.4 24/24	1.1	53	11 円形に打ち欠いて いる龍泉系 素年 13C
77	92	SD244	—	土師器	高台付 坏	外面：ロクロナデ 底部：回転系切り→高台貼付→ナデ 内面：ヘラミガキ→黒色処理	—	7.8 24/24	(3.3)	51	—
80	92	土壤	—	土師器	坏	外面：ロクロナデ 底部：— 内面：ヘラミガキ→黒色処理	(13.5) 7/24	—	(3.4)	51	— B類 油煙あり
83	92	土壤	—	須恵系 土器	高台付 坏	外面：ロクロナデ 底部：回転系切り→高台貼付 内面：ロクロナデ	—	6.7 24/24	(2.6)	52	—
85	92	土壤	—	土師器	坏	外面：ロクロナデ 底部：回転系切り 内面：ヘラミガキ→黒色処理	(13.2) 5/24	4.9 18/24	4.1	51	— BV類
92	78 ①	SD11	堆積土	中世 陶器	甕	外面：工具によるナデ 底部：— 内面：工具によるナデ	—	— (5.3)	53	—	
93	78 ①	SD11	堆積土	灰釉 陶器	皿	外面：ロクロナデ 底部：ヘラ切り→高台貼付 内面：ロクロナデ	—	(7.0) 10/24	(2.1)	53	10
96	78 ①	SD11	堆積土	石製品	砥石	—	長さ (9.8)	幅 (5.6)	厚さ (2.6)	54	— 重さ 211 g
100	90 ①	SX85	—	土師器	甕	外面：ロクロナデ 体部下半→底部：手持ちヘラケズリ 内面：ロクロナデ	(9.3) 8/24	5.7 24/24	7.6	53	10
106	90 ⑥	SX214	—	土師器	広口甕	外面：口縁部ロクロナデ。ヘラナデ 体部：ヘラミガキ 底部：木葉痕 内面：ヘラナデ→ヘラミガキ	(24.4) 8/24	8.0 24/24	28.0	52	—
107	90 ⑥	SX214	—	土師器	甕	外面：口縁部ハケメー部ヘラナデ 体部ハケメ 底部：摩滅（ヘラケズリ？） 内面：口縁部ハケメー部ヘラナデ 体部：ハケメ→ヘラナデ	(22.8) 10/24	6.4 11/24	29.0	52	—

第8表 内館跡出土遺物観察表3

登録番号	調査区	遺構	層	位種別	器種	調整	法量法量(cm)			遺物図版	写真図版	備考
							口径 残存率	底径 残存率	器高			
108	90 ⑦	SD213	堆積土	須恵系 土器	高台付 环	外面：ロクロナデ 底部：回転系切り→高台貼付→口 クロナデ 内面：ロクロナデ	13.8 13/24	7.0 23/24	4.7	52	—	全体的に摩滅 高台に欠けあり
110	57	ナラ	—	中世 陶器	擂鉢	外面：工具によるナデ 底部：— 内面：工具によるナデ	—	—	(5.4)	53	11	
116	59	SD03	堆積土	かわらけ	—	外面：ロクロナデ 底部：回転系切り 内面：ロクロナデ	(13.0) 9/24	8.2 12/24	2.1	52	10	内外面口縁付近に 油煙付着
118	61 ②	SD06	堆積土	瓦質 土器	擂鉢	外面：工具によるナデ 底部：— 内面：工具によるナデ	—	—	(6.7)	53	—	
123	64	—	堆積土	かわらけ	—	外面：ロクロナデ 底部：回転系切り 内面：ロクロナデ	6.3 20/24	3.5 24/24	1.6	52	—	内外面にタール状 付着物あり
128	67 ①	—	—	土師器	环	外面：ヨコナデ、手持ちヘラケズリ 底部：手持ちヘラケズリ 内面：ヘラミガキ→黒色処理	15.3 12/24	9.3 20/24	4.2	51	10	A類
129	67 ①	—	—	土師器	环	外面：ヨコナデ、手持ちヘラケズリ 底部：— 内面：ヘラミガキ→黒色処理	(15.0) 4/24	—	(4.0)	51	—	A類
142	71 ⑩	SD160	堆積土	須恵系 土器	环	外面：ロクロナデ 底部：回転系切り 内面：ロクロナデ	13.3 19/24	4.8 24/24	4.1	52	—	
143	71 ⑩	SD160	堆積土	須恵系 土器	环	外面：ロクロナデ 底部：回転系切り 内面：ロクロナデ	—	5.2 21/24	(2.2)	52	—	体部外面に油煙 付着か？
146	89 ②	SD192	堆積土	須恵系 土器	小皿	外面：ロクロナデ 底部：回転系切り? 内面：ロクロナデ	9.1 16/24	3.8 23/24	1.7	52	10	全体的に摩滅
147	89 ②	東西溝	—	土師器	环	外面：回転ヘラケズリ 底部：回転ヘラケズリ 内面：ヘラミガキ→黒色処理	—	6.7 15/24	(1.9)	51	—	
148	93	SX220	堆積土	石製品	石臼	—	長さ (12.2)	幅 (12.2)	厚さ (8.4)	54	12	B1類 下臼 重さ 711 g
149	106	SD230	—	須恵器	壺	外面：ロクロナデ 底部：— 内面：ロクロナデ	6.9 24/24	—	(9.9)	53	11	
150	106 ③	SD231	—	須恵系 土器	高台付 环	外面：ロクロナデ 底部：回転系切り 内面：ロクロナデ	(13.8) 10/24	—	(4.1)	52	—	
152	8 ②	SD72	堆積土	須恵系 土器	环	外面：ロクロナデ 底部：回転系切り 内面：ロクロナデ	(14.3) 9/24	6.6 24/24	4.5	51	10	剥離、割れ多し

第9表 内館跡出土木製品観察表

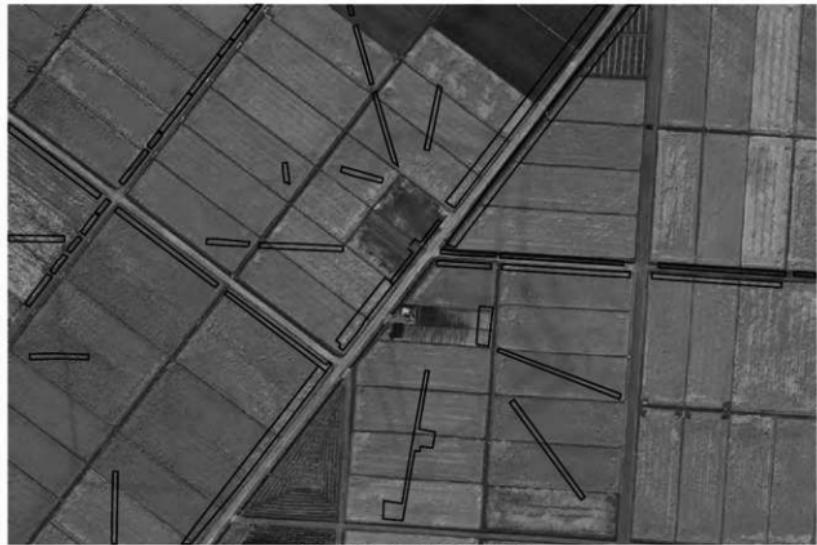
№	遺構・部位	法量(cm)			樹種	木取り	遺物図版	写真図版	特徴
		長さ	幅	厚さ					
4	SE50 北側横板	61.1	13.7	2.5	—	板目	56	—	
7	SE50 北側横棟	65.8	4.7	4.4	—	丸木	56	14	
12	SE50 北側横板	93.8	16.4	2.5	—	板目	56	14	
13	SE50 北側横板	97.9	16.4	2.9	—	板目	56	14	
14	SE50 北側縦板	(74.4)	16.8	3.8	クリ	柾目	57	14	
15	SE50 北側縦板	(9.6)	(24.0)	(1.0)	クリ	板目	57	—	
16	SE50 北側縦板	(43.2)	22.2	3.5	クリ	柾目	57	14	
17	SE50 西側縦板	(35.9)	26.9	4.5	クリ	板目	57	—	
18	SE50 西側縦板	(37.4)	22.2	4.0	クリ	板目	57	—	
19	SE50 西側縦板	(47.3)	16.8	3.2	クリ	板目	57	14	
20	SE50 西側縦板	(48.0)	(18.0)	4.0	クリ	柾目	57	14	
21	SE50 東側縦板	(44.0)	18.5	6.6	クリ	柾目	56	14	
22	SE50 南側縦板	7.6	15.5	3.0	クリ	柾目	57	—	
23	SE50 曲物蓋板	最大径 20.6		最大厚 0.7	モミ属	柾目	55	13	墨書「釜」
24	SE50 曲物底板	最大径 19.5		最大厚 1.1	ヒノキ	柾目	55	13	
25	SE50 東側縦板	(32.5)	21.0	1.9	クリ	柾目	56	14	
26	SE50 東側縦板	47.1	27.6	4.7	クリ	柾目	56	14	
36	SD03 連唐下駄	(18.0)	(9.2)	蓄 5.8 台 1.6	クリ	芯持ち?	57	13	
37	SE50 北東隅の丸柱	(66.0)	16.0	16.1	—	丸木	56	14	クギ文字「大」力
38	SE50 東側横棟と 横板の間の杭	27.2	4.3	3.5	—	丸木	56	—	
39	SE50 東側横棟と 横板の間の杭	31.3	3.4	2.8	—	丸木	56	14	

第10表 内館跡出土金属製品観察表

M №	調査区	遺構	層位	種別	遺物図版	写真図版	備考
1	7②・91②	SE50	側内堆積土	銅鋌先	—	13	
2	7②・91②	P170	埋土	銅錢	—	13	元豐通寶
3	7②・91②	—	K面	銅錢	—	13	さし錢 44枚 乾元重寶など
4	92	SD11	—	銅錢	—	13	2枚が重なっている
5	58①	SD103	—	銅錢	—	13	腐食著しい
7	81	SD13	K面	銅錢	—	13	寛永通寶



遺跡全景（南東から）



クロップマークと調査区（上が北）

写真図版 1



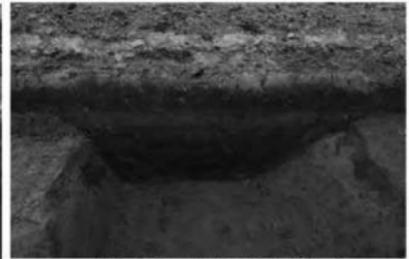
6①・78①T 全景（西から）



6②・78②T 全景（西から）



6②・78②T SD03 中溝跡（南から）



6②・78②T SD04 外1溝跡（南から）



6②・78②T SD05 外2溝跡（南から）



7①T 全景（南から）



92T SX46 小溝群（北から）



7②T SD02 内溝跡（東から）

写真図版2



7②・91②T SE50 井戸跡（南から） 1



SE50 井戸跡 井戸側（北東から） 2



SE50 井戸跡 井戸側内面（東から） 3



SE50 井戸跡 井戸側縦板（西面） 4

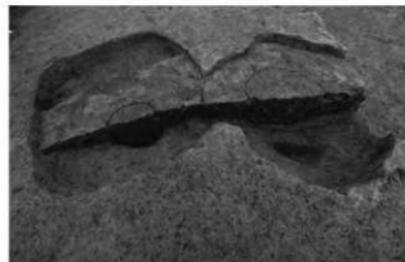


SE50 井戸跡 井戸側内鑿先、曲物出土状況（東から） 5

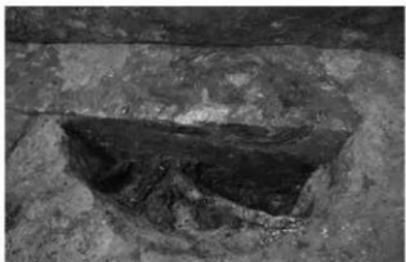
写真図版 3



7③・91③T 挖立柱建物跡（南から） 1



7③・91③T 挖立柱建物跡柱穴断面（北東から） 2



7②・91②T SE51 井戸跡（東から） 3

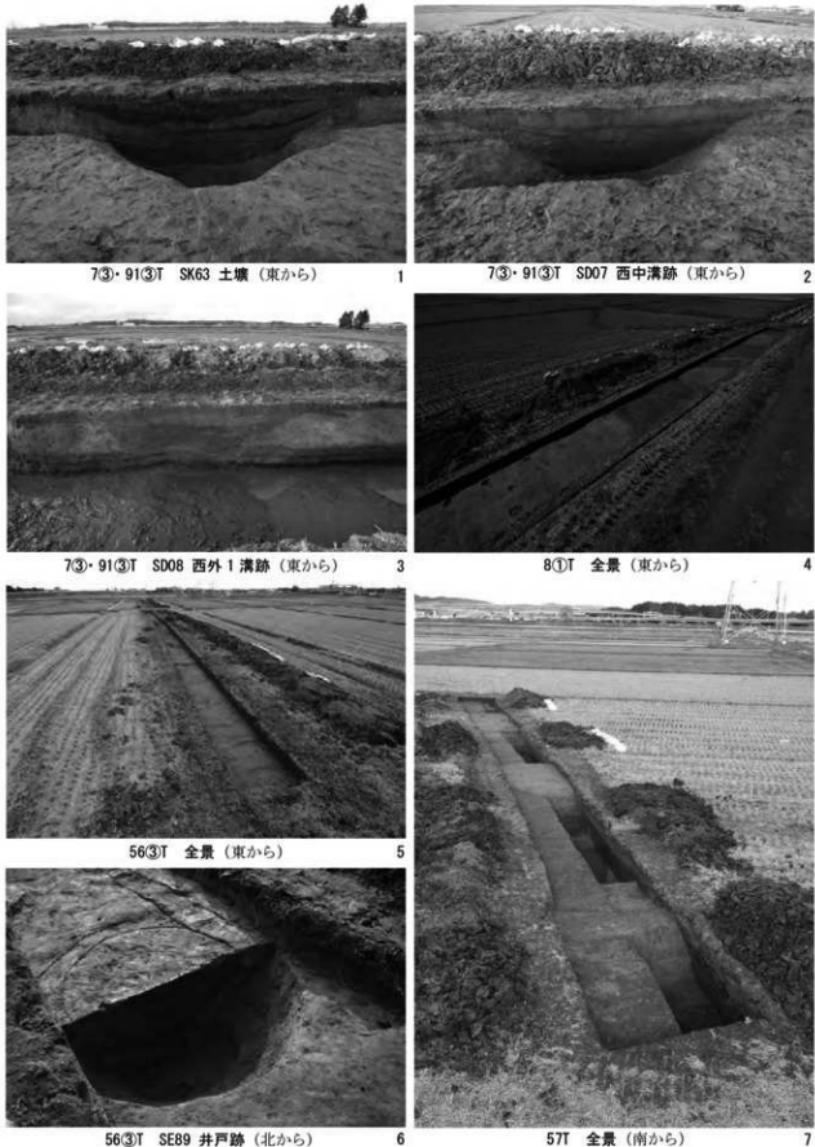


7②・91②T SE52 井戸跡（東から） 4



7③・91③T SK62 土壤（東から） 5

写真図版4



写真図版 5



58①T 全景（北から）



58①T SE101 井戸跡（西から）



58①T SD02 内溝跡、SD100 溝跡（北東から）



58①T SD03 中溝跡（北東から）



59T SD03 中溝跡と SD07 西中溝跡の接続部（南から）



61①T SD07 西中溝跡（南西から）

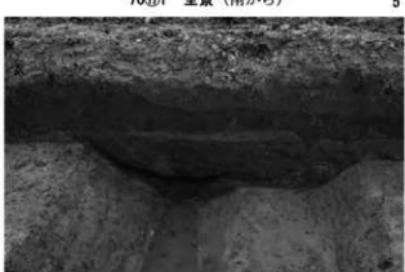
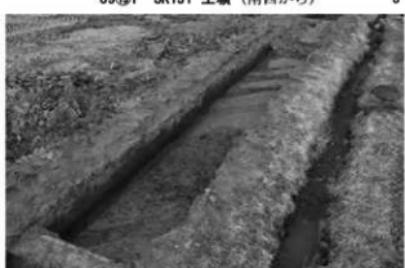


63T 全景（北から）



64T SD02 内溝跡南西コーナー部（南から）

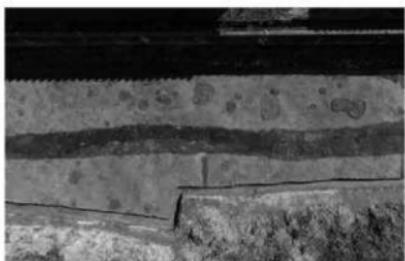
写真図版 6



写真図版 7



79②T SD173・174 溝跡断面（南から）



80①T 全景



80③T 全景



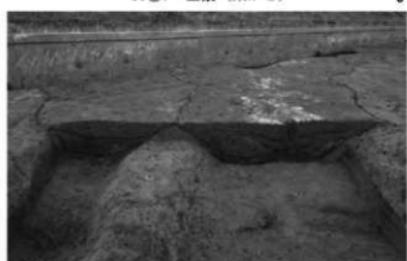
80③T SD15 溝跡（南から）



89①T 全景（東から）



89①T SD187 溝跡（南から）



89①T SD188 溝跡（西から）



89②T 全景（東から）

写真図版 8



90①T 全景（東から）



90①T 調査風景（北から）



90①T SD185 溝跡（左）、SD246 溝跡（右）（南から）



90①T SB195 据立柱建物跡柱穴碇板（南から）



90①T SK207 土壌（南から）



90②T SD88 溝跡（西から）



93T SK221 土壌 混貝土層（北東から）



106T 全景（南から）

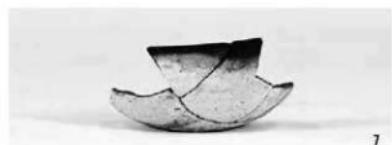
写真図版 9



128



1



7



30



31



59



36



28



152



5



146



116



93



100

写真図版10



45



149



27



21



76

3
6②T SD03

54



110



58

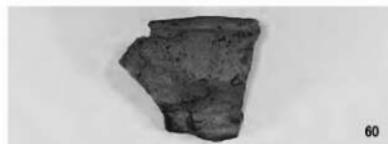


90①T SK206 104



80②T SK206 144

写真図版11



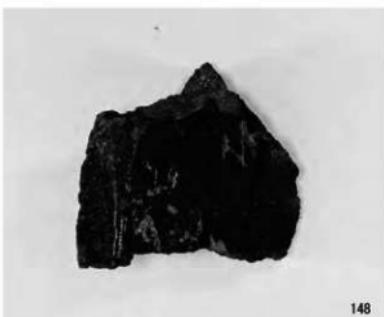
60



60 内面



63

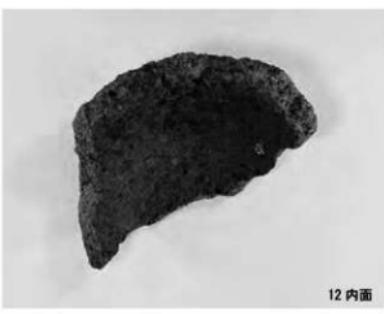


148



12

7③T SK62



12 内面



95

78①T SD11



115

58①T SD103



73 表



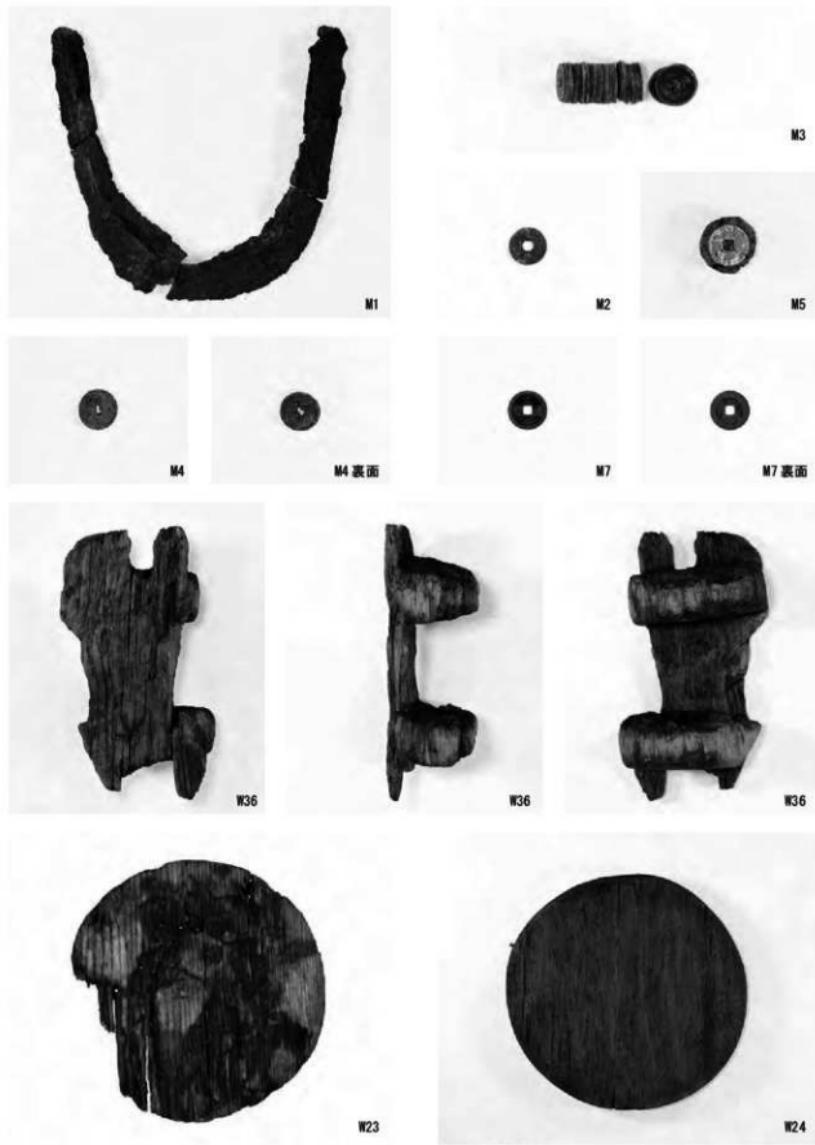
73 侧面



92T 裏

SD41

写真図版12



写真図版13



W37



W12



W13



W7



W14



W16



W19



W20



W26



W25



W21



W39

写真図版14

VI 新田遺跡

1 遺跡概要

新田遺跡周辺の地理的環境や歴史的環境については本書の遺跡環境や内館館跡の歴史的環境で述べたので、ここでは新田遺跡の発掘調査の成果について簡単に記しておくこととする。

新田遺跡は昭和 56 年度以来多賀城市教育委員会によって多数の発掘調査が実施されてきた。しかしながら、小規模な宅地開発や個人住宅の建築に伴うものが大部分で、遺跡の実態を十分に解明するには困難な状況である。その中で、南寿福寺地区では 8 世紀の幅 15 m の東西道路跡や平安時代の幅 12 m の東西道路跡を発見し、東側の山王遺跡で発見されている東西大路に接続する東山道と考えられている。また、中世では、北寿福寺、南寿福寺地区で、区画溝で囲まれた大規模な屋敷群が発見され、中世の多賀国府や当方の領主であった留守氏閥連の上級武士階級の屋敷群と考えられている。

2 調査経過

平成 27 年度に、新田遺跡とほ場整備計画とのかかわりを確認するために、遺跡北東側隣接地に 11・12 調査区（以下 T と略す）を、南東側隣接地に 13～15T を設定して第 108 次調査として試掘確認調査を実施した。その結果、11・12T と 14T で遺構・遺物が発見されたため、新田遺跡の範囲を拡大するとともに、平成 28 年度に北東側を第 114 次調査、南東側を第 119 次調査として発掘調査を行った（第 1・2 図）。13・15T では遺構・遺物は検出されず、遺跡の範囲外と判断した。

基本層序は近隣の山王遺跡や内館館跡と概ね同じだと考えられ、遺構検出は山王遺跡基本層序の第Ⅳ層に対応すると思われる黄褐色のシルトや砂層上面で行った。なお、この層の上部で検出された堆積層については、地点によって異なっており、トレンチ調査という制約もあって、それぞれの関連や性格について明確にはし得なかったため、断面図には便宜的に a、b の名称を付して示した。

3 第 114 次調査

調査区は西側（12・87・88・99・109・110T）と東側（11・94～98・112T）に分かれている（第 1 図）。西側では、12①T と 88T、99①～⑫T で遺構・遺物が発見されたが、12②・③T、87①T～③T、109①～⑫T、110①～⑨T では遺構・遺物は発見されなかった。東側はすべての調査区で遺構・遺物が発見された。以下、西側から順に主要なものについて簡単に説明する。

12①T、88T（第 3・21 図、写真図版 1-2）

両者は近接しており、一括して説明する。

【SD2350 溝跡】（第 21 図 1）調査区北端で検出した東西溝跡で、堆積土から近世以降の陶器皿が出土した新しい溝跡によって壊されている。堆積土中に To-a 火山灰が流入している。

【SD2354 溝跡】（第 21 図 2）上幅 1.3 m の南北方向の溝跡で、堆積土上部に To-a 火山灰が流入している。

【SD2357 溝跡】（写真図版 1-2）12①T で検出したが、北側の 88T では検出されていない。上幅 1.5 m の南北方向の溝跡で、堆積土上部に To-a 火山灰が流入している。

【SX2353 流路跡】調査区のほぼ中央で検出された流路跡かと思われる落ち込みで、To-a 火山灰が流入している溝跡より古い。

99①～⑧T（第 4～9・21 図、写真図版 1-2）

小柱穴群や土壤、溝跡が検出された。小柱穴群は⑥T 東側調査区内に密集して存在し、SX2368 流路跡上面で検出された（写真図版 1-4・5）。組み合わせは不明なものこの場所に多くの掘立柱建物跡が存在したと思われる。柱痕跡や柱穴埋土から須恵器坏・瓶・甕、土師器坏・甕などが出土した。また、①

Tの溝跡からは中世陶器甕（写真図版4-5）が出土した。

【SK2366 土壙】（第8・22図6）⑦T-1調査区のSX2368流路跡上面で検出された土壙で、西半部が調査区外であるが平面形は円形と思われる。

【SD2345溝跡】（第4・5図、写真図版1-3）③Tで検出した東西溝跡で、⑤Tの中央部付近まで調査区に沿って68m以上延びている。⑤Tの中央部付近以東はSD2360溝跡によって壊されている。To-a火山灰が流入しているSD2347溝跡よりも新しい。

【SD2347溝跡】（第4図、写真図版1-3）③Tで検出した東西溝跡で、SD2345溝跡より古い。堆積土上部にTo-a火山灰が流入している。

【SD2360溝跡】（第5・6・7・21図4）⑤・⑥Tで検出した東西溝跡で、調査区に沿って63m以上延びている。南北方向のSD2359・2361・2362溝跡より古い。堆積土から、弥生土器甕（写真図版4-6・7）、古墳時代前期の土師器甕・台付甕、須恵器甕、須恵系土器壺（写真図版4-4）が出土した。

【SD2362溝跡】（第6・21図3）⑥T西側調査区で検出した南北溝跡で、SD2360溝跡より新しい。

【SD2363・2364溝跡】（第7・22図1）⑥T西側調査区で検出した南北大溝跡で、両者が平行して存在した可能性が考えられる。

【SD2369溝跡】（第8図、写真図版2-1）⑧T西端で検出した東西溝跡で、堆積土上部に基本層II層に類似する黒色土が堆積している。調査時の写真をみると、SD2369溝跡の西側のSD2365溝跡付近ではTo-a火山灰が堆積しており、そこからSD2369溝跡までの部分が盛り上がりっているように見える。こういった状況から、SD2369溝跡は水田のための用排水路で、北側はある程度の幅があることから畦道であり、さらに北側のTo-a火山灰が堆積した部分は水田であったように見える。なお、すこし離れた南東側にはSX2370水田跡が存在し、本溝跡はこの水田跡の用排水路でもあったと思われる。

【SX2370水田跡】（第8・9図、写真図版2-2）⑧Tの東半部で、南北方向の畦畔3条（A～C）と北東から南西方向の畦畔1条（D）、東西方向の畦畔1条（E）、それらに囲まれた水田5枚（①～⑤）を検出した。畦畔の幅は0.6m～0.8mであり、水田②は東西およそ17m、水田③は東西およそ14mである。水田部分にはTo-a火山灰と基本層II層である黒色土が薄く堆積しており、降灰によって廃絶し、復旧はされなかつたと思われる。

【SX2368流路跡】（第8図）⑥T東側調査区と⑦T-1調査区で堆積土上部にTo-a火山灰が流入した流路跡を検出した。50mほど離れているが東西に延びる同一のものと思われる。

94①・②・③T（第11・12・23図、写真図版2-4）

比較的多くの土壙、溝跡などが検出されたが、大きく擾乱された部分もある。遺構検出時に茶臼の下臼（写真図版4-3）が出土した。

【SK2373土壙】（第11図）③Tで検出した土壙で、北側は調査区外だが平面形は長楕円形と思われる。

【SK2380土壙】（第11図）①Tで検出した不整形の土壙で、SD2378溝跡とSK2381土壙より古く、SK2379土壙より新しい。堆積土から土師器高台付皿（写真図版4-2）が出土した。

【SK2382土壙】（第11・12・23図1、写真図版2-5）①Tで検出したやや歪んだ円形の土壙で、堆積土中位にTo-a火山灰が流入している。堆積土から須恵系土器壺（写真図版4-100）が出土した。

【SK2383土壙、SD2385溝跡】（第12・23図2・3）①Tで検出した不整形の浅い土壙とされたもので、SD2384溝跡より古い。調査時の写真をみると堆積土上部の黄褐色土と下部の黒褐色土は均質で、上部が基本層IV層、下部が基本層V層であり、人為的な掘り込みではない可能性が考えられる。

【SD2386溝跡】（第12図）①Tで検出した東西溝跡で、SD2388溝跡より古い。堆積土上部にTo-a火山灰が流入している。

【SD2387溝跡】（第12図）①Tで検出した東西溝跡で、SD2388溝跡と重複するが、カクランのため新旧関係は不明である。堆積土上部にTo-a火山灰が流入している。堆積土から、古墳時代前期の土師器甕と内面がミガキ調整・黒色処理され外側がロクロ調整の土師器鉢が出土した。

97①～④T(第13・14図)

【SD2393溝跡】(第13図) ②Tで検出した東西溝跡で、堆積土上部にTo-a火山灰が流入している。堆積土から土師器甕が出土した。

【SD2395溝跡】(第14図) ④Tで検出した北東から南西方向の溝跡で、堆積土上部に基本層II層に類似する黒色土が堆積している。堆積土からA類の土師器甕が出土した。北東方向の延長上の95Tで検出されたSD2405溝跡は堆積土上部に基本層II層に類似する黒色土が堆積しており、一連の溝跡である可能性がある。【SX2396小溝群】(第14図、写真図版3-2) ④T東側で検出した南北方向の小溝群で、東側の95Tまでは延びず、東西24mの範囲に存在する。小溝の幅は0.3～0.6mで0.5mほどのものが多く、深さは0.1m程である。間隔は、溝の中心で測ると1.2～1.6mで1.4m前後のものが多い。堆積土は黒褐色粘質シルトで、自然堆積である。

95T(第14・24図、写真図版2-6)

【SD2397溝跡】(第24図5) 南端部で検出した東西溝跡で、SD2398溝跡より新しい。堆積土上部にTo-a火山灰が流入しており、さらに上部に基本層II層に類似する黒色土が堆積している。

【SD2398溝跡】南側にある南北溝跡で総長は21m程度で、SD2397・2399・2400溝跡より古い。

【SD2405溝跡】北東～南西方向の溝跡で、SD2404溝跡より新しい。堆積土上部に基本層II層に類似する黒色土が堆積しており、94④TのSD2395溝跡と一連と思われる。

【SD2406溝跡】(第24図6) 東西方向の大溝跡で、上部の壁は大きく開きながら立ち上がり、下部はやや急角度で立ち上がる。

96T(第14・15・23～26図、写真図版2-7)

掘立柱建物跡や土壙、溝跡、小溝群が調査区の全面で検出された。掘立柱建物跡の周辺には多くの柱穴があり、より多くの掘立柱建物跡が存在したと思われる(第24図2・3・4)。

【SB2415掘立柱建物跡】(第24図4) 桁行2間以上、梁行1間の南北棟で、SX2413小溝群とSB2416掘立柱建物跡とは同時に存在しないが新旧関係は不明であり、SK2412土壙より古い。柱間は、桁行が東側柱列で北から2.0m・1.8mで、梁行が北妻で3.5mである。方向は、東側柱列で測るとN-3°-Eである。柱穴は直径0.2～0.4mの円形で、埋土は地山ブロックを多く含む黄灰色土である。柱痕跡は直径0.1m程の円形で、堆積土は黒褐色土である。

【SB2416掘立柱建物跡】東西2間、南北2間以上の建物跡で、SX2413小溝群とSB2415掘立柱建物跡とは同時に存在しないが新旧関係は不明である。柱間は、北側柱列が東から2.3m・2.6mであり、西側柱列が1.9mである。方向は南側柱列で測るとE-1°-Nである。柱穴は直径0.3m程の円形で、埋土は黒褐色土である。

【SA2418柱列跡】(第15図) 東西7間の柱列跡で、SX2413小溝群より新しく、SB2415・2416掘立柱建物跡とSA2419柱列跡と同時に存在しないが、新旧関係は不明である。柱間は、東から2.2m・2.1m・2.0m・2.2m・2.0m・2.4m・2.3mであり、方向はE-3°-Sである。柱穴は直径もしくは長径が0.3～0.5mの円形・楕円形である。

【SA2419柱列跡】(第15図) 東西3間の柱列跡で、SX2413小溝群とSA2418柱列跡とは同時に存在しないが、新旧関係は不明である。柱間は、東から2.2m・2.2m・2.2mであり、方向はE-3°-Sである。柱穴は直径が0.4m程の円形である。

【SK2412土壙】(第14・26図2) 南半部が調査区外であるが、平面形は円形と思われる。SX2413小溝群と重複するが新旧関係は不明であり、SB2415掘立柱建物跡より新しい。堆積土から表面に煤が付着した礫が出土した。

【SK2414土壙】(第15・24図1) 北端部が調査区外であるが、平面形は円形と思われ、SX2413小溝群より新しい。堆積土から安山岩の礫が出土した。

【SD2410溝跡】(第14図) 調査区西端部で検出した南北溝跡で、堆積土上部にTo-a火山灰が流入している。

【SD2417溝跡】(第15図、写真図版3-1) 南北方向の大溝跡で、横断面形は箱堀状である。

【SD2420 溝跡】(第 15・23 図 4) 南北溝跡で、堆積土上部に To-a 火山灰が流入している。

【SD2422 溝跡】(第 15・25 図 1) 調査区東端で検出した東西溝跡で、埋め戻されている。

【SX2413 小溝群】(第 14・15 図・写真図版 2-8) 南北方向の小溝群で、SA2418 柱列跡と SK2414 土壌より古いが、SB2415・2416 挖立柱建物跡と SA2419 柱列跡、SK2412 土壌との新旧関係は不明である。小溝跡の間隔は 1.7 ~ 2.9 m であり、2 m 前後のものが多い。幅は 0.2 ~ 0.4 m であり、深さは 0.1 m 程である。堆積土は黒褐色土で、自然堆積である。

11T(第 15 図)

【SD2427A・B 溝跡】(第 25 図 3) 東西溝跡で、A 期の堆積土に To-a 火山灰が筋状に入り込んでおり、ひび割れなどに沿って入り込んだ可能性を考えられ、火山灰降下以前の溝跡と思われる。B 期は堆積土にしまりがなく、近年の溝跡である可能性も考えられ、たまたまこの場所で重複したと思われる。

4 第 119 次調査

134T ~ 136T を設定し、調査を行った(第 2 図)。第 108 次調査の 14T は 134②T として改めて調査を行った。

134①・②T(第 16・17・26 図、写真図版 3-3・4)

①T では溝跡 2 条を、②T では溝跡と多くの土壌を検出した。

【SK2439・2440・2441・2443・2444 土壌】(第 16 図) ②T 東側に存在する土壌群で、いずれも堆積土中に To-a 火山灰が流入している。

【SD2431 溝跡】(第 16・26 図 1) ①T で検出した幅の広い、浅い溝跡で、堆積土中に To-a 火山灰が流入している。人為的な溝ではなく、地形の低い部分に堆積した土層の可能性も考えられる。

【SD2432 溝跡】(第 17・26 図 2) ①T 南端にある溝跡で、基本層 II 層の黒色土に覆われている。

【SD2445 溝跡】②T 東端にある溝跡で、新旧 2 時期あり、古い時期には堆積土中に To-a 火山灰が流入しており、新しい時期には堆積土上部に基本層 II 層に類似する黒色土が堆積している。

135T(第 17 ~ 19・20・27 図)

【SD2446 大溝跡】(第 17・26 図 4、写真図版 3-5・6) ①T で西肩を、③T で南肩と東肩を検出した。壁は急角度で立ち上がるところから人為的に掘り込まれたものと思われる。新田遺跡では大溝で区画された中世の屋敷跡が発見されており(第 20 図)、屋敷跡に連する大溝跡の可能性が考えられる。

【SD2447 溝跡】(第 17・26 図 3) ①T 西端の東西溝跡で、基本層 III 層に覆われている。

【SD2448 溝跡】(第 18・27 図 1) ②T 西側の南北溝跡で、新旧 2 時期あり、新期の堆積土上部に To-a 火山灰が流入している。

【SD2451 溝跡】(第 18・26 図 5、写真図版 3-7) ②T 中央の南北溝跡で、堆積土中位に To-a 火山灰が流入している。

【SD2456 溝跡】(第 18・27 図 2) ②T 東側の南北方向の大溝跡で、堆積土上部に To-a 火山灰が流入している。最下層から土師器小型甕(写真図版 4-1)が出土した。

【SD2459 溝跡】(第 19・27 図 3、写真図版 3-8) ③T 南端の東西溝跡で、南肩は調査区外である。

136T(第 19 図)

【SD2460 溝跡】(第 27 図 4) ①T 中央部の東西溝跡で、堆積土から A 類の土師器甕が出土した。

【SD2461 溝跡】(第 27 図 5) ③T で検出した東西溝跡で、東側はカクランによって壊されている。今回の調査で検出した最南端の遺構で、これより南側・東側では遺構は検出されなかつたものの当該時期

5 総括

第 108 次調査によって新田遺跡の範囲が広がることが確かめられ、北東部と南東部の範囲が確定した。

第 114 次調査では、弥生土器や古墳時代前期の土器が出土し、遺構は検出されなかつたものの当該時期

に調査区周辺で何らかの活動をしていたものと思われる。また、99⑧Tでは平安時代の水田跡が検出され、To-a火山灰降下によって廃絶したことが明らかになった。また、97④Tと96Tでは畑作の痕跡である小溝群を検出した。年代は判然としないが、従来検出された小溝群はほぼ平安時代のものであることから、平安時代のものである可能性が考えられる。99⑥T東側と96Tでは掘立柱建物跡を構成すると思われる小柱穴群を検出した。平面形が円形や楕円形であることや、埋土が黒色土を主体とすること、99⑥T東側ではTo-a火山灰が流入している流路跡上面から掘り込まれていることなどから、年代は中世～近世と思われる。

第119次調査では、134②Tで堆積土にTo-a火山灰が流入している土壤や溝跡を比較的多く検出した。また、135①・②・③Tにまたがる大溝かと思われる落ち込みを検出した。南へは延びておらず、北へ延びて新田遺跡の屋敷群を区画する溝跡に接続する可能性が考えられる(第20図)。なお、134①Tの西側は東側の水田部分より一段高い畠地や宅地となっており、大溝だとすれば、高い部分の縁辺を巡って北へ延びていると思われる。

参考文献

多賀城市教育委員会 2018『新田・山王遺跡ほか』多賀城市文化財調査報告書第137集

第1表 新田遺跡溝跡属性表 ND114

遺構名	調査区	検出長 (m)	方向 向き 角度	断面形	上幅 (m)	下幅 (m)	深さ (m)	堆積土	新田関係	備考	図版	
											平面	断面
SD2342	99③	2.6+	南北	N-11°-W		1.0			人為	SD2343→	検出のみ	4
SD2343	99③	2.6+	南北	N-33°-W	皿	8.2+	7.3	0.5	自然	→SD2342 •2344		4
SD2344	99③	2.6+	南北	N-11°-E	皿	3.5	2.0	0.6	自然	SD2343→		4
SD2345	99③	6.8+	東西	E-11°-S						SD2346・2347・2348 →SD2349 →SD234	検出のみ	4・5
SD2346	99③	3.6+	南北	N-30°-E		0.4	0.3	0.2		→SD2345		4
SD2347	99③	10.0+	東西	E-7°-S		0.6+			自然	→SD2345 SD2348→	To-a火山灰入る	4
SD2348	99③	12.0+	東西	E-26°-S		0.7				→SD2345・2347		4
SD2349	99③	1.9+	南北	N-0°-E	箱樋	3.0	1.4	0.8	自然	SD2345→	近代?	4
SD2350	12①	10.2+	東西	E-18°-S	箱樋	1.9+	1.5+	0.8	自然	SD2351→	To-a火山灰入る	3 21-1
SD2351	12①	10.6+	南北	N-12°-E	箱樋	1.5	0.8		自然	→SD2350		3
SD2352	12①	7.8+	東西	E-3°-N	箱樋	2.4	1.6	1.1	自然			3
SD2354	12①	5.8+	南北	N-26°-E	皿	1.3	0.7	0.5	自然		To-a火山灰入る	3 21-2
SD2355	12①	7.8+	南北	N-7°-E	皿	1.3	0.6	0.5	自然	SD2356→		3
SD2356	12①	2.4+	南北	N-14°-E	箱樋	1.4	0.5	0.6	自然	→SD2355		3
SD2357	12①	5.8+	南北	N-27°-W	皿	1.5	0.8	0.3	自然		To-a火山灰入る	3
SD2358	99④	1.9+	東西	E-3°-S	箱樋	2.6	0.8	0.9	自然		近代?	5
SD2359	99⑤	1.9+	南北	N-5°-E		2.7		0.9+	自然	SD2360→	近代?	5
SD2360	99⑤・ ⑥	63.6+	東西	E-12°-S	箱樋	1.9+	1		自然	→SD2389・2361・ 2362	5・6 7	21-4
SD2361	99⑥	1.9+	南北	N-10°-E		5.3		0.8+	自然	SD2360→		6 21-4
SD2362	99⑥	1.9+	南北	N-7°-E	箱樋	1.3	0.5	0.5	自然	SD2360→		6 21-3
SD2363	99⑥	1.9+	南北	N-5°-E	箱樋	3.3	1.9	0.6	自然			7 22-1
SD2364	99⑥	1.9+	南北	N-15°-E	箱樋	5.7	3.5	0.6	自然			7 22-1
SD2365	99⑥	16+	東西	E-3°-N		1.8+		0.7	自然			7・8
SD2367	99⑦	1.9+	東西	E-8°-S	皿	1.5	0.6	0.4	自然			8

遺構名	調査区	検出長 (m)	方向		断面形	土幅 (m)	下幅 (m)	深さ (m)	堆積土	新旧関係	図版	
			向き	角度							平面	断面
SD2369	99 ⑧	10.4+	東西	E-12° -S					自然		SX2370 水田跡に 伴うものか	
SD2371	99 ⑧	10.2+	東西	E-5° -S		2.0					近代？	8
SD2375	112 ③	1.9+	東西	E-6° -S		2.0			自然	SD2376 →	検出のみ	11
SD2376	112 ③	1.3+	東西	E-9° -N		2.0+			自然	→ SD2375	検出のみ	11
SD2377	94 ①	6.8+	南北	N-2° -E	■	0.4	0.2	0.1	人為	SK2380 →	近代？	11
SD2378	94 ①	5.3+	南北	N-23° -W	■	0.6	0.2	0.2	自然	SK2380 + 2381 →		11
SD2385	94 ①	2.8+	東西	E-8° -N	箱堰	0.6	0.4	0.2	自然	SK2383 →		12
SD2386	94 ①	29.5+	東西	E-25° -N	■	3.0	1.3	0.4	自然	SD2389 → → SD2388		12
SD2387	94 ①	27+	東西	E-6° -S	■	1.4	0.5	0.3	自然	SD2389 →		12
SD2388	94 ①	7.1+	南北	N-7° -W	箱堰	2.4	0.7	0.9	自然	SD2386 →		12
SD2389	94 ①	5+	南北	N-7° -W		0.5				→ SD2386 + 2387		12
SD2390	98 ①	9.2+	東西	E-12° -N		9.3			自然	SD2391 →		12 22-7
SD2391	98 ①	6.5+	南北	N-5° -E		6 .7			自然	→ SD2390		12 22-7
SD2392	97 ①	1.7+	東西	E-7° -S	■	1.1			自然			13
SD2393	97 ①	1.7+	東西	E-0° -N	箱堰	0.9	0.7	0.4	自然		To-a 火山灰入る	13
SD2394	97 ①	1.9+	東西	E-18° -N		0.5	0.3	0.2	自然			13
SD2395	97 ④	2.0+	東西	E-38° -N	掩	1.7	0.6		自然		SD2405 と一連か	14
SD2397	95	2.2+	東西	E-3° -S	■	1.8	0.5	0.3	自然	SD2398 →	To-a 火山灰入る	14 24-5
SD2398	95	20.6+	南北	N-3° -E		0.6				→ SD2397 + 2399 + 2400		14
SD2399	95	2.2+	東西	E-4° -N		0.9				SD2398 →		14
SD2400	95	2.2+	東西	E-0° -N	■	1.5	0.7	0.3	自然	SD2398 →		14
SD2401	95	2.5+	南北	N-27° -E		0.4				→ SD2400		14
SD2402	95	2.2+	東西	E-3° -S	■	0.5	0.2	0.1	自然			14
SD2403	95	10.5+	南北	N-8° -W		0.3				→ SD2404 + 2405		14
SD2404	95	2.2+	東西	E-6° -N		0.5		0.2	自然	SD2403 →		14
SD2405	95	2.4+	東西	E-38° -N	掩	1.5	0.2	0.8	自然	SD2403 →	SD2395 と一連か	14
SD2406	95	2.4+	東西	E-0° -N	■	6.0	2.4	0.6	自然			14 24-6
SD2407	95	2.4+	東西	E-0° -N		0.3						14
SD2408	95	2.4+	東西	E-5° -N	■	0.8	0.4	0.2	自然			14
SD2410	96	3.9+	南北	N-2° -E	■	1.9	0.6	0.4	自然		To-a 火山灰入る	14
SD2411	96	6.0+	南北	N-2° -E	■	6.0		0.8	自然			14
SD2417	96	6.5+	南北	N-12° -W	箱堰	3.0	2.0	0.6	自然			15
SD2420	96	6.5+	南北	N-7° -E	箱堰	1.0	0.6	0.4	自然		To-a 火山灰入る	15 23-4
SD2421	96	6.5+	南北	N-0° -E	掩	3.5	1.2	1	自然			15 23-4
SD2422	96	9.7+	東西	E-9° -S	掩	2.4	0.7	1.1	人為			15 25-1
SD2423	11	2.2+	東西	E-6° -S	掩	2.1	1.0	0.9	人為			15
SD2424	11	2.2+	東西	E-6° -S		1.5			自然			15
SD2425	11	2.2+	東西	E-5° -S		1.0			自然			15
SD2426	11	2.2+	東西	E-4° -S		1.4			自然			15
SD2427A	11	2.2+	東西	E-7° -S	■?			0.3	自然			15 25-3
SD2427B	11	2.2+	東西	E-7° -S	箱堰	3.9	1.7	0.9	自然			15 25-3
SD2428	11	2.2+	東西	E-1° -N	箱堰	4.0	1.1	0.9	自然	SD2429 →		15
SD2429	11	2.3+	南北	N-35° -W	■	1.0	0.7	0.2	自然	→ SD2428		15

第2表 新田遺跡溝跡属性表 ND119

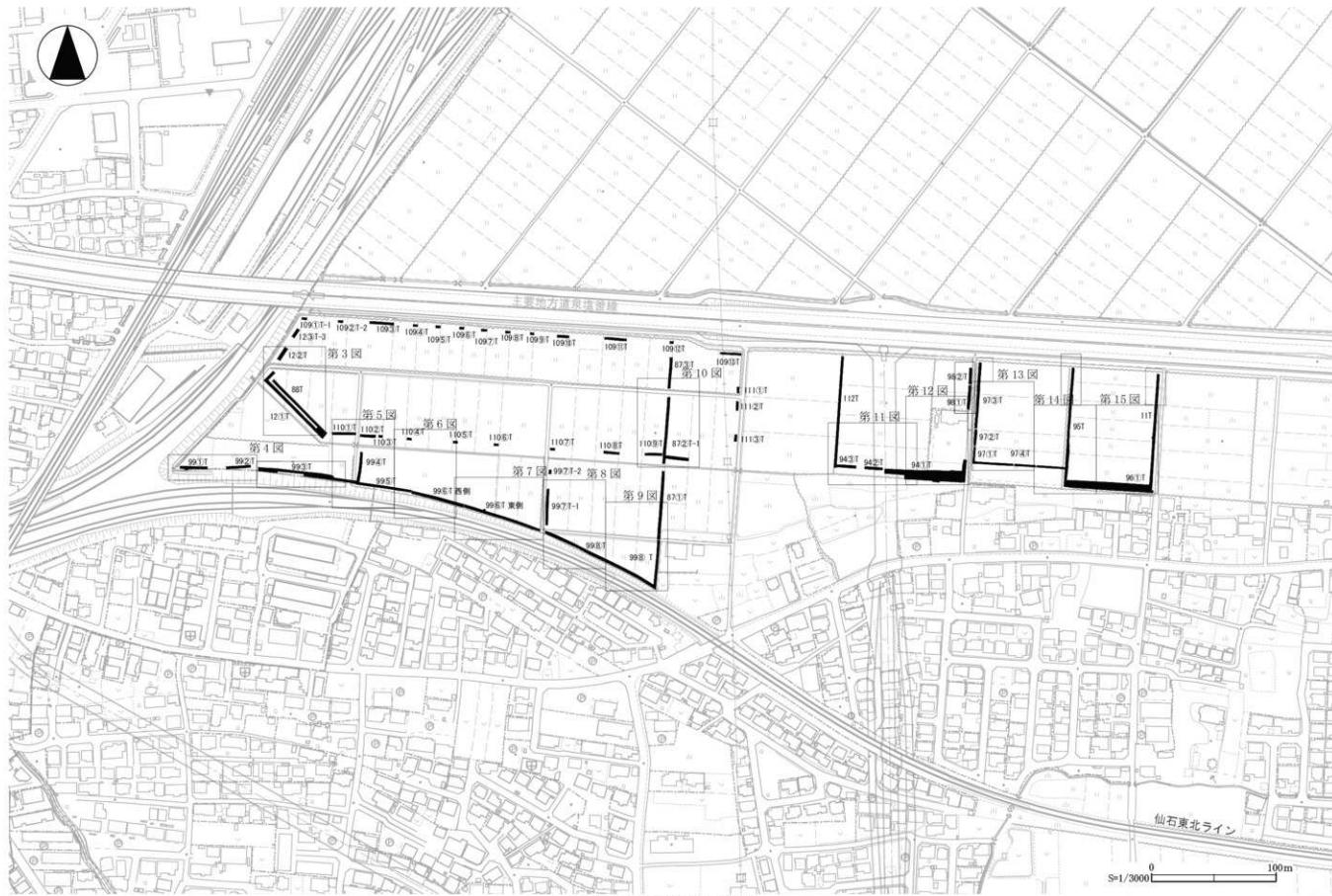
遺構名	調査区	検出長 (m)	方向		断面形	上幅 (m)	下幅 (m)	深さ (m)	堆積土	新旧関係	備考	図版	
			向き	角度								平面	断面
SD2431	134 ①	1.5+	東西	E-0°-N	皿	5.2	2.0	0.4	自然		To-a 火山灰入る 自然の落ち込み?	16	26-1
SD2432	134 ①	1.5+	東西	E-30°-N	椀	0.8	0.4	0.3	自然		上部にⅡ層類似土	17	26-2
SD2433	134 ②	3.7+	南北	N-7°-N		0.4						16	
SD2334	134 ②	3.7+	南北	N-17°-E		0.4				→ SK2437		16	
SD2435	134 ②	4.2+	南北	N-4°-E		0.6						16	
SD2442	134 ②	5.9+	南北	N-45°-E		0.8						16	
SD2444	134 ②	2.3+	南北	N-7°-E	皿	0.9	0.6	0.1	自然		To-a 火山灰入る	16	
SD2445A	134 ②	3.7+	南北	N-0°-E	皿	0.7+			自然		To-a 火山灰入る	16	
SD2445B	134 ②	3.7+	南北	N-0°-E	椀	0.5			自然		上部にⅡ層類似土	16	
SD2446	135 ①	4.0+	東西		箱堀	12.3		0.8	自然		大土壤。もしくは 大溝の終点	17	26-4
SD2447	135 ③	5.0+	東西	E-30°-S	皿	1.2+			自然			17	26-3
SD2448A	135 ①	1.2+	南北	N-16°-W	皿	2.0+	1.2	0.4	自然			18	27-1
SD2448B	135 ②	1.2+	南北	N-16°-W	箱堀	2.6+	0.3	0.5	自然		To-a 火山灰入る	18	27-1
SD2449	135 ②	1.2+	南北	N-0°-E	椀	0.6	0.2	0.3	自然			18	26-5
SD2450	135 ②	1.4+	南北	N-0°-E	椀	0.4	0.1	0.2	自然			18	26-5
SD2451A	135 ②	1.4+	南北	N-0°-E	箱堀	1.6	0.8	0.5	自然		To-a 火山灰入る	18	26-5
SD2451B	135 ②	1.4+	南北	N-0°-E	椀	0.6	0.2	0.2	自然		上部にⅡ層類似土	18	26-5
SD2452	135 ②	1.4+	南北	N-11°-E	椀	0.5	0.4	0.3	自然			18	
SD2453	135 ②	1.4+	南北	N-5°-W	箱堀	0.8	0.5	0.2	自然			18	
SD2454	135 ②	1.4+	南北	N-35°-W	皿	0.7	0.2	0.2	自然			18	
SD2455	135 ②	1.4+	南北	N-5°-W	皿	1.6	1.4	0.2	自然			18	
SD2456	135 ②	1.4+	南北	N-5°-W	椀	4.6	0.9	0.8	自然		To-a 火山灰入る	18	27-2
SD2457	135 ③	1.9+	東西	E-28°-N	皿	1.0	0.8	0.3	自然			17	
SD2458	135 ③	1.8+	東西	E-0°-N	箱堀	1.6	0.6	0.3	自然			19	27-3
SD2459	135 ③	1.8+	東西	E-9°-S	箱堀	2.6+	1.0	0.6	自然			19	27-3
SD2460	136 ①	1.8+	東西	E-25°-N	皿	0.6	0.4	0.1	自然			19	27-4
SD2461	136 ③	2.2+	東西	E-25°-N	皿	0.6			自然	SD2462 →*		19	27-5
SD2462	136 ③	1.4+	南北	N-17°-E		0.6				→ SD2461		19	

第3表 新田遺跡土壤属性表 ND114

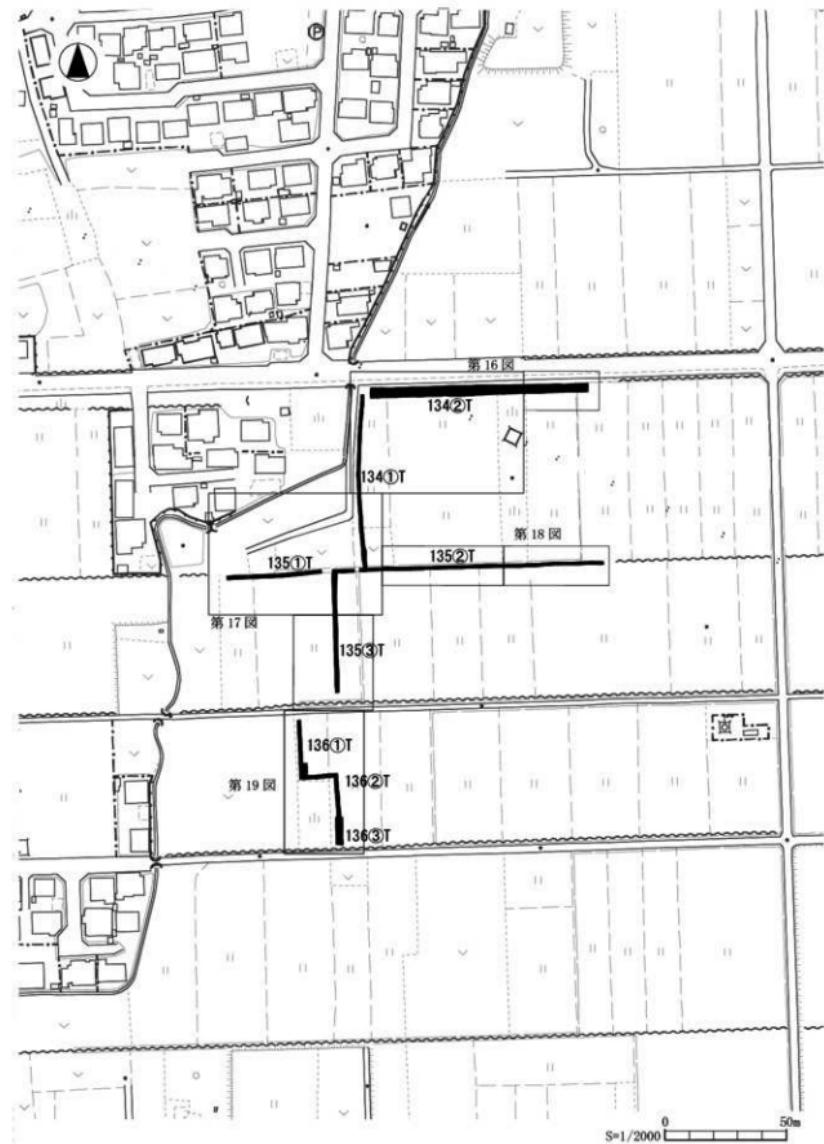
遺構名	調査区	検出面	平面形	断面形	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	堆積土	新旧関係	備考	図版	
											平面	断面
SK2366	99 ⑦ T-1	流路上	円	U字形	1.7		0.5	自然	SX2668 →		8	22-6
SK2373	94 ⑩	地山	長楕円?	U字形	1.9+	2.8	1.1	自然			11	
SK2374	112 ⑩	地山	長方?		1.6+	1.7		自然			11	
SK2379	94 ①	地山	不整		3.5+	1.9+			→ SK2380		11	
SK2380	94 ①	地山	長方?		4.0	3+			SK2379 → → SK2381 SD2378・2373		11	
SK2381	94 ①	SK2380 上	不整		2.1+	1.5			SK2379 → → SD2378		11	
SK2382	94 ①	地山	円	皿	3.7	3.5	0.8	自然			11・12	23-1
SK2383	94 ①	地山	不整		5.3+	3.5	0.3		→ SD2384	地山の産みか	12	23-2
SK2412	96	II層	円?	U字形	4.0	2.1+	1.1	自然	SB2415 →		14	25-2
SK2414	96	II層	円?	U字形	4.8	3.9+	1.5	自然	SX2413・SK2416・ SD2415 →		15	24-1

第4表 新田遺跡土壤属性表 ND119

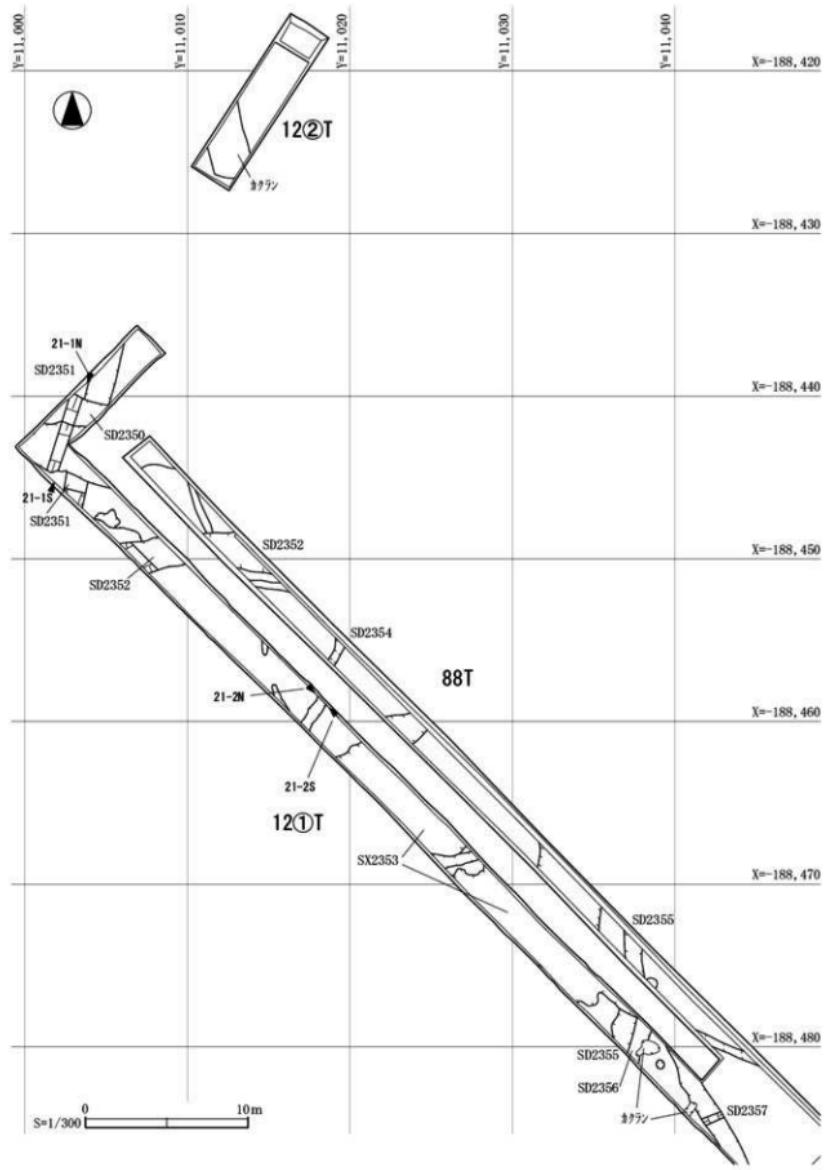
遺構名	調査区	検出面	平面形	断面形	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	堆積土	新旧関係	備考	図版	
											平面	断面
SK2436	134 ②	地山	不整円		0.9+	0.9					16	
SK2437	134 ②	地山	長楕円?		1.7	0.8			SD2434 →		16	
SK2438	134 ②	地山	不整		0.9	0.6					16	
SK2439	134 ②	地山	歪んだ長方		1.6	1.0		自然		To-a 火山灰入る	16	
SK2440	134 ②	地山	歪んだ長方		1.2	0.7		自然		To-a 火山灰入る	16	
SK2441	134 ②	地山	長方?		1.1	0.8		自然		To-a 火山灰入る	16	
SK2443	134 ②	地山	長楕円?		1.8	1.0		自然		To-a 火山灰入る	16	
SK2444	134 ②	地山	長楕円?		2.0+	1.0		自然		To-a 火山灰入る	16	



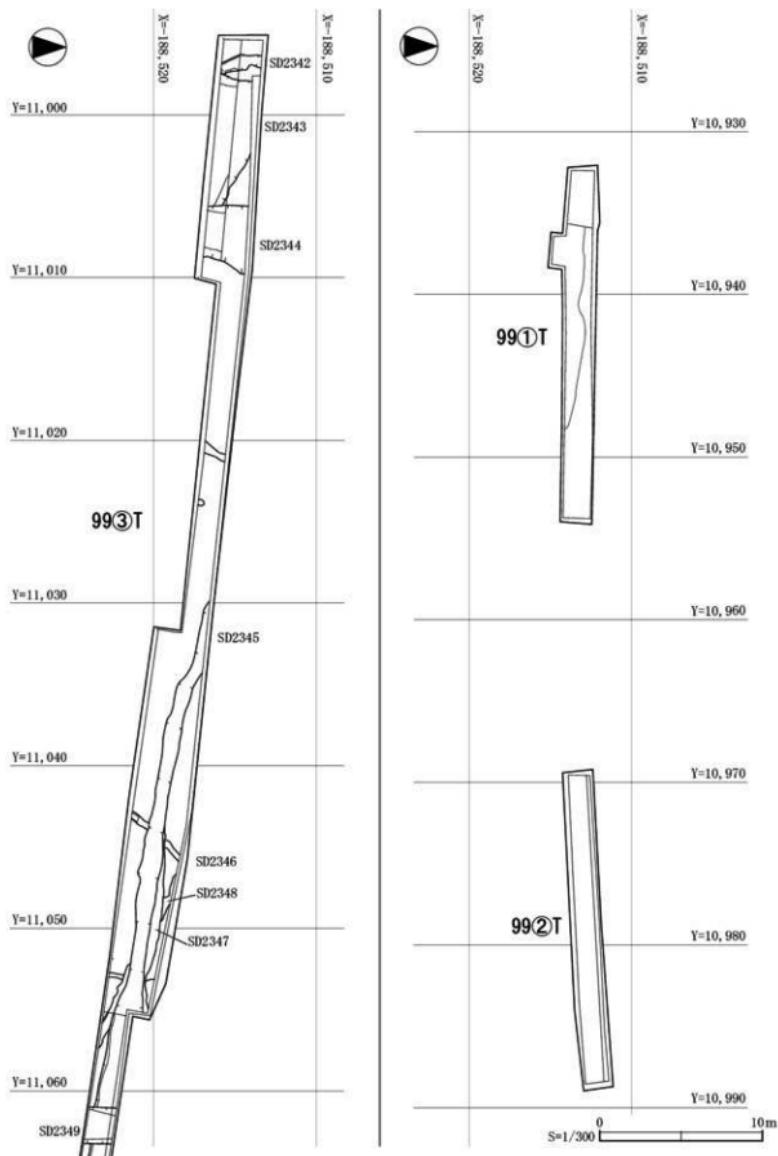
第1図 第114次調査区位置図



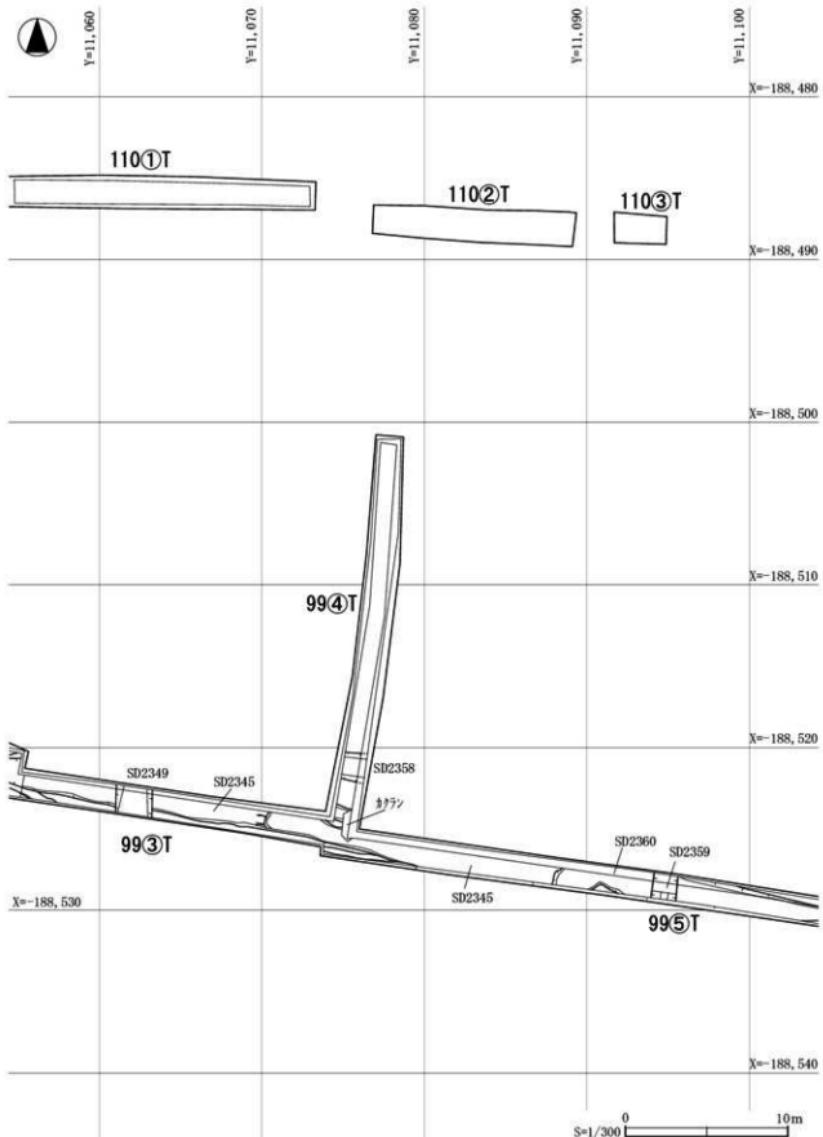
第2図 第119次調査区位置図



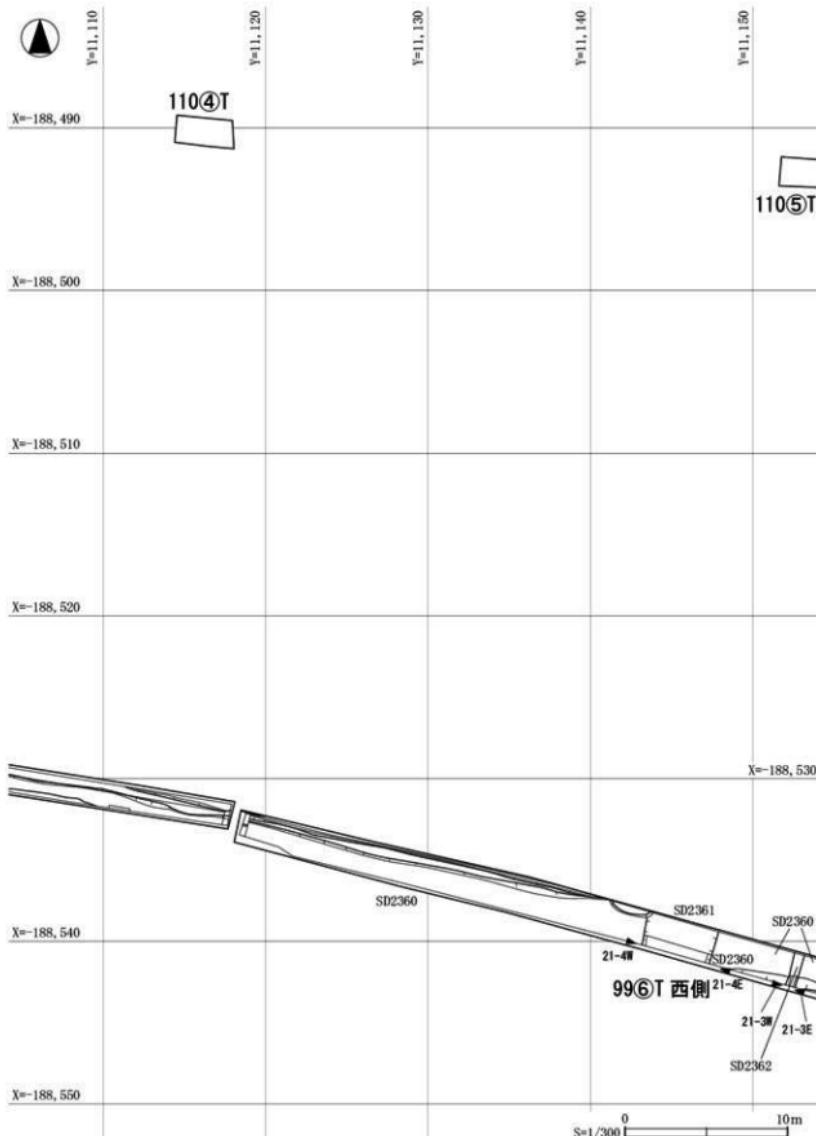
第3図 12T、88T平面図



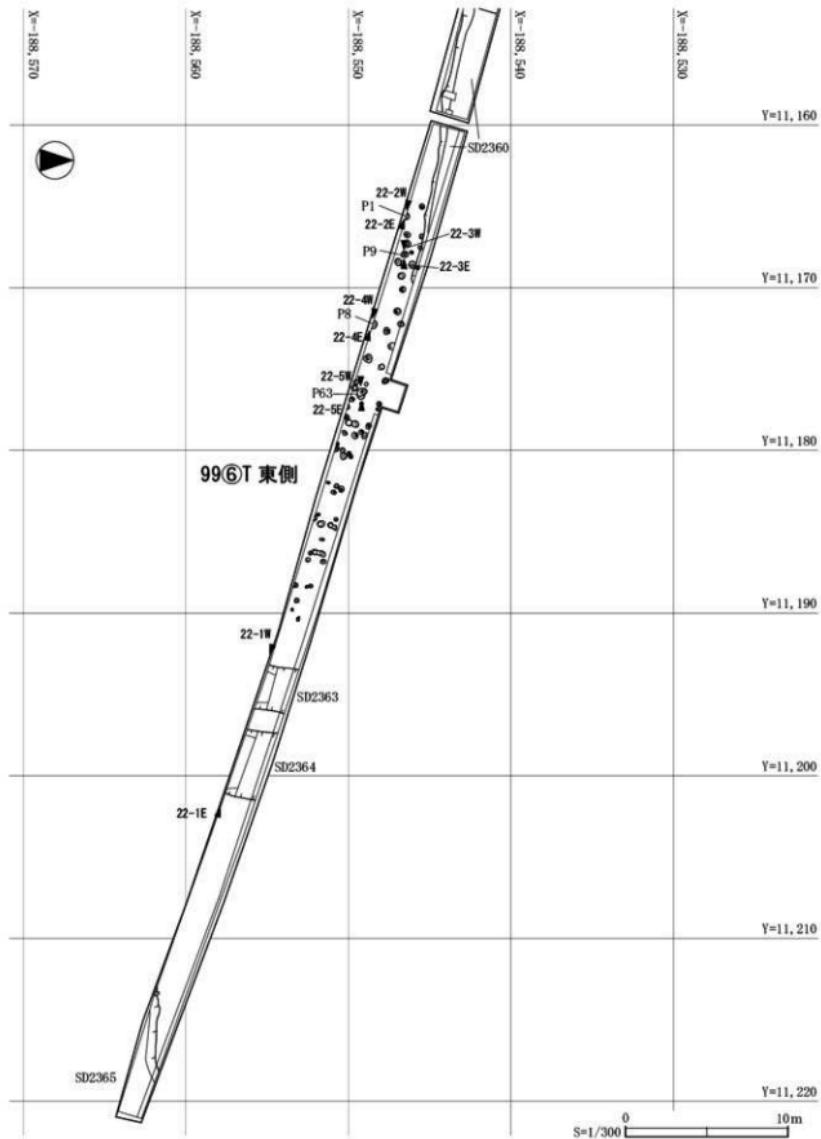
第4図 99①~③T平面図



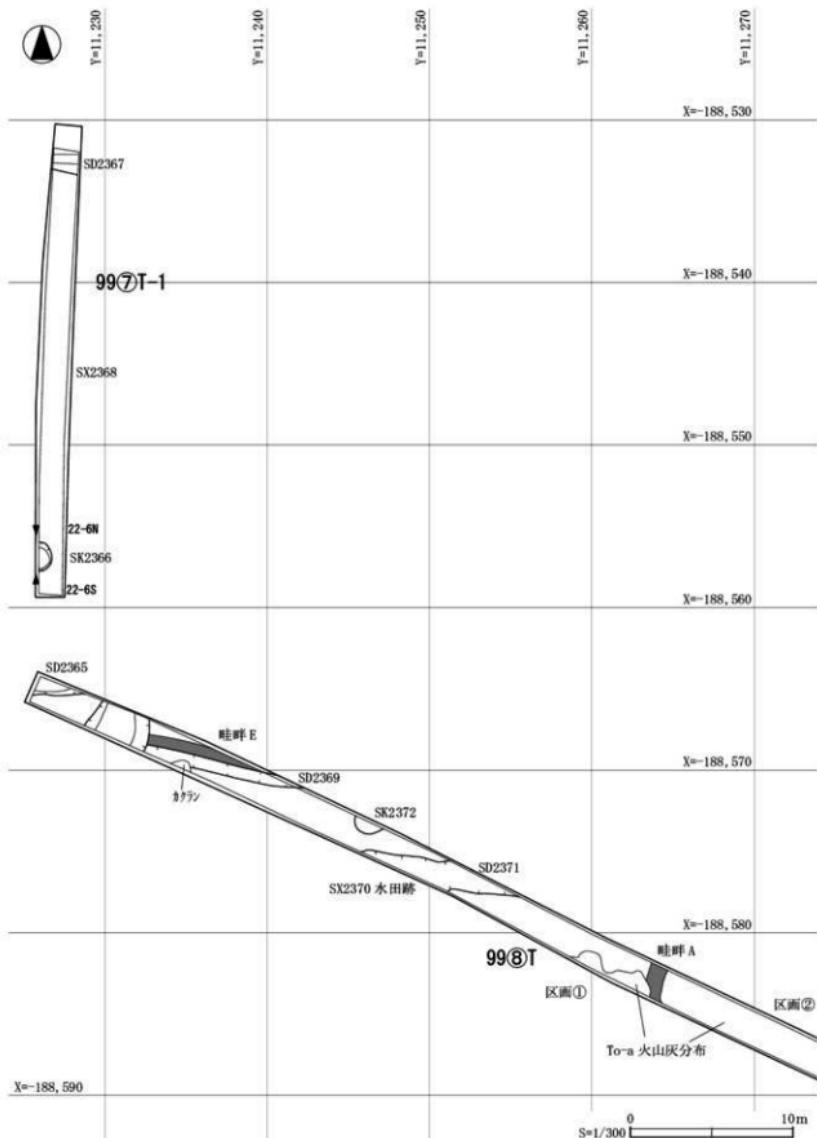
第5図 99③～⑤T、110①～③T平面図



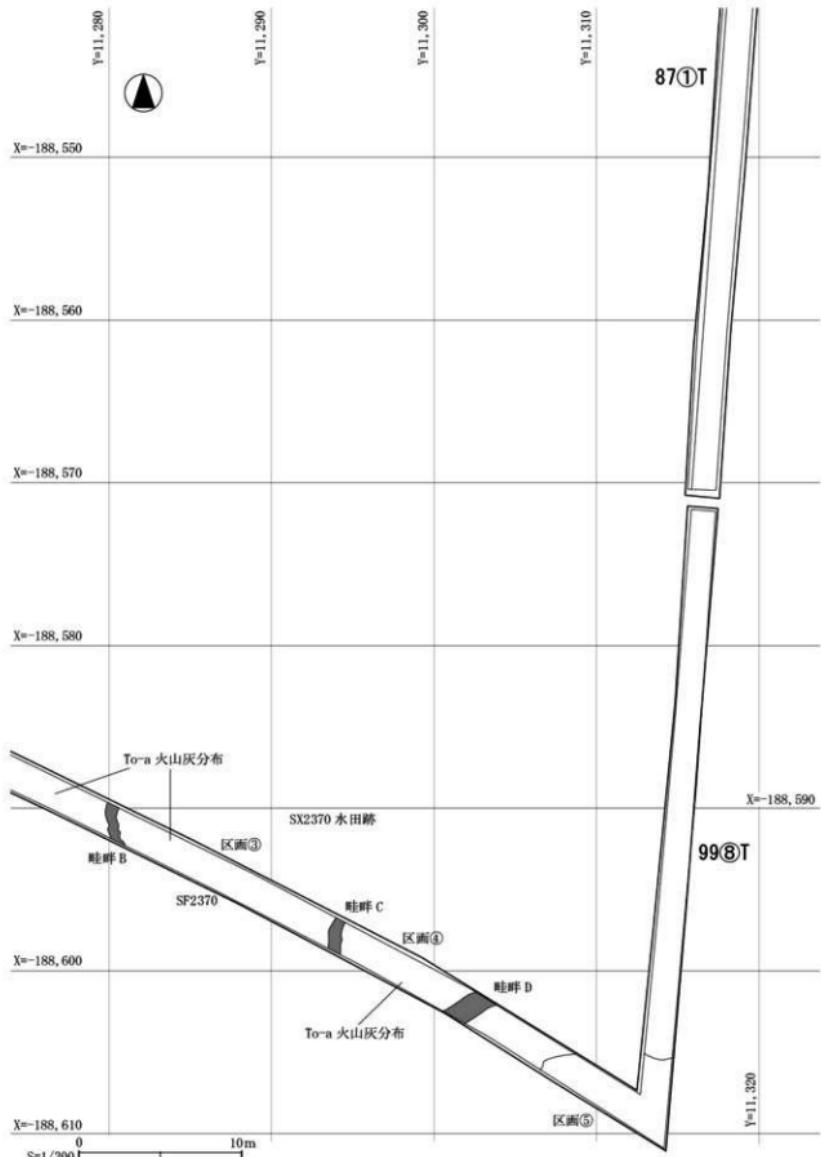
第6図 99⑥T西側平面図



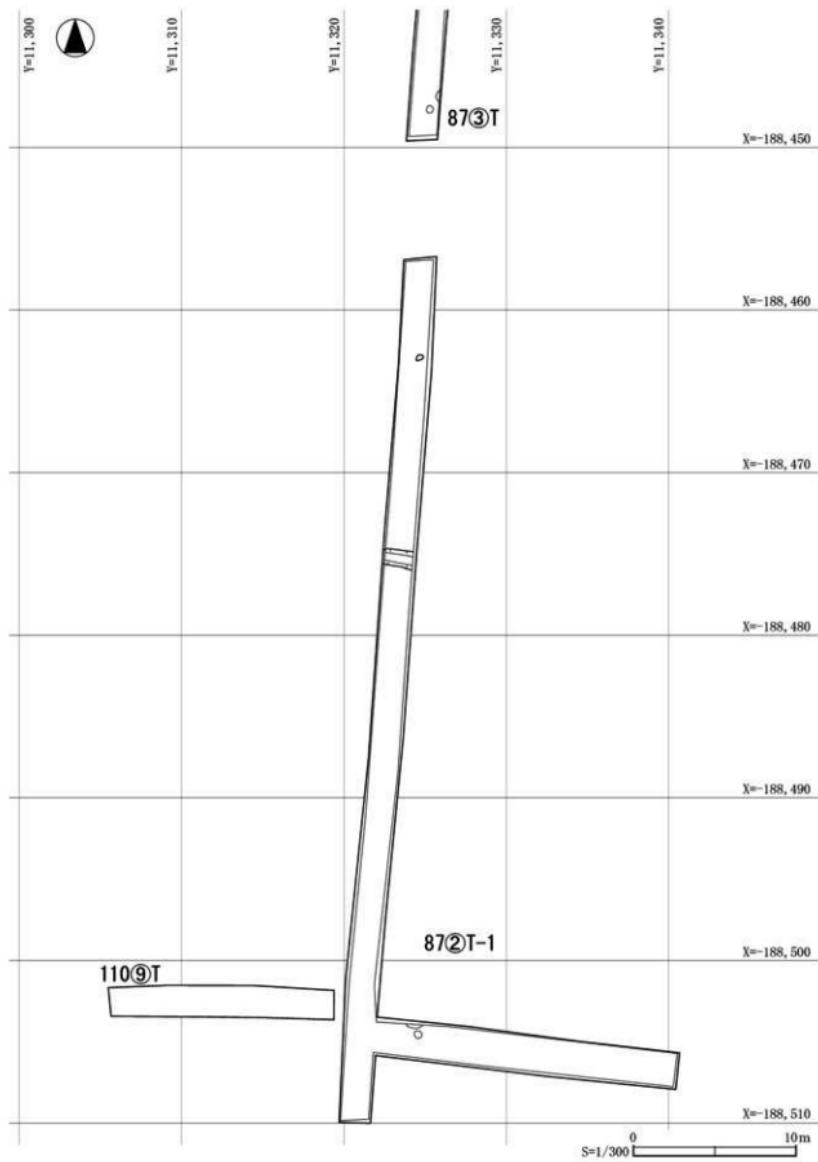
第7図 99⑥T東側平面図



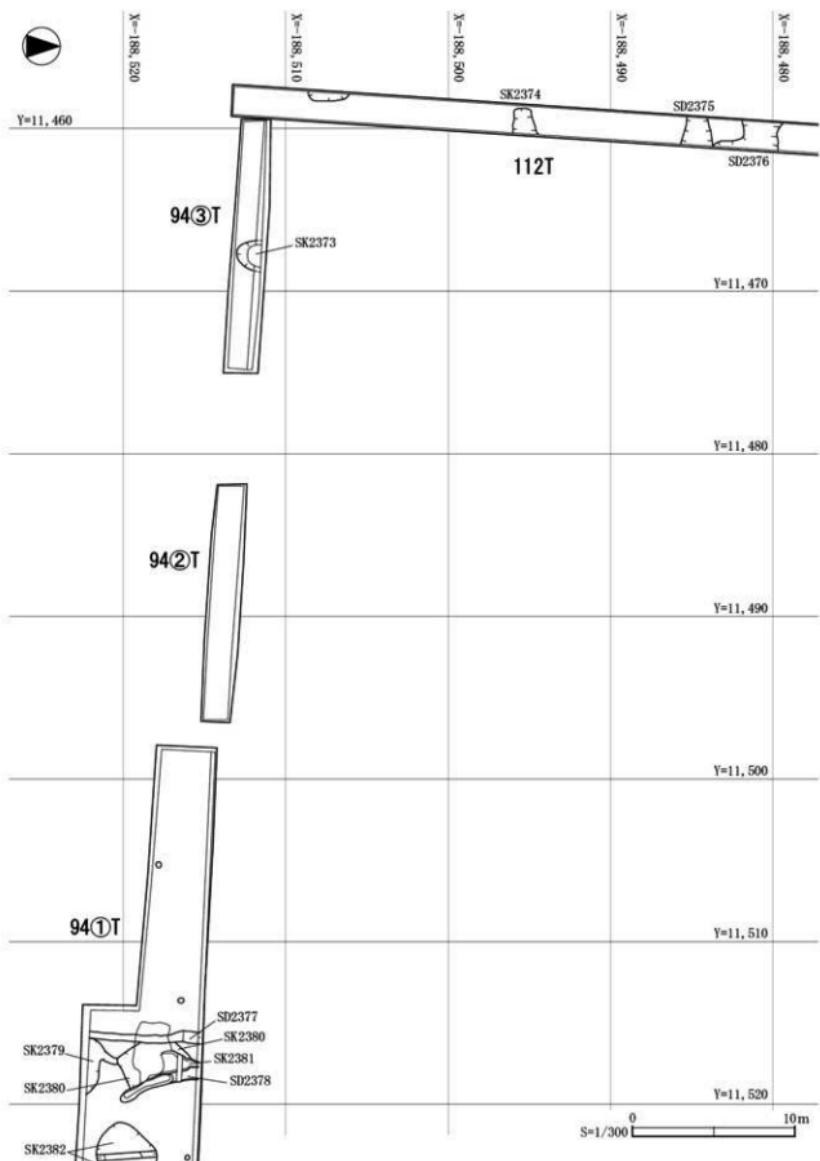
第8図 99⑦T-1・99⑧T平面図



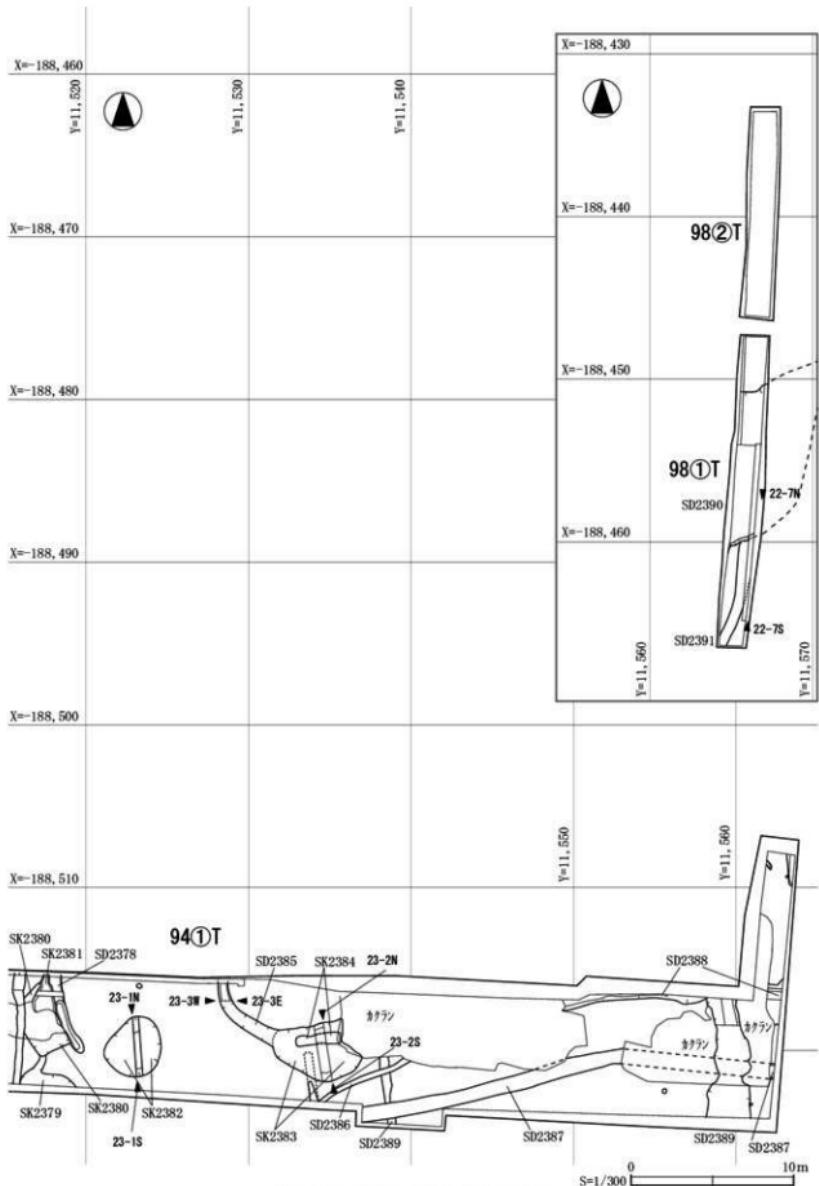
第9図 87①T、99⑧T東側平面図



第10図 87②T-1、110⑨T平面図



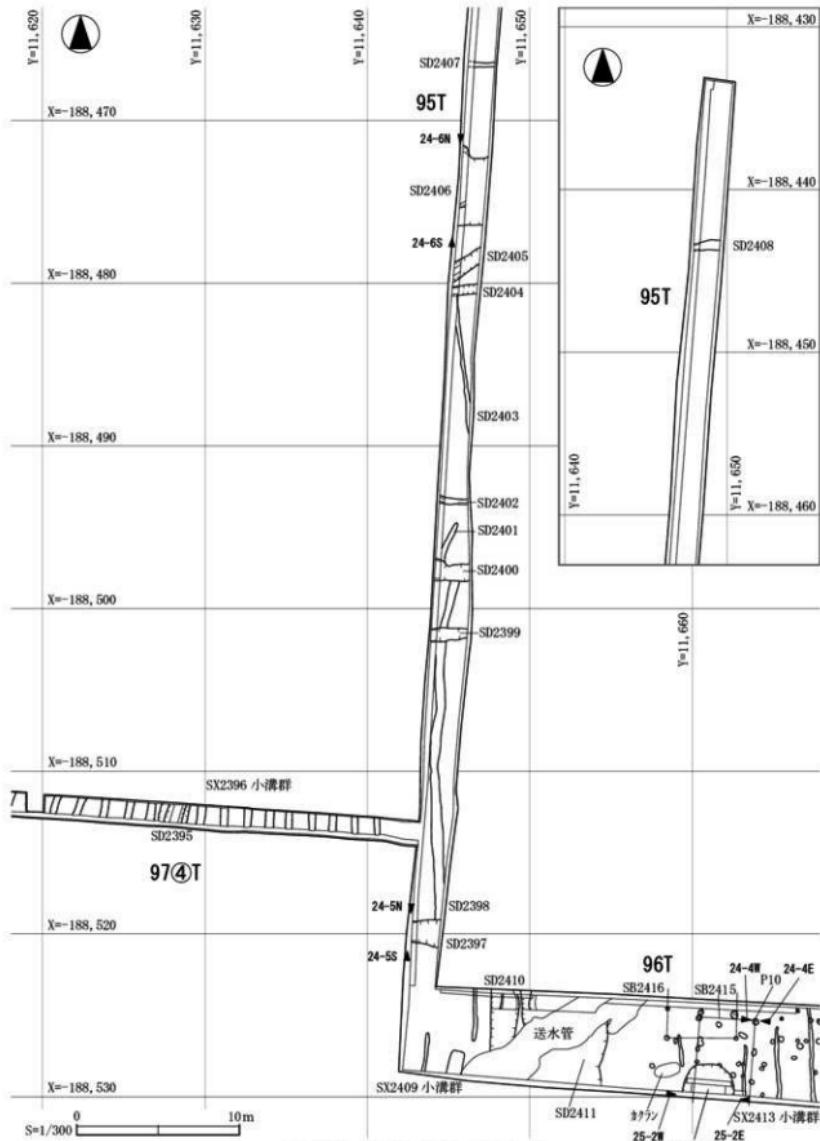
第11図 94①~③T、112T平面図



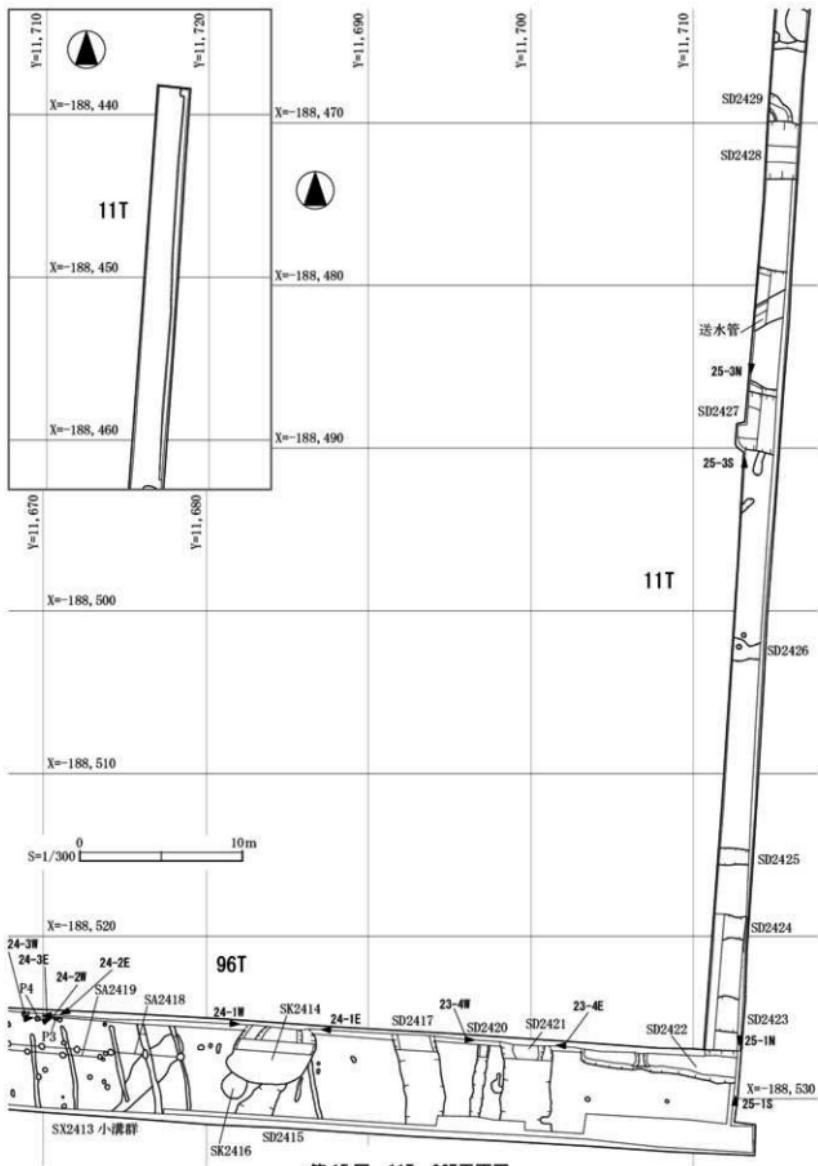
第12図 94①T、98①・②T平面図



第13図 97①~④T平面図



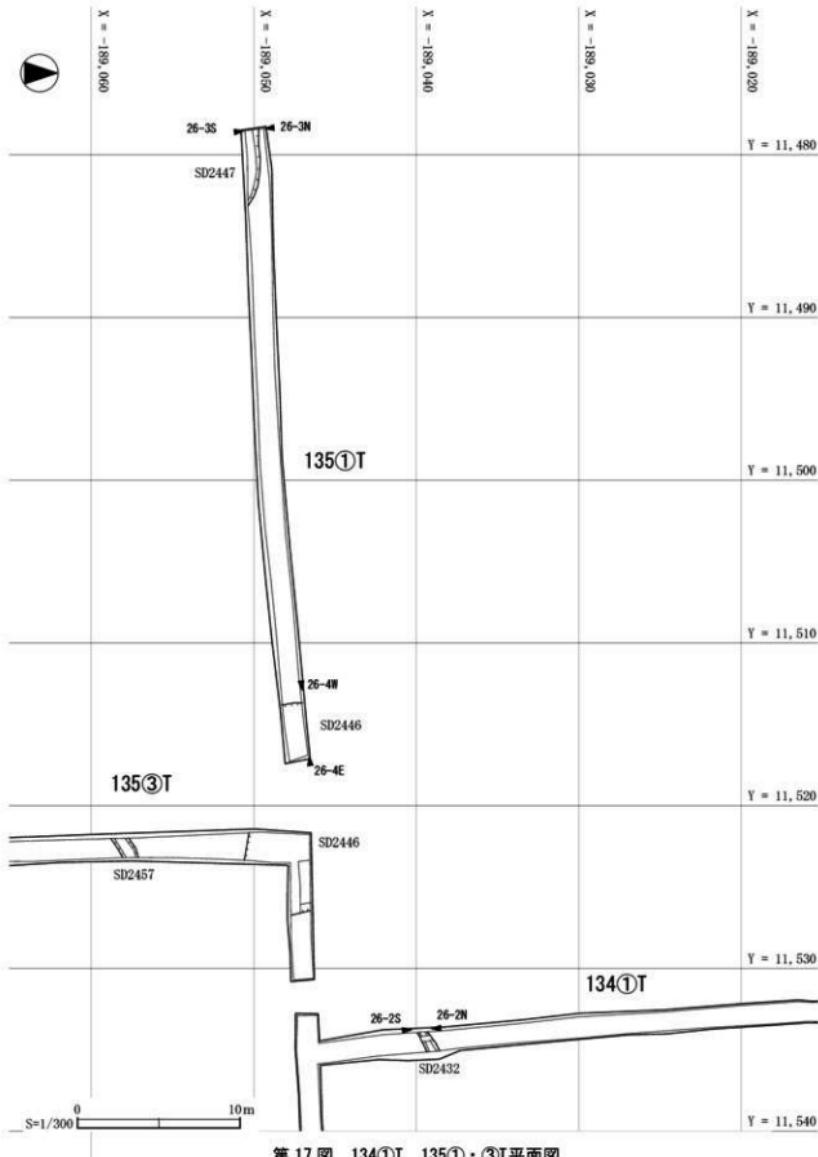
第14図 97④T、95T、96T平面図



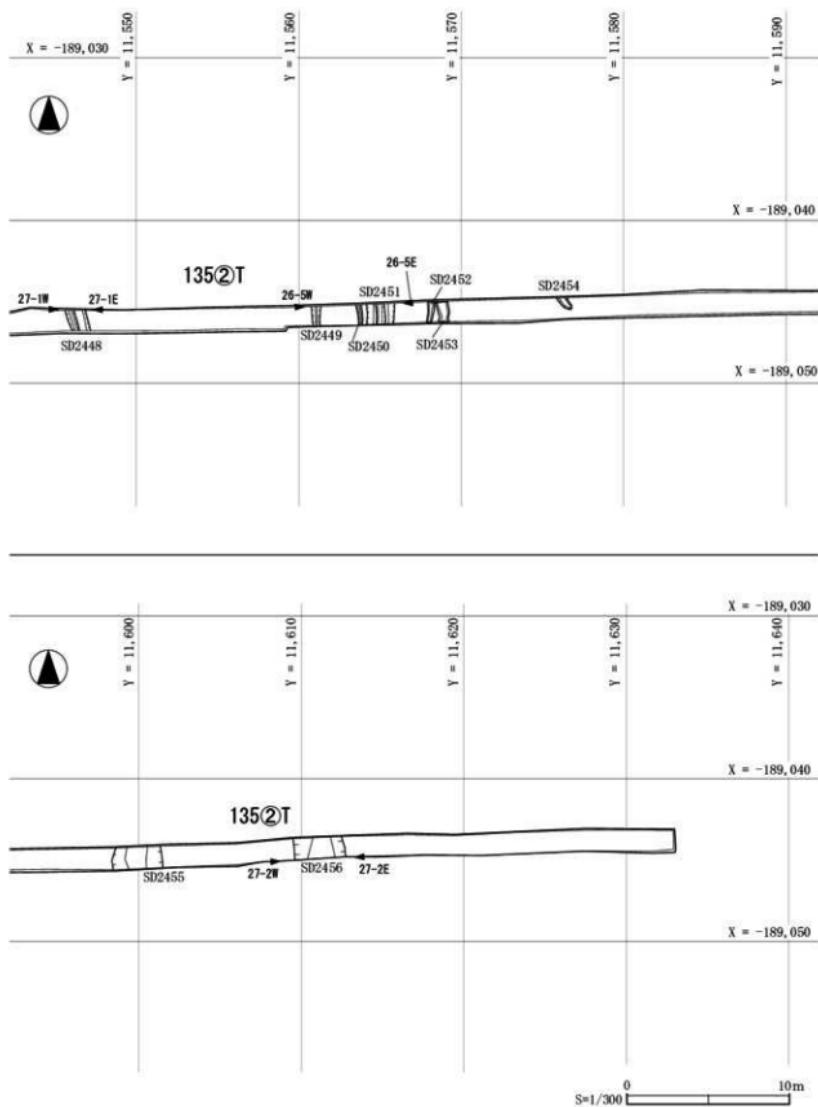
第15図 11T、96T平面図



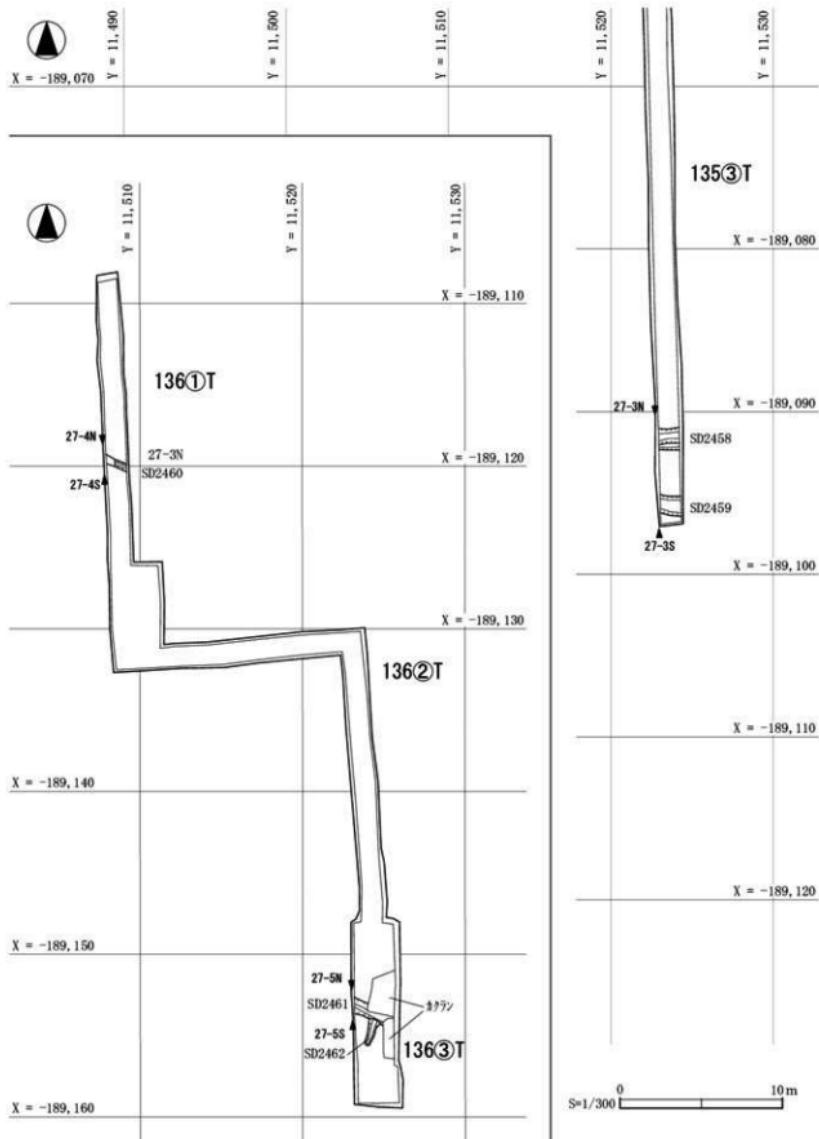
第 16 図 134①・②T 平面図



第 17 図 134①T、135①・③T 平面図



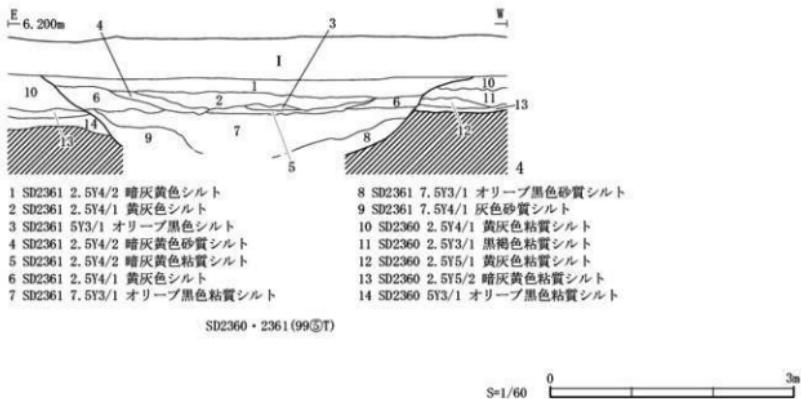
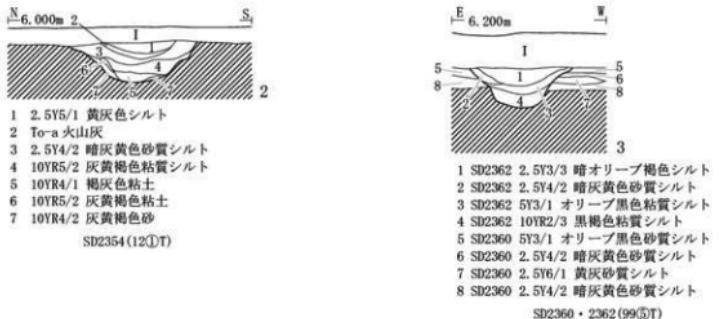
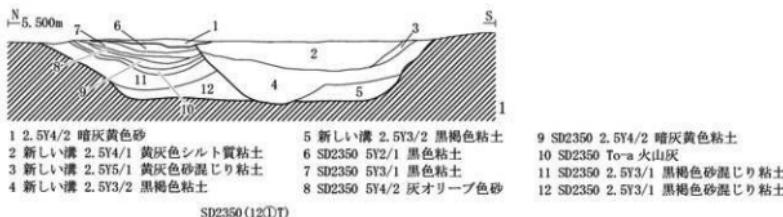
第18図 135(2)T平面図



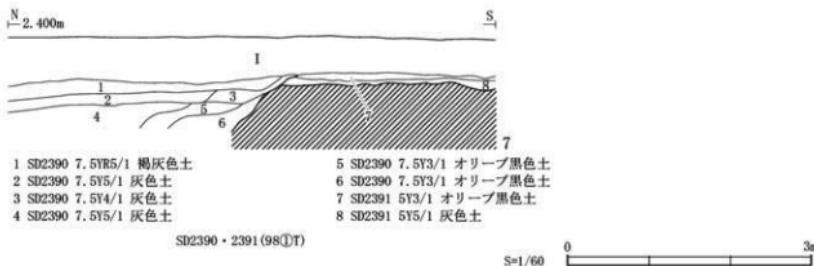
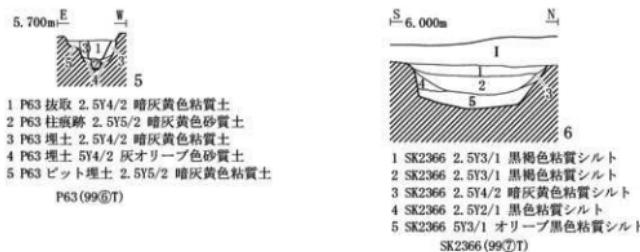
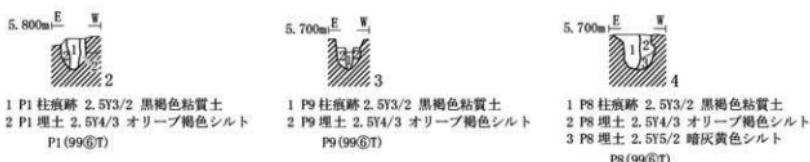
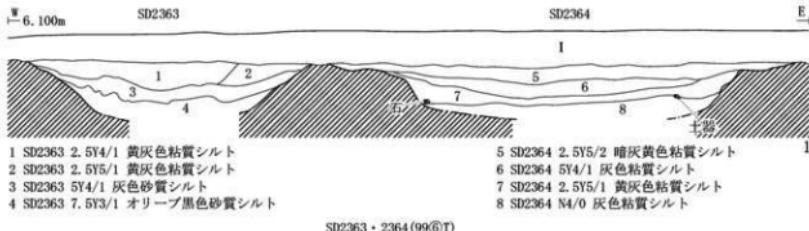
第19図 135③T、136①~③T平面図



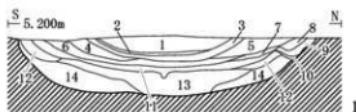
第20図 中世の大溝と調査区



第 21 図 12T, 99T 断面図



第22図 98T、99T断面図

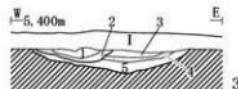


- 1 10YR2/2 黒褐色粘質土
- 2 2.5Y3/1 黒褐色粘質土
- 3 7.5Y2/1 黒色粘質土
- 4 2.5Y3/1 黒褐色粘質土
- 5 2.5Y4/2 暗灰黄色砂
- 6 5Y3/1 オリーブ黒色粘質土
- 7 2.5Y3/1 黑褐色粘質土
- 8 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂
- 9 2.5Y3/2 黑褐色砂
- 10 2.5Y5/3 黄褐色砂
- 11 To-a 火山灰
- 12 2.5Y3/2 黑褐色砂
- 13 7.5Y2/2 オリーブ黒色粘質土
- 14 7.5Y4/1 灰色砂

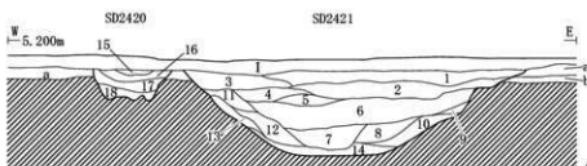
SK2382 (94①T)



- 1 SD2384 2.5Y3/2 黒褐色粘質土
 - 2 SK2383 2.5Y3/1 黒褐色粘質土
 - 3 SK2383 2.5Y5/3 黄褐色粘質土
 - 4 SK2383 2.5Y3/1 黑褐色粘質土
 - 5 SK2383 2.5Y2/1 黑色粘質土
 - 6 SK2383 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粘質土
- SD2384 + SK2383 (94①T)



- 1 別の溝堆積層 2.5Y3/1 黑褐色粘質土
 - 2 別の溝堆積層 2.5Y3/1 黑褐色粘質土
 - 3 SD2385 2.5Y3/1 黑褐色土
 - 4 SD2385 2.5Y3/1 黑褐色土
 - 5 SD2385 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質土
- SD2385 (94①T)

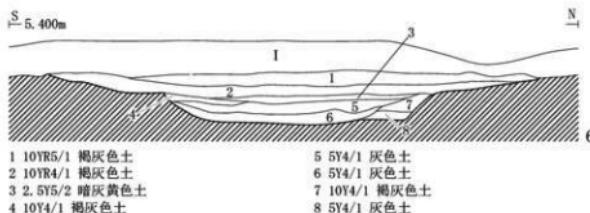
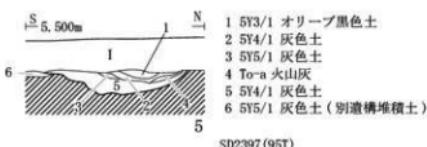
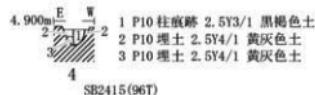
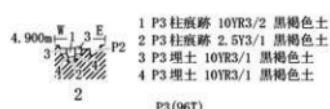
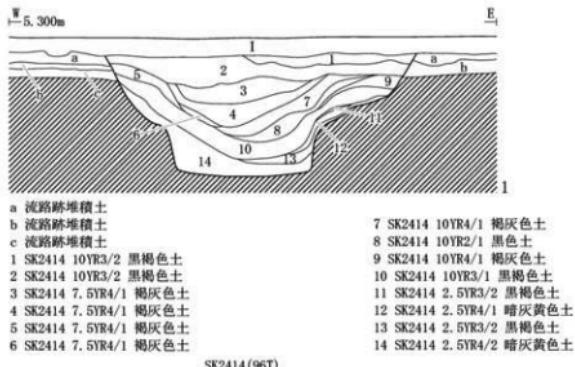


- | | |
|--------------------------|---------------------------|
| 1 SD2421 7.5Y4/1 灰色土 | 8 SD2421 7.5Y4/1 灰色土 |
| 2 SD2421 2.5Y4/1 黄灰色土 | 9 SD2421 5Y3/2 オリーブ黒色土 |
| 3 SD2421 10YR5/1 褐灰色土 | 10 SD2421 10Y4/1 灰色土 |
| 4 SD2421 10YR4/1 褐灰色土 | 11 SD2421 2.5Y4/2 暗灰黄色土 |
| 5 SD2421 10YR4/1 褐灰色土 | 12 SD2421 5Y4/1 灰色土 |
| 6 SD2421 5Y3/2 オリーブ黒色土 | 13 SD2421 5Y4/1 灰色土 |
| 7 SD2421 7.5Y3/2 オリーブ黒色土 | 14 SD2421 7.5G5/1 緑灰色土 |
| a 堆積層 | 15 SD2420 2.5Y5/1 黄灰色土 |
| b 堆積層 | 16 SD2420 2.5Y4/2 暗灰黄色土 |
| | 17 SD2420 2.5Y4/1 黄灰色土 |
| | 18 SD2420 2.5Y4/3 オリーブ褐色土 |

SD2420 + 2421 (96T)

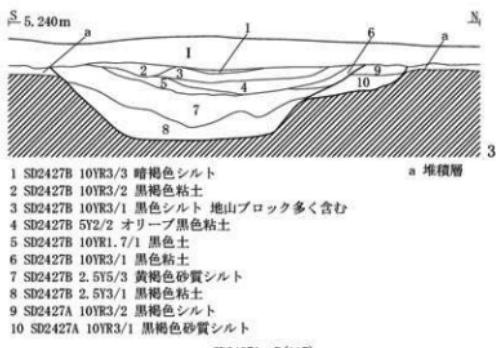
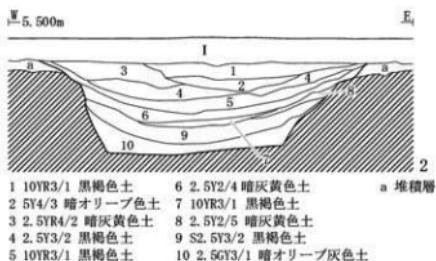
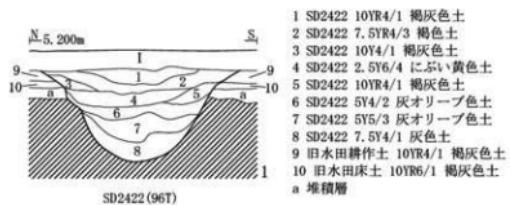
S=1/60 0 3m

第23図 94①T、96T断面図



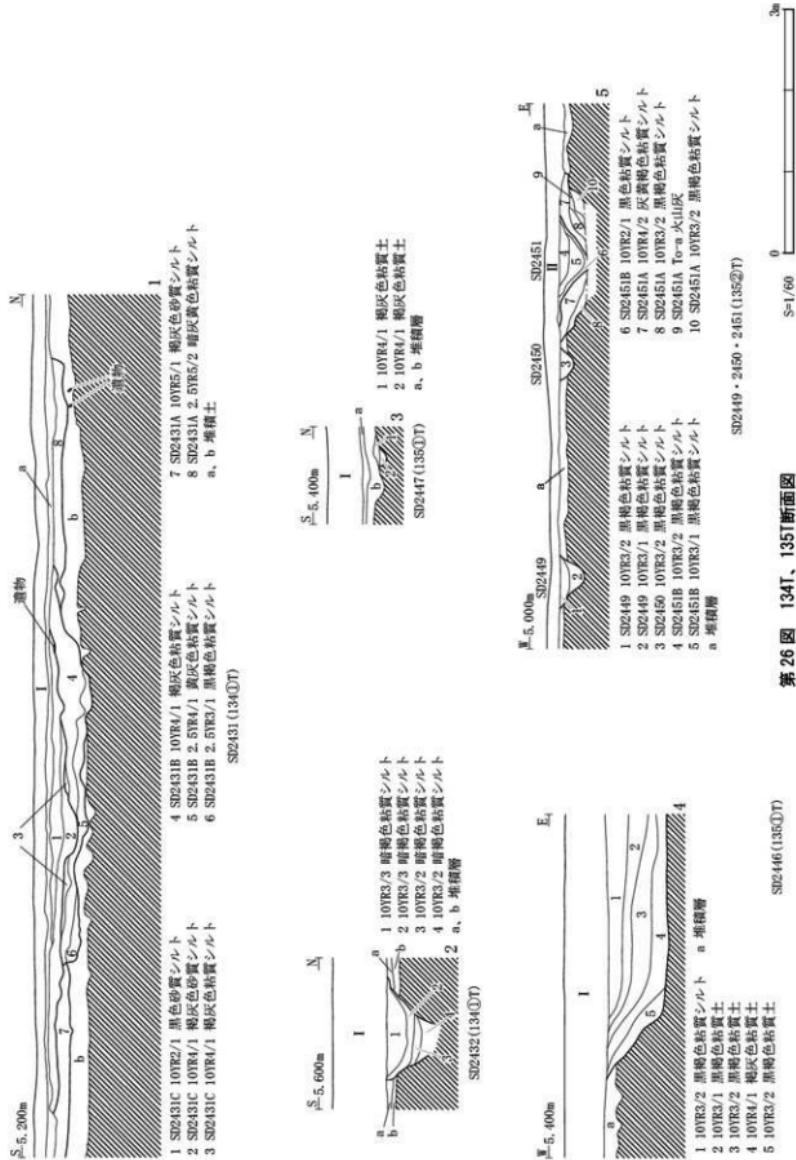
0 3m
S=1/60

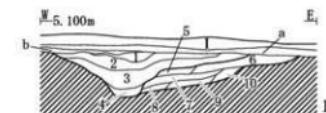
第24図 95T、96T断面図



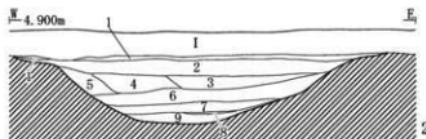
S=1/60 0 3m

第25図 96T、11T断面図

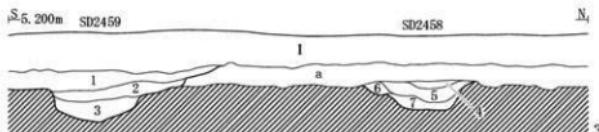




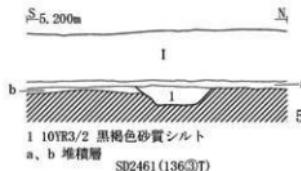
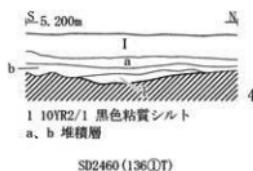
- 1 SD2448B 10YR3/2 黒褐色砂質シルト
 - 2 SD2448B 10YR3/2 黒褐色砂質シルト
 - 3 SD2448B 10YR3/2 黒褐色砂質シルト
 - 4 SD2448B 10YR3/2 黒褐色砂質シルト
 - 5 SD2448A 10YR4/1 灰黄褐色砂質シルト
 - 6 SD2448A 10YR3/1 黒褐色砂質シルト
 - 7 SD2448A 10YR3/2 黒褐色砂質シルト
 - 8 SD2448A 10YR3/1 黑褐色砂質シルト
 - 9 SD2448A 10YR2/1 黑褐色砂質シルト
 - 10 SD2448A 10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト
- a, b 堆積層



- 1 10YR4/1 褐灰色砂質シルト
- 2 10YR3/2 黑褐色粘質シルト
- 3 10YR3/1 黑褐色砂質シルト
- 4 10YR3/2 黑褐色砂質シルト
- 5 10YR3/2 黑褐色砂質シルト
- 6 10YR3/1 黑褐色粘質シルト
- 7 10YR2/2 黑褐色粘質シルト
- 8 10YR4/1 褐灰色砂
- 9 10YR3/1 黑褐色粘質シルト



- 1 SD2459 10YR3/2 黑褐色粘土
 - 2 SD2459 10YR2/2 黑褐色粘土
 - 3 SD2459 10YR2/2 黑褐色粘土
 - 4 SD2458 10YR1.7/1 黑色粘土
 - 5 SD2458 10YR4/2 灰黄褐色シルト
 - 6 SD2458 10YR3/1 黑褐色粘土
 - 7 SD2458 10YR3/2 黑褐色粘土
- a 堆積層



S=1/60 0 3m

第27図 135T、136T断面図



新田遺跡第 114 次調査区全景（東から）

1



12T 全景（南東から）

2



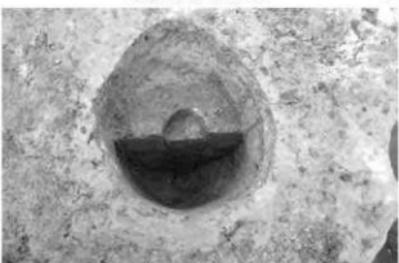
993T 全景（西から）

3



996T 柱穴群検出状況（東から）

4



996T P9 断面（北から）

5

写真図版 1



99⑧T SD2369・SX2370 検出状況（西から）



99⑧T SX2370 畦畔B検出状況（南から）



99⑧T 層序（北から）



94①T 全景（西上空から）



94①T SK2382 断面（東から）



95T 全景（南から）

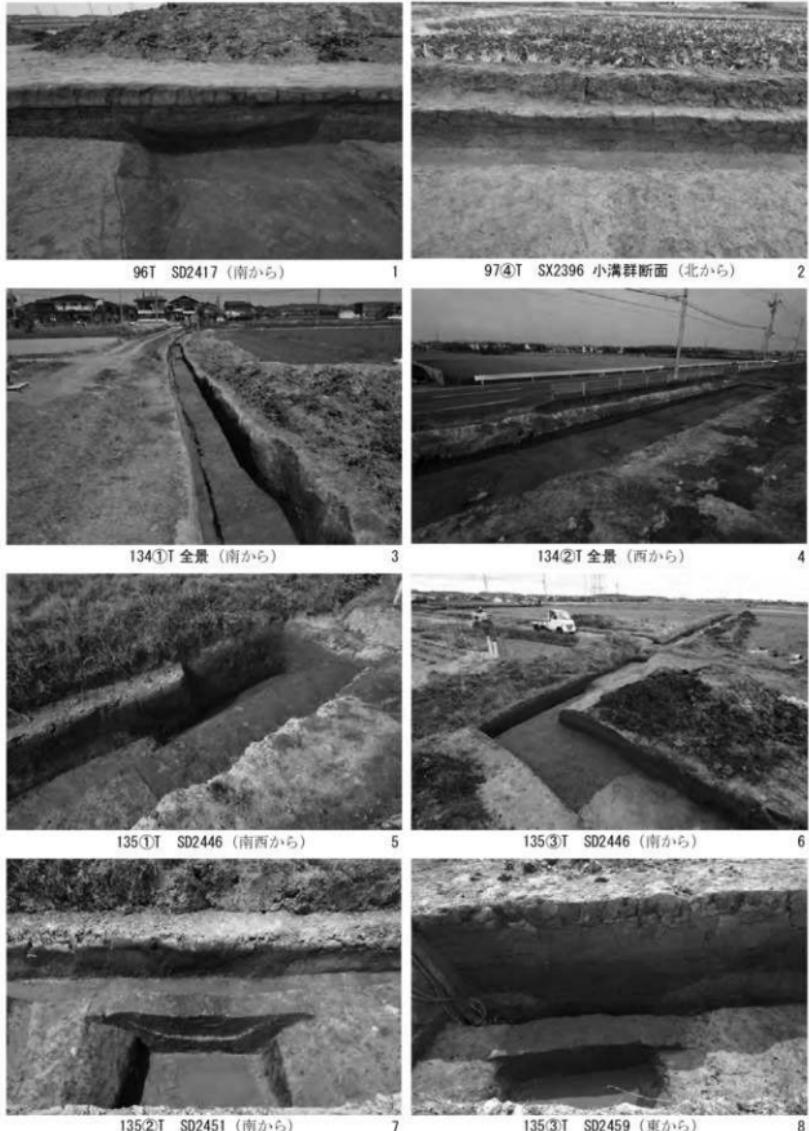


96T 全景



96T SX2413 小溝群・柱穴群検出状況（北から）

写真図版 2



写真図版 3



2

94①T SK2380



4

99⑤-⑥T SD2360



9

出土地不明



100

94①T SK2382



5

99①T 清跡



6

99⑤-⑥T SD2360



3表

94T 接出面



3裏

写真図版 4



1

135②T SD2456

VII 大日南遺跡

1 調査経過

大日南遺跡の本発掘調査及び隣接地の試掘確認調査は、平成29年度に第13次調査として実施した（第1図）。9月初旬に西側隣接地に位置する南北方向の145⑨・⑩Tから調査を開始した。ここでは、溝跡や土坑、柱穴などが発見された。同年12月中旬から平成30年2月中旬にかけては、北西側隣接地の145①～⑧T、北東側遺跡内及び隣接地の146Tの試掘確認調査を実施した。断続的に調査区を設定して遺構の分布を探ったが、いずれの調査区でも遺構が発見されないことを確認して調査を終了した。

ここでは、遺構がまとまって発見された145⑨・⑩Tの調査成果を報告する。なお、いずれの遺構からも遺物は出土しなかった。

2 発見した遺構

今回の調査では、北側の145⑨Tで溝跡5条、南側の145⑩Tで溝跡4条、土壙6基、柱穴63基を発見した。溝跡は東西方向のものが多く、南側では柱穴がまとまっている箇所がある。いずれの遺構も約0.2mの表土を掘り下げた直下の黄褐色土層（IV層）上面で検出した。

ここでは主要な遺構として溝跡8条について詳細に報告する。

SD512 溝跡（第2・3図1）

【位置・検出面・変遷】145⑨T北側で検出した溝跡である。東側と西側は調査区外に延びる。新旧2時期の変遷（A→B）が確認できる。B期はA期よりも約1m北側に位置を変えて作り替えられている。【方向】東西溝で、方向はE-8°-Sである。【規模・検出長】上幅は、A期は0.9m以上、B期は1.8mで深さは0.3mである。【断面形】新旧どちらも楕形である。

SD513 溝跡（第2・3図2）

【位置・検出面・変遷】145⑨T中央で検出した溝跡である。東側と西側は調査区外に延びる。

【方向】東西溝で、方向はE-15°-Sである。【規模・検出長】上幅は0.8m、深さは0.4mである。【断面形】楕形である。

SD514 溝跡（第2・3図3）

【位置・検出面・変遷】145⑨T中央で検出した溝跡である。東側と西側は調査区外に延びる。調査は約0.5m掘り下げたにとどまる。【方向】東西溝で、方向はE-1°-Nである。【規模・検出長】上幅4.0m、深さは0.5m以上である。【断面形】楕形ないしは皿形と見られる。

SD515 溝跡（第2・3図4）

【位置・検出面・変遷】145⑨T南側で検出した溝跡である。北東側と南西側は調査区外に延びる。調査は約0.5m掘り下げたにとどまる。【方向】北東-南西方向の溝で、方向はE-50°-Nである。【規模・検出長】上幅は4.4m、深さは0.5m以上である。【断面形】楕形ないしは皿形と見られる。【堆積土】下層となる5層は、水成堆積と見られる。

SD516 溝跡（第2・3図）

【位置・検出面・変遷】145⑩T北側で検出した溝跡である。東側と西側は調査区外に延びる。

【重複】（新）Pit 【方向】東西溝で、方向はE-26°-Sである。【規模・検出長】上幅は1.2mである。

SD517 溝跡（第2・3図5）

【位置・検出面・変遷】145⑩T中央で検出した溝跡である。北東側と南西側は調査区外に延びる。【重複】（新）Pit 【方向】北東-南西溝で、方向はE-28°-Nである。【規模・検出長】上幅は1.7m、

3 総括

深さは 0.4 m である。【断面形】楕形である。

SD518 溝跡（第 2・3 図 6）

【位置・検出面・変遷】145 ⑩ T 南側で検出した溝跡である。北西側と南東側は調査区外に延びる。【方向】北西—南東溝で、方向は E-34°-S である。【規模・検出長】上幅は 2.6 m、深さは 0.7 m である。【断面形】楕形である。

SD519 溝跡（第 2・3 図 7）

【位置・検出面・変遷】145 ⑩ T 南側で検出した溝跡である。北西側と南東側は調査区外に延びる。【方向】北西—南東溝で、方向は E-30°-S である。【規模・検出長】上幅は 2.8 m、深さは 0.4 m である。【断面形】断面形はどちらも皿形である。

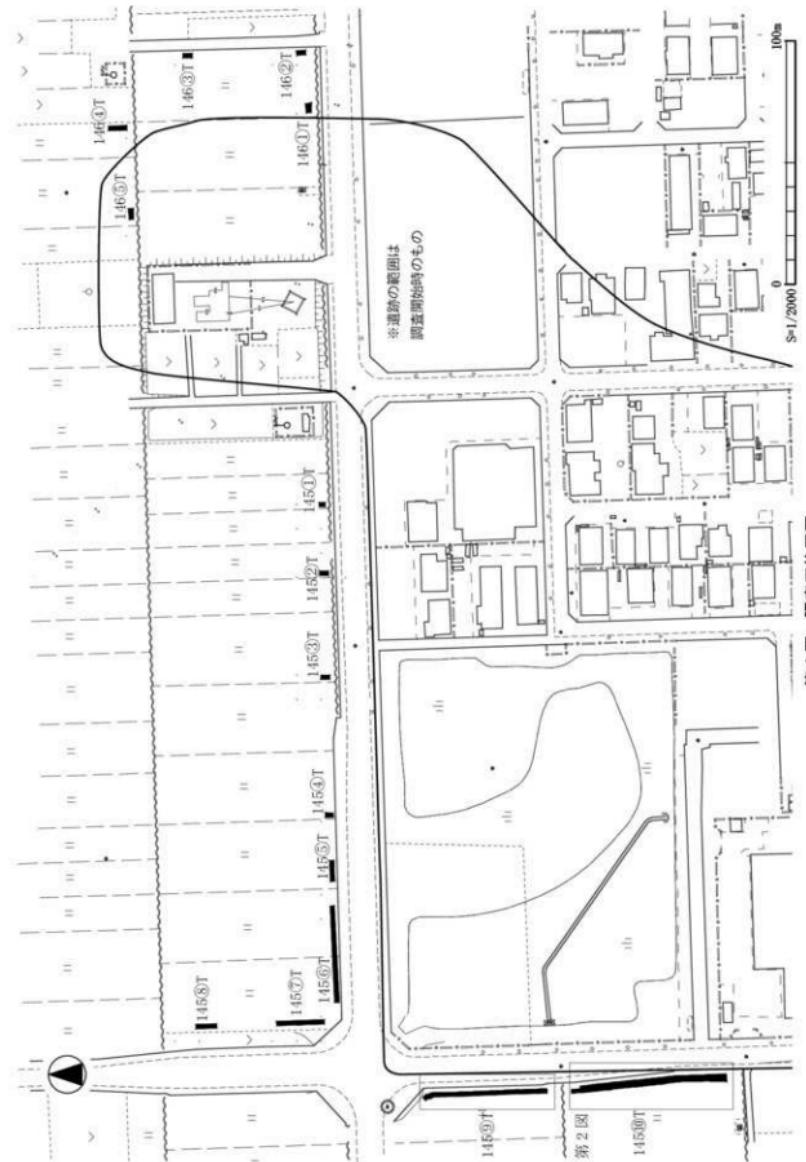
3 総括

大日南遺跡におけるこれまでの調査区と、今回の 145 ⑨・⑩ T の位置関係について、第 4 図に示した。本調査区東側の土地区画整理事業に伴い大規模な発掘調査を実施した第 1～3 次調査では、区画溝跡に囲まれた中世の屋敷跡が広がっていたことが分かっている（多賀城市教育委員会 2013）。今回の調査で発見された溝跡は東側の調査区とのつながりは不明であるが、特に 145 ⑩ T の溝跡は延長するとそれそれが概ね直交する方向に延びており、第 1～3 次調査区における屋敷跡の区画溝の様相と類似する。このことから、今回の調査で発見された溝跡の中にも、屋敷跡の区画溝の一部が存在している可能性がある。

溝跡には、上幅が 0.8～1.7 m の溝跡（SD512・513・516・517）と、上幅が 2.6～4.4 m の溝跡（SD514・515・518・519）のそれぞれがある。第 1～3 次調査では、13 世紀～14 世紀中頃には幅約 1 m 前後の溝跡が巡るのに対し、15～16 世紀頃には幅 2～3 m の大規模な区画溝へと変化する傾向が確認されている。遺物が出土していないため詳細な時期は不明であるが、今回の調査で発見された溝跡の規模の差異は、第 1～3 次調査で確認された区画溝跡規模の時期的な傾向と関連している可能性が考えられる。

参考文献

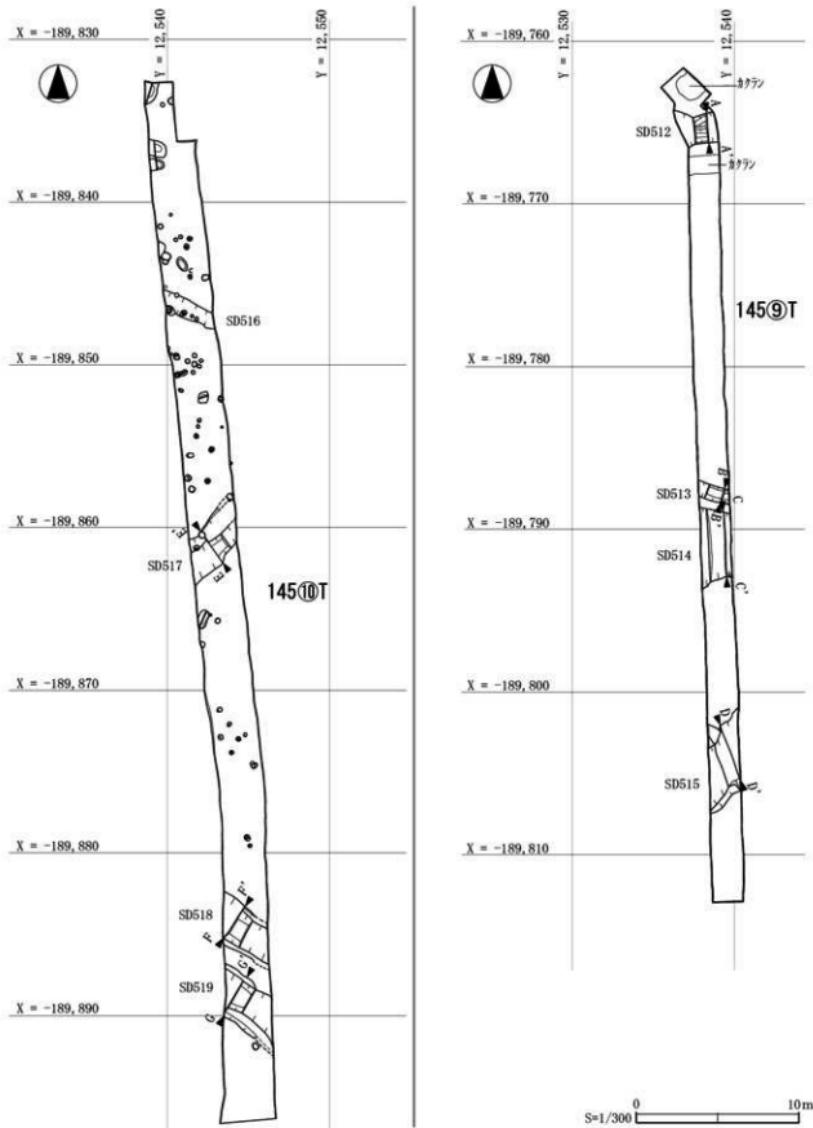
多賀城市教育委員会 2013 『多賀城市内の遺跡 1－平成 22 年度ほか発掘調査報告書一』 多賀城市文化財調査報告書第 112 集



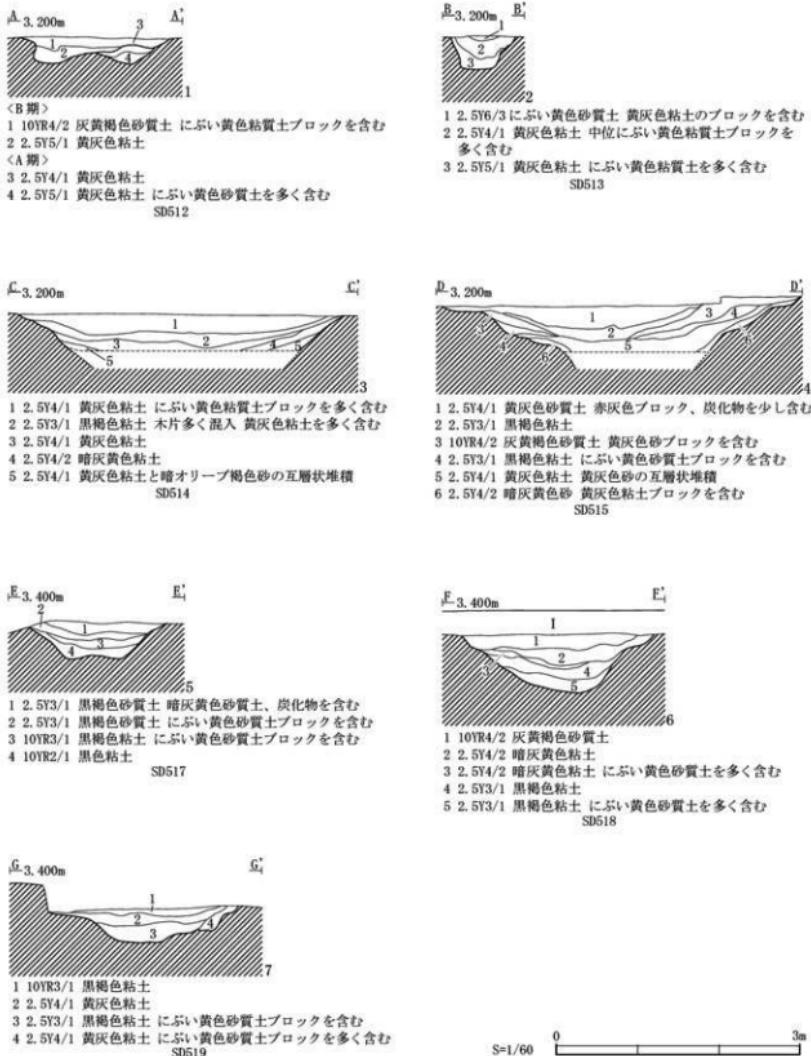
第1図 調査区位置図



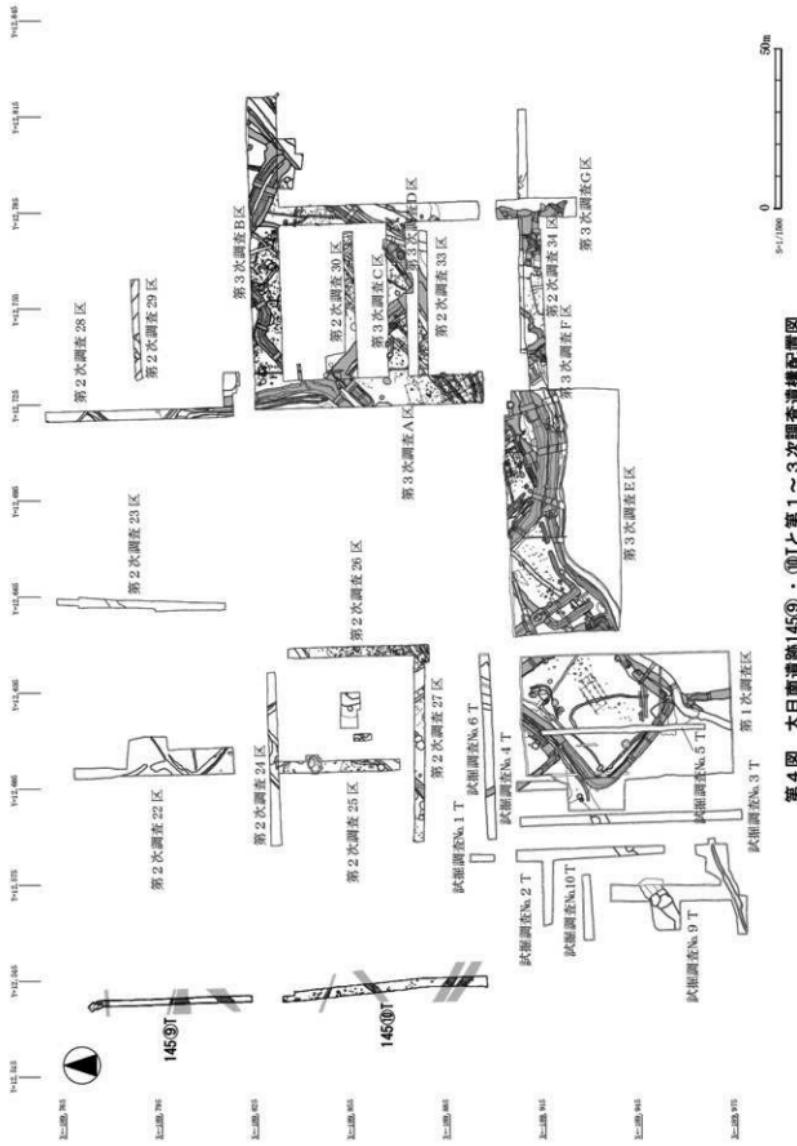
177



第2図 145⑨・⑩T平面図



第3図 145⑨・⑩T断面図 (SD512~519)



第4図 大日南道路145⑨・⑩と第1～3次調査道線配置図



145⑨T 全景（南から）



145⑩T 全景（南から）

写真図版1

VIII 山王遺跡（古墳時代）

1 調査概要

山王遺跡における古墳時代の遺構は、古代以降の遺構検出面の確認と並行して、同一検出面ないしは下層の掘り下げ調査を行う過程で、必要に応じて遺構を確認した。特に古代の地山面である基本層IV層より下層の調査は、工事の掘削深度が深くまで及ぶ箇所でしか行っていないことから、古墳時代の遺構全てを網羅的には把握していない。

前期の遺構は、堅穴建物跡1棟、溝跡2条、土壙1基、溝状遺構1基、水田跡3箇所、遺物包含層5箇所などを発見した。中期の遺構は、堅穴建物跡1棟、遺物包含層2箇所などを発見した。後期の遺構は、堅穴建物跡3棟などを発見した。

各時期の層序については、前期は古代の地山面であるIV層よりも下層のV層以下が検出面となっていたことがこれまでの調査成果から分かっており、今回の調査でも主に一部深掘りをした箇所でV層以下上面検出遺構ないしV層により形成された水田跡として確認した。このV層の年代については、山王遺跡第88次調査で古墳時代の水田耕作土の放射性炭素年代測定(AMS法)を実施した結果、曆年較正年代(1σ)で256～342cal ADの分析結果が得られており(多賀城市教育委員会2013)、概ね3世紀中頃～4世紀中頃に形成された堆積層と推定される。

中期は、104③Tで確認されたSX10425遺物包含層では古代の地山面であるIV層を2層に大別して捉えることができ、遺物はIV層を細別した層境付近からまとまって出土している。このことから、中期においてはIV層中に当時の生活面が存在していた可能性があり、ここでは遺物包含層として報告する。しかし、他の地点では同様の状況を確認できなかつたことから、調査時においては基本層IV層を細分しておらず、古代の地山としての理解にとどめている。

後期は、古代の地山面であるIV層上面で古代の遺構とともに検出されている。

2 発見した遺構と遺物

(1) 前期の遺構

S110265堅穴建物跡(第2図、写真図版1)

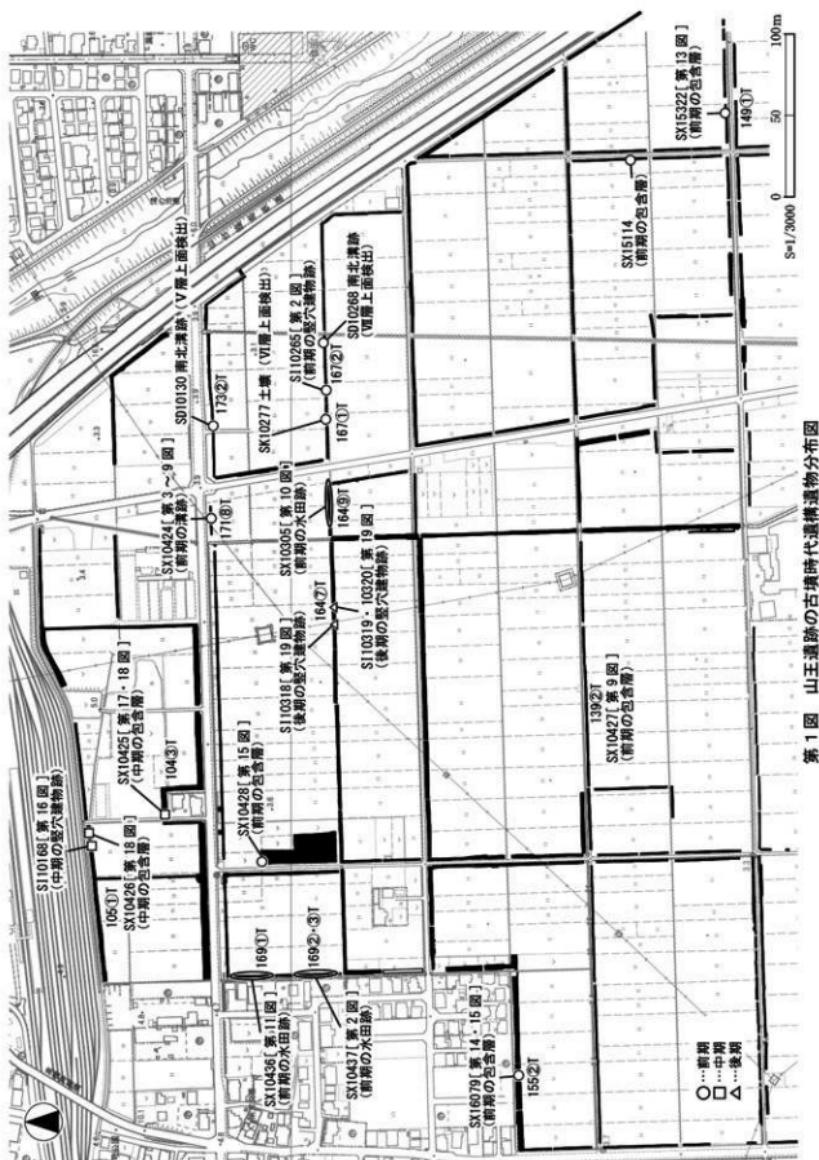
【位置・検出面・残存状況・変遷】167②T中央のV層上面及びVI層上面で検出した。周辺にIV層ではなく、遺構はIII層に覆われる。南辺及び東・西辺の一部の確認にとどまり、それ以外は調査区外に延びる。掘方及び埋土の一部を確認した。【規模・平面形・方向】東西4.9m、南北2.0m以上の方形で、方向は東辺で測るとN-21°-Eである。【床面】一部黒褐色粘土質シルトの掘方埋土及びVI層を床としている。【堆積土】2層に分けることができ、いずれも黒褐色粘土質シルトであるが、下層はにぶい黄褐色粘土ブロックをやや多く含む。【出土遺物】堆積土から遺物が出土しており、器形の復元が可能な2点を図化した。

高坏：高坏（2056）は段を持つ塊形の坏部を持ち、外面にはヘラミガキを施す。脚部は欠損しているが外方へ向かって「ハ」の字状に伸びており、円窓を有する。壺：壺（2057）は口縁部のみ残存している。所謂二重口縁壺であり、口縁部は横方向のミガキ、頸部は縦方向のミガキが施される。【年代】概ね古墳時代前期前半頃に位置づけられる。

SX10424溝状遺構(第3～9図、写真図版1・3～7・10・11)

【位置・検出面・残存状況・変遷】171⑧TのV層上面で検出した溝状遺構である。調査区南壁付近で「く」の字に屈折する。方形状に巡る溝跡の南角付近を確認したものと見られるが、調査範囲が狭隘であることから、遺構の全容は不明である。【方向】屈折部から西側では方向はN-122°-E、東側ではN-54°-Eである。

【規模・検出長】屈折部東側で測ると上幅1.7m、深さはいずれも0.3～0.4mで検出長は7.4m以上である。【断面形】南西部にテラス状の平坦面を持ち、中央部で深く落ち込む。断面の立ち上がりは緩や



第1図 山王遺跡の古墳時代遺構遺物分布図

かな皿形で、底面は概ね平坦である。【堆積土】1層は遺構埋没途中の窪みに堆積した基本層IV層である。2層は黒褐色粘質土であり、炭化物ブロックをやや多く含む。3層は黒色粘質土であり、炭化物により形成された層である。4層はにぶい黄色粘質土、5層は黒色粘質土である。【出土遺物】(第4～9図)底面から土師器壺、甕、鉢、器台、ミニチュア土器、支脚が出土している。破片資料には異なる堆積層出土のものも含まれるが、ほぼ同一レベルで破棄されていることから、一括して検討する。鉢：小型丸底鉢は器面調整がハケメのもの(2021・2032)、ヘラミガキのもの(2031)がある。後者は内外面にミガキ後赤色顔料を塗布し、精良な胎土が用いられる。浅鉢(2017)は体部が皿状で頸部が屈曲して口縁部が外傾し、内外面にミガキを施す。口頸部高に対して体部高が低く、底部はドーム状の窪みを持つ。器台：器台(2044)は内外面全体に精緻なミガキを施したのち、赤色顔料が塗布されている。円窓は4箇所に施され、台部に貫通孔を持つ。壺：単純口縁(2029)と複合口縁(2039)がある。単純口縁壺(2029)は口頸部が長い直口壺であり、頸部と体部の境に粘土紐による補強帯が施されている。体部上半に焼成後穿孔が施されている。また、底部から体部下半にかけてのみの残存ではあるが、胴部最大径は60cmを超える超大型壺(2015)が出土している。甕：単純口縁と複合口縁がある。器面調整はハケメ主体である。高坏：脚部中空で体部に稜を持つものの(2024)が出土している。胎土は精良で、内外面にヘラミガキを施す。内面には黒斑を持つ。支脚：4点出土しており、いずれも被熱により赤色化している。ユビオサエにより持ち手が作出される。胎土は粗く、砂粒を多く含んでいる。砥石：砥石(2030)は緑泥片岩ないし粘板岩である。長辺4面を研磨面とし、長軸方向の研磨を行っている。幅広の研磨痕を持つ面と、幅狭の研磨痕を持つ面がある。

【年代】概ね古墳時代前期後半に位置付けられる。詳細は総括で詳述する。

SX10305水田跡（第10図、写真図版2）

【位置・検出面】164⑨TのV層上面で検出した。畦畔Bは現代水路によって削平されており北壁断面で確認した。IV層に覆われる。【水田区画】4枚検出した。畦畔Cの西側4m以西は低くなってしまい、後世の削平もあり耕作土が残っていない。平面形がわかるものはなく、区画1・3は本来存在した畦畔が失われている可能性がある。規模は、畦畔の中心で測ると、区画1が東西17m以上で、区画2が東西4.9m、区画3が東西28m以上、区画4が東西3.8m以上である。田面の標高は区画1が2.6m、区画2・3・4が2.5mである。【耕作土・床土】耕作土は黒褐色粘土(V層由来)で、床土はV層と灰黄褐色砂質シルト(VI層)である。【畦畔・方向】東西方向の畦畔1条、南北方向の畦畔2条を検出した。断面形はかまぼこ形で、V層にVI層由来のブロックが混じる土が積み上げられている。畦畔Aは東西21m以上延びており西端で北へ湾曲している。高さは田面より0.1～0.2m高い。上幅は0.2～0.3mで、下幅は0.6～1.1mである。方向は、畦畔Aの東西部部分がE-4°-Sであり、畦畔CがN-9°-Eである。

SX10436水田跡（第11図、写真図版2）

【位置・検出面】169①TのV層上面で検出した。区画1の北側の畦畔Aと区画5の南側の畦畔Fは断面でのみ確認した。IV層に覆われる。【水田区画】6枚検出した。畦畔Fより南側は4m程V層が平坦であり水田であった可能性があるが、さらに南側は標高が次第に低くなってしまい、この部分には水田は存在しなかったと思われる。平面形がわかるものはない。規模は、畦畔の中心で測ると、区画2が南北3.6m以上で、区画3が南北3.6m以上、区画4が南北3.9m以上である。区画1は断面図では南北10m程、区画5は南北9.2mで、他の区画より大きい。田面の標高は、区画1・2・3が3.4mであり、区画4・5・6が3.3mである。【耕作土・床土】耕作土は灰黄褐色粘質シルト(V層)で、床土は浅黄橙色粘質シルト(VII層)である。【畦畔・方向】東西方向の畦畔3条、南北方向の畦畔1条を検出した。畦畔A・Fの方向は不明である。断面形はかまぼこ形で、V層上にVI層由来のブロックが混じる土が積み上げられている。高さは田面より0.1～0.2m高い。上幅は0.2～0.7mで、下幅は0.6～1.0mである。方向はバラつきが大きいが、畦畔CがN-24°-E、畦畔DがE-15°-S、畦畔EがE-10°-Nである。なお、畦畔Cと畦畔D付近の西壁断面には高まりが1ヶ所しかなく、水口で畦畔が切れていた、もしくは畦畔C・Dが接続していた可能性などが考えられる。

SX10437水田跡（第12図）

【位置・検出面】169②・③TのV層上面で検出した。IV層に覆われる。【水田区画】3枚検出した。畦畔Aより北側はIV層により削平されV層が残っていないが、北側の169①Tの状況から、この部分には水田は存在しなかったと思われる。また、畦畔Dより南側もV層の標高が次第に低くなっていることから水田は存在しなかったと思われる。規模は、区画1が畦畔の中心で測ると南北11.8m以上で、区画2が南北6.7m以上、区画3が南北5.2m以上である。田面の標高は区画1・2が3.2mであり、区画3が3.1mである。

【耕作土・床土】耕作土は黒色粘土(V層)で、床土は灰黄褐色砂(VI層)である。両者の間のV b層としたものは耕作等によって両者が混じったもの可能性がある。【畦畔・方向】東西方向の畦畔3条、南北方向の畦畔1条を検出した。断面形はかまぼこ形で、V層にVI層由来のブロックが混じる土が積み上げられている。畦畔Aには積手の違いがみられる。高さは田面より0.1～0.3m高い。規模は、畦畔A・Bが上幅は1.2m程で、下幅は2.4mで大規模であり、畦畔Cが上幅0.7m、下幅1.8m、畦畔Dが上幅0.4mで下幅0.9mである。全体的に北側にあるSX10436の畦畔より大規模である。方向は、畦畔AがN-18°-E、畦畔BがE-12°-S、畦畔CがE-15°-S、畦畔DがE-3°-Sである。

SX10427遺物包含層（第9図）

【位置・堆積状況】139②Tで確認した遺物包含層である。基本層第IV層に該当する。【出土遺物】壺：壺は1点出土している。複合口縁壺(1735)は体部下半に最大径がある下膨れ形状である。【年代】概ね古墳時代前期に位置付けられる。

SX15322遺物包含層（第13図、写真図版2）

【位置・堆積状況】149①Tで確認した不整形に壅む構状の遺物を包含する堆積層である。【規模・平面形】東西3.0m以上、南北0.8m以上、深さ約0.2mの不整形の壅地に均質なにぶい黄褐色土が堆積し、土器を多数包含する。遺構の一部を確認できたのみであり、詳細な平面形状は不明である。【出土遺物】甕：甕(1795)は口縁部が「く」の字状で体部内外面にハケメを施す。底部は輪台充填技法である。鉢：鉢(1804)は比較的小型で浅く、外反する口縁部を持つ。内外面にミガキが施されている。高坏：図示していないが、高坏(1805・1806)が出土している。高坏(1805)は有窓の脚部であり、器面に赤色顔料が塗布されている。1806は坏部であり、内彎しながら外傾して伸びる形状である。【年代】概ね古墳時代前期に位置付けられる。

SX16079遺物包含層（第14・15図、写真図版10）

【位置・堆積状況】155②Tで確認した遺物包含層である。基本層第V層に該当する。【出土遺物】壺：壺は3点出土している。壺(1688)は体部に縱方向のハケメを施し、口縁部ではヨコナデ痕が残る。内面は横方向のヘラナデである。高坏：1点出土している。(1691)は内彎しながら外傾して伸びる坏部と、外反しながら「ハ」の字形に外下方に伸びる器形を持つ。外面は摩耗しているが、脚部に縱方向のミガキを持つ。円窓は3箇所確認できる。器面に赤色顔料が塗布されている。壺：直口壺(1695)は、体部径に対して口縁径が小さく、直立気味に外傾する口縁を持つ。甕：小型甕(1698)は比較的短めの口縁部に、やや下膨れ気味の体部を持つ。外面には縦方向のケズリが施され、赤色顔料が塗布されている。器台：器台は2点出土している。内彎する小さな受部を持ち、脚部が直線的に外下方に伸びるもの(1692)と、直線的に外傾する小さな受部を持ち、脚部が「ハ」の字状に広がるもの(1693)がある。前者は器面に赤色顔料が塗布されている。いずれも3か所の円窓を持ち、受部径に対して脚部径が大きい。【年代】高坏・小壺・器台等から概ね古墳時代前期前半に位置づけられる。

SX10428遺物包含層（第15図）

【位置・堆積状況】177Tで確認した遺物包含層である。基本層V層に該当する。【出土遺物】壺：壺(1946)は球胴状の体部であり、口縁部は「く」の字状に外反する。外面は縦方向に丁寧なヘラミガキが施されている。【年代】概ね古墳時代前期に位置づけられる。

(2) 中期の遺構

SI10168竪穴建物跡（第16図、写真図版2）

【位置・検出面・残存状況・変遷】105①T中央のIV層上面で検出した。削平のため、表土剥ぎの段階で大部分が床に達しており、住居内埋土は確認できていない。床面の貼り換え及び炉の作り替えが確認できる。

【規模・平面形・方向】東西5.2m以上、南北2.5mの方形で、方向は南辺で測るとE-8°-Sである。【床面】第一次床面は地山を床とし、第二次床面はIV層由来のにぶい黄褐色粘質土の貼床を床としている。【炉】第一次床面に伴う炉を2基確認した。1号炉は建物中央の南寄りに位置し、直径約0.6mの範囲に被熱範囲が認められる。2号炉は1号炉よりも約1m東側にある。【周溝】南壁の一部で、第一次床面に伴う幅0.5m、深さ15cmの周溝状の掘り込みを確認した。【出土遺物】甕：甕(729)は掘方から出土した。口縁部は緩く外反し、体部外面にヘラミガキ調整を施す。高坏：1層から3点出土した。いずれも坏下部にケズリを施しており、明瞭な稜を持つ。【年代】概ね古墳時代中期前半に位置付けられる。

SX10425遺物包含層（第17・18図、写真図版2・8・10）

【位置・堆積状況】104③Tで確認した遺物包含層である。基本層IV層に該当する。【出土遺物】壺：大型壺(1111・1112)と小型壺(1116)がある。大型壺(1111)は体部外面に斜め方向と縱方向のハケメ調整を持ち、口縁部は外面ヨコナデ、内面ハケメである。単位は頗著でないが、外面には一部ミガキの痕跡が認められる。頭部には幅1cm前後の粘土紐による補強帯が巡る。体部の最大径は下半部であり、円盤状の台部を持つ。体部には頗著な黒斑が確認できる。小型壺(1116)は口径が胴部径よりやや小さく、口縁部高が胴部高よりもやや低い。高坏：小型のもの(1114)と、比較的大型で末広がりの脚部を持つもの(1115)がある。前者(1114)は脚上部が棒状・中空で裾部が広がり、台部径は口径よりも小さい。外面は丁寧なミガキが確認でき、内外面ともに赤彩が施されている。坏下部に明瞭な稜を持つ。後者(1115)は脚上部が円錐状・中空で裾部が広がり、台部径は口径よりも小さい。白玉：白玉は41点出土している。このうち32点(1113-1～32)が大型壺(1111)、9点(1117-1～9)が小型壺(1116)内部に収められていた。石材は比較的軟質で、やや青みのある灰色を呈している。いずれも滑石製である。【年代】SX10425は河川の氾濫などで形成された遺物包含層であり、複数の完形品が比較的近接して出土した。器種構成の主体となる高坏は、坏部に明瞭な稜・段を持ち、裾部が広がる形態のものである。概ね古墳時代中期前半に位置付けられる。

SX10426遺物包含層（第18図、写真図版2）

【位置・堆積状況】105①Tで確認した遺物包含層である。基本層IV層に該当する。【出土遺物】高坏：高坏は4点出土している。坏部から脚部にかけて残存するもの(745・747・748)と脚部のみ残存するもの(746)がある。【年代】概ね古墳時代中期前半に位置付けられる

(3) 後期の遺構

SI10318竪穴建物跡（第19図、写真図版2）

【位置・検出面・残存状況・変遷】164⑦T中央のIV層上面で検出した。【重複】(新)SB10315【規模・平面形・方向】北東-南西3.8m、南東-北西3.9mの方形で、方向は北西辺で測るとN-55°-Eである。【床面】炭化物と黒褐色土を若干含む灰黄褐色砂の掘方埋土を床としている。【カマド】カマドは2箇所にあり、作り替えられたと見られる。旧カマドは北西壁に付設されており、幅25cmの煙道のみが確認できる。新カマドは北東壁にあり、残存状態は良くない。焼土の分布範囲は、幅40cm、奥行60cmである。側壁部は側壁の本体の基部が痕跡状に残っているのみであり、カマドの構築方法については不明である。煙道は確認されなかった。【堆積土】床面直上には焼失した構築材と見られる炭化物が堆積する。【出土遺物】坏：掘方から比較的浅身で、口縁部が外に開く土師器有段丸底坏(2072)が出土している。摩耗が著しいが、口縁部ヨコナデ・体部ヘラケズリ調整であり、内面に黒色処理を施している。その他：掘方・床面から壺・甕類の破片が複数出土しているが、いずれも非ロクロ調整である。【年代】概ね古墳時代後期後半に位置付けられる。

SI10319堅穴建物跡（第19図、写真図版2）

【位置・検出面・残存状況・変遷】164⑦T東側のIV層で検出した。カマドや主柱穴は確認されなかった。構築材由来と見られる炭化物が残ることから、焼失住居と見られる。東側では本遺構よりも古いSI10320堅穴建物跡と重複しそれよりも新しいが、SI10320についてはほとんどが調査区外であるため、詳細は不明である。【重複】（旧）SI10320（新）SB10314【規模・平面形・方向】北東—南西4.6m、南東—北西3.8m以上の方形で、方向は南東辺で測るとN=47°-Eである。SI10320も同様の方向である。【床面】炭化物小ブロックを少量含む黄褐色シルト質砂の掘方埋土を床としている。【堆積土】床面上には焼失した構築材と見られる炭化物を含んだ黒褐色土が堆積する。その上層には、IV層由来の黄褐色シルト質砂が堆積し、土屋根の崩落土と見られる。【その他の施設】東隅に径約0.9m、深さ15cmの土壌を伴う。建物焼失後の埋土と同じ土で埋まっており、建物機能時には開口していたと見られる。【出土遺物】壺：床面上から、比較的浅身で、口縁部が外に聞く土師器有段丸底壺（600）が出土している。口縁部ヨコナデ・体部ヘラケズリ調整であり、内面に黒色処理を施している。口縁部と体部に明瞭な稜を持つ。その他：掘方・床面から壺・甕類の破片が複数出土しているが、いずれも非クロロ調整である。【年代】概ね古墳時代後期後半に位置付けられる。

3 総括

（1）各時期の遺構の分布について

各時期の遺構の分布状況は第1図のとおりである。古墳時代の遺構は概ね北側調査区にまとまっている。一部前期の遺構や遺物包含層についてはより南側にも点在する。前期や後期の遺構は164T・167Tライン付近やそれよりも北側にあり、中期の遺構はさらに北側の104・105Tにまとまる傾向にあるが、全ての調査区で下層まで確認できるような調査を行っていないため、分布の傾向は調査方法によるバイアスを考慮する必要がある。

前期では167②TのSI10265堅穴建物跡及び155②TのSX16079遺物包含層が、前期前半の青山編年1式・辻編年II期（青山2010、辻1994・1995）に遡る可能性があるほか、171⑧Tで前期後半の青山編年2式・辻編年III期（青山2010、辻1994・1995）に位置付けられるSX10424溝状遺構を確認している。また、164⑨TのSX10305、169①TのSX10436、169②・③TのSX10437の3地点で水田跡を検出した。

中期では105①TのSI10168堅穴建物跡及び104③TのSX10425遺物包含層から、村田編年A群（村田2018）に当たる土師器が出土しており、中期前半（TK216以前）に位置付けられる。後者は壺2点の内部に滑石製の臼玉が認められていた。

後期では164⑦TのSI10318堅穴建物跡及びSI10319堅穴建物跡から、口縁部が比較的強く外反する深身の有段丸底壺が出土している。村田編年第3段階（村田2007）で一般的な器形であり、後期後半（TK209並行）に位置付けられる。

（2）SX10424溝状遺構について

【年代】小型丸底鉢は古墳時代前期後半、青山編年塩釜2式（青山2010）、辻編年III期（辻1994・1995）のメルクマールとなる器種である。（2021・2032）は外面のハケメ調整が明瞭に看取される一方で、（2031）は丁寧なヘラミガキが施されている。いずれも底部に窪みを持ち、ミガキを省略する個体が含まれることから、出現段階よりやや新しい特徴が認められる。また、隆帶付直口壺（2029）の、体部下半に緩やかな膨らみを持ち、口縁部の立ち上がりが直立気味である点、壺部が小型丸底壺状の高壺（2024）が出土する点のほか、後続段階で一般化する中実脚部を持つ高壺や円窓を省略する器台が出土しない点等から、概ね青山編年塩釜2式新相（辻編年III-2期）に位置付けられる。

【遺構の性格】SX10424は方形に巡る溝跡であり、埋土からは多数の古墳時代前期後半の遺物が出土した。山王遺跡谷地地区では、本遺構と類似する古墳時代の方形周溝墓SX2823・2818が報告されている（宮城県教育委員会1998）、飯島義雄による批判的検討（飯島2008）を受け、周溝を持つ建物に訂正されている（

宮城県教育委員会2018)。本遺構SX10424については、調査範囲の制約により遺構の全体形状が把握困難であることから、現時点では遺構の性格を決定付けることは出来ないが、出土した土器群の特徴には、町地区SX2823・2818とは若干の相違が認められる。すなわち、壺・甕類に顕著な煮炊きの痕跡が認められない点、胴部最大径60cmを超える超大型壺(2015)や、体部上半への焼成後穿孔により擬器化された単純口縁壺(2029)など、日常的な生活以外の用途が想定される土器が含まれており、本遺構の性格の一端を示す可能性がある。

(3) 古墳時代の水田跡について

【年代】 遺物は出土しておらず、年代は明確には決定できないが、いずれも基本層IV層に覆われ、基本層V層上に造成されていることから、古墳時代前期のものと思われる。

【生産域と居住域】 これらのうち、SX10436水田跡とSX10437水田跡は近接しており、同一の集団が耕作していた可能性が考えられる。50m程西側で実施された山王遺跡第54次調査では、基本層V層(第54次調査ではIX層)でプラントオバールが高密度で検出され水田稲作が営まれたと推定されており(多賀城市教育委員会2006)、100m程南西で実施された山王遺跡第172・173次調査でも古墳時代前期の水田が発見されていることから(多賀城市教育委員会2017)この周辺が生産域であったと思われる。ところで、200m程南側の155②TではSX16079遺物包含層が検出されており、遺物量が比較的多いことから付近に居住域の存在が予想され、居住域の周辺を生産域として水田耕作を行っていた可能性が推定される。一方、SX10436・10437水田跡の東70m程の177TでもSX10428遺物包含層が検出されたが、遺物量が少なく付近に居住域が存在したかどうかは不明である。また、SX10305水田跡の東60m程の167②TではSI10265竪穴建物跡が検出され、同様に生産域と居住域であった可能性が推定される。

なお、山王遺跡内の居住域としては、町地区で竪穴建物跡2棟(多賀城市教育委員会2006)、毛上地区で竪穴建物跡3棟(多賀城市教育委員会2010)と谷地地区で竪穴建物跡3棟(宮城県教育委員会1998)が確認されている。水田跡は掃下(多賀城市教育委員会2016)、山王二区(多賀城市教育委員会2012)、多賀前(宮城県教育委員会1995)、八幡(宮城県教育委員会2018)など多くの地点で確認されている。このうち、町地区的居住域とおよそ100m南に位置する掃下地区の水田跡については居住域と生産域であった可能性がある。

【水田区画】 調査区が狭く、水田区画の規模等は不明である。また、検出した畦畔からは水田区画の規則性等は読み取れない。しかし、畦畔の間隔がわかるものはいずれも狭く、小区画水田であったと思われる。水田区画は水利条件に規制されると考えられており(藤原他1989)、その場所の灌漑状況を反映したものと思われる。なお、多賀前地区では多くの方形区画の小水田が整然と並ぶSF3124水田跡(宮城県教育委員会1995)が検出されており、今回検出した水田跡とは異なったあり方である。

【プラントオバール分析】 畦畔が検出された場所を中心にプラントオバール分析を実施した(附章1参照)。SX10436水田跡の区画2からサンプルを採取し分析した結果、耕作土から比較的高い密度のプラントオバールが検出され、水田稲作が行われた可能性が高いと判断された。一方、SX10437水田跡の区画2の分析結果では、耕作土のプラントオバールの密度が低く、他所から混入したものと考えられた。しかし、発掘調査では明瞭な高まりが検出されており、水田が造成されたと思われる。分析報告では、稲作が行われたがプラントオバールの密度が低い要因として、1) 稲作が行われた期間が短かった、2) イネの生産性が低かったなどがあげられている。SX10305水田跡の区画2の分析結果では多量のプラントオバールが検出され、稲作が行われた可能性が高いと判断された。しかし、調査時に耕作土とを考えた層の上部はプラントオバールの密度が低く、その反面、耕作が及んでいないとしたV層からは高密度のプラントオバールが検出された。以上のように、発掘調査の成果とプラントオバール分析の結果は、一致しない部分があるものの概ね整合的である。今後に向けては、発掘調査の精度が求められるのと同時に分析結果の信頼性を高めるためのある程度の分析サンプル数も必要であろう(注)。

【古墳時代中・後期の水田跡】 中期には「豪族居館」が、後期には材木塀と溝で囲われた大規模な集落が

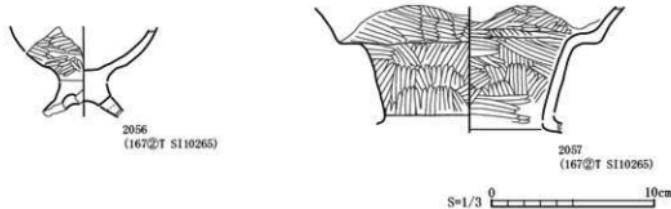
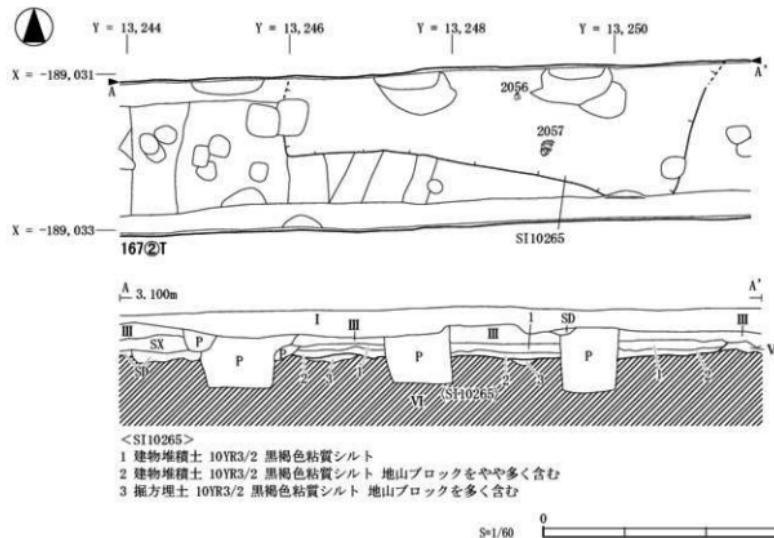
形成され、周辺には水田が存在したと思われるが、今回の発掘調査では未検出であった。中期については、山王遺跡第223次調査で基本層IV層中に水田畦畔とみられる高まりが検出されており(多賀城市教育委員会2022b)、今後は基本層IV層中の探索が必要であろう。

注

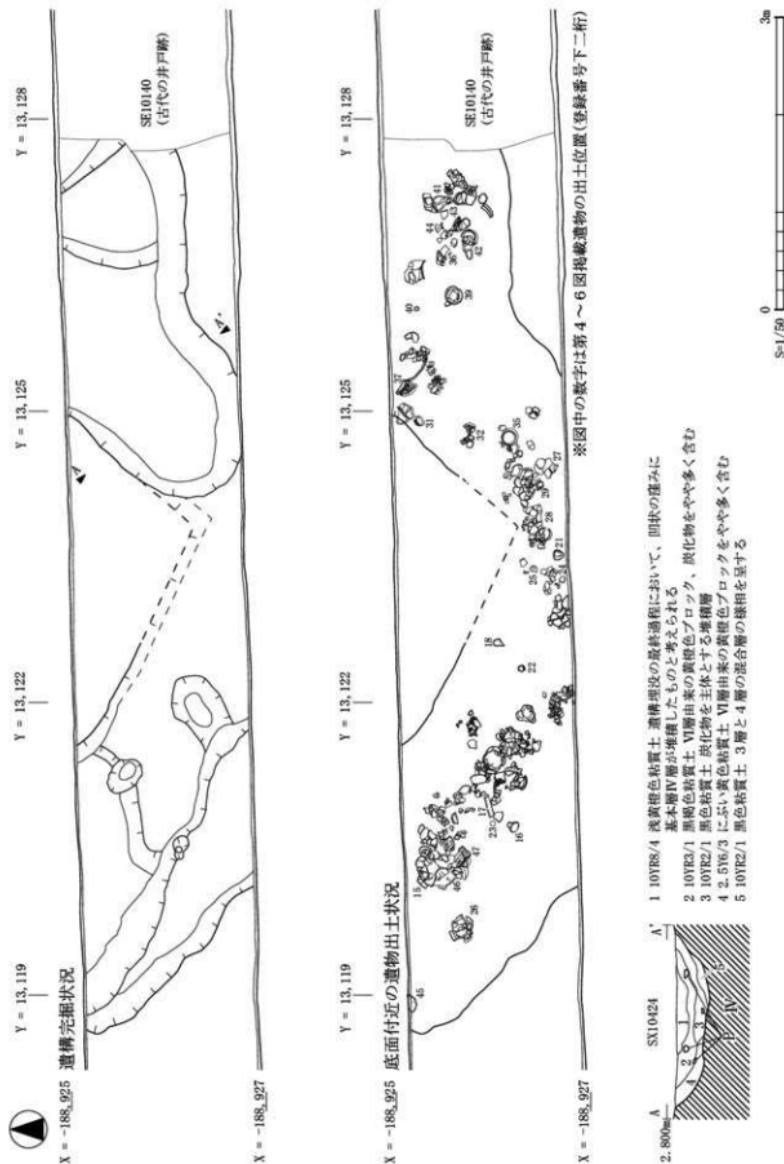
SX10305水田跡の場合は、耕作土と考えた層の上部は廃絶後の堆積層であった可能性も考えられ、V層については、調査時には認識できなかったが耕作土であった、あるいは今回検出した畦畔より古い時期の水田耕作土であった等が考えられる。なお、山王遺跡第64・67次調査では古墳時代前期の水田畦畔が検出されたが、プラントオバールの密度が高い部分と低い部分が混在しており、SX10437水田跡と同様の状況であった(多賀城市教育委員会2008、2009)。また、市川橋遺跡の南北大路側溝から高密度のプラントオバールが検出された例もあり(多賀城市教育委員会2004)、高密度のプラントオバールが必ずしもその場所での水田稻作を示すわけではないことにも留意しなければならない。

参考文献

- 青山博樹 2010 「古墳時代前期の土器編年—仙台平野とその周辺—」『北杜一辻秀人先生還暦記念論集—』
- 飯島義雄 2008 「宮城県仙台平野における古墳時代前期の「周溝をもつ建物」の認識とその意義」『芹沢長介先生追悼 考古・民族・歴史学論叢』
- 辻秀人 1989 「東北古墳時代の画期について(その1)ー中期後半の画期とその意義ー」『福島県立博物館紀要』第3号
- 辻秀人 1990 「東北古墳時代の画期について(その2)ー7世紀史の理解をめざしてー」『伊東信雄先生追悼 考古学古代史論叢』
- 辻秀人 1994 「東北南部における古墳出現期の土器編年ーその1 会津盆地ー」『東北学院大学論集ー歴史学・地理学ー』第26号
- 辻秀人 1995 「東北南部における古墳出現期の土器編年 その2」『東北学院大学論集ー歴史学・地理学ー』第27号
- 藤沢教 1992 「引田式再論」『歴史』第79輯
- 藤原宏志・佐々木章・保野敏子 1989 「先史時代水田の区画規模決定要因に関する検討」『考古学と自然科学』第21号—日本文化財科学会誌—
- 村田晃一 2007 「V. 宮城県中部から南部」『古代東北、北海道におけるモノ、人、文化交流の研究』
- 村田晃一 2018 「1. 古墳時代中期の土器」『山王遺跡VII』第3分冊 宮城県文化財調査報告書第246集
- 多賀城市教育委員会 2004 『市川橋遺跡ー城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書IIIー』多賀城市文化財調査報告書第75集
- 多賀城市教育委員会 2006 『山王遺跡ー第51・54・57次調査報告書ー』多賀城市文化財調査報告書第81集
- 多賀城市教育委員会 2006 『山王遺跡ー第58次調査報告書ー』多賀城市文化財調査報告書第86集
- 多賀城市教育委員会 2008 『山王遺跡ー第60・64次調査報告書ー』多賀城市文化財調査報告書第94集
- 多賀城市教育委員会 2009 『山王遺跡第67次調査』『多賀城市内の遺跡1ー平成19年度発掘調査報告書はかー』多賀城市文化財調査報告書第96集
- 多賀城市教育委員会 2012 『多賀城市内の遺跡2ー平成23年度発掘調査報告書ー』多賀城市文化財調査報告書第108集
- 多賀城市教育委員会 2013 『山王遺跡はか』多賀城市文化財調査報告書第109集
- 多賀城市教育委員会 2016 『高崎遺跡はか』多賀城市文化財調査報告書第128集
- 多賀城市教育委員会 2017 『多賀城市内の遺跡2ー平成28年度はか発掘調査報告書ー』多賀城市文化財調査報告書第132集
- 多賀城市教育委員会 2022a 『山王遺跡第214次調査報告書』多賀城市文化財調査報告書第150集
- 多賀城市教育委員会 2022b 『山王遺跡第223次調査報告書』多賀城市文化財調査報告書第156集
- 宮城県教育委員会 1995 『山王遺跡IIー多賀前地区遺構編ー』宮城県文化財調査報告書第167集
- 宮城県教育委員会 1998 『山王遺跡町地区的調査ー県道泉塩釜線関連調査報告書IIー』宮城県文化財調査報告書第175集
- 宮城県教育委員会 2018 『山王遺跡VII』宮城県文化財調査報告書第246集



第2図 SI10265 平面・断面図と出土遺物



第3図 171⑥T SX10424平面・断面図



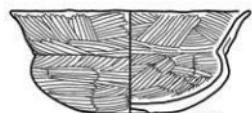
2024
(171⑤T SX10424)



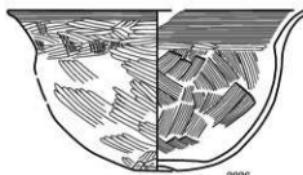
2016
(171⑤T SX10424)



2044
(171⑤T SX10424)



2017
(171⑤T SX10424)



2026
(171⑤T SX10424)



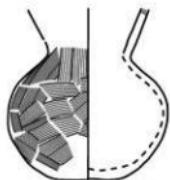
2031
(171⑤T SX10424)



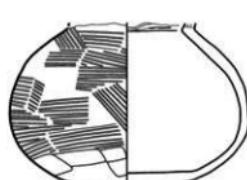
2021
(171⑤T SX10424)



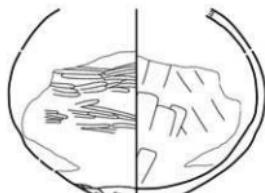
2032
(171⑤T SX10424)



2046
(171⑤T SX10424)



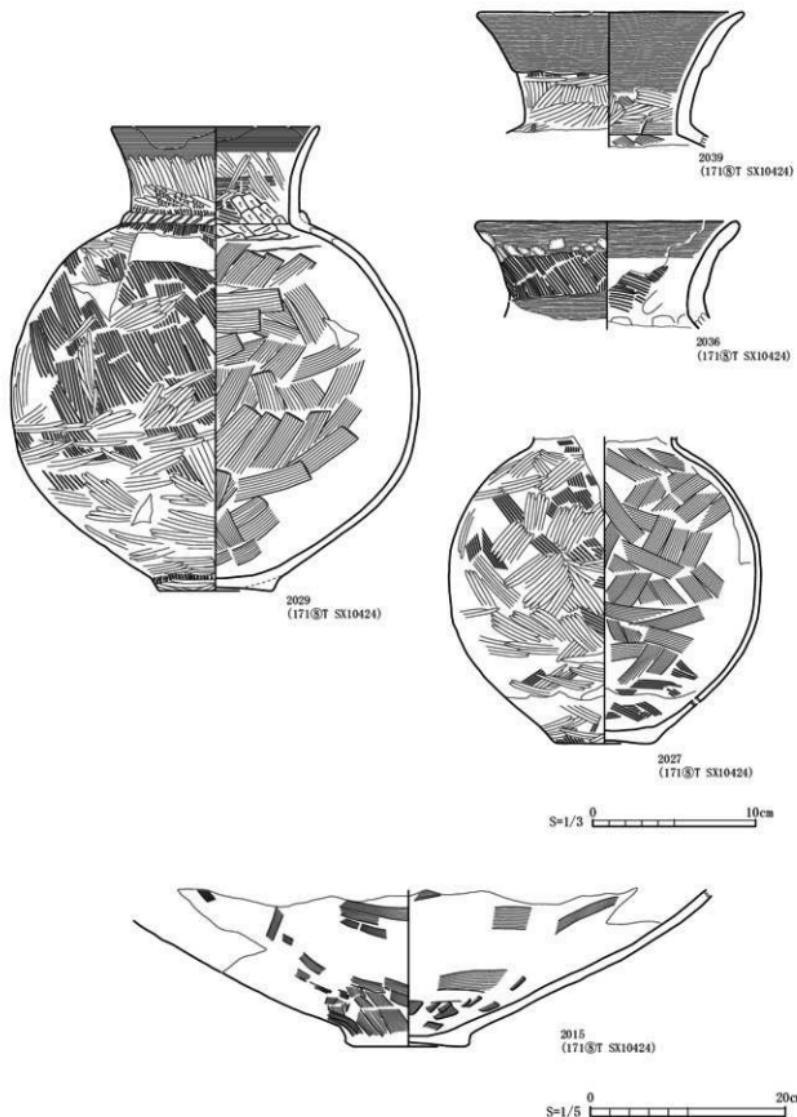
2018
(171⑤T SX10424)



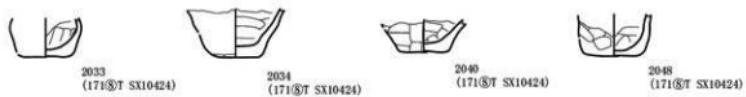
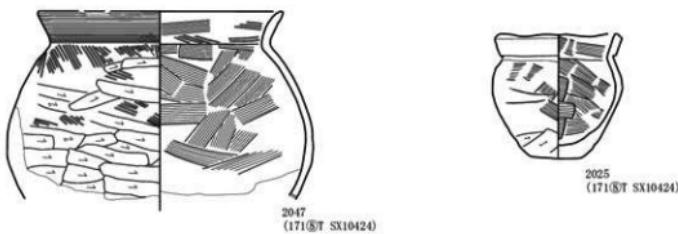
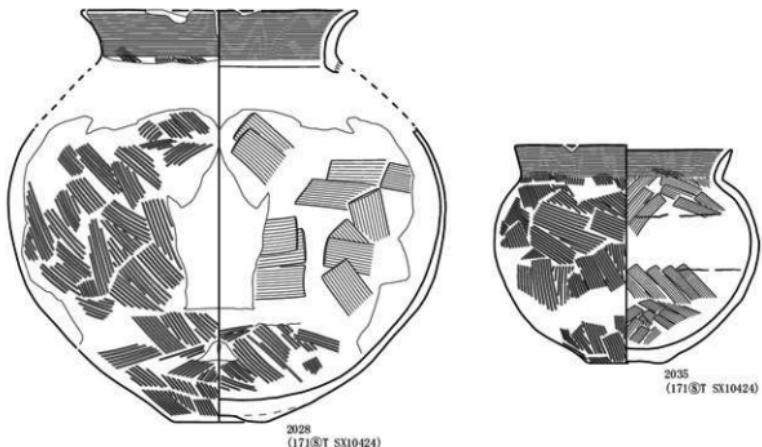
2045
(171⑤T SX10424)

S=1/3 0 10cm

第4図 SX10424 出土遺物 1

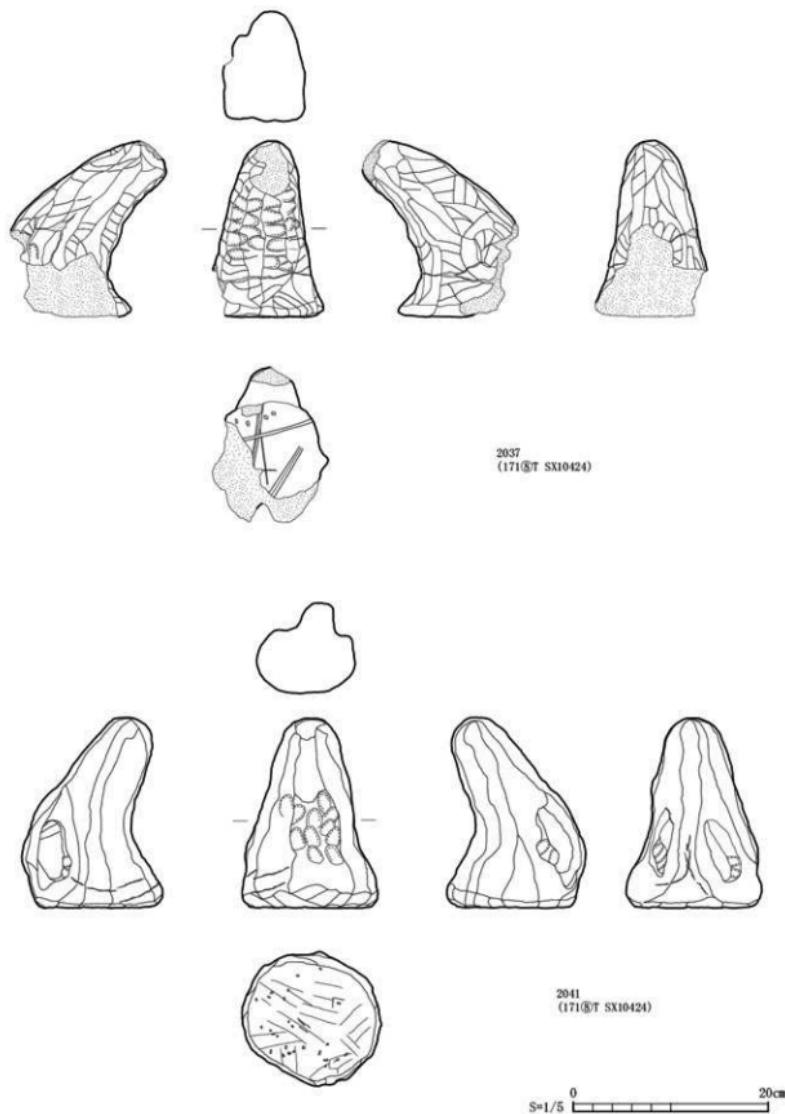


第5図 SX10424 出土遺物2

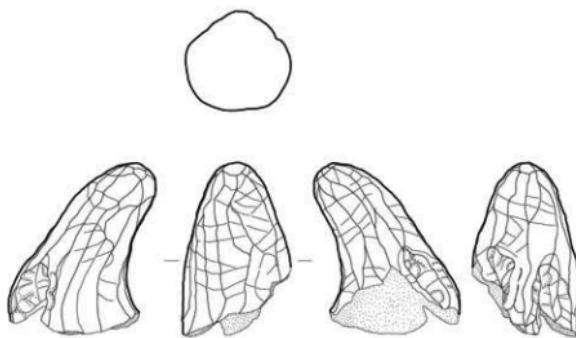
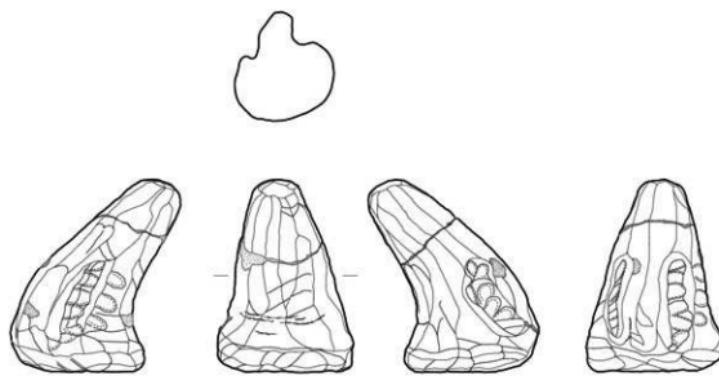


S=1/3 0 10cm

第6図 SX10424 出土遺物 3



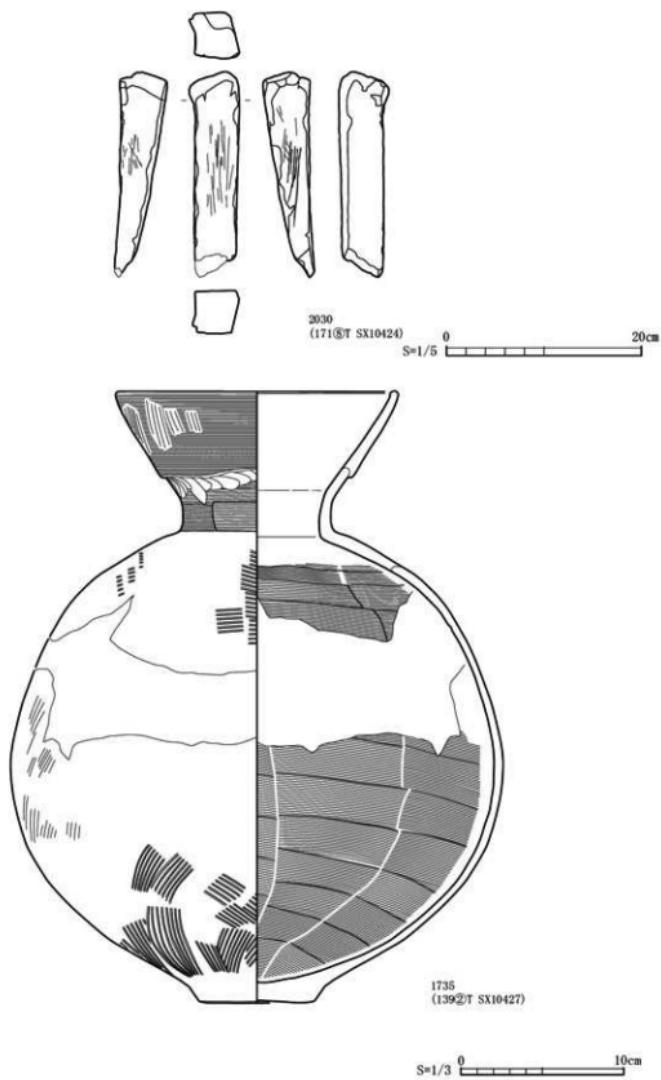
第7図 SX10424 出土遺物4



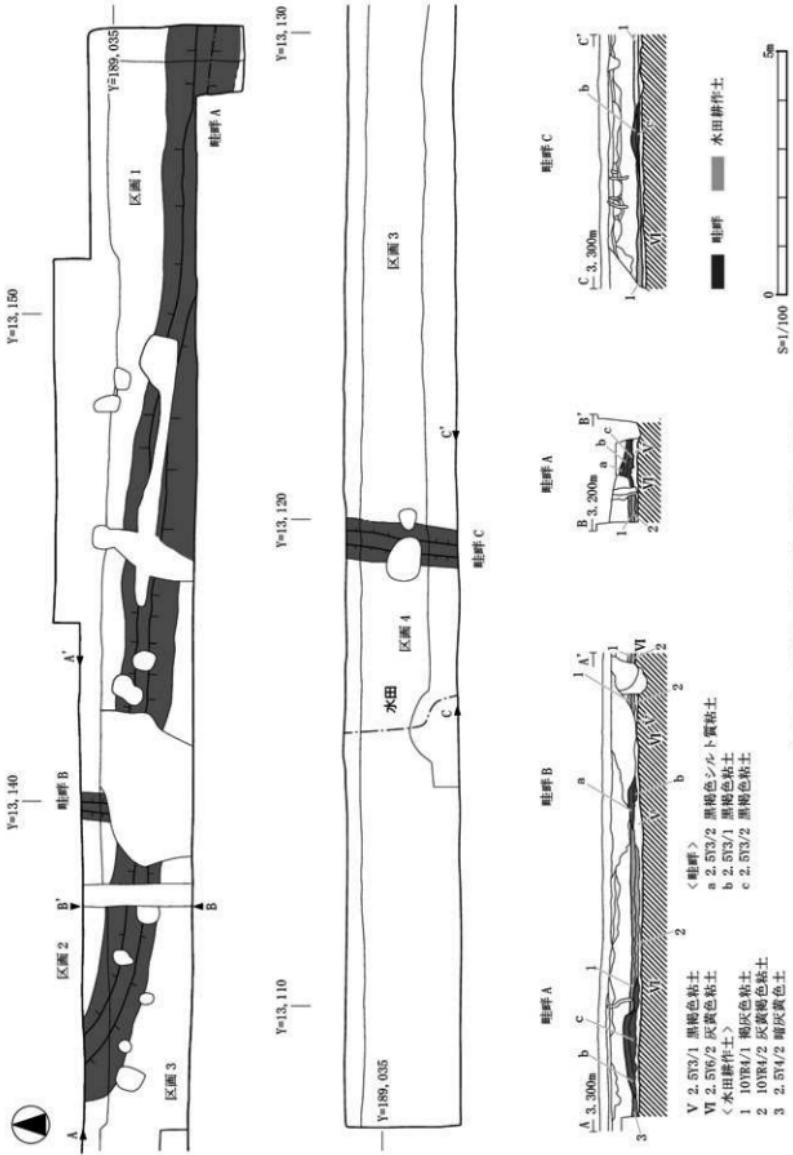
2043
(171⑤T SX10424)

0 20cm
S=1/5

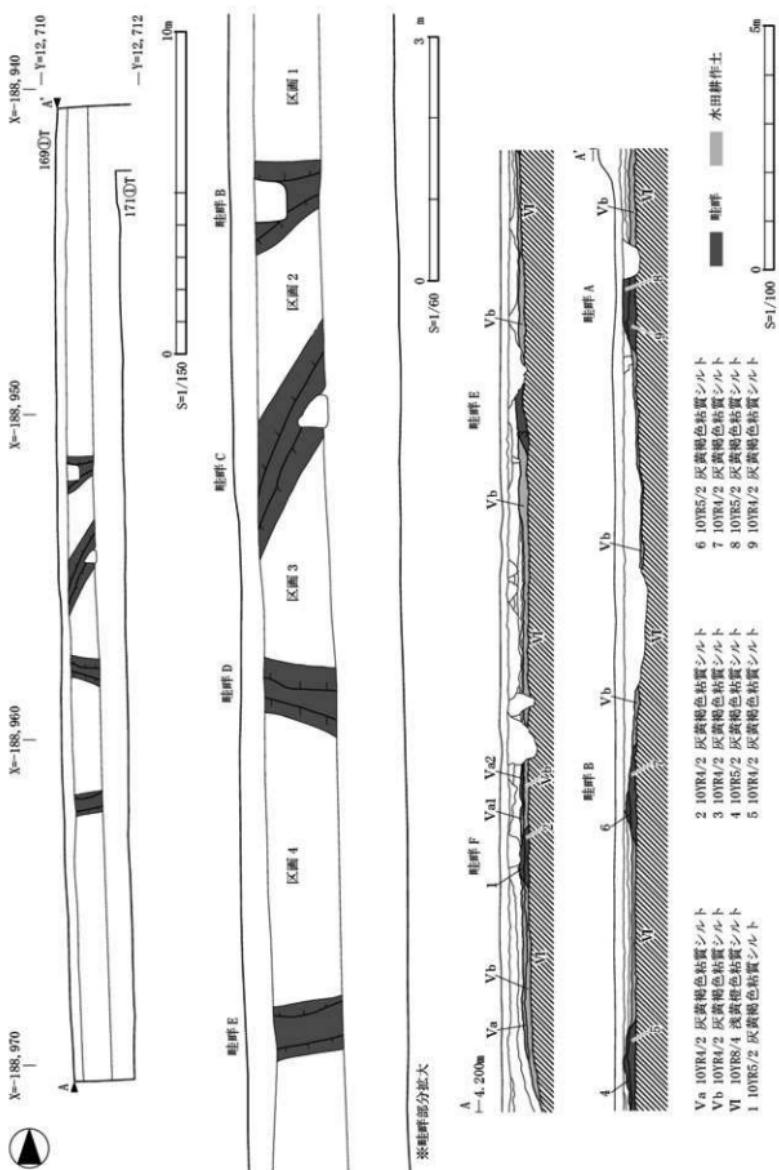
第8図 SX10424出土遺物5



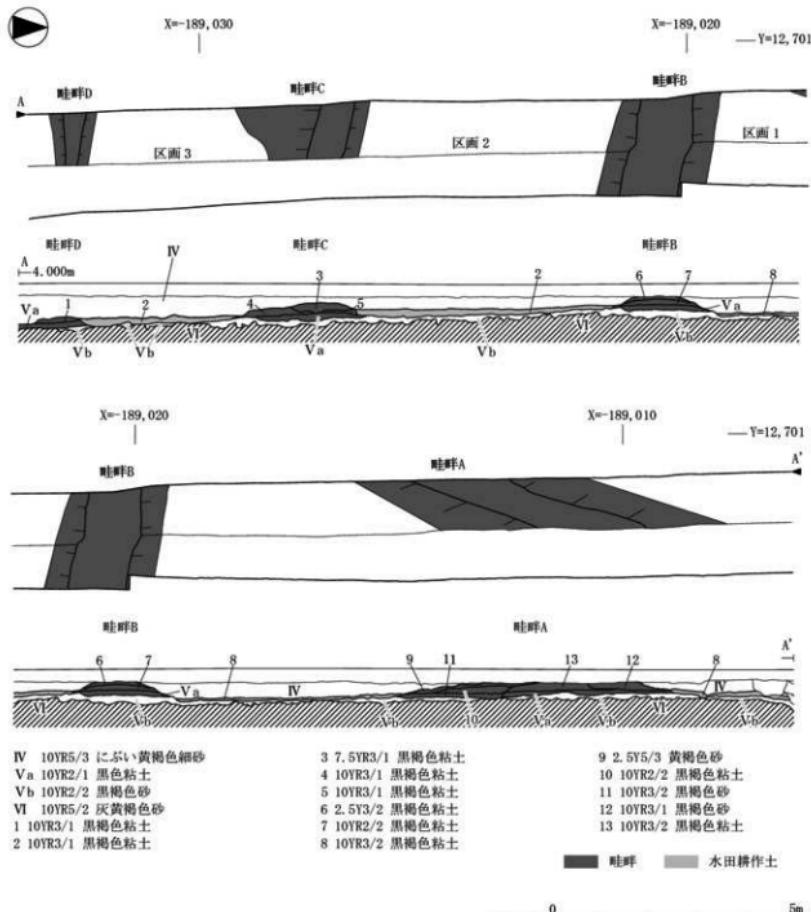
第9図 SX10424・10427出土遺物



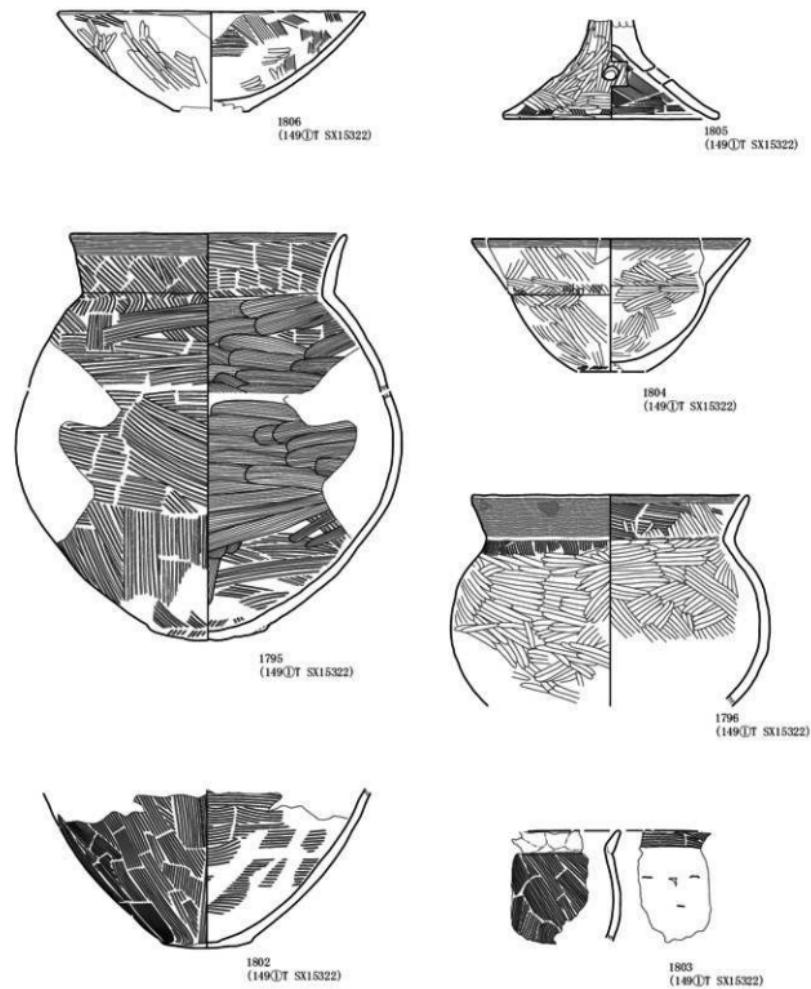
第10図 164⑨T SX10305水田耕平面・断面図



第11圖 169①T SX10436K 田跡平面・断面図

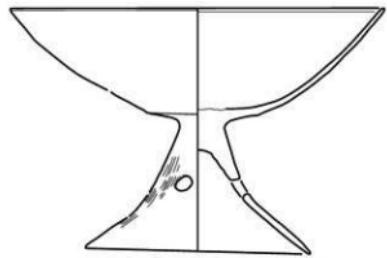


第 12 図 169②・③T SX10437水田跡平面・断面図とIV層上面出土遺物



第13図 SX15322出土遺物

S=1/3 0 10cm



1691+1694
(155②T SX16079)



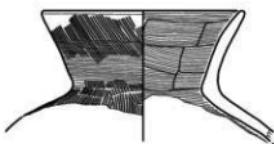
1692
(155②T SX16079)



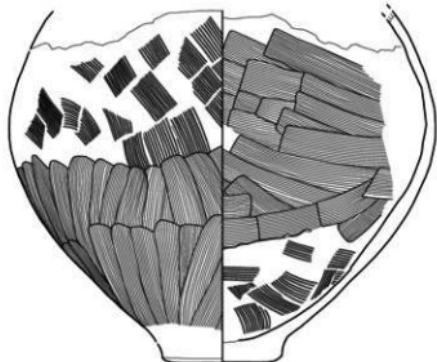
1693
(155②T SX16079)



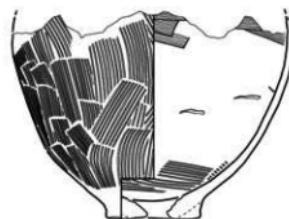
1695
(155②T SX16079)



1688
(155②T SX16079)



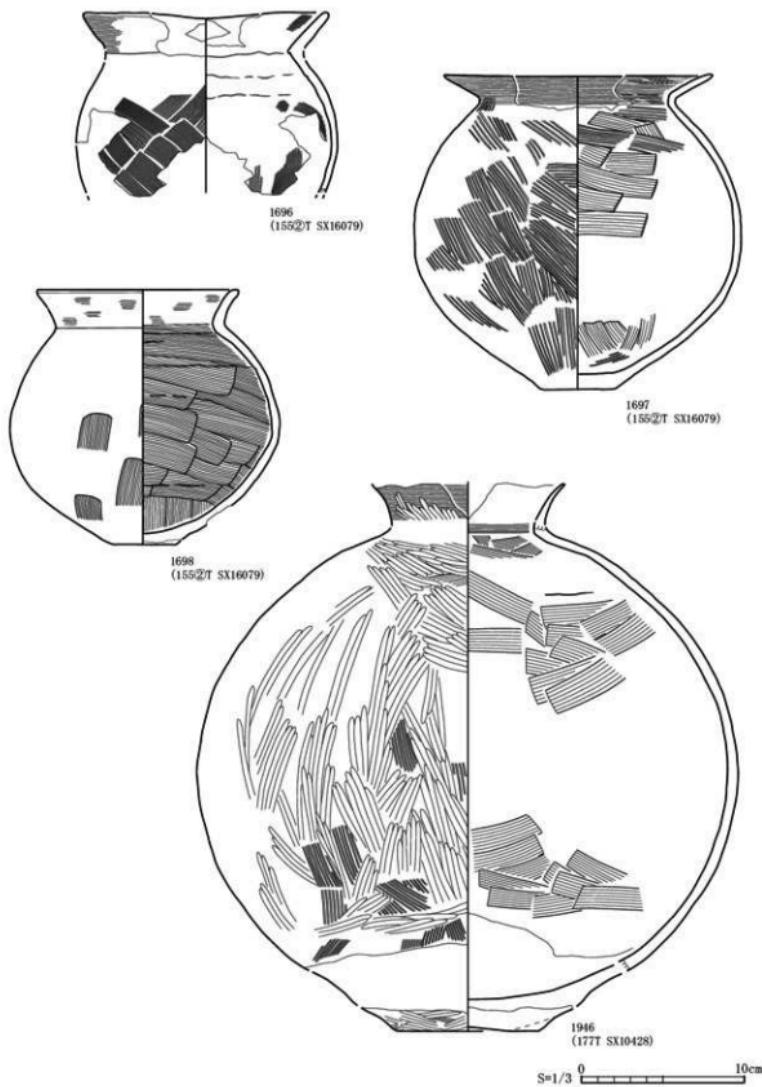
1689
(155②T SX16079)



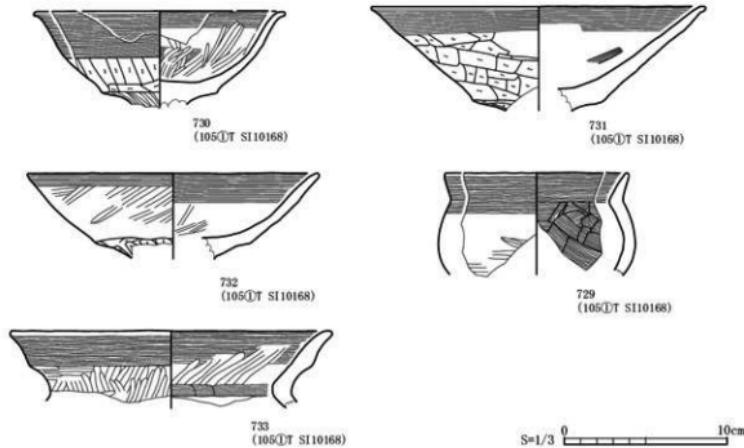
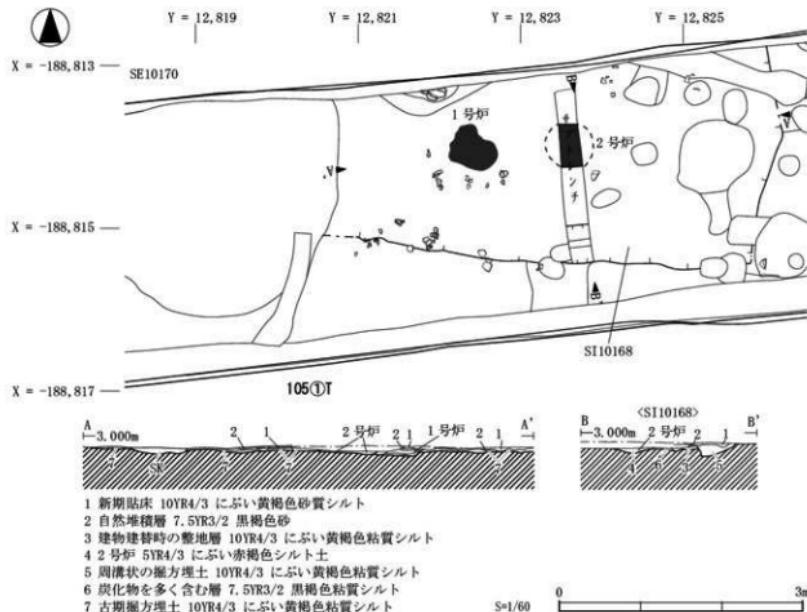
1690
(155②T SX16079)

S=1/3 0 10cm

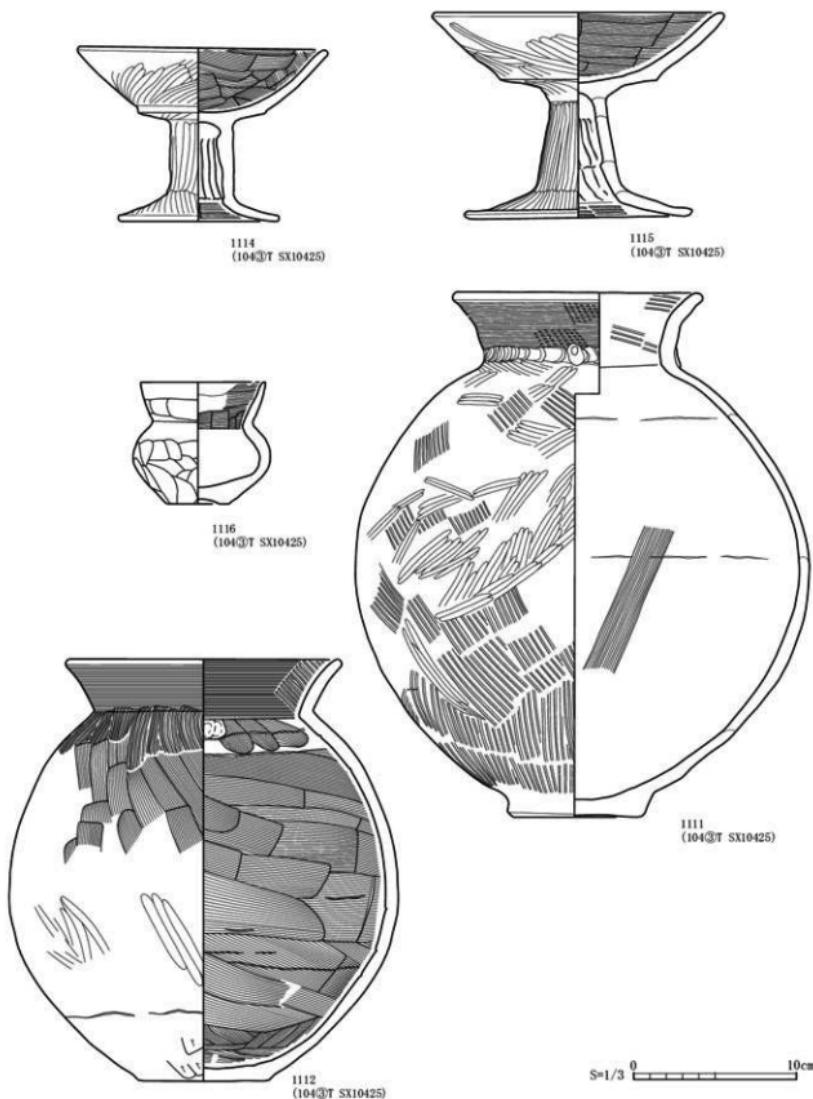
第14図 SX16079出土遺物



第15図 SX16079・10428出土遺物



第16図 105①T SI10168平面・断面図と出土遺物



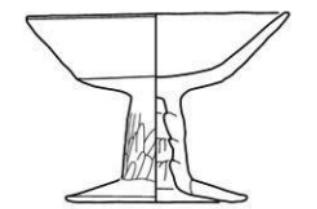
第17図 SX10425出土遺物

- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -
□□ 1113-1	□□ 1113-2	□□ 1113-3	□□ 1113-4	□□ 1113-5	□□ 1113-6	□□ 1113-7	□□ 1113-8	
- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -
□□ 1113-9	□□ 1113-10	□□ 1113-11	□□ 1113-12	□□ 1113-13	□□ 1113-14	□□ 1113-15	□□ 1113-16	
- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -
□△ 1113-17	□△ 1113-18	□△ 1113-19	□△ 1113-20	□△ 1113-21	□△ 1113-22	□△ 1113-23	□△ 1113-24	
- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -
□△ 1113-25	□△ 1113-26	□△ 1113-27	□△ 1113-28	□△ 1113-29	□△ 1113-30	□△ 1113-31	□△ 1113-32	

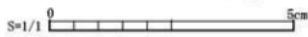
1113
(104@T SX10425)

- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -	- ◎ -
□□ 1117-1	□□ 1117-2	□□ 1117-3	□□ 1117-4	□□ 1117-5	□□ 1117-6	□□ 1117-7	□□ 1117-8	□□ 1117-9

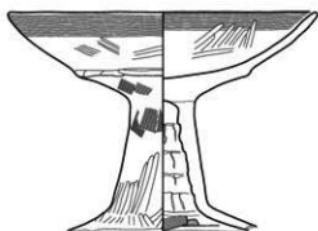
1117
(104@T SX10425)



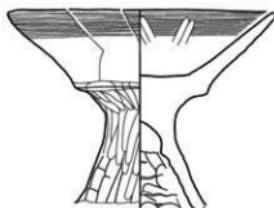
745
(105@T SX10426)



746
(105@T SX10426)

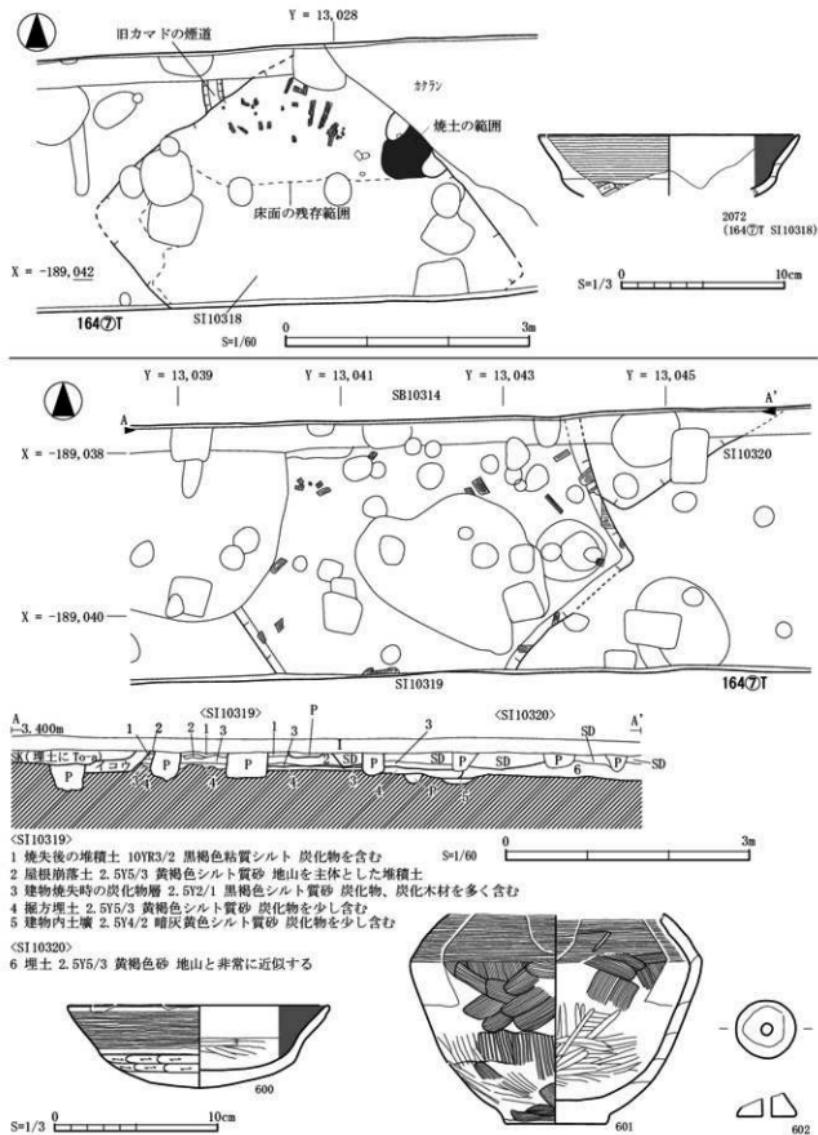


747
(105@T SX10426)



748
(105@T SX10426)
S=1/3 0 10cm

第 18 図 SX10425・10426出土遺物



第19図 164⑦T SI10318~10320平面・断面図と出土遺物

第1表 山王遺跡(古墳時代)出土遺物観察表1

登録番号	調査区	遺構	層位	種別	器種	調整	法量(cm)			遺物図版	写真図版	備考
							口径 残存率	底径 残存率	器高			
600	164⑦	SI 10319	床面	土師器	壺	外面：口縁部ヨコナデ 体部下部ヘラケズリ 体部へ底部マヌフ 内面：ヘラミガキ→黒色処理	16.0 20/24	—	5.1	19	10	
601	164⑦	SI 10319	床面	土師器	壺	外面：口縁部ヨコナデ 体部ハケメ→ヘラナダ→ヘラミガキ 底部：ヘラケズリ 内面：口縁部ヨコナデ→一部ヘラナダ 体部ヘラナダ→ヘラミガキ	—	6.3 24/24	(12.9)	19	10	輪積み底あり
602	164⑦	SI 10319	3層	石製品	劫鍊車		長さ 3.5	幅 3.7	厚さ (1.5)	19	10	孔径 0.7 cm 重さ 21.5g
729	105⑨	SI 10168	樋方	土師器	小型壺	外面：口縁部ヨコナデ 体部ナダ又はヘラナダ→ヘラミガキ 内面：口縁部ヨコナデ 体部ヘラナダ	(11.2) 4/24	—	(6.3)	16	—	
730	105⑩	SI 10168	1層	土師器	高壺	外面：口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ、ヘラミガキ 内面：口縁部ヨコナデ 体部ヘラナダ→ヘラミガキ	(15.3) 1/24	—	(5.7)	16	—	壺部のみ
731	105⑪	SI 10168	1層	土師器	高壺	外面：口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ 内面：口縁部ヨコナデ 体部ヘラナダ→ヘラミガキ?	(20.4) 11/24	—	(6.4)	16	—	壺部のみ
732	105⑫	SI 10168	1層	土師器	高壺	外面：口縁部ヨコナデ 体部ヘラミガキ、ヘラケズリ又はヘラナダ 内面：口縁部ヨコナデ 体部ヘラミガキ	(17.8) 6/24	—	(5.3)	16	—	
733	105⑬	SI 10168	1層	土師器	甕	外面：口縁部ヨコナデ、ヘラミガキ 内面：口縁部ヨコナデ、ヘラミガキ	(19.6) 6/24	—	(4.3)	16	—	
745	105⑭	SX 10426	1層	土師器	高壺	外面：(マメツ) 脚部：ナダ又はヘラミガキ 内面：(マメツ)	16.0 14/24	(11.2) 8/24	11.6	18	9	内面輪積み底あり
746	105⑮	SX 10426	1層	土師器	高壺	外面：脚部ヘラナダ 下部ヨコナデ 内面：脚部シボリ、ヘラナダ、ヨコナダ	欠損	脚部 13.9 24/24	(7.4)	18	10	
747	105⑯	SX 10426	1層	土師器	高壺	外面：坪部口縁ヨコナデ 体部ヘラミガキ 脚部ハケメ→ヘラミガキ 内面：坪部口縁ヨコナデ 体部ヘラミガキ 脚部ヘラナダ	(18.6) 7/24	—	(13.5)	18	—	
748	105⑰	SX 10426	1層	土師器	高壺	外面：口縁部ヨコナデ 体部(マメツ) 脚部ヘラナダ、ヘラミガキ 内面：口縁部ヨコナデ→ヘラミガキ 体部(マメツ) 脚部ナダ	16.4 22/24	—	(12.0)	18	—	内面輪積み底あり
1111	104③	SX 10425	1層	土師器	甕	外面：口縁部ハケメ→ヨコナデ 頭部貼付け 体部ハケメ→ヘラミガキ 底部：ヘラナダ 内面：口縁部ハケメ 体部ヘラナダ	15.4 23/24	8.2 24/24	32.3	17	8	臼玉 32 点 土器内から
1112	104④	SX 10425	1層	土師器	甕	外面：口縁部ヨコナデ 頭部ハケメ 体部上半ヘラナダ 体部下部ヘラミガキ、ヘラケズリ 底部：ヘラナダ 内面：口縁部ハケメ 頭部ユピナダ 体部ヘラナダ	17.0 24/24	8.0 24/24	26.0	17	—	体部外面に カーボン付着

第2表 山王遺跡(古墳時代)出土遺物観察表2

登録番号	調査区	遺構	層位	種別	器種	調整	法量(cm)			遺物図版	写真図版	備考
							口径 残存率	底径 残存率	器高			
1113	104③	SX 10425	1111 土器内	石製品	臼玉	—	直径 4.0 ~ 5.0 mm	厚み 1.0 ~ 3.0 mm	重さ 参考記入	18	8	1) 0.08g 2) 0.1g 3) 0.07g 4) 0.09g 5) 0.07g 6) 0.1g 7) 0.06g 8) 0.06g 9) 0.06g 10) 0.04g 11) 0.06g 12) 0.07g 13) 0.07g 14) 0.09g 15) 0.04g 16) 0.09g 17) 0.06g 18) .006g 19) 0.09g 20) 0.03g 21) 0.05g 22) 0.06g 23) 0.07g 24) 0.08g 25) 0.07g 26) 0.06g 27) 0.03g 28) 0.05g 29) 0.09g 30) 0.06g 31) 0.06g 32) 0.07g
1114	104③	SX 10425	—	土師器	环	外面: 环部ヘラミガキ 胸部ヘラナデ 底部: 环部ヘラナデ 脚部ヘラナデ 内面: ヘラナデ	环部 15.4 17/24	脚部 9.9 15/24	10.8	17	8	
1115	104③	SX 10425	—	土師器	高環	外面: 环部ヘラナデ 胸部ヘラナデ、ヘラミガキ 底部: 环部シボリ 内面: 环部シボリ 脚部ハケメ	环部 18.0 24/24	脚部 (14.0) 7/24	12.5	17	8	
1116	104③	SX 10425	—	土師器	小蓋	外面: ナデ 内面: 口縁部ヘラナデ	10.3 24/24	4.6 24/24	7.2	17	8	臼玉9点 土器内から 出土
1117	104③	SX 10425	1116 土器内	石製品	臼玉	—	直径 4.5 mm	厚み 2.0 ~ 3.0 mm	重さ 参考記入	18	9	1) 0.10g 2) 0.08g 3) 0.08g 4) 0.09g 5) 0.10g 6) 0.06g 7) 0.05g 8) 0.07g 9) 0.08g
1383	169②	SX 10437	IV層 上面	土師器	环	外面: 手持ちヘラケズリ 底部: 手持ちヘラケズリ 内面: ヘラナデ	15.7 16/24	(5.7) 11/24	4.9	12	—	
1688	155②	SX 16079	I層	土師器	壺	外面: 口縁部ハケメ 口縁部下ナデ 体部ハケメ 内面: ヘラナデ	12.5 18/24	—	(8.0)	14	—	透かしあり
1689	155②	SX 16079	I層	土師器	甕	外面: 上半ハケメ 下半縦位ヘラナデ 底部: 切り離し技法不明 内面: 上半ヘラナデ 下半ハケメ	—	7.4 24/24	(21.7)	14	—	

第3表 山王遺跡(古墳時代)出土遺物観察表3

登録番号	調査区	遺構	層位	種別	器種	調整	法量(cm)			遺物図版	写真図版	備考
							口径 残存率	底径 残存率	器高			
1690	155②	SX 16079	1層	土師器	有孔鉢	外面：ハケメ 内面：上半ヘラ、ナデ（マメツ） 下半ハケメ	—	5.7 24/24	(12.8)	14	—	底部：輪台充填
1691	155②	SX 16079	1層	土師器	高杯	外面：ミガキ（マメツ） 底部：切り離し不明（マメツ） 内面：ミガキ（マメツ）	(23.0) 8/24	13.8 22/24	15.2	14	9	脚部に円窓あり
1692	155②	SX 16079	1層	土師器	器台	外面：口縁部ヨコナデ 頭部から体部上半ミガキ（マメツ） 内面：台部ミガキ 体部ハケメ	台部径 8.1 19/24	11.4 22/24	8.2	14	9	赤彩あり 内面にミガキ残るが図化不能
1693	155②	SX 16079	1層	土師器	器台	外面：口縁部ヨコナデ 台部下半裏位ヘラケズリ 体部ヘラナデ 内面：体部下半ヘラナデ（マメツ）	台部径 (8.7) 6/25	(12.6) 10/24	7.9	14	9	
1694	155②	SX 16079	1層	土師器	高环	外面：ミガキ（マメツ） 底部：切り離し不明（マメツ） 内面：ミガキ（マメツ）	(23.0) 8/24	13.8 22/24	15.2	14	—	
1695	155②	SX 16079	1層	土師器	壺	外面：ミガキ（マメツ） 内面：口縁部ヨコナデ 体部（マメツ）	7.4 24/24	—	(11.3)	14	—	
1696	155②	SX 16079	1層	土師器	甕	外面：口縁部ヨコナデ（マメツ） 体部ハケメ（マメツ） 内面：ハケメ（マメツ）	15.2 21/24	—	(11.1)	15	—	
1697	155②	SX 16079	1層	土師器	甕	外面：口縁部ハケメ→ヨコナデ 体部ハケメ 底部：切り離し不明（マメツ） 内面：口縁部ハケメ→ヨコナデ 体部ヘラナデ 底部付近ハケメ	16.5 17/24	4.6 12/24	19.3	15	—	内面輪構み痕あり
1698	155②	SX 16079	1層	土師器	鉢	外面：口縁部ヨコナデ（マメツ） 体部裏位ヘラナデ（マメツ） 底部：切り離し不明（剥離） 内面：口縁部ヨコナデ（マメツ） 体部ヘラナデ	(12.4) 10/24	(3.9) 10/24	15.7	15	9	全体的にマメツ
1735	139②	SX 10427		土師器	壺	外面：口縁部ヨコナデ→ヘラミガキ 頭部ヘラナデ 体部ヘケメナデ消し ヘラミガキ 内面：ヘラナデ 底部：ヘラケズリ	(17.4) 10/24	7.2 24/24	37.6	9	—	
1795	149①	SX 15322	1層	土師器	甕	外面：口縁部ハケメ→ヨコナデ 頭部→体部ハケメ 内面：口縁部ハケメ→ヨコナデ 頭部ハケメ 体部ハケメ→ナデ 体部下半ハケメ	(16.8) 21/24	7.0 14/24	25.0	13	—	
1796	149①	SX 15322	1層	土師器	甕	外面：口縁ハケメ→ヨコナデ 頭部ハケメ 体部ハケメ→ヘラミガキ 内面：口縁ハケメ→ヘラミガキ→ヨコナデ 体部ハケメ→ヘラミガキ	(16.9) 14/24	—	(12.9)	13	—	
1802	149①	SX 15322	1層	土師器	甕	外面：ハケメ 底部：ヘラケズリ 内面：ハケメ	—	5.4 (19/24)	(9.8)	13	—	
1803	149①	SX 15322	1層	土師器	小型甕	外面：口縁部ヨビオサエ 体部裏位ハケメ 内面：口縁部横位ハケメ	—	—	(7.0)	13	—	

第4表 山王遺跡(古墳時代)出土遺物観察表4

登録番号	調査区	遺構	層位	種別	器種	調整	法量(cm)			遺物図版	写真図版	備考
							口径 残存率	底径 残存率	器高			
1804	149 ①	SX 15322	1層	土師器	鉢	外面：口縁部ヨコナデ 体部ハケメ→ヘラミガキ 底部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ 体部ヘラミガキ	(16.9) 23/24	(8.2) 5/24	4.2	13	—	
1805	149 ①	SX 15322	1層	土師器	高环	外面：ハケメ→ヘラミガキ 内面：ハケメ→ヘラナデ	—	脚径 (13.2) 16/24	(6.0)	13	—	円窓3ヶ所 (内2ヶ所欠け)
1806	149 ①	SX 15322	1層	土師器	高环	外面：ハケメ→ヘラミガキ 内面：ハケメ→ヘラナデ→ヘラミガキ	(18.6) 11/24	脚径 —	6.1	13	—	全体的にマメツ
1946	1777	SX 10428	V層	土師器	壺	口縁：ヨコナデ→ヘラミガキ 体部：ハケメ→ヘラミガキ 口縁：ヨコナデ 体部：ヘラナデ	—	8.8 13/24	(33.5)	15	—	底部：輪台充填
2015	171 ⑤	SX 10424	1層	土師器	壺	外面：ハケメ→ヘラナデ 底部：ヘラナデ 内面：ヘラケズリ	—	12.0 24/24	(16.0)	5	5	
2016	171 ⑤	SX 10424	1層	土師器	器台	外面：脚部ハケメ→ナデ(上部)、ハケメ 内面：脚部ナデ(上部)、ハケメ	—	10.6 22/24	(8.2)	4	3	
2017	171 ⑤	SX 10424	1層	土師器	鉢	外面：口縁ヨコナデ→ヘラミガキ 体部ハラケズリ→ヘラミガキ 内面：口縁ヨコナデ→ヘラミガキ 体部ヘラナデ→ヘラミガキ	(14.9) 13/24	—	6.4	4	3	底部にくぼみあり
2018	171 ⑤	SX 10424	1層	土師器	壺	外面：ハケメ 体部下部ハケメ→ナデ 底部：— 内面：—	—	—	10.2	4	4	
2019	171 ⑤	SX 10424	1層	土師器	小型环	外面：ナデ? (マメツにより不明) 底部：マメツにより不明 内面：マメツにより不明	8.7 16/24	—	3.2	6	5	底部にくぼみあり
2020	171 ⑤	SX 10424	1層	土師器	ミニチュア 土器	外面：ナデ 底部：ナデ 内面：ナデ	4.7 12/24	4.1 24/24	3.3	6	5	
2021	171 ⑤	SX 10424	2層	土師器	小型 鉢?	外面：ヨコナデ→ハケメ→ナデ 底部：— 内面：ヘラナデ→ヨコナデ	11.2 14/24	—	7.0	4	3	底部にくぼみあり
2022	171 ⑤	SX 10424	2層	土師器	ミニ チュア 土器	外面：ハケメ→ナデ 底部：— 内面：マメツにより不明	(8.0) 2/24	—	(4.3)	6	5	底部にくぼみあり
2023	171 ⑤	SX 10424	2層	土師器	ミニ チュア 土器	外面：ナデ 底部：ナデ 内面：ナデ	4.5 8/24	3.9 24/24	3.2	6	5	
2024	171 ⑤	SX 10424	2層	土師器	高环	外面：ヘラミガキ→ナデ 底部：— 内面：上部ヘラミガキ 下部→ナデ	—	—	(6.3)	4	3	円窓1ヶ所
2025	171 ⑤	SX 10424	2層	土師器	小型壺	外面：上部ヘラナデ 下部ヘラケズリ 輪積み底あり 底部：ヘラケズリ? 内面：ヘラナデ	(7.2) 11/24	3.1 24/24	7.6	6	5	

第5表 山王遺跡(古墳時代)出土遺物観察表5

登録番号	調査区	遺構	層位	種別	器種	調整	法量(cm)			遺物図版	写真図版	備考
							口径 残存率	底径 残存率	器高			
2026	171⑤	SX 10424	2層	土師器	鉢	外面：口縁ハケメ→ヨコナデ→ヘラミガキ 体部ヘラケズリ→ヘラミガキ 内面：口縁ヨコナデ 体部ヘラナデ→ヘラミガキ	18.2 10/24	2.6 24/24	9.9	4	3	
2027	171⑤	SX 10424	2層	土師器	壺	外面：ハケメ→ヘラミガキ 底部付近：ハケメ 内面：体部ヘラナデ	—	5.8 16/24	(18.8)	5	—	
2028	171⑤	SX 10424	2層	土師器	甕	外面：口縁ハケメ→ヨコナデ 体部ハケメ 底部付近：ハケメ 内面：口縁ヨコナデ 体部ヘラナデ	(16.8) 8/24	5.8 24/24	(25.3)	6	—	底部：輪台充填
2029	171⑤	SX 10424	2層	土師器	壺	外面：口縁ハケメ→ヨコナデ→ヘラミガキ 体部ハケメ→ヘラミガキ 内面：口縁ハケメ→ヘラケズリ→ヘラミガキ→ヨコナデ 体部ヘラナデ	(12.7) 7/24	7.0 24/24	28.5	5	4	体部に穿孔あり 底部：輪台充填
2030	171⑤	SX 10424	2層	土師器	砥石	砥面3面？	長さ 20.2	幅 5.0	厚さ 4.8	9	7	
2031	171⑤	SX 10424	3層	土師器	小型鉢	外面：ヘラケズリ→ヘラミガキ→ヨコナデ 底部：— 内面：ヘラミガキ	(10.2) 3/24	—	6.3	4	—	底部：丸底、くぼみあり
2032	171⑤	SX 10424	3層	土師器	小型壺？	外面：ハケメ→ヨコナデ 底部：— 内面：ハケメ	(8.8) 7/24	—	(9.1)	4	3	
2033	171⑤	SX 10424	3層	土師器	ミニチュア 土器	外面：不明 底部：ナデ 内面：ナデ	—	3.1 24/24	(2.4)	6	5	
2034	171⑤	SX 10424	3層	土師器	ミニチュア 土器	外面：ナデ 底部：ナデ 内面：ナデ	—	3.0 24/24	(3.0)	6	—	
2035	171⑤	SX 10424	3層	土師器	甕	外面：口縁ハケメ→ヨコナデ 体部ハケメ 内面：口縁ハケメ→ヨコナデ 体部ヘラナデ	(13.4) 4/24	4.6 24/24	13.4	6	5	
2036	171⑤	SX 10424	3層	土師器	壺	外面：口縁ヨコナデ→オサエヌ 体部ハケメ→ヨコナデ 底部：なし 内面：ヨコナデ→ハケメ	(15.8) 6/24	—	(6.6)	5	—	
2037	171⑤	SX 10424	3層	土製品	支柱	外面：体部不明→指ナデ 底部：不明→ナデ 内面：—	高さ 18.0	幅 8.3	厚さ 11.3	7	6	
2039	171⑤	SX 10424	4層	土師器	壺	外面：ハケメ→ヘラミガキ→ヨコナデ 内面：ヘラナデ→ヨコナデ→ヘラミガキ	—	—	(8.4)	5	4	

第6表 山王遺跡(古墳時代)出土遺物観察表6

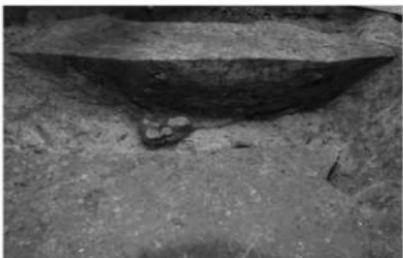
登録番号	調査区	遺構	層位	種別	器種	調整	法量(cm)			遺物図版	写真図版	備考
							口径 残存率	底径 残存率	器高			
2040	171⑤	SX 10424	4層	土師器	ミニ チュア 土器	外面:ハケメ→ナデ 底部:ナデ 内面:ナデ	—	3.0 24/24	(2.0)	6	5	
2041	171⑤	SX 10424	4層	土製品	支脚	外面:体部不明→指ナデ 底部:不明→ナデ 内面:—	高さ 19.4	幅 9.8	厚さ 10.0	7	6	後背部に持ち手状の凸凹あり 底部に穀物圧痕のようなものあり
2042	171⑤	SX 10424	底面	土製品	支脚	外面:体部不明→指ナデ 底部:不明→ナデ 内面:—	高さ 19.6	幅 10.0	厚さ 11.1	8	6	後背部に持ち手状の凸凹あり 底部に穀物圧痕のようなものあり
2043	171⑤	SX 10424	底面	土製品	支脚	外面:体部不明→指ナデ 内面:—	高さ 残存 (17.4)	幅 10.7	厚さ 10.3	8	7	後背部に持ち手状の凸凹あり その付近に指圧痕のあり 底部欠損
2044	171⑤	SX 10424	底面	土師器	器台	外面:ヘラミガキ 脚部:穴4個 内面:环部ヘラミガキ 脚部ハケメ→ナデ	(7.0) 14/24	—	(8.2)	4		穴4個あり 器面に赤彩
2045	171⑤	SX 10424	底面	土師器	壺	外面:上部ヘラミガキ 下部ヘラケズリ 底部:不明→ヘラケズリ 内面:ナデ	—	4.3 24/24	(11.7)	4	4	
2046	171⑤	SX 10424	底面	土師器	小型壺	外面:ヘラナデ 底部:不明 内面:不明	—	3.5 24/24	(10.5)	4	4	
2047	171⑤	SX 10424	底面	土師器	甕	外面:口縁ハケメ→ヨコナデ 体部ハケメ→ヘラケズリ 内面:口縁ハケメ 体部ヘラナデ	(15.0) 7/24	—	(11.6)	6	—	
2048	171⑤	SX 10424	底面	土師器	ミニ チュア 土器	外面:ナデ 底部:不明 内面:ナデ	—	3.4 24/24	(2.6)	6	5	
2056	167⑥	SI 10265	1層	土師器	高坏	外面:ヘラミガキ 内面:环部マツにより単位不明(黒色 物付着) 脚部マツにより単位不明	—	脚径 —	(5.5)	2	—	円窓3ヶ所
2057	167⑥	SI 10265	1層	土師器	壺	外面:ヘラナデ→ヘラミガキ(一部粘土 貼付け→ナデ→ヘラミガキ) 内面:ヘラナデ→ヘラミガキ	—	—	(7.2)	2	—	
2072	164⑦	SI 10318	掘方	土師器	环	外面:口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ 内面:ヘラミガキ→黒色処理	(16.0) 3/24	—	(3.8)	19		内面摩耗が激しい



167②T SI10265 掘り下げ状況（南から）



171⑧T SX10424 検出状況（南西から）



171⑧T SX10424 断面（南西から）



171⑧T SX10424 遺物出土状況（西から）



171⑧T SX10424 遺物出土状況（南から）



171⑧T SX10424 遺物出土状況（南から）



171⑧T SX10424 遺物出土状況（南から）



171⑧T SX10424 完掘状況（北西から）

写真図版 1



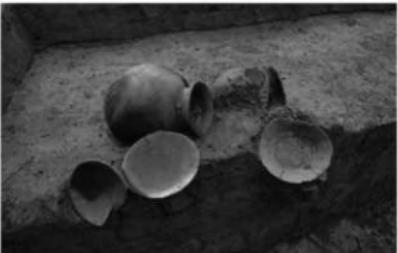
149①T X15322 遺物出土状況（北西から）



164⑨T SX10305 畦畔検出状況（南西から）



169①T X10436 畦畔検出状況（東から）



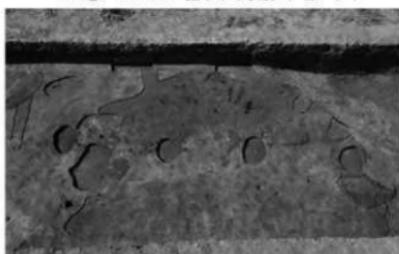
104③T SX10425 遺物包含層遺物出土状況（西から）



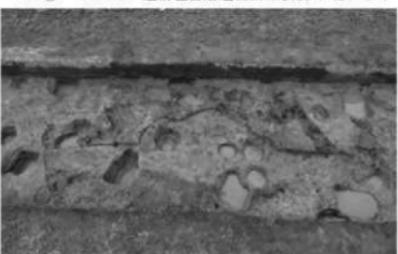
105①T SI10168 掘り下げ状況（北から）



105①T SX10426 遺物包含層遺物出土状況（北から）



164⑦T SI10318 検出状況（南から）



164⑦T SI10319 掘り下げ状況（南から）

写真図版2



2024



2016



2044



2017



2026



2031

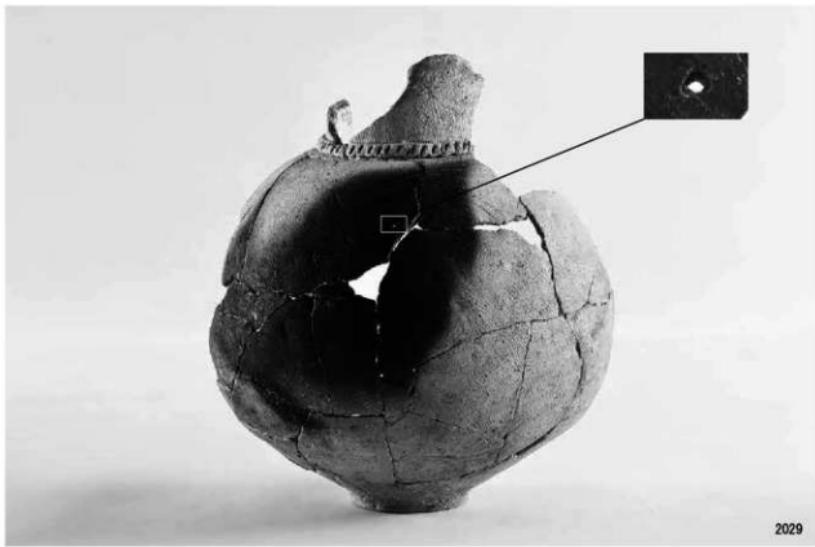
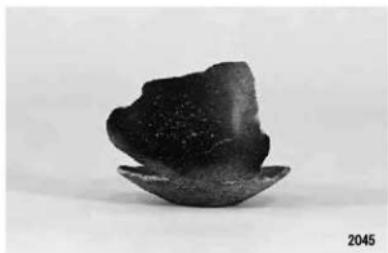


2021



2032

写真図版 3



写真図版 4



2015



2035



2025



2019



2020



2022



2023



2033



2040



2048

写真図版5



2037 側面



2037 正面



2041 正面



2041 側面



2041 裏面



2042 正面

写真図版 6



2042 左面



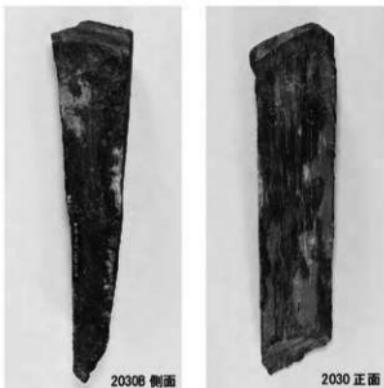
2042 右面



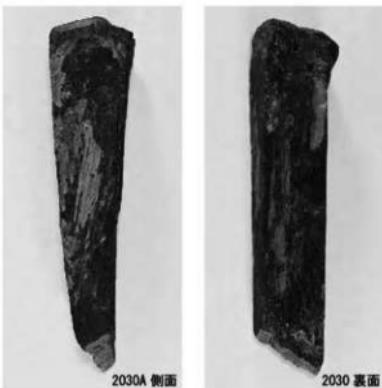
2043 正面



2043 左面



2030 左面



2030 右面

写真図版 7



1114



1115



1116



1112



1111

1113-1	1113-2	1113-3	1113-4	1113-5	1113-6	1113-7	1113-8
1113-9	1113-10	1113-11	1113-12	1113-13	1113-14	1113-15	1113-16
1113-17	1113-18	1113-19	1113-20	1113-21	1113-22	1113-23	1113-24
1113-25	1113-26	1113-27	1113-28	1113-29	1113-30	1113-31	1113-32

写真図版 8

1117-1 1117-2 1117-3 1117-4

1117-5 1117-6 1117-7 1117-8 1117-9



1688



1691



1693



1692



745



1698

写真図版 9



写真図版10



支脚 3 点集合 SX101424



支脚 4 点集合 SX101424



土器集合 SX101424

写真图版11

附章 1 山王遺跡におけるプラント・オパール分析

株式会社古環境研究所

1はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸(SiO₂)が蓄積したものであり、植物が枯れたあとで微化石(プラント・オパール)となって土壤中に半永久的に残っている。プラント・オパール分析は、この微化石を遺跡土壤などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている(杉山, 2000)。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である(藤原・杉山, 1984)。

ここでは、多賀城地区ほ場整備事業に係る山王遺跡発掘調査における稻作の可能性と周辺植生を検討する目的でプラント・オパール分析を実施する。

2 試料

分析試料は、154⑧TのSX16102の1層(試料No.1)と2層(試料No.2)、II層(試料No.3)、III層(試料No.4)の4点、158①TのSX15198のA層(試料No.5)、B層(試料No.6)の2点、164⑨TのIV層(試料No.7)、SX10305の1層(試料No.8)と2層(試料No.9)、V層(試料No.10)、VI層(試料No.11)の5点、169①TのSX10436のIVb層(試料No.12)、2層(試料No.13)の2点、169③TのSX10437のIVa層(試料No.14)、1層(試料No.15)の2点の計15点である。

3 方法

- プラント・オパールの抽出と定量は、ガラスピーズ法(藤原, 1976)を用いて、次の手順で行った。
- 1) 試料を105°Cで24時間乾燥(絶乾)
 - 2) 試料約1gに対し直徑約40μmのガラスピーズを約0.02g添加(0.1mgの精度で秤量)
 - 3) 電気炉灰化法(550°C・6時間)による脱有機物処理
 - 4) 超音波水中照射(300W・42kHz・10分間)による分散
 - 5) 沈底法による20μm以下の微粒子除去
 - 6) 封入剤(オイキット)中に分散してプレパラート作成
 - 7) 檢鏡・計数

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来するプラント・オパールを対象として行った。計数は、ガラスピーズ個数が500以上になるまで行った。これはプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスピーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスピーズ個数の比率を乗じて、試料1g中のプラント・オパール個数を求めた。また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重(1.0と仮定)と各植物の換算係数(機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重)を乗じて、単位面積で厚層1cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる(杉山, 2000)。

4 結果

(1) 分類群

検出されたプラント・オパールの分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1および図1に示した。主要な分類群については顕微鏡写真を写真図版に示す。

〔イネ科〕

イネ、キビ族型、ヨシ属、スキ属型（おもにスキ属）、ウシクサ族型、シバ属

〔イネ科—タケ亜科〕

メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属）、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、チマキザサ節型（ササ属チマキザサ節・チシマザサ節など）、ミヤコザサ節型（ササ属ミヤコザサ節など）、その他（未分類等）

〔イネ科—その他〕

未分類等

〔植物珪酸体以外〕

海綿骨針

（2）プラント・オパールの検出状況

以下に、プラント・オパールの検出状況を記す。なお、プラント・オパールの生産量は植物種によって相違することから、検出密度の評価は分類群によって異なる。

1) 154 ⑧T

上位より、II層ではイネが高い密度であり、ヨシ属とネザサ節型がやや高い密度である。他には、キビ族型、スキ属型、シバ属、メダケ節型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型などが検出されているが、いずれも低い密度である。SX16102の1層では、イネが非常に高い密度で検出されている点が特筆される。また、スキ属型、ネザサ節型とチマキザサ節型がやや高い密度である。他にはキビ族型、ヨシ属、シバ属、メダケ節型、ミヤコザサ節型などが認められるものの、やや低いか低い密度である。2層では、1層同様にイネが高い密度である。他には、キビ族型、ヨシ属、スキ属型、メダケ節型、ネザサ節型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型などが検出されているが、いずれもやや低いか低い密度である。III層では、イネ、ヨシ属、スキ属型、メダケ節型、ネザサ節型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型が検出されている。このうち、ヨシ属、ネザサ節型、チマキザサ節型が比較的高い密度である。他の分類群は、いずれもやや低いか低い密度である。なお、各層ともプラント・オパール以外に海綿骨針が少量検出されている。

2) 158 ①T

上位より、SX15198のB層では、イネ、スキ属型、シバ属、メダケ節型、ネザサ節型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型が検出されている。ネザサ節型とチマキザサ節型が高い密度であるが、他の分類群はやや低いか低い密度である。A層では、イネが比較的高い密度である。他には、ヨシ属、スキ属型、メダケ節型、ネザサ節型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型が検出されているが、やや低いか低い密度である。また、それぞれで海綿骨針が少量検出されている。

3) 164 ⑨T

IV層では、イネ、ヨシ属、スキ属型、ウシクサ族型、メダケ節型、ネザサ節型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型が検出されている。このうち、ネザサ節型が高い密度であり、スキ属型が比較的高い密度である。SX10305の1層では、イネ、ヨシ属、スキ属型、ウシクサ族型、メダケ節型、ネザサ節型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型が検出されている。このうち、ヨシ属、スキ属型、ネザサ節型、チマキザサ節型の各分類群は比較的高い密度である。その他は、いずれもやや低いか低い密度である。2層では、イネが高い密度であり、ネザサ節型とチマキザサ節型が比較的高い密度である。他の分類群はやや低いか低い密度である。V層では、イネが高い密度である。他には、キビ族型、ヨシ属、スキ属型、ウシクサ族型、メダケ節型、ネザサ節型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型が検出されているが、いずれも低い密度である。VI層では、スキ属型、メダケ節型、ネザサ節型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型が検出されているが、いずれもやや低いか低い密度である。各層ともプラント・オパール以外に海綿骨針が少量検出されている。

4) 169 ① T

IV b 層では、イネ、ヨシ属、スキ属型、メダケ節型、ネザサ節型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型が検出されている。ネザサ節型とチマキザサ節型が比較的高い密度である以外は、いずれもやや低いか低い密度である。2 層では、IV b 層と概ね同様のプラント・オバール構成であるが、イネ、スキ属型、チマキザサ節型が比較的高い密度である。その他の分類群はやや低いか低い密度である。それぞれの層で海綿骨針が少量検出されている。

5) 169 ③ T

上位より IV a 層では、イネ、ヨシ属、スキ属型、メダケ節型、ネザサ節型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型が検出されている。チマキザサ節型がやや高い密度である以外はいずれも低い密度である。1 層では、IV a 層と概ね同様のプラント・オバール構成である。特徴としては、ヨシ属が高い密度であり、スキ属型とチマキザサ節型が比較的高い密度である点があげられる。両層で少量であるが海綿骨針が検出されている。

5 考察

プラント・オバール分析において稲作跡の探査や検証を行うにあたっては、通常、イネのプラント・オバールが試料 1 gあたり 5,000 個以上の密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している（杉山, 2000）。なお、近年の調査では密度が 3,000 個 / g 程度あるいはそれ未満であっても水田遺構が検出された事例が報告されていることから、ここでは 3,000 個 / g を基準値とする。

1) 154 ⑧ T

II 層では、イネが 4,300 個 / g と高い密度であり、稲作跡の判断基準値を超過している。このことから、調査地では II 層において水田稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。SX16102 の 1 層では、イネが 19,500 個 / g と非常に高い密度であり、稲作跡の判断基準値を大きく超過している。したがって、当該層は水田耕作土である可能性が極めて高いと判断される。なお、かなりの高密度であることから、採取地点は稲藁の集積地であった可能性もある。② 層ではイネが 6,300 個 / g と高密度であり、稲作跡の判断基準値を超過している。このことから、② 層においても水田稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。III 層では、密度が 1,600 個 / g とやや低い値である。稲作が行われていた可能性はあるものの、直上層が高密度であることから、上層から後代のプラント・オバールが混入したことも否定できない。仮に当該層で稲作が行われていたとするならば、プラント・オバール密度が低いことの要因としては、1) 稲作が行われた期間が短かった、2) 稲の生産性が低かった、3) 試料採取箇所が畦畔など耕作面でなかつた、4) 土層の堆積速度が速かった、などが考えられる。

2) 158 ① T

下位の A 層では 3,100 個 / g と比較的高い密度である。このことから、A 層では調査地において水田稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。一方、上位の B 層では密度は 1,600 個 / g とやや低いことから、調査地で稲作が行われていた可能性はあるものの、他所からプラント・オバールが混入したことも否定できない。なお、ここで稲作が行われていたならば、プラント・オバール密度が低いことに関しては 154 ⑧ T の III 層と同様の要因が考えられる。

3) 164 ⑨ T

SX10305 の 2 層ではイネが 4,600 個 / g、V 層でも 6,900 個 / g といずれも高い密度であり、稲作跡の判断基準値を超過している。このことから、両層については水田耕作土である可能性が高いと判断される。SX10305 の 1 層ではイネが 1,600 個 / g とやや低い密度である。このことから、1 層においても水田稲作が行われていた可能性はあるものの、他所からプラント・オバールが混入したことも否定できない。仮にここで稲作が行われていたとするならば、プラント・オバール密度が低いことに関しては前述と同様のことと考えられる。IV 層ではイネの密度が 800 個 / g と低いことから、ここで検出されたプラント・オバ-

ルは他所からの混入と考えられる。

4) 169 ① T

下位の2層ではイネが3,200個/gと比較的高い密度であり、稻作跡の判断基準値を満たしている。したがって、調査地では2層において水田稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。上位のIV b層では密度が2,000個/gとやや低い値である。調査地で稲作が行われていた可能性はあるものの、他所から混入したことも否定できない。ここでも稲作が行われていたとするならば、プラント・オパール密度が低いことに関しては前述と同様の要因が考えられる。

5) 169 ③ T

IV a層と1層について分析を行った結果、両層でイネが検出されている。ただし、密度はそれぞれ500個/g、1,200個/gといずれも低い値であることから、これらの層で検出されたプラント・オパールは他所から混入したものと考えられる。

プラント・オパール分析から推定される周辺植生と環境

ヨシ属やマコモ属は湿地や湿ったところに生育し、ススキ属の多くやタケ亜科は比較的乾いたところに生育する。そこで、これらの植物の産出状況を検討することで、堆積当時の植生や環境（乾燥・湿润）を推定することができる。

154 ⑧ Tにおけるおもな分類群の推定生産量をみると、イネ以外の分類群ではII層とIII層ではヨシ属が優勢である。一方、SX16102の1層と2層ではススキ属型、ネザサ節型およびチマキザサ節型がやや優勢となっている。こうしたことから、調査地はII層とIII層の堆積時は湿った環境であり、SX16102の1層と2層の時期は比較的乾いた環境であったと推定される。なお、上述のとおり SX16102の1層と2層は水田耕作層と考えられることから、畠畔や周辺の乾いたところなどにススキ属が生育していた可能性が考えられる。同様に他の地点についても各分類群の産状を検討してみると、158 ① TのB層ではネザサ節型とチマキザサ節型が優勢であり、A層でもこれらがやや優勢であることから、それぞれ乾いた環境であったと推定される。164 ⑨ Tでは、IV層、SX10305の1層と2層、V層ではいずれもヨシ属が優勢であることから、これら各層の堆積時の調査地はヨシ属が生育する湿った環境であったと推定される。VI層では優占する分類群はみられないものの、ヨシ属は認められずタケ亜科の各分類群が検出されることから、比較的乾いた環境であったと考えられる。169 ① TではIV b層、2層ともにヨシ属がやや優勢であることから、両層の堆積時の調査地は比較的湿った環境であったと考えられる。なお、2層ではススキ属型が比較的高い密度であることから、畠畔などにススキ属が生育していた可能性も考えられる。169 ③ Tでは1層でヨシ属が卓越している。当時の調査地は、ヨシの繁茂する湿地の環境であったと考えられる。IV a層では優占する分類群ではなく、ススキ属型やチマキザサ節型がやや多いことから、比較的乾いた環境であったと推定される。

6 まとめ

多賀城地区は場整備事業に係る山王遺跡発掘調査においてプラント・オパール分析を行い、稲作の可能性について検討した。その結果、154 ⑧ TのII層、SX16102の1層と2層、158 ① TのSX15198のA層、164 ⑨ TのSX10305の2層とV層、169 ① Tの2層でイネのプラント・オパールが高い密度あるいは比較的高い密度で検出されたことから、これらの層で稲作が行われていた可能性が高いと判断された。また、154 ⑧ TのIII層、158 ① TのSX15198のB層、164 ⑨ TのSX10305の1層、169 ① TのIV b層についても稲作が行われていた可能性が示唆された。ただし、プラント・オパール密度がやや低いことから、他所からプラント・オパールが混入した可能性も否定できなかった。

文献

- 杉山真二・藤原宏志 1986 機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定—古環境推定の基礎資料として一、考古学と自然科学, 19, p. 69-84.
- 杉山真二 2000 植物珪酸体 (プラント・オバール), 考古学と植物学, 同成社, p. 189-213.
- 杉山真二・松田隆二・藤原宏志 (1988) 機動細胞珪酸体の形態によるキビ族植物の同定とその応用—古代農耕追及のための基礎資料として一、考古学と自然科学, 20, p. 81-92.
- 藤原宏志 1976 プラント・オバール分析法の基礎的研究 (1) —数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法—、考古学と自然科学, 9, p. 15-29.
- 藤原宏志・杉山真二 1984 プラント・オバール分析法の基礎的研究 (5) —プラント・オバール分析による水田址の探査—、考古学と自然科学, 17, p. 73-85.

表1 山王遺跡発掘調査のプラント・オパール分析結果

検出密度(単位: ×100個/g)

分類群(和名・学名)	調査区 遺構名 層位 試料No.	154⑤T				158⑦T				164⑨T				169⑩T				169⑪T			
		SX16102				SX15198				SX10305				SX10436				SX10437			
		II	I	II	III	II	I	II	III	IV	I	II	V	VI	IVb	II	IVa	I	II	IVb	II
イネ科	Gramineae																				
イネ	<i>Oryza sativa</i>	43	195	63	16	16	31	8	16	46	69	20	32	5	12						
キビ族型	<i>Panicoid type</i>	4	6	5						4	5										
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	26	11	16	31			5	20	36	17	11	15	13	5	88					
ススキ属型	<i>Miscanthus type</i>	13	29	21	10	16	15	28	31	21	11	5	5	26	14	35					
タシクサ族型	<i>Andropogonoid type</i>							4	5	4	5										
シバ属	<i>Zizaniinae</i>	4	6				5														
タケ本科	Bambusoideae																				
メダケ属型	<i>Pleioblastus sect. Nipponocalamus</i>	9	23	16	5	22	5	29	21	17	11	5	20	6	9	18					
ネザサ属型	<i>Pleioblastus sect. Netusa</i>	30	40	26	36	60	15	60	31	29	11	16	39	19	9	23					
チマキナサ属型	<i>Sasa sect. Sasa etc.</i>	9	40	21	42	55	20	24	47	29	11	21	39	38	28	35					
ミヤコサ属型	<i>Sasa sect. Crassifolii</i>	9	11	10	16	5	10	8	10	8	5	16	5	6	5	6					
その他	Others	13	23	16	16	5	10	8	21	17	11	5	15	13	5	6					
その他のイネ科	Others																				
未分類等	Others	52	109	89	73	49	51	64	47	92	84	47	30	51	35	35					
(測定骨針)	Spikes	9	11	16	19	16	10	17	10	8	11	5	10	6	3	12					
プラント・オパール数	Total	212	493	283	245	255	177	244	265	284	234	115	188	204	113	228					

おもな分類群の堆定量(単位: kg/m²・cm) : 試料の比重を1.0と仮定して算出

イネ	<i>Oryza sativa</i>	1.28	5.75	1.85	0.46	0.48	0.90	0.24	0.46	1.36	2.01	0.58	0.94	0.14	0.34						
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	1.64	0.73	0.99	1.97		0.32	1.27	2.29	1.06	0.67	0.93	0.81	0.30	3.69						
ススキ属型	<i>Miscanthus type</i>	0.16	0.36	0.26	0.13	0.20	0.19	0.35	0.38	0.26	0.13	0.06	0.06	0.32	0.18	0.43					
メダケ属型	<i>Pleioblastus sect. Nipponocalamus</i>	0.10	0.27	0.18	0.06	0.25	0.06	0.23	0.24	0.19	0.12	0.06	0.23	0.07	0.11	0.20					
ネザサ属型	<i>Pleioblastus sect. Netusa</i>	0.15	0.19	0.13	0.17	0.29	0.07	0.29	0.15	0.14	0.05	0.07	0.19	0.09	0.05	0.11					
チマキナサ属型	<i>Sasa sect. Sasa etc.</i>	0.07	0.20	0.16	0.31	0.41	0.15	0.18	0.35	0.22	0.08	0.16	0.30	0.29	0.21	0.26					
ミヤコサ属型	<i>Sasa sect. Crassifolii</i>	0.03	0.03	0.03	0.05	0.02	0.03	0.02	0.03	0.02	0.05	0.01	0.02	0.01	0.02	0.02					

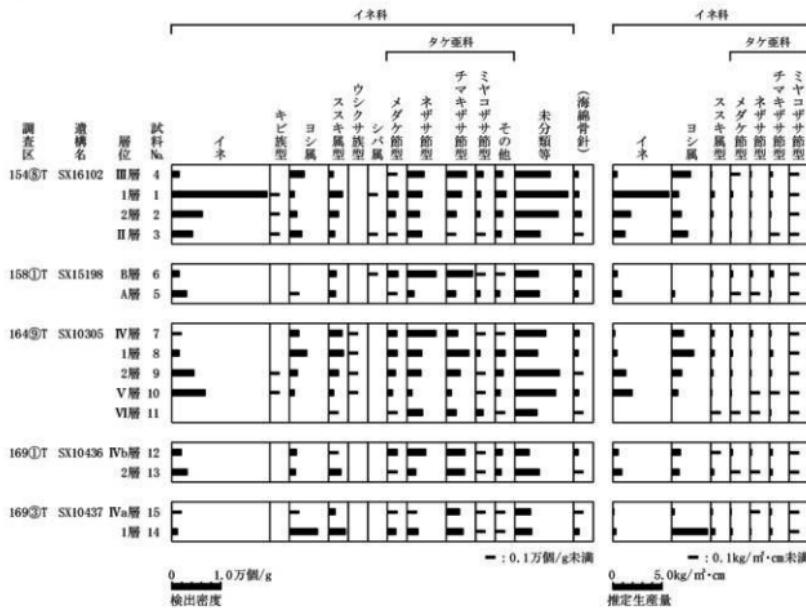
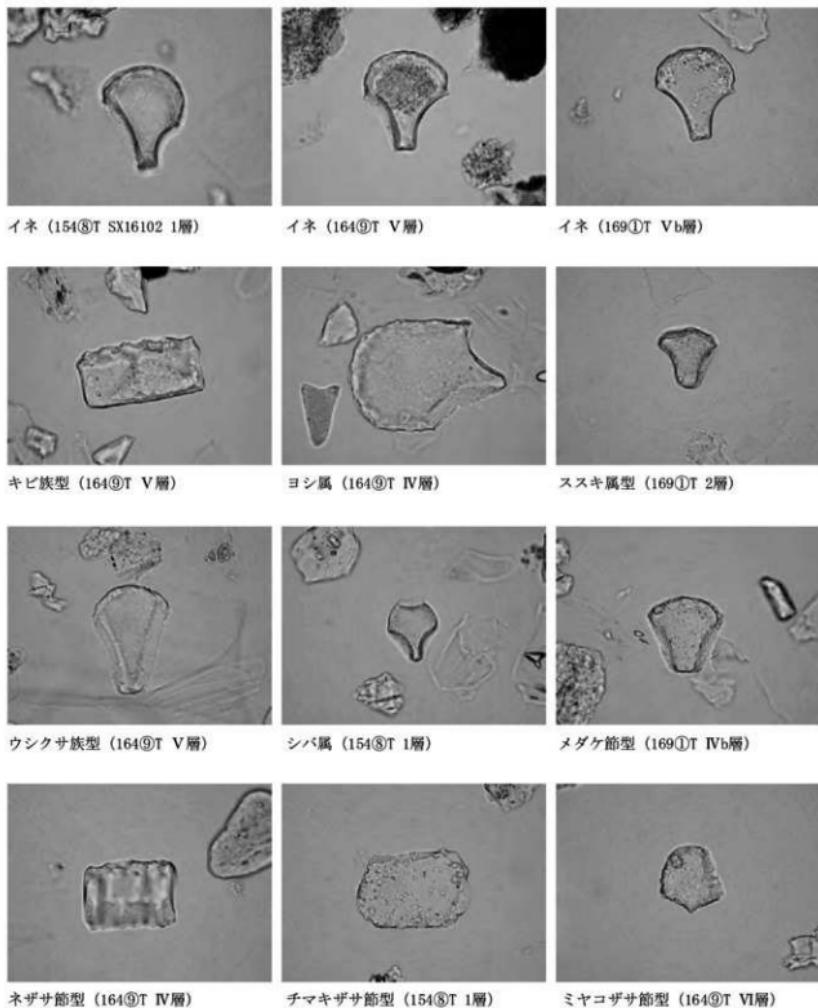


図1 山王遺跡のプラント・オパール分析結果



写真図版 山王遺跡のプラント・オパール

— 50 μ m

多賀城市文化財調査報告書第 157 集

多賀城地区ほ場整備事業に係る発掘調査報告書

第 1 分冊

内館館跡 新田遺跡

大日南遺跡 山王遺跡（古墳時代）

令和 5 年 2 月 17 日発行

編 集 多賀城市埋蔵文化財調査センター
宮城県多賀城市中央二丁目 27 番 1 号

電話 (022) 368-0134

発 行 多賀城市教育委員会
宮城県多賀城市中央二丁目 1 番 1 号

電話 (022) 368-1141

印 刷 株式会社 東北プリント
宮城県仙台市青葉区立町 24 番 24 号

電話 022 (263) 1166
